真・恋姫無双　～新外史伝～

殴って退場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双　～新外史伝～

【Ｎコード】
Ｎ３６８８Ｘ

【作者名】
殴って退場

【あらすじ】
なお今回のヒロインは一応、紫苑と璃々です。

この物語は恋姫無双の世界から、北郷一刀と紫苑と璃々が現代社会に帰って来て、今度は真・恋姫無双の世界に飛び込む物語です。

かなりの都合主義ですので、嫌な方はＵターンして下さい。

この作品は現在「ＴＩＮＡＭＩ」でも掲載しています。

第1話

あれから１０年か・・・

一刀は学校の正門前で呟いていると、一刀の背中に母親似のグラマーな少女が

「お父さ～ん」

と言って、背中に飛びついてきたそんな少女に一刀が

「こ～ら璃々、学校ではお父さんと言ったらダメだろう」

「ええ～いいでしょう、学校が終わったんだから」

と口を膨らませて反論していると、また背中から女性の声で

「璃々、学校ではそんなことしないの、すぐに降りなさい」

と少々怒った口調で言われると璃々は渋々一刀の背中から降りた。

そんな女性に一刀は

「助かったよ、紫苑先生」

「どういたしまして、一刀先生」

と2人は笑顔でいい気分になって見つめていると、璃々がからかうように

「2人ともまだ学校ですよ、せ・ん・せ・い」

と言うと2人はハモって

「「璃々！」」

「ハハハ、早く家に帰ろう、お父さん、お母さん」

一刀と紫苑は苦笑いしながら、3人は学校を離れ下校した。

そう・・この3人は家族になっていた。

一刀は自分の通っていた聖フランチェスカ学園の博物館で三国時代に使われたとされる銅鏡が少年左慈により盗まれ、たまたま心配に

なり夜の見回りをしていた一刀と左慈が遭遇、争った挙句に一刀はその銅鏡を破壊してしまい、一刀はある世界へと飛ばされたのだ。

それは三国志の世界であった。しかもただの過去の世界では無い、異世界……いや、外史と呼ばれる三国志の世界である。

その外史の三国志の世界は主要武将が女性であると言う世界であった。

一刀はその世界で、天の御遣いとして祭られ、関羽、張飛、趙雲、馬超、諸葛亮、そして黄忠である紫苑と娘の璃々と共に三国を統一したのだ。

しかしその外史を破壊しようとする者がいたのだ。左慈であった。

筋肉達磨の男の貂蝉と呼ばれる男が左慈の仲間であったが、一刀達の味方をし、そして外史を支える銅鏡を一刀が触れた時、銅鏡は光だし、一刀はその光に飲み込まれ、飲み込まれる際に紫苑と璃々の事を思い出し、紫苑が一刀の伸ばされた手を取り、気が付いたら3人は一刀がいた世界に帰ってきたのだった。

まだ高校生だった一刀は紫苑と璃々を連れて、祖父母がいる実家に行き、事情を説明し、祖父は、一言

「こんなに早く、一刀の子を見るとは思わなかったな・・」

と言いながらも、紫苑らの面倒を見ることを約束したが、まだ高校生の一刀は学業優先のため高校に戻り、紫苑らもこちらの生活を勉強するため、離れ離れの生活となった。

高校卒業後、一刀と紫苑は結婚しそのまま実家に住み、近くの大学に進学したが、紫苑もその間勉強、一刀も同じ大学に入学し、そして2人とも在学中に教職の免許を取り、大学卒業後に聖フランチェスカ学園の先生になり、成長した璃々も一刀と紫苑を追って聖フランチェスカ学園の生徒になったのである。

一刀はこちらに帰ってから、勉学だけでなく、祖父や紫苑からの特訓にも励み、そして北郷流の免許皆伝を取得していた。

紫苑いわく

「今のご主人様の腕前は、愛紗ちゃん並かそれ以上の実力はありますよ」

と言ってくれたが、自分ではどれくらいの実力があるのか今一つ分かっていない。

紫苑も同じ様に剣の修業に励み、弓と剣の両方使えるようになった。

そして璃々も成長するにつれ剣や弓の修業に励み、まだ2人には及ばないものの、学校では剣道部（顧問は一刀）と弓道部（顧問は紫苑）の両方に入部し、両方とも全国レベルのスーパー高校生となり話題になっていた。

成長した璃々は、紫苑の教育が行きとどいていたのか、同年代の男

性には興味がなく、一刀大好きっ子になり、昔、紫苑が一刀に色んなことを教えて貰うことを覚えていて、それで最近色仕掛けをしてくるため、一刀は煩悩と戦うようになり、紫苑も璃々を止めようとはしなかったのである。

そして自宅に帰り、3人は食事など身の回りのことを終わらせ、一刀と紫苑は部屋のベットにいた。

「璃々はもう寝たのか」

「試験が近いから部屋で勉強していますわ」

「そうか・・」

と一刀が何か考え込んでいるように見えたので紫苑が

「どうしました、ご主人様」

「いや、今日急に10年前のことを思い出してな・・」

「もうあれから10年経ったのですね・・」

と紫苑も呟くと

「ご主人様、後悔していますか?」

「いいや、確かに皆から離れるのは辛かったけど、2人から離れるのはもっと辛いから、これでいいと思っているよ、ただ・・」

「ただ、何です?」

「いや俺ら2人の子供が欲しいな～と思って」

「あらあら」

と言いながらも紫苑も拒否することなく、今日も夜の生活を開始するのであった・・。

そして3人が寝静まったころ・・

2人が居る部屋と璃々の部屋に強い光が放ち、そして3人の身体を光の中に呑み込んでいった・・

第1話（後書き）

取り敢えず、今までないパターンで考えてみました。
３人の設定については、次回に書きたいと思います。
３人が降りるところは、自分が好きなキャラのところにしようと思っています。
叱咤激励は受付しますが、批判はスルーしますのでよろしくお願いします。

第2話（前書き）

妄想モードが入っていますが、取りあえずこれでルートが明らかになります。

第2話

～とある町の郊外～

「あ・・流れ星」

「本当だ、こんな昼から流れ星って、何か気味が悪いな」

と2人の少女が喋っていると、横にいた少年が

「あの噂、本当だったかも・・」

と呟くと、その少年の弟らしき者が

「噂って?」

と聞くと、その少年が

「皆、知っているとは思うけど、最近町で流れている噂で「黒天を切り裂いて、天より飛来する三筋の流星、それは天の御遣いを乗せ、乱世を鎮静す」と言う話を」

と言うとその少年の姉らしき人物が

「あ～、あの話か、お前あんな与太話を信じているのかよ」

「しかし姉貴、実際に今、３つの流れ星が落ちたのだから、実際に確認する必要があるだろう」

「お姉様～取り敢えず皆で見に行った方がいいんじゃあない～」

「そうそう、ここでゴチャゴチャしているよりは、見に行こうぜ姉貴、兄貴」

と姉と呼ぶ少女と姉貴と呼ぶ少年２名がそれぞれ言うと、この中の１番実力者である姉が

「仕方ないな～、何かあったら、この槍でぶっ飛ばしてやるから大丈夫か」

と言いながら、同意したので、４人はその流星が落ちた方向に馬を進めた・・。

「ご主人様、起きてください」

紫苑が一刀を起こすと、一刀は大きな欠伸をしながら、目を覚ますと、昔、どこかで見たことあるような懐かしい風景が目の前に・・

「紫苑、ここどこ？」

「私も起きたら、ここにいたのでどこかさっぱり・・」

と言うと、一刀が周りを確認すると、どこかの林の中で一刀の横に璃々がまだ寝ていた。

そんな状況で一刀と紫苑があることに気付いた。

「紫苑、その格好に・・、そして若返っていない？」

と一刀が言うと紫苑も

「そういうご主人様も、その格好に・・、昨日より若くなっていますよ」

とお互いに言いあっていたが、そう2人の格好がかなり変わってい

た。

一刀は、見た目の年齢が１８~２０歳くらいになり、そして聖フランチェスカ学園の制服を着用し、そして一刀の愛刀「紫電」の太刀・小太刀が一緒にあった。

紫苑は見た目の年齢が２５歳くらいになり、そして一刀と出会った頃の服（ゲームの姿を想像して下さい）に、これもまた愛弓「颶鵬」が置かれていた。

そんな中、璃々が起きて、周りと2人の姿を見て、そして自分の姿を見ると

「え、え?、お父さんとお母さん、随分若くなってる・・、そしてここはどこ?それに私のこの恰好・・」

と混乱状態になっていた。

現在の璃々の格好は紫苑と同じ明るい紫色のチャイナドレスを着て、そして胸と胸の間が開けられている形になり、璃々の横にも愛刀「桜花」と愛弓「鵬翼」（鉄弓）が置かれていた、そしてなぜか璃々だけは年齢が変わっていなかった。

そんな璃々を見て、一刀が

「璃々、まずは深呼吸して落ち着け」

と言って、璃々を落ち着かせると、紫苑と璃々に

「まず現状を把握しよう」

と言いながら、昨日の3人の寝る前の行動や寝ている時の異変の有無を確認したが原因が判明しなかったが、璃々が昨晩2人がまたいちゃいちゃしていたので、少々拗ねていた。

そこで一刀が

「推測で話をするが、俺達は昔、紫苑や璃々がいた世界に帰ってきてかもしれないが、しかしこの世界がどういう世界で状況がまったく分からないし、だから以前とは全く違う状況になっているかもしれない」

そういう言うと紫苑が

「ではご主人様は、以前私たちと一緒にいた愛紗ちゃんたちが姿は同じでも記憶が別という可能があるというですか」

「そうだな、だから姿を見てもいきなり真名など呼ばずに様子を見た方がいいかもしれんな」

と言っていると璃々が

「それだったら、別の私やお母さんもいるという可能性があるということだね」

「その可能性もあるが、今のところは何とも言えんがな・・」

そう言い終えると一刀が

「まずここで皆の確認事項をしておこう」

2人は

「「確認事項？」」

と首を傾げていると、一刀は念押しをすると

「まず紫苑と璃々の関係だが、今の2人の姿ではどうしても親子というのは無理がある、だから2人には姉妹と言うことにしてもらう」

と言うと璃々が反対したが、一刀が

「文句言うなよ璃々、仕方ないだろうこの姿を見て親子ですと言ったら、紫苑が璃々を産んだのが、小学生の時に産んだ計算になるぞ、いくら昔が早婚だからってこれは無理だろう」

と言うと、確かにそういう話になってしまうので納得した。

更に一刀は璃々に

「そこでだ、璃々、お前が紫苑の妹ということになるから、今ま

で通り、お父さん、お母さんと呼ぶわけにはいかないから、俺たちの呼ぶ時の言い方を変えてもらうぞ」

そう告げると璃々が頷いて少し考えると

「じゃあ、お母さんことのことをお姉さんで、お父さんのことをご主人様って呼ぶ！」

璃々の突然の発言に一刀が噴出し、紫苑が「まあまあ」という顔しながら、この場を楽しんでいた。

「何でご主人様だよ！、普通にお兄さんと呼んだらいいじゃないか！」

「え～お兄さんと言いにくし、それに昔、ご主人様と呼んでいたから、そっちの方がいい易いもん」

と言われると、一刀も返す言葉もなく、渋々了解した。

そこで3人が話をしていると、こちらに近づいてくる人影が感じた
3人は傍に置いていた自分の武
器を持ち様子を見ていると・・

昔、どこかで聞いたような声を中心に複数が寄って、3人が先頭に出てきた人物をその姿を見ると・・3人は心の中で

「翠（ちゃん）（お姉ちゃん）」と呼んでいた・・

第2話（後書き）

設定

北郷一刀

紫苑と結婚、聖フランチェスカ学園の先生（担当科目は理科だが、全科目教えることは可能）で、剣道部顧問、北郷流格闘術免許皆伝（現在は愛紗以上の実力あるらしいが披露されておらず）、愛刀「紫電」の太刀・小太刀所持。

璃々に言い寄られる毎日を過ごしているため、周りの生徒から近親相姦をしているのでないかと言われている。

紫苑（黄忠）

一刀と結婚、聖フランチェスカ学園の先生（担当科目は国語、特に

漢文に授業が分かりやすく評判）、弓道部顧問、更に生徒から恋愛相談に相談を受け「愛の伝道師」として尊敬されている。

現在は弓だけでなく刀も使えるようなり、強さもパワーアップしている。

愛弓「颶鵬」を所持。

璃々（黄敍）

一刀、紫苑の娘、聖フランチェスカ学園の生徒、剣道部と弓道部に所属し、両方の強さが全国レベルというスーパー女子高生。

愛刀「桜花」と愛弓「鵬翼」（鉄弓）を所持。

一刀大好きっ子で、昔、紫苑が一刀に色んなことを教えて貰うことを言っていたことを覚えているため、現在実力行使手前まできている。

という設定ですが、何か話の途中で範囲内で設定変更できることがあれば、遠慮なくコメントして下さい。

第3話

久しぶりに見る翠を見て一刀たちは、心の中で

（（（（「これは西涼に来たな」））））

と思ってしまった。

しかし翠は武器を持っていた一刀たちを見て、身構えてしまい、槍を示し

「お前たち、いったい何者だ！」

と怒鳴ってところ、翠の後から来た少年らが

「姉貴（お姉様）、誰かいた？（のか？）（の～）」

と言いながらやって来た。

一刀は、取り敢えず冷静に話をする必要がある思い

「ちょっと話をしないか」

と言って持っていた武器を地面に置き、紫苑らも同じように武器を地面に置いた。

翠は一刀たちから殺気を感じないことから、槍を下げ

「悪いな、こんなところであんた達がいたので不審に思い、槍を突きつけてしまって」

と言いながら話し合いに応じる姿勢を見せた。

翠の様子を見て一刀らは、やはり前の記憶が無く、別の世界に来たことを改めて感じた。

一刀が改めて、この状況を把握するため翠に

「では申し訳ないが、いったいここはどこで君たちは誰かな?」

と質問すると翠が

「ここは涼州の武威郡の武威の町の外れさ」

更に自己紹介を始め

「あたしの名は馬超。姓は馬、名は超、字は孟起、涼州太守馬騰の娘だ、横にいるのが弟の馬休に馬鉄、それに従姉妹の馬岱だ」

と紹介すると3人はそれぞれ挨拶をした。

それを見て一刀が

「俺の名前は北郷一刀」

と言うと紫苑が

「私は妻の北郷紫苑で、こちらが妹の璃々です」

と言ってしまった。

それを聞いて一刀が紫苑に小声で

（「おい、いいのか、元の名前を使わなくて」）

（「ええ、さっきも言ったとおり別の私たちもいる可能性がいるから、同じ人物が2人もいたらややこしいでしょう、それにご主人様と結婚して名前が変わったのですから、別に間違ってはいないでしょう」）

と笑顔で語った。

翠が一刀の名前を聞くと

「変わった名前だな、姓が北で、名は郷で、字は一刀と言うのか」

「いいや、姓が北郷で、名が一刀で字はないよ」

「字がないって、いったいあんたらどこから来たんだ?」

「この国とは違う１８００年以上過ぎてからある日本という国で、今は倭国って言われているところから来たんだが、分かりやすく言うと、馬超さんが今の時代から秦の始皇帝の時代に変わって来たって言ったら分かるかな・・」

と言っても翠は頭の中で疑問符を付けながら

「う～ん、分かったようで・・分かんねえ・・」

と頭を抱え込んでいた。

そこで弟の馬休が

「すいません、姉貴に変わって質問ですが、ではあなた様方は、いったいどうやってここまで来たのですか?」

「昨日、部屋で寝ていて、起きたらここにいたとしか言いようがないな・・」

「それでは、もし良かったら持っているもの見せてもらいますか？」

と言うと一刀らが持っているものを確かめると、なぜか一刀が携帯電話、紫苑がお金、璃々がスナック菓子を持っていた。

馬休が携帯電話を見て一刀に尋ねると

「これは何ですか」

「携帯電話。俺のいた時代じゃ当たり前の道具で、遠くにいる相手と話すための道具だよ。この世界じゃその機能は使えないけど、カメラなら使える」

「「「「かめら？」」」」

「そう、写真・・・精巧な絵って言えばいいのかな。それを写す道

具だよ。とにかく論よ証拠・・・誰かそこに立って・・・」

「はいはーい♪私を撮って見て～」

と馬岱が名乗りを上げたので、携帯から

「カシャ」

とシャッター音がしたところ翠が

「なんだ?今の変な音は」

「出来たって合図・・・ほら」

そう言って一刀が携帯の画面を翠たちに向ける。携帯の小さな画面に４人の少年が詰め寄り、彼ら達からすれば信じられないほど精巧

に映っている馬岱を見てに感嘆の声を漏らした。

更に馬休が、紫苑が持っていた硬貨を見て

「すごい精巧な作りだな・・」

と驚き、そして璃々が翠と馬鉄に

「これ食べてみる?」

とスナック菓子を示したが、さすがに気味が悪いと思い翠たちが手を出さなかったので、璃々が

「あ~毒が入ってると思ってるのでしょう、じゃあ私が食べてみるからね」

とスナック菓子を開け、2人の目の前で食べ始め、璃々が菓子を翠たちに配り、恐る恐る食べてみると

「「うまい～」」

と言って2人とも争うよう食べていたため、すっかり璃々に餌付け状態にされていた・・。

それを見て馬休と馬岱が

「この馬鹿姉貴！馬鉄！いったい何してんだよ！食べ物に夢中になってどうするんだ！」

「お姉様～皆の前で恥ずかしいから止めてよ～（涙目）」

と説教を食らっていた。

食べ物に夢中になる翠を見て一刀たちは心の中で

（（（この世界でも翠（ちゃん、お姉ちゃん）は翠（ちゃん、お姉ちゃん）だな・・））））

と納得していた。

馬休と馬岱に説教されて、気を取り直して恥ずかしながら翠が一刀に

「す・・すまねえ、食べ物に夢中になってしまって、それで単刀直入に聞くけど、ところであんたらさ、天の御遣いなのか？」

「う～ん、天の御遣いと言い方はどうかな？見ての通り、普通の親子だし、俺らが見せた物も俺等の世界ではありふれた物で、それに特別な能力や術を持っている訳じゃあないけどな」

「しかし、俺らがここに来たということは、何らかの天命があって、ここに来たということだろう、恐らく今は、世が乱れ、民など苦し

んでいることであろう、だったら俺らは、民が普通に暮らし、普通な人生、普通な恋愛などできるように戦うつもりだ」

と熱く語った、一刀は以前の世界では前線には立っていたが自らは戦っていないことを気にしており、今度は自ら武器を持って戦うことを心に決めていた。

翠はそんな一刀を見て

「こいつ、今まで見てきた男たちと全く違うな・・」

と何となく一刀を気になり始めていた。

そこで翠は

「せっかくだからよ、うちの城に来て、うちの母さんや私や皆に色々とあんたの国のことや理想を聞かせてくれないか、そして出来れば私らの国に仕えてくれないか」

と言うと

「ぜひ来ていただけますか」

「よろしくお願いします」

「お兄さんら来て、仲良くしようよ～♪」

と馬休、馬鉄、馬岱も揃って一刀らに城に来て貰えるよう嘆願した。

一刀は、他に行くあてもないことや４人の願いを無下にする気もないことから素直に願いを受け入れた。

そして紫苑と璃々にも確認すると

「「いいですわ、ご主人様」」

と2人も同意して、翠らの案内で城に向かった。

第4話

武威城の一室～

机の上に両肘を置き、両手を組んで、自分の顎をおいている女性が、

「はぁ～」

とため息をついていた。

そして横で仕事をしている女性が

「ため息などつかれて、どうされましたか？碧様」

「ああ渚か…、いやあのバカ娘のことを考えていたんだよ…」

と言うと心当たりがあったのか渚が

「…申し訳ありません、姫をあのように育ててしまって…」

「いいや、お主のせいではないよ、元々男に負けないよう強く育ててくれと言ってきた私が悪いんだが、まさかあそこまでなるとはな…」

と嘆いていた。

碧と呼ばれた茶色のロングの髪をした女性は、西涼の太守、馬騰で翠の母親で、渚と呼ばれていた赤色セミロングの髪をした女性は馬騰の家臣で?徳、翠の教育係であった。

実はこの2人、翠の結婚相手について悩んでいた。

以前から、翠には家のために早く結婚するように言ってきたが、翠が

「私より強い者でないと結婚しない」

と言ったため、母親である馬騰は翠のために強い男性を探してはきたのだが、翠がことごとく、その相手を全てぶちのめしたため、最近では、この周りでは翠に似合う男性がいなくなっていた。

碧はこんな状況であったので

「もし翠を押さえことができる強い男がいたら…」

と碧がぼやいていると、馬休が部屋に入って来て、

「母上、只今、戻りましたが、現在こちらに天の御遣いの家族を姉貴と一緒に連れてきています」

と報告すると、碧と渚は驚き、そして馬休が一刀たちと出会った状況や話した内容について、碧らに語った。

それを聞いた碧は、

「もし休の言っていることが事実であったら、いろんな意味においても、我ら一族の命運を掛ける時かもしれないわ…」

と2人に話し、少し考えると

「来たら謁見するので、2人は準備に取り掛かりなさい、そして休、翠に城へ入るのにあまり目立たないように入れと伝えておくれ」

と命を出すと2人は準備に取り掛かった。

そして部屋に残った碧は、

「もしかしたら、私らの救世主になってくれるかも…」

笑みを浮かべていた。

そして一刀たちは、夕方頃に城に到着し、周りにあまり気付かれないよう、城内に案内された。

そして謁見の間に案内されると、女性の2人しか居らず、翠が主と思われる女性に

「お母様、只今戻った。そして天の御遣いと言われている人たちを連れてきたよ」

と報告するのを聞くと、一刀と紫苑は、

（「「あれが馬騰か…」」）

と思っていた、歴史上でも前の時にも馬騰は曹操に殺されており、前の時は曹操の敵討ちするため、翠は一刀の仲間になった経緯がある。

そして馬騰と思われる女性が一刀に

「はじめまして御遣い様、私は西涼の太守の馬騰と言います」

と穏やかに挨拶をすると、

「丁寧な挨拶ありがとうございます、私は北郷一刀でこちらが妻の紫苑、その横が妻の妹の璃々です」

と紹介すると共に会釈した。

そして碧が一刀に

「さてに御遣い様とやら、ここにいる子供たちから話を伺いましたが、なぜこちらに来たのでしょうか…」

と探るように一刀に聞くと一刀は

「正直、俺らにもなぜここに来たかは分かりません、そして今は何の力もありません。しかし、俺らがここに来たということは、何らかの天命があって、ここに来たということでしょう、恐らく今は、世が乱れ、民など苦しんでいることと思います、だったら俺らは、皆が普通に暮らし、普通な人生、普通な恋愛などができるような普通な世の中にするために戦うつもりです」

と一刀が言うと碧は

「理想は素晴らしいわ、しかし、今、全く何もないあなたらに何ができるのかしら」

と挑発的な発言をするも一刀は

「確かに今の俺らにも何も力はないけど、しかし横にいる紫苑や璃々がいたら何も怖くない、3人で力を合わしたら、何とかなりますよ」

と前回に比べたら、最初から紫苑や璃々がいて、そして今回はそれなりの知識や武も持っていることに自信もあったので、そんな笑顔で答えると2人は一刀の発言に

「「ご主人様…」」

と2人は照れ、そしてそれを聞いていた碧は…

このやり取りだけであるが、碧の地位に頼ったり、媚びたりするわけでもなく、そして天の御遣い

という名称に対しても傲慢でもない、そんな自然体な一刀を見て碧は、一目惚れみたいな感じで

（ただ者ではないわ！これこそ私たちが待ち望んでいた人、何としてもここに留めておかなければ…、しかし正直独身だったらよかったのだが、でもこの計画は必ず実行して成功させるわよ）

と何か胸に秘めている碧であった。

そして碧は一刀に

「もしできることなら、あなた方家族がここに私に仕えて欲しい…いや御遣い様を家臣するなど恐れおおいわ、政治等にも権限を与えるので、ぜひ我が国の客将になっていただけませんか？」

と言うと逆に一刀はこの待遇に驚き

「なぜ初対面の人物にここまでの待遇をしてくれるのですか?そしてあなたの目的というか理想を教えて貰えますか?」

「私もこう見えて一国の主で、人の目もあるつもりよ、そしてあなたの理想と私の目的が合致したいうのが大きいわ」

「私はね、漢の征西将軍の地位を貰っているけど、昔、民のために思い反乱を起こしたこともあるわ、結果、当時の改革派に諭され、鋒を収め、一時期それでこの国も少し良くなったわ、しかし再びそれが悪い方向に流れてきている…、だから私は、まず民を守りたい、そして子供たちも守りたい…それが答えよ」

と碧が答えると、一刀も少し考え

「分かりました、今の話を聞いて馬騰さんが悪い人ではないと分かりました。喜んで仕えさせて貰えます」

「いいえ、それは駄目よ。あくまでも私と同等の立場を取って貰わないと困るわ、御遣い様の価値を高めるために必要なの、だから対等の同盟者という形で、客将で権限も与え、そしてこの国のために

力を貸して欲しいのよ」

とそこまで言われ一刀も折れて

「分かりました、俺の知識等教えてこの国の発展に力を尽くしましょう。しかし御遣い様というのは堅苦しいので、せめて北郷か一刀で読んで貰えませんか？」

と言うと碧は

「分かったわ、一刀さんと呼ばせて貰うわ、そして皆に私の真名を預けるわ」

一刀は真名については確認する意味で

「真名とは？」

「真名というのはその人物の本質を現す真の名で、本人の許しがなければ決して呼んではならない大切な名のことですよ、一刀さん。では改めて紹介を私の姓は「馬」、名「騰」、字が「寿成」、真名「碧」（みどり）と言います」

と碧が言うと一刀も

「私も改めて、姓「北郷」、名は「一刀」と言います、よろしくお願いします、碧さん」

「妻の北郷紫苑と言います、ご主人様共々よろしくお願いします」

「・・妻の妹の北郷璃々です、よろしくお願いします。」

と璃々が少し言いにくそうに言ったが、特に周りから気付かれることはなかった。

そして碧が

「翠、あんたも自己紹介くらいしな！」

「分かった～よ、じゃあ改めて言うが、あたしの名は馬超。姓は「馬」、名は「超」、字は「孟起」、真名は「翠」だ、よろしく頼むぜ、一刀」

「私は馬超の弟の馬休です、よろしくお願いします一刀さん」

「同じく弟の馬鉄です、よろしくお願いします兄貴」

「従姉妹の馬岱で、真名は「蒲公英」だよ～、よろしくねお兄さん♪」

「碧様の家臣で、姓は「？」、名は「徳」、字を「令明」、真名を「渚」と申します、よろしくお願いします一刀様」

とそれぞれ紹介し、こうして一刀らは馬一族と共に戦乱の世に立ち向かうことになった。

そして紹介のあと皆で食事をし、一刀らは、城の一室にそれぞれ部屋が与えられ、今、一刀の部屋

には一刀と紫苑が休憩していた。

「なあ紫苑、俺の判断でここに世話になることにしたがこれでよかったかな・・」

「あらあらご主人様、どうしたのですか？」

「ここに世話にならず、愛紗や鈴々を探すという手もあったかな・・と思ってさ」

「でもここの世界に愛紗ちゃんや鈴々ちゃんが、ご主人様のことを覚えているとは限らないでしょう、だったら心機一転この世界で頑張りましょうよ、私や璃々もいるのですから」

「・・そうだな、明日は明日の風が吹くか・・、明日から頑張っていこうか、さあ今日は疲れたし寝ようか、紫苑・・って、何してるの・・服を脱いで」

「え、ご主人様、せっかく若返ったのですから、味見をして欲しくて・・せっかくご主人様も若返ったのですから・・ね」

とベットから紫苑に誘いを受けると、一刀は抵抗できずに・・・陥落した。

こうして波乱の1日を終えたのである・・。

第5話（前書き）

下手くそな戦いのシーンですが文句は言わないで下さい。

第5話

一刀が西涼に来て1月が経過した。

翠視点

最初、一刀たちと出会った時は、胡散臭い連中と思っていた。

しかし、出会って理想を聞いてからその考えを改め、そして一刀たちと一緒に1週間、領内を回

り、そして西涼を変えるための提案を出した時に、お母様のあのように喜ぶ顔、そして私たちにも

分かりやすく説明してくれ、皆一致団結して、国を変えていこうという気持ちが十分伝わった。

そして、頭だけではなく武の方でも、一刀たち対私たちで対戦した時、皆でくじ引きの結果

璃々対蒲公英

紫苑対渚

一刀対お母様

とそれぞれ戦った。

璃々は、実戦慣れしていないため、蒲公英にやられたが、筋がいいし、弓は問題ないので、あとは

接近戦での対応だな。

紫苑は、渚と戦ったが、私と五分五分の力の渚が勝つと思っていたが、最後に紫苑が丈を振り下ろ

してからの蹴りの2段攻撃に蹴りが腹に入ってしまい、紫苑が勝ってしまった。

紫苑はこれで弓もできるというのだから、遠近両方戦える武将は滅多にいない。私は接近戦だけな

ら勝てるかもしれないが、総合的な実力なら紫苑の方が上かもしれない。

一刀はお母様と戦い、一刀は守り重視の戦いであったが、途中で仕事が入ってしまったため、勝負

はお預けとなってしまった。

お母様に一刀の実力を聞いたら、「私に花を持たせてくれたのでは」と笑いながら言っていた。

決して弱くないみたいので、一度機会があれば戦ってみよう。

「でもこれで頭よし、武も私より強かったら、最高の男なのだが、すでに結婚しているからな・・」

「でもこんながさつな私に惚れてくれる訳ないか・・」

と考えていると兵が近付き

「馬超様、馬騰様がお呼びです、すぐにお城にお戻り下さい」

兵に気付かれないよう気を取り戻し

「ああ、すぐ戻る」

と言ったが、いったい何だろう・・？

翠視点終了。

城に戻ると馬鉄以外、全員集合しており、碧から賊が出たという話を聞いた。

そして馬鉄が領内を警戒中に村を襲っている賊と遭遇、奇襲攻撃を加え、賊は先鋒隊のみであった

ため、直ぐに逃走、村人たちの損害は軽少で済んだが、逃走した先鋒隊は本隊と合流、その数約７

００。

馬鉄の兵が現在約３００程度で村を守っているので、援軍要請があった。

そこで軍議が開かれ、誰が援軍に行くかという話になり、碧が

「翠、あんたが大将で、副将に渚、そして一刀さんからの要請で一刀さん、紫苑さん、璃々ちゃん

も出陣するよ」

「一刀たちを出陣させて大丈夫なのかよ」

と翠が碧に聞くと

「大丈夫だよ、それに弓騎隊も出陣させて、訓練の成果を見せる絶好な機会だ、指揮する紫苑や璃々がいた方がよいだろう」

と言われると納得した。

弓騎隊（仮称）とは、騎馬から弓を射る専門の突撃部隊で、弓が得意な紫苑と璃々が中心となり作られ訓練されてきた。

一刀が

「翠、璃々が初陣なのでよろしく頼むよ」

「ああ分かったよ、璃々は弓騎隊で、一刀にも弓騎隊を指揮して貰うから、3人一緒に戦った方がいいだろう」

「いいのかよ、俺が指揮しても」

「一刀や紫苑、璃々らが一緒になって、徹底的に鍛えてくれたから、皆、一刀たちを信用しているよ」

と翠から言われると、一刀たちは照れくさそう了解した。

碧が

「準備が出来たら、直ぐに出陣だよ」

と言う、皆、返事をして一斉に出陣準備に取り掛かった。

出陣準備中、浮かない顔をしている一刀に紫苑が近づき

「どうされましたご主人様？」

「ああ、実戦に慣れておきたいと思っていたが、璃々のことを考えると、まだ初陣は早すぎたかな

と思ってさ」

と言うと微笑みながら紫苑が

「優しいのですね、ご主人様は・・、しかしご主人様も本当の戦場に前線に武器を持って立たれるのが初めてなのですから、気をつけて下さいませ」

「ああそうだな、これで璃々が無事で俺が怪我をしたら、璃々に何を言われるか分かったものじゃあないからな」

「そうですよ、そうなったら説教だけではすみませんからね」

「痛！」

と紫苑が一刀の左肘を抓り上げていた。

そして翌日には出陣し、そしてその次の日に賊を発見した。

～翠の陣～

斥候に行った兵が帰って来て

「ただ今、６里先（１里約５００メートル計算）に賊は陣を張っており、兵は約７００、まだこち

らの様子には気付いていないようです」

受け、翠が

「ご苦労さん、下がって休んでいてくれ」

と言って兵を下げさせた。

それを聞いた渚が

「姫様、向こうはこちらの兵２０００がすべて騎馬隊で編成されているのに気付かず、完全に油断

していますがどうされます？」

と言うと翠は考えて、一刀と紫苑に目を向けて

「一刀と紫苑はどう思う？」

話を振ってきたので、紫苑が一刀に目配せをして

「では私の案ですが、最初にご主人様、私、璃々の弓騎隊１０００名で弓を射ながら奇襲攻撃し、

陣をそのまま駆け抜けます。その後浮足立った賊に波状攻撃で翠さん、渚さんの部隊が突撃、そして私らはその後、武器を変えて、再び反転して賊を挟撃するという作戦ですが、いかかでしょうか」

と言うと翠も渚もその説明に納得し、紫苑の作戦実行されることになった。

突撃前に一刀は璃々が気になって様子を見たが、緊張のため、少々顔が青ざめていたので、一刀は

璃々の緊張を解そうと、まだ一刀に気付かない璃々の背後に回り、後から璃々の首筋に息を吹きかけると、璃々が

「キャ！何するのよ」

と言って、一刀がいることを確認せず、右手で

「バチーン」

と顔面にビンタをしていた・・。

ビンタをした相手が一刀だったことに気付いた璃々が慌てながら

「ごめんなさい、お・・いや、ご主人様」

「いやいや俺が悪いのだから気にしなくていいよ、璃々、それで、緊張は解けたかい」

と言うと

「あ・・」

と言ってさっきまで緊張していたのが解け、普段の璃々に戻っていた。

一刀が璃々に

「璃々、実際に俺も武器を持って、こうして前線に出るのが初めてだ、璃々は実際に戦場自体に出るのが初めてだ、だから璃々、失敗してもいいから必ず生きて帰ってこい、これだけでも大きな勲章だからな、いいな」

と璃々に言うと璃々が、少し考え悪戯っぽい顔をして

「じゃあ、無事に帰ってきたら、何か褒美頂戴よ～」

と甘えたように言うと一刀は、そんな大した物を言わないだろうと考え、その申し出を了解した。

それを近くで見ていた紫苑が微笑みながら

「璃々のことありがとうございます」

「いやいや、（小声で）親子だろ、気にしなくていいよ」

「それもそうですが、ご褒美のことですよ」

「ああ大した物を頼まないから大丈夫だろ」

「そうだといいのですけど・・」

と言って笑みを浮かべながら、戦の準備に掛った。

そして一刀たちが賊に対して、奇襲攻撃を加えたところ、賊は一刀たちにまったく無警戒であった

ため、簡単に突入を許し、紫苑や璃々たちの放つ矢が賊兵たちに命中し、一刀は弓騎隊に近づく賊

たちの警戒に当たり、数人の賊兵が一刀たちに掛ってきたが、

「ハァー」

と言いながら、愛刀「紫電」で賊兵たちを討取っていった。

一刀は賊兵を討取り、以前のような戦に対する不快さは多少残ってはいたが、今は

「皆が普通に暮らし、普通な人生、普通な恋愛などができるような普通な世の中にするために戦

う」

が信念があるから戦えるのだと。

そして、部隊はそのまま敵中突破を果たすと、波状攻撃で翠と渚の部隊がそのまま突撃すると、翠

が

「我が白銀の槍の攻撃！！その身に受けてぶっ飛びやがれぇぇぇーーー！！おらぁぁぁぁ！」

と賊兵を蹴散らしていた。

そして一刀たちは、翠たちが突撃している間に、今度は刀や槍に武器を持ちかえ、再び賊兵のとこ

ろに反転突撃すると賊兵は浮き足だし、賊兵たちは逃走を図るなど、戦の趨勢が決したが、賊将の

1人が

「クソー、1人でも道ずれしてやる！」

と言って、一刀の部隊に突入し、剣を持って部隊を指揮していた璃々に向かって馬ごと体当たりし

たところ、それに気付かなかった璃々は

「キャ！」

と言って、その賊将とも落馬し、２人が対峙する状態になった。

まだ一刀や紫苑は璃々の様子には気付いておらず、それぞれ戦っていたため、璃々１人で賊将と対

決する状態になり、賊将が

「ウォー、死ね！」

と上段から刀を振り下ろしたが、何とか璃々がこれを食い止めて、強引にこれを必死で跳ね返し、

間合いを取ったが、賊将の攻撃で恐怖心が出てしまい璃々は

「このままじゃあ殺されてしまう・・、何とかしなければ・・」

と思っていたが、賊将が再び

「ウォー」

と言って上段を振り被って、璃々に向かって行くと、璃々がその瞬間に頭の中が

（「死、死ぬは嫌――」）

それ以外記憶が覚えていない状態になり、賊将に向かって

「イヤー」

と言って愛刀「桜花」を突き刺したところ、賊将の胸に刀が刺さり、そして血を吐き倒れて討取っ

たが、璃々はその場で力を使い果たし、気を失い、倒れてしまった・・。

その後、璃々の様子に気付いた一刀と紫苑に助けられたが、意識を失っている状態で怪我は無かった。

そして戦いは大きな損害もなく勝利に終わった・・。

第6話（前書き）

今回は妄想モードに、昼ドラみたいな展開で書いてしまった・・。

気に食わない方はUターンして下さい。

第6話

戦は、勝利に終わったが、その夜璃々は、まだ陣の天幕で眠っていた。

眠っていても、何かにうなされている状態で、そして

「ウヮーー」

と悲鳴を上げると同時に起き上がり、そして周りから身を案じられる声がしたので、ようやく落着いて周りを見ると一刀、紫苑、翠、渚がいた。

そして璃々が戦場の恐怖と助かった安堵感からか感極まって、横にいた紫苑に泣き付いた。

璃々は、本当は紫苑に「お母さん」と言って泣きたいところだが、今は姉妹の関係、翠たちには知られる訳にはいかなかったので、今はただ泣いて、紫苑に甘えたかった。

しばらくしてから泣きやみ、ようやく落ち着くと紫苑が

「よく無事に戻ってきたね、璃々」

と笑顔で言ってくれると、璃々はその笑顔に救われ、心の中でやはりお母さんは偉大なと感じていた。

そして一刀も

「倒れたけど、大きな怪我もなく戻ってきてくれたな、帰ったら、褒美を上げるからな」

と言って、労るかのように璃々の頭を撫でていた。

その行為は、璃々に取っては、大変嬉しく、そして生きている実感

が湧くと同時に長年恋い焦がれきた人の手の暖かさを感じていた、
そして心の中で

「お父さん、やはり私は…」

と何らかの気持ちが外れた瞬間でもあった…。

そして翠が

「無事で本当に良かったよ、璃々が討ち取った賊将は向こうで一番
強い奴だったらしいよ、初陣で手柄
を立てると大したもんだよ」

と褒めていると、横にいた渚が笑いながら

「そうですよ、姫なんて初陣の時に…」

と言おうとすると、翠が顔を赤らめて、渚の口を両手で塞ぎ、

「渚言うな！言ったらただじゃあおかないからな」

と半分脅迫、半分涙目になりながら、訴えたので、渚は、このまま口を押さえこまれたら窒息死してしまいそうだったので、頷いて、口から手を離して貰った。

その光景を見て璃々も笑顔見せ、そして、璃々がかなりの寝汗を描いていたため、着替えのため紫苑だけ残し、一刀たちは璃々の天幕から出た。

そして璃々が着替え終わると、周りに誰もいないことを確認して

「ねえ、お母さん一つ聞いていい？お母さんが初陣の時に人を殺した時って、どんなだった？」

と璃々が紫苑に質問したが、紫苑は優しい顔をして静かに

「璃々、私の場合倒れたりしなかったけど、気分が悪くなって、人が見えないところで戻していたわ」

「それに誰も人を殺して、いい気分はしないわ、戦場では、生か死の2つしかないの。でもね璃々、自分が生きて行く事や何かを守らねばならない時、自分の道を歩まねばならぬ時に、必ずと言って良い程避けて通れぬ時があるわ、それを守るために私は戦ってきたわ。昔はあなたと民を守るため、今はあなたとご主人様と民を守るために、そしてそれは変わらず、これからも戦っていくわ」

「だからと言って、急に理想を作れと言ってもできないわ、まずは璃々、私たちが無事にこの世界を生き抜くこと、これを第一に考えなさい。もし戦いが嫌なら、後方で控えるように言うけど…」

と紫苑が言い終えると璃々は笑顔で

「お母さん…、ありがとう心配してくれて、お母さんも最初はそうだったんだ。私はまだ民のためとかと言っても実感が湧かないけど、まずは私自身、そして、ご主人…、否、お父さんとお母さんを守るために戦うよ、だから心配しなくていいよ」

と璃々は声は静かであるが力強く言い切った。

そして2人は少し話をして、紫苑が

「じゃあ璃々、ゆっくり休みなさい」

と言うと、璃々はなぜか少し赤らめた顔で小声で

「ここを出てから、お父さん呼んできてくれる」

と紫苑に頼むと、紫苑は笑顔で

「はいはい、でもね夜更かしとか無理したら駄目よ」

と何か釘を刺される一言が帰ってきたので、璃々はさっきの一刀への呼び方を急に変えたのが、自分の心が紫苑に読まれたかと思っていた。

しばらくすると一刀が天幕に来ると

「どうしたんだい璃々？」

と声を掛けるも、しばらく無言で、かもじもじするような仕草をして、ようやく

「ねえ、お父さん、戦の前に言っていた褒美の件なんだけど…」

「お、何か欲しい物があるのか？町に帰ったら用意するぞ」

と一刀は言うと璃々は顔を赤らめて

「物ではないの…、お願いを聞いて欲しいの」

「何だ、出来る範囲の願いで叶えられるものなら、何でも聞いてやるぞ」

と一刀が言うと璃々は、この言葉を待っていたかのように意を決して

「じゃあ、お父…ではなく、ご主人様、私を抱いて下さい」

と言うと一刀は、

「え……、璃々本気…？」

と放心状態で聞くと璃々は小さく頷いた。一刀は

「何でまた…」

「……ずっと前からご主人様が好きだったの、今日の戦いをして、私やご主人様もいつ戦死するか分からないでしょう、私は後で好きであることを言わずに後悔するよりは、好きな思い告げて、ご主人様と結ばれたいの…、お母さんの次で好きでも構わないの、ご主人様この思い受けて欲しいの…」

と璃々が切実に語ると一刀は

「璃々が俺を好きだったことは知っていたし、俺も璃々が好きだよ、でも今まではどうしてもそれに答える勇気が無かった、しかし璃々かここまで勇気を出して言ってくれた、だから俺は迷わない、紫苑だけでなく璃々も守ってやる、誰に何を言われようとも」

と一刀は力強く璃々を抱き締めた。

璃々は泣きながら

「嬉しいよ…、夢じゃないのよね…」

「ああ、夢じゃない」

と言って、2人は熱い口付けを交わした…。

そして2人は寝台に横たわり、璃々が

「その…初めてだから、優しくしてね…」

「ああ、分かっているよ…優しくするさ」

と言って、2人は結ばれた・・。

そして翠が璃々のことが気になって、再び天幕に訪れ、入口の前に来ると中からは息使いが荒い男女の声が聞こえてきた。

翠は、その声が気になり、聞き耳立てると、

「璃々…愛して…いるよ」

「お父さ…ん、否、ご主人…様、嬉し…い」

と聞いてしまった…聞いてはいけない言葉を。

翠は、頭が真っ白になり、すぐにその場を離れ、自分の天幕に戻った。

そして天幕に入り、その場で座り込み、

「何で…こんなことに…」

翠が初めて一刀を男として興味を持ったのに、そんな一刀が璃々と結ばれ、そして紫苑の妹であるはずの璃々から一刀を「お父さん」と言った言葉の意味が分からなかった。

そして翠は2人の事を考えながら、寝れない夜を過ごしたのであった…。

第7話（前書き）

ハチャメチャな展開になっていますので、嫌な方はスルーして下さい。

第7話

翌朝・・

璃々の天幕から帰っていた一刀が、陣払いの準備をしていると渚がやって来て

「一刀様、姫が2人でお話したいことがありますので、姫の天幕まで来て下さい」

と言ってきた。

一刀が了解したが、渚が

「一刀様？」

「はい、何ですか渚さん」

「昨日、璃々さんの見舞いの後、姫と何かありました？」

「いいや、昨日はあれから翠や渚さんと別れてから、さっきまでまったく会っていないけど？」

「う～ん、そうですよね・・」

「どうかしましたか？」

「いいえ、話し方は普通なのですけど、雰囲気が何か殺気というか悲壮感が漂っているというか・・、姫が今まで見せたことがない様子だったので・・、すいませんが姫のことよろしくお願いします」

と渚が心配そうに言うので、一刀が

「分かりました。取り敢えず、翠のところに行って話を聞いてきま

すよ。すいませんがでは陣払いの方はお願いします」

と言い残し、翠の陣幕に向かった。

一刀が翠の陣幕前に来ると

「翠、一刀だが入ってもいいか～」

と声を掛けると、中の奥の方から辛うじて聞こえるような声で

「・・入れよ」

と聞こえたので一刀が

「入るぞ」

と天幕の中に入ったが、中は暗く、辛うじて外の光だけで中の様子が見える状態で、奥の方に人影が見えたので、確認してみると、銀閃を持って構えている翠が立っていた・・

一刀が翠の様子がおかしいことに気付いたが、翠が無言で、そして銀閃を構えたまま、槍の先を顔に近付け・・怒りを込めた声で

「一刀・・、昨日璃々と・・・男と・・・女の付き合いをやっている時・・・、璃々が一刀のことを「お父さん」・・・と言っていたよな・・あれはどういうことだよ、教えてくれよ・・」

と衝撃な発言を聞いた瞬間、一刀は昨日の事が翠に見られたことを悟った。

一刀はしばらく沈黙した後、右手の素手で銀閃の先の部分を強く握り、そして手からは出血しているにも係わらず、そのまま握った状態で銀閃の先を自分の心臓の位置に持っていき、覚悟を決めたかのように

「翠・・今から俺が話すことについて嘘偽りはない、これを聞いて、俺が生かしてはならない人間だと思うのなら、そのまま銀閃で俺の心の臓を刺しても構わない、俺は翠に殺されても後悔もしないし、恨みも言わない、ただ紫苑と璃々の命だけ取らないでくれ」

と言うと翠が警戒を緩めない態度で

「ああ・・紫苑と璃々の命までは取らないよ、・・話してくれ」

と言うと、一刀は以前別の外史で紫苑と璃々と出会った時ことから、この世界まで降りてきた時までのこと、そして別の外史で翠と出会っていたことや一刀と紫苑が若返ったため、璃々との関係を改ざんしたこと、そして璃々が一刀と紫苑の関係を承知で愛していることを全て話をした・・。

そして全ての話を聞いて翠は一刀に

「は・は・は、そんな話、誰が信じろって言うんだよ!」

「・・信じるか信じないか翠、翠の判断次第だよ・・、ただ1つだけ言っておく。俺は璃々を抱いたことについて後悔はしない、1人の男として寧ろ嬉しいくらいだよ。そして紫苑も承知の上だ、だから翠が俺の命だけでなく紫苑や璃々の命まで取るというのであれば、俺は翠を敵に回しても戦うつもりだ・・」

と言い切ると、翠は涙を流しながら

「何なんだよ・・それ・・」

「せっかく私が、生まれて初めて男に興味を持って、好きかもしれないと思っていたのによ・・」

と言いながら、持っていた銀閃を地面に落とし、そしてその場で泣き崩れた・・。

そして一刀は心中

（「今の俺に翠を慰める資格はない・・」）

そして

「翠、ごめん・・」

と言って陣幕を出た。

そして一刀は、その足で璃々がいる陣幕に行くと、璃々の様子を見にきていた紫苑もいた。

紫苑と璃々

「おはようございます、ご主人様」

「おはよう～ご主人様」

と言うと、一刀の様子がおかしいと気付いた紫苑と璃々が一刀を見ると右手が怪我をしていたので

「「ご主人様、手が・・」」

「ああ、すまんが紫苑、治療して貰ってもいいか」

と言うと紫苑は治療をしていると、紫苑と璃々が

「どうしたのですか、こんな怪我をされて」

「そうそう、どこかで転んだの～」

と心配そうに言うと、一刀が2人に

「すまん、実は・・」

と言って、先程翠の陣幕であった出来事について全て説明した。

紫苑が全てを聞き終えると、一刀と璃々の関係を持ったことについては微笑んでいたが、

今後について真剣な顔つきになって一刀に

「ご主人様、これからどうされますか」

と聞くと、一刀は紫苑に頭を下げて

「本当にすまん紫苑、正直言って、俺は近いうちにここから出よう

と思っている。翠は俺の事が好きかもしれないと言っていたが、この状況になってしまったら、居るに居られないだろう、それに翠の悲しい顔を見たくはないし、これ以上翠を苦しめるのも俺の本意ではない、だから翠の心の傷をこれ以上広げないためにも、ここを出た方がいいと思う」

と言うと璃々は泣きそうな顔になりながら

「ごめんね・・、ご主人様、私の不用意な一言がこのようなことになるとは・・」

と謝ると一刀は

「気にするな、璃々、俺もまさかこのようなことになるとは思っていなかったけど、言っただろう、どんなことになろうとも紫苑と璃々を守るって」

それを聞いて紫苑は

「残念だけど・・仕方がないですね、でも何かいい方法があるか考えてはみますけど・・」

「ああ、いい方法があればいいけど・・」

そして璃々も寂しそうな顔で

「うん、仕方ないよね、私も翠お姉ちゃんの辛い顔を見たくないし、お姉ちゃんも好きなご主人様を奪い取った私の顔なんて、きっと見たくないはずだよ」

と言い、話し合いの結果、武威に戻ったあとに涼州から離れる方針で一致した。

家族会議の後、陣を引き払い、武威に戻ったが、その間行軍中、翠は元気がなく、翠と一刀らの会話もなく、更に紫苑も道中、一刀とほとんど会話を交わさず、何かを考えている様子であった、城に戻ると翠は、碧への報告については体調不良を理由に渚に任せ、自室に籠ってしまい、そして一刀と璃々の方は、翠との摩擦を避けるた

め、戦の報告については紫苑に任せることにした。

そして、碧への報告に行く前に紫苑が一刀に

「ご主人様、一つお聞きしていいですか」

「何、紫苑？」

「ご主人様と翠ちゃんの会話の時に翠ちゃんはご主人様が好きかもしれないと言っていましたよね」

「ああそうだけど」

「それでご主人様は翠ちゃんのことをどう思ってますか？」

「ああ、あんなことになったけど俺が翠を嫌いになるはずがないだ

ろ、まだ昔の気持ちがあるかもしれんが、今の翠も好きだよ」

「まぁ」

と笑みを浮かべながら、璃々の方に向き

「璃々、翠ちゃんの悲しい顔を見たくないと言っていたよね」

「うん、そうだけど・・」

と言って、紫苑が璃々に耳を貸しなさいと言って、一刀に聞こえないように小声でヒソヒソ話をして、璃々にそのことを告げると璃々が

「え～、そんなこと可能なの？それはできたら何か複雑な気分で、嬉しいけど・・でもできたら何となく面白そう～」

と興味深深なことを言いだした。

「紫苑、いったい璃々に何を言ったんだ、教えてくれよ」

「ふふ、それは秘密ですよ、ご主人様」

「それでご主人様、今回の一件、私に任せて欲しいのですけど、よろしいですか？」

「何か案でも浮かんだのか、紫苑？」

「ええ、ただ確実ではないので成功するかどうかは分かりませんが・・、だから璃々、さっきの話はあくまでも話が成功してから、後のことだから心配しなくていいわよ」

「紫苑、無理をするなよ、お前を失ってまで、ここにいるとは考えていないからな」

「いやですわご主人様、殺し合いに行くわけじゃあないのですから」

「分かった紫苑、話し合いは任せるよ、決して無理をするなよ」

「分かっていますわ、ご主人様、では碧様のところに行ってきますので」

と胸にある決意を秘め、碧との会談に臨む紫苑であった・・。

第8話（前書き）

強引な話ですが、温かく見て下さい。

第8話

翠の部屋～

私は討伐から帰ると、お母様の報告は渚に任せ、自分の部屋に閉じこもった。

なぜ私は、逃げるようなことをしている？

紫苑と璃々が実は親子同士で抱いて軽蔑している？

一刀が璃々を抱いて嫉妬している？

璃々を愛していると言われて、負けたと思い逃げた？

別の世界で私らは愛し合っていた？

私の思いはいったいどうなの？

頭がぐちゃぐちゃで訳が分からないよ・・・

一人で自問自答を繰り返していた・・・。

～執務室～

部屋には碧と馬休が仕事をしていたが、戦から帰ってきた渚から報告を受けていた。

報告を受けると碧が渚に

「賊将を討ち取り、こちらの被害は大したことは無かったのは良かったけど、翠の体調は大丈夫かい？」

「正直、体調というよりは、何か人に言えない問題を抱えているみたいですが…、憶測ですが恐らくは一刀様が絡んでいるような気がしますが…」

「それは何故？」

と言うと、

「失礼します」

とちょうど紫苑が入室してきた。

碧が紫苑を見ると

「ちょうど良かった、紫苑さんに聞きたいことがあってね」

と言うと紫苑も

「はい、私も皆様方と大切なお話があって参りました」

「大切な話？」

「はい…」

ただならぬ紫苑の様子に察知したのか、碧は先に話をするように勧めると紫苑は

「ありがとうございます。こちらには長い間、大変お世話になり、大したご恩を返すことができず申し訳ありませんが、身勝手なお話ですが、近い内に我々家族、涼州から退去したいと存じ上げます」

という紫苑の話を聞くと3人は呆然とし、いち早く気を取り戻した碧が

「それは待遇面が悪いってというお話？」

「待遇面については何の不満もないですわ」

「ではなぜ…？」

「では碧様、休様、渚さん、今から私がお話する内容を信じるか信じないかは、お任せしますが、私自身は嘘を言うつもりは一切ありませんので、しばらく拝聴願いますでしょうか？」

と言うと、３人は承諾し、紫苑は事の発端になった一刀と璃々のことから説明を始め、そしてこれを翠に見られ、翠が一刀を追及、そして一刀が自分達の正体を全て翠に説明した等を、碧たちに説明した。

それを聞き終えた碧が

「やれやれ正直、こんな話を聞いたら信じられないだろうが、わざわざ嘘を言いに来ても仕方がないから、信じるしかないだろうよ」

「しかし姉貴が、別の世界で一刀さんを愛していたというのも驚きだよ」

「でも紫苑さん、璃々ちゃんが本当は親子だったとは…、そっちも信じられないですわ」

と碧や馬休、渚は、それぞれ驚きの言葉を口にしていた。

碧が紫苑に

「では、なぜ翠があそこまで落ち込んでしまったのかい？」

「憶測でありますが、翠さんはご主人様に男として興味を持っていましたが、璃々の方に先に愛され、それが、最初は血縁関係がある

親子でそういう関係を持ったことに精神的衝撃を受け、実際の血縁関係がないと分かっても璃々を愛する発言もあり、更に過去の世界でご主人様と翠さんが愛し合っていたというのを聞いて、更に頭が混乱してしまい、心の整理が全くつけられないのが原因かもしれないですが…」

「・・その考え間違っていないかもしれないね・・」

「でも、それで涼州からわざわざ出なくてもいいのでは?」

と碧は言うが、紫苑は

「ご主人様と璃々は翠さんをこれ以上悲しい思いにさせたくないということからここから離れる決意をしています、それに私もそれについて行こうと思っています」

と言うと、碧は

「・・ちょっとその話は待って貰えないかしら？」

「休、渚、悪いが2人は翠の部屋に行って、あいつを呼び出して来てくれ」

と2人を部屋から出した。

そして碧は、紫苑に一刀がこちらに来てからずっと考えていた自分の考えを述べた

「これは私の本音の話だが、聞いてくれるかい」

「・・伺いましょう」

「紫苑さんも知っているとは思うけど、翠にはずっと結婚相手を探していたんだが、あいつの合う相手が全くいなかった、しかし一刀さんや紫苑さんらがこの地に来て、特に一刀さんの人間的の強さが本物に感じたので、翠も何とか気になっていたようだし、私は翠を何とか一刀さんと結婚させようと考えていたのさ、もちろん紫苑さんの承諾を得てね」

と言ったが、紫苑は微笑を浮かべながら、

「それではご主人様を馬家に嫁ぐという形ですか？」

「そういうことになるね？」

「うふふ、それでは正直私らが不服ですわ、その様な扱いでは、ご主人様は別として、私らの立場がありませんわ」

とやんわりと否定し、

「では、どうすればいいのかしら?」

「それでしたら、逆に翠さんが、ご主人様に嫁ぐというのはどうでしょうか?そして私たち3人は同等の正妻という形で、そして碧様のあとにご主人様を主になっていただくという形では・・・」

という考えを述べた。

紫苑は、碧が何らかの考えを持っていたのは分かっていたが、一刀を馬家に嫁ぐというのは、妻の立場として、さすがに許容範囲を越えていた。

逆に紫苑の考えは、やはり一刀を再度主として再び抱き、自分や民のために天下を握って欲しい、だからここを出て一から勢力を作るのは、大変な事は分かっている、それなら翠が一刀を愛しているのならば、思いを遂げるようにして、逆に一刀に嫁ぐようにして、そして一刀を主にして、一刀と馬家を一体化させようと考えていた。

紫苑の考えに碧は

「・・ちょっと考えさせてくれないか」

とその場で長考に入った。

執務室を出た馬休と渚は、翠の部屋前に来て、渚が

「姫様、入りますよ」

と入ると、寝台に仰向けで考えて込んでいる翠がいた。

それを見て、渚が碧が呼んでいることを伝えたが、

「悪いけど、一人にしてくれないか」

「いいのですが、この一刀様がここから去っても・・」

と渚が一刀が西涼から去ることを伝えると、翠は飛び起きて

「それはどういうことだよ！」

翠が言い放つと渚はさっきほど紫苑が言った内容を伝え、更に一刀と紫苑らの関係についても分かっている内容を語った。

それを聞くと翠は

「何だよ、それ・・」

とうなだれていると、馬休が

「姉貴、このままでいいのかよ?」

「良いわけないだろ!」

「じゃあ、なぜぐずぐずしてるんだよ!このまま泣き寝入りするのかよ!」

「だって・・よ、すでに向こうは結婚していて、それに璃々もいて、愛しているって言われたのだぞ・・」

「じゃあ姉貴は、一刀さんに好きって伝えたのかよ」

「!!」

翠の驚く顔を見て馬休が思いを伝えていないと悟り

「思いを伝えないで、すでに璃々ちゃんに負けているのがおかしいだろ、姉貴」

と馬休が言うと、引き続き渚が

「姫様、姫がこのまま思い伝えずに、一刀様が立ち去ってしまったら、必ず後悔するでしょう」

「姫のいいところは、気持ちが真っ直ぐなところでしょう、部屋で悩んでいても何も解決出来ませんよ、そしてこのままおめおめ引き下がったら、錦馬超の名が泣きますよ」

と2人から言われると、翠は吹っ切れた顔になり

「2人ともありがとうよ、確かにこのまま引き下がったら、私の名が泣くよな」

「よし分かった、お母様のところに行くよ」

と言って、翠らは執務室に向かった。

そして長考していた碧が紫苑に

「では、勝負といかない？」

「勝負とは？」

「一刀さんと翠を一騎打ちで勝負させる、一刀さんが勝てば、紫苑さん、あなたの言う通りにする、翠が勝てば、あなた方は私らの言うことを聞いて貰うという勝負よ」

と言うと、外から勢いよく扉が開けられ、翠が今の内容を聞いていたのか

「お母様、その勝負乗った！一刀と一騎打ちさせてくれ！負けたら、前からの約束を果たすよ」

と翠が一騎打ちの申し出を受け入れた。

これを見て紫苑も

「分かりました、この勝負をお受けしますわ」

一騎打ちの承諾をした。

そして碧が馬休に、一刀と璃々を呼び出すように命令し、その際に何も言わずに連れて来るよう指示した。

そして一刀と璃々が馬休に連れられて、執務室にやって来たが、皆

が揃っていたおり、碧が

「話は紫苑さんから聞いたわ、でもね一刀さん、一度翠と一騎打ちの勝負して欲しいのよ、理由は紫苑さんに説明して承諾して貰っているわ、この勝負受けて貰えるかしら・・・」

と碧が一刀に説明すると、一刀は翠を見ると翠は

「一刀頼む、私のためにもこの勝負受けてくれ」

と懇願するかの様に言ってきたので、あえて理由は聞かず、一刀は翠からの一騎打ちの申し出をを承諾した。

そして一刀は、準備のため、一度部屋に戻り、勝負の場所となる城の中庭に行くと、先程居なかった馬鉄や蒲公英もやって来て、全員で観戦する状態であった。

そして一刀は、すでに準備が出来ている翠を見て

「待たせたな翠」

「こっちもさっき来て準備が終わったばかりだ、良いかい始めても」

と言うと、立会人の渚が頷き2人を見て

「では始め！」

と勝負を開始した。

翠は左足を前にして半身の構えに対し、一刀は中段の構えでいた。

そして翠が

「うぉぉーーーー」

と鋭く槍を突いていくと一刀も

「はぁぁーーーー」

と翠の鋭い連続攻撃を交わし、そして翠が槍を引いたところ、一刀が素早く翠の懐に入り込み、カウンターで刀を入れて翠が交わしていく展開が数回続いた。

そして戦いの途中で翠が、一刀に対して

「ハアハア、なあ一刀、もし私が好きなら、私に勝って、私を一刀のモノにしてくれよ」

と翠の爆弾発言に一刀は驚きつつ、

「ハアハア、分かったよ、翠、お前に勝って、俺のモノにしてやるよ！」

「フン！そう簡単に勝たせやしないぜ」

と翠が槍を突く方法から、上下左右に振り回す方法に変えた。

すると一刀は、翠の激しい攻撃に防戦一方の展開に持ち込まれしまった。

（「くそ～、相変わらず力強い攻撃だな」）

と一刀は考えていると、一刀は間合いを取り、構えを変え、

（「一か八か、これで勝負！」）

刀を下ろして、そして翠を誘いを掛けるように下段に構えた。

翠は一刀の構えを見て、

（「見たことのない構えだかな・・、迷っても仕方がないこれで止めだ！」）

と一撃必殺のように鋭い突きを胸に突いてきた。

一刀は予想していたように

（「やはり来たか！」）

と翠の攻撃を下から力一杯にかち上げると、この一撃で

「あ！」

翠は槍を手放してしまい、一刀は翠の顔に刀を突き付けた。

そして翠はがっかりした顔で

「私の負けだよ・・」

と負けを認めた。

そして一刀が

「翠、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だよ・・」

と言うもののお互い無言になり、それを見て碧が

「一刀さん」

「何ですか、碧さん」

「あなたが勝ったから、約束通り、翠を一刀さんに嫁がせ、そして私の後継者にあなたにお願いするわ」

と聞くと一刀は慌てて

「ど、どういうことですか?」

と言うと碧は紫苑との勝負内容を説明した。

それを聞いて、一刀は

「紫苑・・・、無茶苦茶なことを、しかしいいのか、翠を迎え入れても」

と言うと紫苑は

「ふふふ構いませんよ、またこの世界に来たら、ご主人様に群がる方は数知れずになる可能性が高いのですから、愛紗ちゃんみたいに焼きもちを焼いて始まらないですから、でも一番はわ・た・しですからね」

と妻としての理解のあることを言っていたが、横にいた璃々が

「ダメだよ、これ以上ご主人様の周りに女の人増やしたら～」

「あら、でも璃々、翠ちゃんには反対しなかったじゃあない」

と紫苑はさりげなく、翠の呼び方を以前の様に変え、璃々に対して、反論すると

「う～ん、翠お姉ちゃんだから、反対はしなかったけど、これ以上増えたら、困るよ～」

とぼやいていた。

すると翠が

「あ～あ、私もとんでもない男に惚れてしまったよ」

と言うと一刀が

「いいのか？こんな俺で、断るなら今ならまだ間に合うぞ」

「い、嫌、ぎゃ、逆にいいのか、こんながさつな私で」

「何に言っているんだ、翠みたいな、こんなかわいい子に言い寄られて、嫌という男がどこにいるんだよ」

「か、かわいい～！？★■※@▼●！？」

と目を白黒しながら、驚いている翠であった。

これを見て碧が翠の様子を見て

「これが一番良かったかもしれないね」

と母親の顔になって呟くと横にいた馬休、馬鉄、蒲公英が

「やれやれ、姉貴もようやく幸せを掴んでくれたか、これから一刀さんから義兄さんと呼ばないとダメだな」

「それもそうだが、姉貴、兄貴のことを一刀と呼び捨てにしていたから変えないとな～」

「それじゃ、紫苑さんみたいにご主人様と呼ばせようか～」

とイタズラぽい顔をしている蒲公英を見て、渚が

「あら、それいいですわね、蒲公英様」

と言い、そして渚が翠のところに行き、笑顔で

「姫様、結婚おめでとうございます。ではこれから一刀さんのことを呼び捨てするのではなく、姫様のご主人様となるのですから、一刀さんのことをご主人様と呼んでみて下さい」

と言うと翠が

「こ、ここでか!?」

「はい、そうです」

「う～～」

と恥ずかしそうにしていると碧が

「翠!しっかりしな!そんなこと言っていると一刀さんを璃々ちゃんに取られてしまうぞ」

とハッパを掛けられると翠は顔を赤くしながら

「ご、ご主人様、こんな私だけど、よろしくお願いします」

と翠が恥ずかしそうに言うと一刀も

「ああ、こんな俺だけど、俺も翠のことが大好きだから、よろしく頼む」

と言って、翠の体を抱き締めた。

翠は一刀から抱き締められると、嬉し泣きしていた。

それを見て、蒲公英は

「いいな～お姉様、次は私の番だね」

とさりげなく爆弾発言をしていた。

翠の姿を見て、璃々が拗ねていたが、紫苑は、今日は翠の記念日だからと言って、璃々を宥めた。

そして、この後、全員で2人の簡単な祝い討伐の慰労会をした後、気を利かせて、一刀と翠の2人きりにさせた。

～一刀の部屋～

部屋は一刀と翠の2人きりになっていた。

翠が一刀に

「なあご主人様、前の世界でも私はご主人様を好きになっていたというけど、実際どうだった？」

「何だ翠、気になるか？」

「う～ん、やっぱり気にはなるよ」

「あ～確かにな、でもな翠、俺は以前いた翠も好きだし、今の翠も大好きだよ」

と言われると翠は

「★■※@▼●！？」

と顔を赤らめていた。

「でも翠、俺が碧さんの後継ぎになっていいのかよ、そっちの方が大事なことだろう？」

「ああご主人様がなってくれた方が私は助かるよ、私も皆の幸せは願っているが、実際は武を奮う以外、頭を使うのは苦手なんだ、だからご主人様が主になってくれた方が、私も安心して武を奮えるから、そっちの方が嬉しいよ」

と笑顔で答えた。

「そうか・・、それだったら何としても、皆の期待に応えていかないといけないな」

と一刀が応えると、翠は

「・・ご主人様、こんな私だけど愛してくれよな」

「勿論さ、翠・・」

と言って、２人はキスをして、それから寝台に行き結ばれた・・。

第9話

一刀と3人が結ばれてから、2月くらい経過し、一刀らが提案した政策も上手くいき国力も大分増強されてきたある日、一刀からこんな提案が出された。

「優秀な軍師又は文官が欲しい」

これを聞いて、翠が

「ご主人様や紫苑ではダメなのか？」

と言うも、紫苑は

「どちらかと言えば、ご主人は内政と武官はできますが軍師向きではないですし、私も本来武官ですし、渚さんも武官でしょう、そういう意味では軍師や純粋な文官が欲しいですわ、優秀であれば武官でもいいですけど」

と紫苑が言うと碧が

「確かにうちの国の課題だな・・、でもどうやって集める?」

そこで一刀が

「正直、涼州は地理的に不利だから、こちらから待ってもなかなか人が来てくれないだろう、だからこちらから頼みに行くというのはどうだろう」

と言うと渚が

「頼みにと言いますが、何かあてはありますか?」

「正直、ないのが事実だが、これとは別に見物を広めたいというのがあるんだよ、今、この国全体がどうなっているかということをね」

「確かに一理ありますね」

「それにもうすぐ大乱が発生する可能性が高いと思うから、それに備えて、今のうちに準備した方がいいからね」

と一刀が言うと、碧は

「最近は涼州以外では賊がはびこり、他の官軍も手を焼いていると聞く、確かに今のうちに打つ手を打った方がいいね」

「では一刀さん、ご足労掛けるけど、軍師の件お願いしてもいいかしら」

「分かりました、それでは誰を連れて行ってもいいですか？」

「そうね～、紫苑さん、璃々ちゃん、翠、蒲公英でいいかしら」

「助かります、それで翠、今回お前が、碧さんの名代で頼むぞ」

と一刀が翠に言うと

「何で私なんだよ、ご主人様がいるじゃないか」

「まだ、世間ではお前が後継者なのだから、取りあえず俺や紫苑や皆いるから安心しろ」

と一刀が言うと、翠はしぶしぶ引き受けた。

すると璃々が、

「軍師を探してに行くということは旅に出るんだよね」

と言うと紫苑が頷くと、璃々が

「それじゃ、探しに行く人の名前を見たら、まるで新婚旅行に行くみたいだね」

と言うと紫苑が顔を赤らめて、馬家のメンバーは

「「「「「「？」」」」」」

となっていた。

そこで一刀が、

「あ～一応、俺の世界の風習というか、決まりではないが、結婚した男女は、その祝いに今まで行ったことない場所に行き、そして楽しみながら旅するというのがあるんだ」

と言ったが一刀は

（「考えてみたら、紫苑と結婚したが、あの時は学生で籍だけ入れて、新婚旅行は出来る状態ではなかったな」）

と思い出しながら、紫苑を見ると嬉しそうな顔をしており、更に璃々や翠を見ると

（「やった～、ご主人様と新婚旅行だ～♪」）

（「し、新婚旅行って、どんな事するんだ」）

と3人とも本来の目的を忘れ、頭の中が別世界に飛んでいた。

そして蒲公英が

「じゃあ、私もご主人様と夫婦になったんだね♪」

と勘違い発言すると、翠が

「蒲公英、お前は違うだろうが！」

「いいじゃない！私も入れてよ～」

と2人で喧嘩を始めた。

これを見て、一刀は

（「このメンツで大丈夫かよ・・」）

と不安になっていた。

そして数日後、一刀たちが出発する時に碧たちが見送りに来ていたのだが、翠が

「お母様行ってくるけど、身体あまり良くないから無理するなよ、休に鉄、渚、すまないが、お母様のことよろしく頼むぞ」

と言って出発した。

そして少し離れてから、紫苑が翠に

「翠ちゃん、碧さんどこか調子が悪いの?」

「原因がはっきり分からないのだが、ここ1、2年あまり身体の調子が良くないんだ、医者にも診て貰っているんだけどな・・」

とあまり芳しくない表情をしている翠であった。

話を変えるように蒲公英が

「ねえ、ご主人様、旅ってどこに行くの？」

「取り敢えず、漢中から荊州の方に行こうと考えているけどな」

すると璃々が

「洛陽には行かないの？」

と言うと翠と紫苑が

「あ～、今な都の方は、政治的状況が良くなくて、お母様や渚にも行かない方がいいと止められているんだよ、確かに何かあったら、お母様に迷惑掛かるしな」

「それに昔から荊州の方は、多くの学者がいるので、そちらの方も見つけやすいからよ」

と説明すると、璃々や蒲公英も納得していた。

そして、武威を出て2週間ほどが過ぎ、漢中に入る手前で、どこから男女の争っている声が聞こえたので、一刀たちは、その声の方に行くと、女の子の1人な対して、男が10人ほど居て、それも武器を持って取り囲んでいる状況であった。

そしてセミロングの女の子はどこかしら負傷しており、集団の指導者らしき男に対して

「卑怯者！恥をしれ！」

「ふん！要は勝てばいいんだよ、勝てば。おい、止めを刺してやれ」

とその男が部下に止めを刺す指示を出したのが、聞こえので、一刀は

「紫苑！璃々！」

「分かってます！」

「分かっているよ、ご主人様！」

と弓を取出し、

「行くぞ翠！蒲公英！」

一刀は翠と蒲公英を連れて、集団の中に突進した。

一刀たちに気付いていない、その部下の男は女の子に

「死ね！」

と刀を大きく振りかぶった瞬間

（「もうダメ！、お母さんごめんなさい、仇、打てなかった・・」）

と目を瞑り、全てを諦めた瞬間、男が

「ギャ！」

と言って、女の子の目の前で倒れた、よく見ると男の首に弓矢が刺さっていた。

そして女の子が周りを見ると紫苑と璃々が

「曲張比肩の弓の味、あなたの身体でとくと味わいなさい！」

「こ～の女の敵！死になさい！」

と男たちを弓矢で仕留め、そして一刀と翠と蒲公英が

「この卑怯者が死にやがれ！」

「うおーー、この野郎、ぶっ飛びやがれーー」

「はぁーー、お前たちの相手、ここにいるぞー！」

と男たちを討ち取っていった。

そしてその指導者の男が、

「な、何だこいつら・・」

と逃げようとすると背後から紫苑の弓矢が木に刺さり

「あらあら、どこへ逃げるのかしら」

と悪魔のような微笑みを見せ、そして翠が

「おいおい、手下ども見捨てて逃げるとは、本当に卑怯者だなてめえは」

と更に追い込むと、一刀は負傷している女の子に

「大丈夫か、あいつとはどういう関係だい？」

「あの男は、私の母上を殺した張本人です！」

「あの男は、私の亡き父の叔父で、私がいない時に母を辱め、そして私の母の命や財産も全て奪い去ったです！」

と悔し涙を流していた。

それを聞いて、一刀が女の子に

「よし分かった、仇なんだね」

と言うと頷き、一刀が

「翠！」

「分かってるよ、ご主人様！」

と言って、男が持っていた刀を叩き落とすと、一刀が女の子に

「今だ！」

と言って、女の子が持っていた刀で男の腹を突き刺し、そして男はその場で崩れ落ちた・・。

そして女の子は、

「は、母上、仇を取ることができました・・」

と嬉し泣きをしていた。

そして女の子も落ち着き、一刀らに

「命を助けていただき、そして母の仇まで手伝っていただきありがとうございます」

「私の名は姓は徐、名は庶、字は元直と言います」

と聞くと、一刀は

（「え～、またえらい有名な人を・・）」

と内心驚いていた。

そして翠が

「私は涼州大守の馬騰の娘で馬超で・・」

チラっと一刀の方を見て、一刀が頷くと

「そ、そこのご主人様の妻だ・・」

と恥ずかしながら言い切った。

すると横にいた蒲公英が、

「わ～よく言えたね、お姉様、それで私は従姉妹の馬岱ね」

と言うと翠が一刀の方を再度見ると

「ああ翠、俺から言うよ。俺の名前は、北郷一刀」

「妻の紫苑です」

「同じく妻の璃々です♪」

とそれぞれ紹介したが、3人の妻に持っていることに驚いたが、更に一刀の名前を聞いた徐庶が

「え!?北郷って、ひょっとしたら御使い様?」

「う～ん、まあ世間ではそう言われているみたいだね」

「でも何でこんなところにいるの?」

と尋ねると一刀は軍師など優秀な人材を探していることを説明した。

「そこで、徐庶さんにお願いがあるんだけど・・、もし良かったら、馬家に仕えて欲しいんだけど・・」

「え!?何で私が軍師だと分かるの?凄い、これって天の知識か何か?」

と言われると一刀も一から説明するのに困ったが

「まあ以前から知っていたとだけ言っておこうかな」

と言葉を濁した。

すると徐庶も

「分かったわ、命の恩人だし、今は深く聞かないけど、あなたの事、3人も妻がいるし、何か面白そうだから、色々とまた教えてね」

「また？」

「そうよ、喜んで仕えさせて頂きます、そして皆に真名を預けるから、私の真名は真里（まり）と言うので、よろしくね」

とウインクして答えた。

そして、お互いに真名を預けたが、真里が負傷していたので、取り敢えず、怪我の治療のため、全員漢中に入った。

第１０話

漢中に入る手前で翠が

「璃々、蒲公英悪いけど、先に町に行って、どこか治療やっている医者を探してきてくれよ」

と頼むと、２人は返事二つで、医者を探しに行った。

そして真里が皆に

「ここまで世話になってすいません、治ったら、一生懸命やりますので、よろしくお願いしますね」

と言うと一刀、紫苑、翠が

「あ～気にしなくていいよ、これから仲間なんだから」

「そうですよ、困った人を助けるのが当たり前なのですから」

「そうそう、気楽に行こうぜ」

と3人は真里を気遣っていた。

そして、話をしているうちに漢中の町の入口で璃々と蒲公英が待っていて、璃々が

「ご主人様～、医者を見つけてきたよ、何かここらで評判の先生らしいよ～」

「皆、こっちこっち」

と蒲公英が先頭を切って案内をした。

しばらく町を歩くと、その場所にやって来ると診療所らしき看板が
上がっていたそして中から大声で

「元気になれぇぇーーー！」

と男の叫び声が聞こえた。

それを聞いた一刀が蒲公英に

「ここに間違いないよな・・？」

「確かに教えて貰った場所はここだけど・・」

と少々心配になっていた。

そして一刀が取り敢えず、普通に治療して貰ったら問題ないだろうと思いながら中に入り、医者らしき若い男性に

「すいません、怪我人を見て貰いたいのですが、よろしいですか？」

「ああいいぞ、怪我人は何処だ？」

負傷している真里を診察室まで一刀たちが付き添った。

その医者の問診と診断の結果、手足の擦過傷に打撲であったが、あと医者曰く

「傷の影響か、また旅の疲れもあるんだろう、君の気が少々弱ってきている、気を回復するのに針を打つのだが、因みに身体に針を刺しても大丈夫か？」

「大丈夫ですが」

と言ったので、針治療するため、一刀たちは一旦診察室を出た。

そして診察室から再び

「一針同体！病魔覆滅！元気になれぇぇーーー」

と大声を出していたので、皆は

（「もう少し静かに治療出来ないか・・」）

と内心思っていた。

しかし、治療が終わってから、真里が本当に怪我をしていたのかと思うくらい元気な姿で戻ってきたので、一刀はこの医者のことが気

になり、名前を聞いてみると

「え?私の名前は華佗というのだが、君たちの名前は」

と聞かれるとそれぞれ自己紹介をしたが、一刀は

（「え~華佗って、こんなに若い男だったのかよ」）

と内心驚いていた。

一刀が

「華佗先生一つお聞きしたいことがあるのですが」

「ああ悪いけど、先生と言われるのは堅苦しいから、華佗と呼んでくれないか」

「分かりました、では俺のことも一刀と呼んで下さい、先生はどんな病気も治すことができるのですか？」

「さすがにそれは無理だな、まだまだ修行中の身だ、しかし、どんな患者にも全力を尽くして治療をして、そして1人でも多くの命を救いたいのだ」

と華佗は自分の信念を述べた。

一刀は信念を語った華佗を感じ、そして治療して元気になった真里を見て、

「華佗、お願いがあるんだが、1人治療をお願いしたい患者がいるのだが」

と言って、碧の治療をお願いした。そして翠や蒲公英は、一刀が華佗にお願いしているのは、碧が何らかの見込みで治る可能性がある

という一刀の勘を信じて、２人は

「先生頼む！お母様の病気を何とか治してくれ！」

「私からもお願いします！伯母上様の病気を治して下さい！」

と急に土下座をしていた。

これには皆が驚き、華佗が

「２人とも顔を上げてくれ、医者は患者を診て、病気があれば治すのは当たり前だ、治せるかどうかは分からないが、必ずその患者を見に行くよ」

と答えると、２人は抱き合って喜んでいた。

しかし華佗もさすがに名医で、ここでの患者もいることで、すぐに出発はできないということもあり、一刀たちも旅の途中ということだったので、翠は華佗に碧への面会状と手紙を渡し、碧の治療を託した・・。

そして一行は漢中を離れ、一路荊州に向かうことになったのだが、一刀が真里に

「なあ真里、誰か知り合いに俺らの軍師や文官になってもいいと者はいないか？」

「ああ、今からちょうど案内しようと思っていたけど、皆、水鏡塾って、知っている？」

と聞くと、名前に聞き覚えがあった紫苑が

「詳しくは知らないけど、ひょっとしたら司馬徽先生がやっている私塾のことかしら？」

「正解！そこの生徒は皆、優秀で各地に官使なっている人間が多いの、私も一応卒業生なんだけど、私の場合、母上が殺されたから敵討ちするため、中途半端な卒業になってしまったのよ、だから今から先生に敵討ちの報告とひょっとしたら私の後輩で凄い優秀な子がまだいるかもしれないから、いたら紹介しようと思ってね」

と真里が言うと、一刀や紫苑、璃々は内心、知っている知識で

（（ひょっとしたら・・））

「へ～、その子の名前は？」

と一刀が真里に聞いてみると、出てきた名が・・

「・・何か知ってそうだけど、名前は言っておくね諸葛孔明と？士元よ」

と一刀らは真里から聞くと内心、

（「やはり朱里か・・、しかし今回はまだ荊州にいて、更に?統もいるって?」）

と今更ながら、以前と違う世界に感じている一刀だった。

因みに横にいた翠と蒲公英は

「「誰それ?」」

と不思議そうな顔をしていた。

一刀は、真里に改めて2人はどんな人物か確認すると

「私よりは能力は段違いに凄いわ、2人とも志が高いので、主君に値しない人物だったら、いくら言っても仕官は無理ね、ただあなたたちだったら可能性はあるわ、ただ・・」

「ただ・・、何だよ」

「イヤ、これはあまり気にしなくていいよ、愛嬌があると思ってくれても」

と何かを隠している真里であった。

そして荊州に到着して、もうすぐ目的地である水鏡塾に行く途中で、翠や蒲公英が

「まあ、真里あとどれくらいで、着くんだ?」

「少し疲れたから、休もうよ~」

「今日中に行くとしたら、到着するのは夕方か夜になるから、今日はこの近くの町で休んで、明日尋ねるのでどうかしら?」

と真里が言うと、皆、納得して、この先の町で宿泊することにした。

そして、一行が町に行く途中の道の分岐点で、3人連れの一行が道に迷っているのか、道の真ん中で何か揉めている様子であった。

しかし、一刀、紫苑、璃々には何か聞き覚えのある声に、久しぶりに見る姿が見えてきた・・。

璃々がそれが見え、その声を聞くと一刀に

「ねえ、ご主人様、あの声にあの姿って・・」

「多分間違いないだろうな紫苑、やはりあれは・・」

「間違いないですわ、でも1人見かけない子もいますわ・・」

と3人ともその姿の人物たちの2人に見覚えがあった・・。

そして一刀らは、心の中で

（「久しぶりだな・・愛紗（ちゃん、お姉ちゃん）に鈴々（ちゃん、お姉ちゃん）・・」

と思いにふけっていた・・。

第１１話

愛紗たちは一刀らに近付いているのには、気付かずに鈴々と言い争いをしていた。

「鈴々、我が儘言うな！今から行けば今日中には到着できる！」

「愛紗無理したら疲れるから、一度、町に行って食事してからでも遅くないのだ」

と言い争いをしていると、もう１人の少女が

「まあまあ愛紗ちゃん、ここまで無理して来ているのだから、取り敢えず町で食事でもしてから行こう？」

とその少女が言うと愛紗は

「しかし桃香様・・」

と愛紗が反論しようとしたところ、紫苑が

「まあまあどうしたのですか？こんな往来で口喧嘩などして」

と言うと、桃香様と言われていた少女が

「す、すいません、見苦しいところお見せして」

「何か喧嘩をしていたけど、いったいどうしたの？」

「あの～あるところに行こうとしてたのですけど、行く前に食事するしないで揉めてしまって・・」

「いったいどこへ行くところだったの？」

「実は・・水鏡塾に行こうとしたのですが、御存知ないですよね？」

とその少女が言うと、真里が

「実は私たちも今からそこに行くところだけど、今から行っても着くのが、夕方か晩になってしまうわよ、行くとしたら、この先の町で1泊してからの方がいいよ」

と説明すると鈴々が

「ほら愛紗、鈴々が言ったことが正しかったのだ」

「お前は食事をしたかっただけだろうが！」

と相変わらず鈴々に厳しい態度だったので、一刀らは

（「この世界の愛紗（ちゃん、お姉ちゃん）も相変わらず手厳しいな・・」）

と内心思っていた。

すると愛紗が

「説明ありがとうございます。それであなた方も水鏡塾に行くとおっしゃっていましたが、失礼ですが、あなた方は何者ですか？」

と一刀らに尋ねると、翠が

「ああ私は涼州大守馬騰の娘、馬超だ」

「従姉妹の馬岱です」

「家臣の北郷一刀です」

「その妻の北郷紫苑ですわ」

「同じく妻の北郷璃々です」

「家臣の徐庶です」

と紹介した、一刀は徐庶にすでに全ての関係を打ち明け、この旅では、必要な時以外は、翠の家臣で紹介するように説明していた。

それを聞いた義姉上と言われた少女が

「え、え、西涼の馬超さんに、北郷さんって噂の御遣い様では・・!?」

と軽く混乱していたが、愛紗が

「桃香様、先に自己紹介を」

「あ、ごめんなさい、私は幽州の劉備で、字は玄徳と言います」

「私は義妹の関羽、字を雲長」

「同じく義妹の張飛翼徳なのだー」

とそれぞれ紹介したが、一刀は

（「この子が劉備か・・、でも愛紗や鈴々が仕えるべき人物に出会えて良かったな」）

と密かに喜んでいた。

すると真里が、

「さっき、あなた方も水鏡塾に行くと言っていましたが、どういう用なのですか？」

そこで劉備が

「実は、私たちは世の中を憂い、何とかしたいと思い立ち上がったのですが、私たち3人だけでは限界があるので、そしてそこに優秀な軍師さんがいるという噂を聞いて、私たちの軍師になって欲しいとお願いにきたのです」

と熱く語った。

すると翠が

「へえ～あんた達もか。私たちもうちの国の軍師になって貰おうとお願いに来たのだが、こいつは勝負だな」

となぜか勝負事の方に意識が行っていた。

紫苑が

「ここで立ち話も何ですから、宿屋に行ってお話しましょう、せっかくですから、皆で一緒に泊まるのはどうでしょう？」

翠、蒲公英らは同意したが、愛紗が

「い、いや敵同士になるのに一緒に泊まるのは・・」

「敵同士って、そんな固いことは言わないの、せっかくだから、私たちが宿代を出しますよ」

と紫苑が言うと鈴々が

「やった～宿代が助かったのだ」

「こら！鈴々勝手に決めるな！」

「愛紗ちゃん、せっかくだからお世話になっておこうよ、また帰る時のお金もいるのだから」

と桃香が言うと、愛紗も観念したかのように

「わ、分かりました、ありがとうございます、お世話になります」

皆で宿泊することに同意し、そして町に移動し、宿屋に入った。

そして一度、それぞれの部屋を別れ、夕食時に落ち合う話になり、愛紗たちが部屋に着いて、落ち着いてから、桃香が

「あ～、まさか馬超さんと御遣い様らが来るとは思ってもいなかったよ～、でもそんな人たち相手に私たち軍師を勧誘できるかしら・・」

と少々落ち込んでいた。

落ち込んでいる桃香を見て愛紗が

「桃香様、鈴々、ちょっと外に出ていきますが、すぐに帰ってきます。鈴々、桃香様を頼むぞ」

「うん、分かった。気をつけてね」

「分かったのだー」

と2人を部屋に残して出ていった。

一刀たちも部屋に入り、皆がくつろいでいたところに外の扉から

「失礼します、関羽です。部屋に入ってもよろしいでしょうか？」

と訪ねてきたので、翠が

「入ってもいいぞ～」

と言って入室を許可したので愛紗が入ってきた。

そして翠が

「どうした何の用だ?」

と愛紗に聞くと、急に頭を下げ

「勝手なお願いだが、明日水鏡塾に行くのを遠慮していただきたい」

と言うと翠が怒気を込めながら

「それはどういうことだよ!勝手な事言うなよ!」

「それは分かっている、しかしそちらはすでに人材が揃っているかもしれないが、私たちは何もない状態で、頼りになる軍師が居なければ、今後の見通しにも影響するのだ、本当に申し訳ないが手を引いてはくれないか」

と言うと、真里が

「それは聞けない話ね、まず目的が同じで、私は水鏡塾の卒業生だけど、私が水鏡先生に仕官するに一緒に挨拶に来て貰っている客人を追い返すことなどできないし、そしてあなた方のそんな勝手な言い分で、はいそうですか引くわけにはいかないわ」

「う、確かにそうだが・・」

と愛紗が言葉を詰まらせると更に紫苑が

「関羽さん、それは劉備さんの命令で来たの、それともあなたの一存かしら?」

「わ、私の一存です・・」

と愛紗が言うと一刀が

「関羽さん、ちょっといいかな？あなたが劉備さんのために思って、こういう話をしたのは分からない訳ではない。しかし、関羽さんがやっていることが劉備さんが望んでいることか？そして軍師になるかならないかは、相手が決めることであって、俺たちが勝手に決めるものではないだろう、それこそ勝手な考えではないかな？」

と愛紗を諭した。

そしてそんな一刀の言葉に愛紗は不思議な感覚を感じ

（「何で初対面なのに、この人の言葉を素直に受け取ることができるのだろう？」）

と愛紗は少し考えると、再び頭を下げ

「申し訳ありません、考えが足りませんでした。確かに皆さんがおっしゃる通りです。決めるの相手であって私たちではありませんね、

それこそ桃香様や私たちの熱意をぶつけて、来て貰えるよう頑張ります」

と素直に謝罪し、そして

「あなた方には大変失礼なことをしてしまったので、お詫びとそして誤りを気付かせていただいた、お礼に真名を預かって頂きたい」

と言うと、翠が

「いいのか？」

「ああ、そしてあなた方と今後交友を深めていた方がいいと思うので、よろしくお願いしたい」

と言うと、皆、承諾して真名を交換した、そして一刀は愛紗に

「俺たちは真名がないので、一刀、紫苑、璃々とそれぞれ呼んでくれ」

と言うと愛紗は顔を赤らめて

「は、はい御遣い様!?」

「御遣い様は止めてくれよ、一刀でいいから」

「すいません、一刀様」

（「何で初対面のはずなのにこれだけ緊張しているのだ?そして胸が熱くなるのだ?」）

と内心なぜか動揺している愛紗であった。

そして、少し雑談をして愛紗は部屋を離れ、食事に行く準備をしていると紫苑が

「ご主人様、愛紗ちゃん、何かご主人様に感じているみたいですよ」

「え、そうか？全然そんな風には見えなかったけどな」

と言っている璃々が一刀のそばに来て、小声で

「ご主人様、また愛紗お姉ちゃん手を出したら、ダメだからね～」

「璃々何言ってるんだよ、向こうは俺らのことは覚えていないんだぞ、無理に決まっているだろう」

「いや、何かまたご主人様が、愛紗お姉ちゃんに追い掛けられている姿が、何となく想像できたから・・」

「それは前の世界の記憶の間違いじゃないのか・・（そして璃々も何でそんなこと覚えているんだ？）」

「でも根拠はないですが何か、ご主人様に愛紗ちゃんたちがまた絡んでくると思いますけどね」

「それは女の感かい？」

「そうですわ、女の第六感かしら」

と笑みを浮かべている紫苑であった。

そして再び全員が合流して、宿屋を出て近くの食堂で食事を始めていたが、途中で劉備が

「あれ～愛紗ちゃん、何か馬超さんや御遣い様たちと親しく話をしているけど、どうしたの？」

「え、そうですか、普通ですけど？」

と言葉で言うものの明らか動揺していたので

「・・怪しい」

「確かにおかしいのだ」

と2人の義姉妹から疑いの目を向けられていた。

そこで一刀が

「劉備さんに張飛さん、さっきまた愛紗と会って、話をしたら、意気投合してお互いに真名を交換したんだよ」

と言うと2人は

「えー、愛紗ちゃんずるい！そんな抜け駆けするなんて！」

「愛紗はずるいのだ！」

と2人は怒っていた。

「私も真名を預けるわね、私の真名は「桃香」、だから皆もそう呼んでね」

「鈴々は「鈴々」と呼んで欲しいのだー」

と言うと皆が真名を交換し、一刀が再び「俺たちは真名がないから、一刀、紫苑、璃々と呼んで欲しいのだが」

と言うと

「分かりました、一刀さん」

「鈴々は、お兄ちゃんと呼ぶことにするのだー」

と2人は一刀のことをそれぞれ呼んでいた。

そして話をしていると真里が真剣な顔付きで

「ところで桃香さん、もしあなた方が国を治めるようになれば、どういう国にしたいの?」

「皆さんは、今、この国の状態をどうお思いですか?、役人たちは重税で民たちから絞り取り、民は賊が怯えて、日々の暮らしさえ困っている状態です。誰かがやらないと国がずっとこの状態ままです。だから私たちは立ちあがって、皆が笑顔で過ごせる平和な国にしたいのです」

と桃香は自分の信念を答えた。

横から愛紗が

「では翠様、あなた方はどういう国を目指しておられるのですか?」

と聞かれ、翠は目で一刀を見て、一刀もアイコンタクトで承諾したので翠は

「私たちは目指すのは普通の国だな、幸せの基準は人それぞれだから分からない、だったらせめて私たちは皆が普通に暮らし、普通な人生を送り、普通に恋愛し、そして皆が賊とかに怯えずに安心して暮らせるようにしたいと思っている」

と以前一刀が言っていたことを翠も賛同してので、このことを桃香たちに説明すると、桃香は

「ほえ～、翠さんたちも私たちと同じような考えですね、だったら同士です、これからもよろしくお願いしますね」

と言って、桃香は両手で翠の両手を握り、同士の契りみたいなことをしてきたので、翠も困惑しながらも承諾をした。

それを聞いていた一刀や紫苑は内心

（（「人柄や理想は悪くないのだが・・、何となく不安があるな・・」））

と感じていた。

そして食事を終えて、一刀たちは桃香らと別れ、明日に備え、休むことにしたが寝る前に紫苑は一

刀に

「今日、愛紗さんたち見てどうでしたか？」

「ああ、仲良さそうで良かったとは思うが・・、何となく桃香に不安がありそうで、何の根拠もないのだけどな」

「あら、ご主人様もですか、私も桃香さんには君主として甘さが目立つような気がして・・」

「そんなこと言ったら、前の世界でも俺は皆から散々甘いと言われてきたぞ」

「でもご主人様は、締める時は締めてしましたが、あの子は、何か全てに対して甘さを見せるような気がして・・」

「そうか・・、まあ今、ここで心配しても仕方ないし、何かあったらその時考えよう」

「そうですね、あれこれ心配しても仕方がないですしね」

「何時まで話をしているの、もう寝るようよ～」

「「ああ、ごめん（ね）、璃々」

と一刀たちは愛紗たちの再会を感謝し、眠りに入った・・。

第12話

翌日、宿を出た一行は、すでに水鏡塾近くまで来ていた。

そして紫苑が真里に

「真里ちゃん、一つ聞いておきたいのだけど、水鏡先生って、どんな方なの？」

「先生は、政策や軍事、農業など色んな分野を教えているけど、先生自体は政事には関わらないようにしているわ。しかし、生徒に褒める時は「好々」と言って、生徒のやる気を引き出して、能力を伸ばすようにしているの」

と言うと、一刀が璃々と翠と蒲公英に

「どうだ、３人ともしばらくここで勉強していくか？」

「・・勘弁してご主人様、まだ字があまり読めないのに」

「そんなの無理だよ～、頭が痛くなってきた・・」

「ここから西涼に帰ろうかな～」

とそれぞれ拒絶反応を示し、それを聞いた紫苑が元学校の先生らしくいわね」

「あらあら3人とも、武威に帰ったら、もっと勉強しないといけない

とお仕置きモードを醸し出すと、紫苑の容赦のない勉強風景を思い出し、3人ともがっかりした表情になった。

すると愛紗も

「では桃香様や鈴々もどうです？」

と話を振ると

「わ、私は遠慮しておこうかな～」

「愛紗、勘弁して欲しいのだ・・」

とこちらの２人も閉口していた。

そして話をしているうちに水鏡塾に到着し、真里が玄関先で

「こんにちは、誰かいないかー」

すると奥から

「「はーい」」

と2人の返事があったので、そのうちの1人の姿を見ると、一刀たちは

「久しぶり・・朱里（ちゃん、お姉ちゃん）」

そしてもう1人の子を見て、一刀は

（「これが?統か・・、何か保護欲に掻き立てそうだな・・」）

と内心で思っていた。

朱里は真里の姿を見て

「お久しぶりです～、真里お姉さん、元気でしたか～」

「ああ、元気さ、朱里や雛里も元気だったか？」

「「はい、元気でした！」」

と答えると、朱里が一刀たちに気付き

「真里お姉さん、この人たちは・・」

「ああ、こちらは西涼の馬超さんたちで、実は私のお母さんの敵討ちの時に助けて貰って、そしてここで軍師とかを募集しているので、私は恩返しと意味もあるが、今度ここに世話になることにした」

「そして、こちらが劉備さんで、２人を軍師として来て欲しいとわざわざ幽州から来たそうだ、もちろん私たちだって２人を軍師とし

て雇うために来たんだけどな、取り敢えずは両方の話を聞いて貰いたいのだが、先生はいるかな?

と言うと、再び奥から銀色のロングヘアーの女性が現われ、真里の姿を見ると

「真里、元気だったか、よくぞ訪ねてきてくれた、好々」

「水鏡先生お久しぶりです。無事母上の敵討ちができまして、そしてこの度、仕官も決まりましたことと、朱里と雛里のことについてお話に来ました」

そして翠と桃香が水鏡先生と言われる女性に挨拶をし、真里が翠と桃香がここに来た経緯を話すと

水鏡は、朱里と雛里に

「あなたたち、このお話聞いてみる?判断はあなたたちに任せるわ」

と言われると朱里と雛里は2人とも無言で頷き、話を聞くことを承諾した。

そして翠は、桃香たちに2人の話し合いを先に譲り、そして待っている間、真里が水鏡に一刀たちを紹介すると、水鏡が

「改めてまして、私は司馬徽、字は徳操、真名を水鏡と言います」

「一刀さんに紫苑さんに璃々ちゃん、あなた方は御遣い様と言われているそうですが、できましたら2、3日ここに留まって、私たちが知らないあなた方の知識を教えて頂きたいのですが」

水鏡から言われると一刀は

（「さすが伏龍鳳雛を育てた先生、知識欲も凄いな・・」）

と感心していた。

そして一刀も

「分かりました、お受けします。その代わりにここにいる間、この3人の勉強をお願いしたいのですが」

と言うと璃々、翠、蒲公英は

「「「!?」」」

顔が引きつっており、水鏡が、そして一刀の申し出を受けた瞬間、3人は無言で落胆していた。

そして一刀が水鏡に

「一つお聞きしたいのですが、取り敢えずあの2人の能力は話では凄いと聞いておりますが、どれくらい凄いのですか？」

「そうですね・・、簡単に言えば、今のこの国の文官や軍師の数は多数いるけど、少なくとも十指の中には入るかしら」

「え～、そんなに凄いのかよ、全然そんな風には見えないな」

と翠は驚いていた。

「ところで馬超さん、あなた方は2人を登用するお話をしましたが、あなた方はどのような国作りを目指しているのですか？」

「私たちは目指すのは普通の国かな、幸せの基準は人それぞれだから分からない、だったらせめて私たちは皆が普通に暮らし、普通の人生を送り、普通に恋愛し、そして皆が賊とかに怯えずに安心して暮らせるようにしたいと思っている」

とやや緊張しながら翠は語ると水鏡は、

「ではそのようにするには、国をどういう方針にしますか？」

と追及されると、翠はそこから上手く答えられず、困った顔をして、一刀や紫苑に助けを求めるような顔し、一刀と紫苑も仕方なく、真実を水鏡に話すことにした。

「すいません、水鏡先生、騙すつもりは無かったのですが、少し私の話を聞いて貰えますか、そしてこのことは他言無用でお願いします」

と一刀が水鏡に申し出すると了解を得て、馬家の事について話をした。そしてそれを聞き終えると

水鏡は

「正直、馬騰さんも思い切ったことをしましたね・・しかし最近、西涼の方が人や物の流れが活発化し、政治的に安定している原因にあなた方がいたことが分かったわ」

「でもすいません、黙っていて」

「仕方ないですわ」

と笑って許して貰った。

「先ほどの話の続きですが、一言言えば、富国強兵を目指します」

「富国強兵？聞き慣れない言葉ね、それはあなた達の世界の言葉？」

「そうです、分かりやすく言えば国を富ませ、そしてその富で兵を養う、力が無ければ国を失う、力のみでも国が豊かで無ければ、これまた国を失いますが、それを上手くやるようにするつもりですが」

と説明すると

「なるほど今の説明で、大体あなた方は現実的な理想を持っていることが分かりましたわ」

「もし朱里や雛里がそちらでお世話になる時は、よろしくお願いします」

と話をしていると、ちょうど桃香たちが話を終え、入れ替わりに一刀たちが話すことになった。

そして部屋に入り、お互いに紹介することなり、真里が2人に自己紹介するように勧めたが、

「はわわ、は、は、初めまして、わ、私は姓は諸葛、名は亮、字は孔明でしゅ、（噛んじゃった・・）です」

「あわわ、わ、私は姓は?、名は統、字はし、士元で、で、です」

と紹介したが、一刀は真里に小声で

（「この事か、以前言っていたことは?」）

（「そうですよ、愛嬌あるでしょう」）

と言われると、一刀も頷くしか無かった。

そして一刀たちも紹介したが、すると翠が一刀の方を見て

「ちょっとお二人さん、話の前にこちらの大事な話をしてもいいかな?」

と言うと朱里が

「はい、いいですが何でしょう?」

「ああ、最初、私が涼州大守馬騰の娘ということで話をしていたが、実は今、横にいるご主人様、つまり北郷一刀と結婚して、そちらに嫁いだんだ、それで今、後継者はご主人様になっているんだよ、だから二人への話は、ご主人様からして貰うけどいいかな?」

翠は勧誘の話を一刀に振る話をしたが、一刀は翠に「急に話を振るな」という顔をしていたが、朱

里と雛里は

「は、はわわ、け、結婚でしゅって・・」

「あ、あわわ・・」

翠の結婚話を聞いて、２人ともパニック状態になっていた。

これを見て一刀は

（「大丈夫かよ・・？」）

不安になっていた。

そしてしばらく緊張を解すため、他愛ないの話をして、ようやく２人が落ち着きそして朱里が一刀に

「北郷さん、あなた方が私たちが必要だとは分かりました、また真里お姉さんがそちらに行くことをお聞きしましたが、あなた方の目指す国とはどんな国ですか？」

「俺たちが目指すのは普通の国かな、幸せの基準は人それぞれだか

ら分からない、だったらせめて

私たちは皆が普通に暮らし、普通の人生を送り、普通に恋愛し、そして皆が賊とかに怯えずに安心して暮らせるようにしたいと思っている」

「はっきり言って完全な政なんてあり得ない、ただ言えることは、民を飢えさせない、悪政して泣かせない、そして平和に暮らす、これが政治の基本だと思う。だからせめてこれだけのことはしたいと思う」

これを聞いた朱里と雛里は内心

（（「先程聞いた、劉備さんの理想と比べ、かなり現実的な理想と言えるね・・」））

更に雛里が一刀に

「戦についてはどう思っていますか・・？」

「誰も好きで戦をする人はいないだろうけど、しかし国や愛する人を守るためなら血を流すことも仕方がないと思う、だからさっき言った理想を成し遂げるためには、国を富国強兵にする必要がある。力なき理想や正義は力のある人の前には無意味になってしまうからね」

「しかし、それを実行するには1人ではできない、皆の協力が必要です。だから諸葛亮さん、？統さんの協力が欲しい。だから家臣ではなく仲間として協力して欲しい」

と一刀が答えると2人は納得したかのような表情になり、朱里が

「ありがとうございました。2人でしばらく考えたいので、別室でお待ち願いますでしょうか？」

と言われると一刀たちは部屋を出て行こうとしたが、出る時に一刀が

「諸葛亮さん、？統さん、自分たちが良いと思う決断をしてくれたらいいから、真里がいるから、こっちに来るという考えだけは、辞めてね」

と言って部屋から出た。

そして雛里が朱里に

「優しいね北郷さん、それで朱里ちゃん、２人の話を聞いてどうだった？」

「うん・・、劉備さんの理想に引かれるものはあるけど・・、北郷さんの理想は現実的で、実現できる可能性がある理想・・」

「そうだね、私たちの理想は民が安心して暮らせる世界だから・・、理想を実現するには北郷さん
の方が確実、しかし劉備さんには未知の魅力もある・・」

と2人はしばらく話し合い結論を出した。

そして別室で待っていた一刀や桃香たちのところに朱里と雛里がやって来て、答えは・・

朱里は一刀のところに雛里は桃香のところに行くことを決めた。

それを聞いた真里が心配した顔で

「2人が決めた結論に反対するつもりではないけど、いつも一緒の意見なのに今回は別の結論になったんだ?」

と朱里と雛里に問いかけると、まずは朱里が

「私は、皆が平和になるためには、劉備さんより北郷さんの理想が現実的で、実現することが可能性が高いから、北郷さんを選びました、これは雛里ちゃんと話し合い、私が出した結論です…」

と最後は目に涙を浮かべながら答えた。

そして雛里が、

「北郷さんの理想も良かったのですが、私は逆に劉備さんの未知の魅力に惹かれ、私はそちらに賭けてみたくなり、劉備さんを選びました…」

と雛里も目に涙を浮かべていた。

そして2人の答えを聞いた水鏡と真里が

「2人とも考えて出した結論には何にも言わないわ、ただ仕えるた

めには、今日から、その主君と民のために全力を尽くしなさい、例えそれが戦場で2人が戦うようになっても。そして戦いをしたくないなら、全力で知恵を使いなさい」

と一呼吸置き

「でも2人の友情は決して忘れてはダメよ・・、そして一刀さんに桃香さん、2人は出来るだけ争わないよう、節にお願いします」

と言われると

「分かりました、出来る限り、桃香とは争わないようします」

「私も一刀さんとは争わないことを誓います」

と2人は水鏡に誓いの言葉を述べたが、この誓いは残念ながら守れなかった、ある戦いで敵味方になってしまったのである・・。

そして真里が

「2人とも成長したな・・、雛里、幽州は遠くて大変だけど頑張れよ、そして朱里、これから仲間だ、よろしく頼むぜ」

と2人とも元気よく

「「はい！」」

と答え、そして朱里は、桃香たちに

「劉備さん、お誘いを断り申し訳ありませんでした、しかしお誘いをした事について大変感謝しております、また馬超さんにもこれからお世話になりますので、皆さんに私の真名を預かって頂きたいと思います」

と朱里は自分の真名を皆に言い、そして雛里も同じように一刀たちにも真名を預け、そして部屋にいる全員が朱里と雛里と真名を交換しあった。

そして朱里が翠に

「改めてよろしくお願いします、翠様」

「よろしく頼むぜ、朱里」

と一応主君である翠に挨拶をした、朱里と雛里には先程、一刀が後継者であると話をしたが、まだ世間ではこのことを公表していないため2人には口止めをお願いし、桃香たちはこのことを知らないので、朱里もこのように振る舞ったのである。

そして、水鏡が

「雛里、私から一刀さんや紫苑さんにお願いして、2、3日一刀さ

んの世界の政治や色んなお話を聞かせて貰うため、塾に留まってもらうわ、桃香さんも一緒に話を聞きたいと言って留まるから、あなたも聞きなさいね」

と言うと雛里は、水鏡と桃香に感謝し泣きながら

「と、桃香しゃま、ありがとうございましゅ・・します」

と舌を咬みながら感謝の言葉を述べると、桃香は

「いいのよ、雛里ちゃん、私も一刀さんの世界のお話を聞きたいし、そして頼りない私だけど力を貸してね」

「はい、頑張ります！」

と元気よく答えた。

そして、その後一刀たちは皆で水鏡から食事を振る舞われた後、各人部屋が割り当てられ、一刀と

紫苑と2人部屋になって、寝る前に

「あ～疲れた」

「お疲れ様です、ご主人様」

「でも残念でしたわね、朱里ちゃんしか来てくれなかったから」

「仕方がないさ、本来なら2人とも、桃香のところに行ってもおかしくはなかったからな」

「そうですわね、でもこれからどうされます？」

「取り敢えず、ここに2、3日逗留して、そろそろ武威に帰った方がいいだろうな、一応目的も達成出来たし、旅の間、色々な話も聞けたことだし」

「分かりましたわ、では明日、皆に伝えておきますわ」

「うん、よろしく頼む・・って、何しているの・・」

と一刀の頭の上に何か重みを感じていたので確認すると紫苑が自分の胸を一刀の頭の上に乗せていた。

「え～と、何しているの紫苑？」

「嫌ですわ、ご主人様、分かっているはずなのに」

「一応、客間で・・隣に聞こえるかもしれないけど・・」

「ずっと旅の間、皆と一緒に寝ていましたから、2人きりなんて無かったではないですか？せっかくだから」

と言って、紫苑に無理やり寝台に押し倒され・・そして一刀は紫苑に食べられてしまった。

そして翌朝、肌色のいい紫苑と元気のない一刀を見て、璃々が抜け駆けされたと怒っていたのは言うまでもなかった。

第１３話

一刀と紫苑は、結局３日間、水鏡塾に逗留し、その間に水鏡を始め、朱里、雛里、桃香、愛紗などは、一刀の世界の政治や政策、文化などを講義し、そして璃々、翠、蒲公英、鈴々は、水鏡の講義を受けていた。

何人かは、講義終了後、脱け殻になっていたが・・。

そして約束の３日間を終え、一刀たちは涼州に、桃香たちは幽州に帰ることとなり、それぞれ帰る前に別れの挨拶をしていた。

翠が水鏡に別れの挨拶を終えると水鏡は朱里に

「身体には気をつけて、元気でやりなさい」

「はい、先生も身体に気をつけて…」

と涙を流していた。

そして雛里に対しても

「雛里ちゃん、離れてもお友達だからね」

「う…ん、ありがとうね、朱里ちゃん、元気でね」

と2人は、別れの挨拶を交わしていた。

一方、翠と鈴々は、稽古の勝敗が五分五分だったので

「今度会う時は、絶対勝ち越してやるからな」

「今度会った時こそ翠には負けないのだ、覚悟しておくのだ」

とこちらも再会を誓いあっていた。

そしてそれぞれが別れの挨拶を交わす中、一刀と紫苑が桃香と愛紗に

「桃香、愛紗元気でな」

「2人とも、身体に気をつけてね」

「うん、一刀さん、紫苑さんも元気でね」

「ありがとうございます、皆さんもお元気で」

とそれぞれ挨拶を交わし、一刀が桃香に

「桃香、これは俺からの参考意見で、これを聞いて判断については君の次第だ、俺から見て、君個人の性格や資質は俺よりかなり高いものを持っている、しかし上に立つ者としての覚悟というか甘さが見えてしまう、平和の時はいいかもしれないが、戦乱の世では、これが欠点になるかもしれないよ、それだけ肝に命じて欲しい」

と言うと桃香は引き締まった顔で

「ではお聞きしますが、上に立つ者に必要な物と何ですか？」

「いざというときに非常な決断を下せるかどうかだね？例えば１つの命を救うのに１００の命を犠牲しなければならない時、桃香、君ならどうする？」

「私は、１つも１００も両方の命を救います！」

「それは確かに理想だ、しかしこの１を救うのに１００を犠牲にして両方共倒れする可能性がある、俺としたらこういう考えがあると、このことを分かって欲しいんだ、まあ俺ならこんな場面が巡ってこ

ないように願うだけどな」

と一刀は桃香が物事を深刻に考えないよう、最後はおどけた言葉で締めくくった。

「ありがとう一刀さん、私のこと心配してくれて、取り敢えず私もそうならないように普段から頑張るからね」

と笑顔で返事をした。

そして紫苑は愛紗に

「愛紗ちゃん、これは私からの意見ね、あなたの桃香さんへの忠誠心は凄いわ、でもそれに拘り過ぎたら、この前のように周りが見えなくあることがあるから、気をつけてね」

「う…ん、確かにあれは申し訳なかった、もう少し冷静になって物事を考えるよう務めよう、助言感謝する」

「いいのよ、お姉さんからのおせっかいだと思って」

とこちらもお互いで笑顔になっていた。

そして別れの時が来て、お互い、またの再会を誓いながら、故郷に向け出発したのであった・・。

そして水鏡塾を出て、数日後、涼州へ帰る途中、荊州の新野の町の食堂で昼食中、翠が一刀に

「結局、軍師2名確保できたけど、武官はなかなか出会わなかったな～」

「そんな贅沢言うなよ、軍師も2人もいただけでも凄いんだぞ、翠」

「いや～分かっているけどさ・・、この旅でまともに勝負できたのが愛紗と鈴々くらいで、少し物足りないかなと思ってさ」

「もう～お姉様、結婚したんだから、もう少し落ち着いたら」

と蒲公英が嗜めると一刀が

「落ち着いたら、翠らしくなくなるだろう」

「わ！ひどっ」

と翠が落ち込んでいると、一刀と紫苑の間に座っていた璃々が、たまたま店の出入口付近にいたある人物の姿に気が付き、小声で

（「ねぇねぇ、ご主人様にお母さん、店の出入口付近にいる人って、もしかして・・」）

2人はその方向に目を向けると・・、その人物を見て驚いた。

（（「何でここに星（ちゃん）がいるんだ（の）？」））

と驚き、星は一刀らに気付かず、一刀らと離れた席に案内されて座った。

すると紫苑が一刀に

「ご主人様、ちょっと私に案がありますが、よろしいでしょうか？」

と一刀に耳打ちして話をすると

「面白いけど、うまくいくか？」

と一刀が半信半疑になっていたが、間で聞いていた璃々は

「何か面白そうね～」

と面白がっていると紫苑が更に翠に

「ちょっと話があるの、耳を貸してね」

と紫苑が翠に話をすると

「その話乗ったぜ紫苑、どうすればいい？」

と更に紫苑が翠に説明すると、

「分かったぜ、話を合わせるからな」

と納得していた。

すると朱里が紫苑に

「何の話しているのですか？」

「いい武官がいたのね、ちょっとした勧誘話よ」

と言われると横にいた真里や蒲公英は周りをキョロキョロし出した。

そして紫苑は、店の店員を呼び出し、ある事を説明して、店員に注文をした。

星が席に座っていると、店員が注文の品ですと言って、この店の最

高級メンマを持ってきたが、

「おや？まだ私は注文を頼んでいないが」

と星が店員に言うと店員が

「あちらのお客様からの注文です」

と言って、一刀たちの方を示した。

「ふむ」

と頷いて、一刀の方にやって来て、星は

「私の大好物なメンマを注文してくれたことは感謝するが、一体何が目的ですかな？」

すると紫苑が

「失礼しました趙子龍殿、あなたの姿を見て、聞いた噂に似ていましたので、ひょっとしたらと思い、声を掛けさせ貰ったのですが」

「何、なぜ私の名を・・」

驚くと、翠がさっき紫苑が言っていた説明通り

「私は涼州大守馬騰の娘、馬超だけどさ、あんたの名前は西涼でも有名だよ、常山の趙子龍、それに美しくて強いという噂をな」

そして一刀も

「そう、あなたの強く美しい姿を見て、私たちもあなたが趙子龍に

間違いないなと思ってね」

それを聞くと真里や朱里も話を合わせて

「私も旅先で聞いたことあるよ」

「荊州でも趙子龍さんの噂は聞いていますよ」

周りから言われると星は

「う…ん、逆に褒められると照れるではないか」

と恥ずかしいそうな顔をしていた。

これは以前の世界で紫苑が、星が普段一刀や愛紗などからかうが、逆に褒められると逆に素直な一面を見せていたので、逆にからめ手

で攻めてみたのである。

そして、星が

「あなた達の正体は分かったが、一体何が目的かな」

と改めて聞くと、一刀が

「ああごめん、目的を言わずに、俺の名前は北郷一刀、馬超さんの家臣だが、実は趙子龍さんの話を聞いて、ぜひ馬家に仕えて欲しいと思ってね、声を掛けさせ貰ったんだ」

と言うと星は一刀の名前を聞いて

「北郷って、ひょっとしたら貴殿は、噂の天の御遣いと言われている人物か？」

「まあ世間では、そのように言われているけど、そんな大層な人物ではないよ」

「しかし、世間の評判では貴殿から西涼に来てから、今まで辺境の地であった西涼が栄えている話ですぞ」

「それは馬家の皆やあと横にいる紫苑や璃々の力があったからさ、そして新たに力を貸してくれる真里や朱里の力もこれから必要になるし、そして趙雲さん、あなたの力も必要なんだ、ぜひ来て貰いたいのだけど？」

「面白いお人だ、旅の途中でどうせ西涼に一度訪れてるつもりだったんだ、そして噂の錦馬超もいるし、貴殿や目の前ご婦人もかなりの武人、一度西涼に行って、あなた方の力を見てみたい、取り敢えずは客将という形なら、お引き受けするが？」

と言うと翠が

「よし決定だな、向こうに帰ったら勝負だな、趙子龍」

と言うと星が少し考え

「でも客将と言えども、信頼して槍を預ける身、改めて自己紹介しますが、合わせて真名もお預けしよう」

と言うと翠が

「いいのか」

「もしかしたら、このまま仕えるかもしれないし、信頼して真名もお預けするよ」

と言って

「我が名は趙雲、字は子龍、真名は星だ、よろしく頼む」

と言うと皆が自己紹介し終わると星が一刀に

「おや貴殿らは、今、紫苑と璃々と皆、同姓だが同じ一族かな？」

と星が一刀に聞くと

（「そうかこちらでは日本みたいに結婚して姓は変わらないからな」）

「一族というか、俺らの世界では結婚すると、姓が変わるんだよ、だから紫苑と璃々は夫婦なんだよ（現代の、一夫一妻はややこしくなるので説明せず）」

と言うと星が驚き

「おや、すでに先約とは、まだ追加は行けますかな」

と言うと翠が

「星！な…何言っているんだ、も…もうすでに私が3人目でいるんだ」

「何と。それでしたら、3人も4人も同じでしょう、ぜひ私も如何ですか」

「ご主人様、これ以上増やしたら駄目！」

璃々が言うと蒲公英が

「璃々いいでしょう～、それに星お姉さんずるい、4人目は蒲公英が狙っているからダメだよ～」

「は…はわわ…す、凄い女の争い、わ…私も・・どうしよう」

「これから面白くなりそうだね～」

そして更に蒲公英の発言を聞いて、慌てふためく朱里と今後を楽しみにしている真里であった。

そして客将として星を採用し、その後無事を旅を続け、武威の町手前まで帰ってくると、町の入口手前で馬休と馬鉄が出迎えに来ていた。

そして2人が皆の無事帰還の出迎え挨拶と真里・朱里・星の紹介が終わると馬休が

「義兄上、姉貴に蒲公英、母上の事ありがとうございます」

と言うと2人は頭を下げていた。

理由を聞くと、一刀と華陀と別れて約1月後に華陀が武威にやって来て、碧を診察した結果、心の蔵を患っており、このまま放置すれば1年持つかどうかのところだった。

それで華陀は、しばらく武威に留まると共に碧の治療に当たり、そして治療の結果、碧の身体もすっかり良くなり、今はまだ様子見だが武術の稽古も再開するくらいまで回復した。

武威の留守組は、華陀から武威に来た理由を聞き、一刀、翠、蒲公英の話を聞いて、3人には大変感謝していた。

そして馬休らの案内で城に戻ると謁見の間で碧と渚が待っていた。

そして翠が碧に

「お母様無事戻りました、そして新しい仲間3人を連れてきました。そしてお母様、病気が治って良かった・・」

と涙を流し、蒲公英や渚、朱里も貰い泣きしていた。

碧が

「ありがとう、でも皆が見てるんだ、泣く奴があるかい・・」

と言って碧も手で涙を隠していた。

そしてようやく落ち着き、全員の挨拶をし、ここでも皆、真名の交換を終えた後、真里、朱里、星は旅の疲れを癒すため、侍女の案内で退室した。

そして碧が改めて一刀に

「一刀さん達のおかげで、私の命が救われたわ、何かお礼をしなく

ていけないけど」

「いいえ、お礼はいいですよ、当たり前のことをしただけで、翠や蒲公英もそう思っていますよ。それに碧さん、俺達家族なのですから」

と言うと碧はその言葉に感動し、そして

「ありがとう、その言葉うれしいわ、でもに後日また違う形で何かお礼させて貰うから」

と言うと一刀は何か物でもプレゼントをするのだろうと思い

「分かりました」

と承諾したが、これが後日とんでもない形で帰ってくるとは一刀も想像していなかった。

そして夜になり、さすがに璃々は疲れて、もう寝ていたが、一刀と紫苑は話をするために一刀の部屋に入ると、なぜかしばらく使っていない寝台の布団が中に誰かいる状態であった。

一刀が布団を捲るとなぜか寝巻姿の翠が横になっていた。

これを見て一刀が困惑し、紫苑は笑顔になっていた。そして一刀が

「え～と、翠、ここで何してるのかな」

「え…え、ここでご主人様を待っていたのだけど・・」

「それで、どうして横になって待っているのか、分からないだが・・」

「い、いや、あのお母様の事で感謝しているから、これは、わ…私

からのお礼と・・私も妻だから・・」

と言って翠は赤くなっていた。すると紫苑が

「あらあら翠ちゃん、ずいぶん積極的になったね～♪」

「では今日は積極的になった翠ちゃんに、ご主人様と私で更に女の喜びを教えようかしら～」

と言うと一刀と翠は驚き

「あらご主人様は、嫌ですの」

「嫌ではないけど、むしろ好きな方だが・・、ただ翠が・・」

と翠を見ると

「○▲※▽●～」

とパニック状態になっていたので、一刀が

「どうする、やめておくか」

翠は困惑しながらも嫌がる素振りを見せなかったので、紫苑が

「翠ちゃんもいいみたいだから、３人で楽しみましょう♪」

と言って、余裕の笑みを浮かべて閨に堕ちて行った・・。

第１４話（前書き）

すでに第１３話までにユニーク数が６０００を越え、アクセス数も３００００を越えて読んでいただき大変驚いています。

「ＴＩＮＡＭＩ」よりこちらの方が読者数が多いことを今更ながら驚いています。

今回は一応触れ合いをテーマにしています。

第１４話

一刀たちが武威に戻って来て2月が経過した、そんなある日、璃々は頭を抱えていた。

「う～ん、難しいよ…」

現在、璃々は紫苑とマンツーマンで勉強しているところだった。

璃々は、生まれはこちらの世界だが、字とかを覚える前に一刀の世界に行ってしまったため、以前の一刀同様、こちらの字が読めなかったので、暇を見つけて、一刀と紫苑が教えていたが、本日は紫苑が教えていた。

そして、紫苑が勉強終了の合図を出すと璃々は、机に寝て、

「疲れた～、頭がショートしそう…」

とぼやいていると、紫苑が

「まあ大分読めるようになってきたから、そろそろ終わってもいいかもね」

「はあ～、やっと終わるの～。今だったら漢文のテストを満点取る自信はあるわ…」

と以前いた世界を思い出したかの様に呟いたので、ちょっと気になり、紫苑は

「ねえ、璃々、あなたはこちらに帰って来て、今、どういう気持ちなの？」

「じゃお母さんはどうなの？」

「私は、どんな世界に行こうとも、ご主人様がいたら、どこでもい

いわよ、この身をご主人様に捧げると誓った日からそう思っているわ」

「そうか…、私は向こうの生活に慣れてしまったから、そういう面での不自由さあるけど、お母さんと同じように、私もご主人様とお母さんがいたら、一緒に付いていくよ、向こうにいたら、ご主人様と多分結ばれることは無かったし、そういうことではこっちに来て良かったと思っているよ、でもさすがにまだ戦うことには慣れていないけどね」

「あらあら、今度は翠ちゃんや星ちゃんあたりに稽古をつけて貰おうかしら」

「え～、あの2人メチャクチャ強いから勘弁して欲しい～」

そしてこの話をこれ以上続けるのを嫌って、話を変えて璃々は

「それで今日、ご主人様、何しているの？」

「今日は、朱里ちゃんらが領内の視察に行っているから、代わりに碧さんと一緒に仕事やっているわ」

「大変だね、ご主人様も」

「そうよ、頑張って璃々も書類の仕事をやって貰わないと」

「は～い」

「それとそろそろお昼だから、一緒に昼食しようか」

「やっとお昼ご飯か～、ちょうどお腹が空いたから助かった～」

部屋に食事を持って来て貰い、２人で食事をしていると紫苑が

「ねえ璃々、あなたももう分かっていると思うけど、また戦いがあると思うわ。もちろんご主人様や私、そしてあなたも出陣すると思う、でも家族3人、どんなことがあっても必ず生き残りましょうね」

「お母さん、今は家族3人じゃあないよ、今は翠お姉ちゃん入れて4人だよ」

「あら間違ってしまったわ、今は4人だわ。しかしまたご主人様のことだから、家族が増えてしまうかも」

「私はこれ以上増えて欲しくないよ～」

とぼやきながら食事をしていた。

一方、一刀は仕事の量が意外と少なかったので、早く仕事が終わり、碧と食事をした後、中庭の木の下で寝ていた。

「あ～、天気もよく、昼から何もすることがないし、気持ちいいか

ら、このまま横になろう」

と言って気持ちよく寝ていた。

そして、しばらくすると、紫苑と璃々が中庭を通ると璃々が寝ている一刀に気付き

「あれ？あそこで寝ているのご主人様？」

と木の方に寄ると一刀を見つけた。

そして紫苑もやって来て

「あらあら気持ちよく寝て」

「でも気持ちよさそうだね～、ねえお母さん、一緒にお昼寝しない」

「そうね、特に急ぎ仕事も無いし、私たちものんびりしましょうか」

「じゃあ、ご主人様を間に挟んで、私が右で、お母さん左ね」

「はいはい」

と言って、2人は一刀を挟んで横になった。

そして璃々が一刀の顔を見ながら

「でもご主人様、寝ている顔って、だらしないけど、でもいざというときは、皆を引き付ける力を持って、そして何とかするのだから不思議だね」

「そうね、あなたが昔、袁紹に捕らわれて、私と愛紗ちゃんが戦う

羽目になった時、ご主人様があなたを助けようと皆で協力して、助け出したから、今があるのよ」

「そうだね、今考えると、ご主人様って、私の王子様だったのかな」

「そうかもね、あまり声を出すとご主人様が目を覚ますから、私たちも寝ましょう」

と言って、2人は一刀と密着して眠りに入った。

一刀が目を覚ますと、何か頭の感覚が柔らかかったので、真上を見ると紫苑の顔が見え、一刀は紫苑に膝枕されていたのであった。

そして紫苑が

「お目覚めですか、ご主人様」

「ありがとう紫苑、途中で膝枕されていたのには、まったく気付かなかったよ」

「私がそのようにしたいから、しただけですわ」

「俺もいい気持ちになったから、礼を言うよ」

と言いながら、そして横を見ると璃々がまだ寝ていたので、一刀は璃々の髪を優しく撫でながら

「気持ちよさそうに寝ているな、璃々は」

「そうですね、昔、3人で木の下でのんびりと過ごしたことを思い出しますわ」

「そうだな…」

と2人は感慨にふけていた。

すると、静寂を破るかのように翠が大声で

「ご主人様～、どこだ～」

と探しているようであったので、一刀が起き上がり

「ここだ、どうした翠」

と言うと、翠が駆け寄り、

「紫苑と璃々もここにいたか、何か都から急使が来たらしくて、それで全員お母様のところに来てくれって」

「分かった、紫苑、璃々を起こして、今から碧さんのところに行こう」

と言って、４人は碧のところに行った。

そして、４人が衆議場に行くとすでに全員が揃っており、碧が

「これで全員揃ったね、今集まって貰ったのは他でもない、都から急使が来て、我らに黄巾党の制圧の命が下ったよ」

と言うと、皆の顔に緊張が走った。

すでに、涼州以外では黄巾党が暴れ回っている知らせが皆の耳に入っており、鎮圧に手を焼いている官軍は、強兵を持っている馬家にも出陣要請してくることは皆、想定していた。

更に碧は

「命令では、まず雍州の黄巾党を討つことになっているわ」

と言うと翠は、

「それは分かったけど、それで今回は誰が遠征の指揮を採る？まさかお母様じゃないだろう？」

「本来ならば、私が行きたいところだが、華佗に止められているから、さすがに自重するよ。だから今回の指揮は一刀さん、あなたが採ってくれる」

と黄巾党討伐の指揮を一刀に委ねる発言をすると、一刀は

「え？それは…」

と拒否の姿勢を示そうとしたが、碧は

「いや、今回は一刀さんでないと駄目だから、一刀さんが内外的にも、馬家の後継者であることを認めさせる絶好な機会だから、ぜひ指揮を採って貰いたいの」

「そうですわ、ご主人様、私たちも協力しますので、安心して下さい」

「そうだよ、私もいるよ」

「何、戦場の働きなら私に任せてくれって、頼むぜ、ご主人様」

と紫苑、璃々、翠が一刀の指揮に依存がないことを言うと更に星や朱里、真里も

「楽しみにしていますぞ、一刀殿」

「まあ、私たちもいるから自信を持っていいわよ」

「はわわ、私も初めてのいくしゃですので、頑張りましゅ」

と星や真里、朱里は咬み咬みながらも一刀を認め、そして渚、馬休、馬鉄も

「ぜひよろしくお願いします、一刀さん」

「馬鹿姉貴の手綱をしっかり持って下さいよ」

「俺も出来る限り、協力するぜ」

と皆から指揮を任せる発言があったので、一刀も

「分かったよ、俺も腹括って頑張るから、皆の協力よろしく頼む」

と皆に頭を下げて、承諾をした。

そして碧が遠征に同行する将については、

紫苑、璃々、翠、蒲公英、星、軍師で朱里

で行くことに決定した。

そして真里は碧の補佐で、内政と羌との外交を担当するために居残り、更に渚、馬休、馬鉄も国境警備等や補充兵の教練のため居残りすることとなった。

そして一週間後には、2万の兵を引きつれ、雍州に向けて出発した

のであった。

第１５話（前書き）

この回はあるシーンを多少アレンジしています。

第１５話

一刀らは武威を離れ、すでに雍州の天水郡に入り進軍していたが、先行している物見から、約１４里（約７キロ）先に敵約４万の兵が陣を引いていたため、現在軍議が行われていた。

「朱里、現在敵の４万だが、こちらの様子に気付いた気配は？」

「今のところありませんが、こちらも大軍ですので、やがて気付くでしょう」

「しかし、あいつら雑魚ばかりだが、兵はムチャクチャ多いからな」

「そうですわ、こちらは今後も連戦が続くかもしれないので、出来るだけ被害も少なく戦わないとね…」

翠と紫苑が発言していると星が

「何、数が多くても雑魚は雑魚、雑魚には兵法など無用、今すぐ突撃すれば、一撃でしょう」

と乱暴な意見が出たので、一刀は

「いくらなんでも、それは無理だな、数が違いすぎる」

「何をおっしゃる一刀殿、これだけの武将に西涼の強兵もいる、問題ないではないはず」

「それでも無理な攻めは被害が多い、取り敢えずは敵の出方を見て判断するから、朱里は更に物見の人数を出して、敵の様子を探り、後の者はここで警戒をしながら休息するが」

と言うと星以外は、了解の返事をしたが、星は明らかに不服そうな顔をして、この場を離れた。

星を見て一刀は、後でフォローしないといけないなと思っていたが…。

そして、しばらくすると第2陣の物見が帰ってきたので、状況を確認すると、やはりこちらに気付き、兵をこちらに進めてきた。

それで一刀らは、この戦の方針を決めるため、再度、全員集まるように指示したが、星だけが未だに来なかったので、兵に再び呼びに行かせたが、別の兵が一刀のところに来て

「あの～趙雲さんからの伝言で、やはり雑魚には兵法は無用、一人で行くと言ってましたが…」

と一刀らに伝えると翠は机を叩き

「何考えているんだ！アイツは！」

怒り心頭になっていたので、一刀は翠を落ちつけるため

「翠、落ち付け、可愛い顔が台無しになるぞ」

と言われると

「可愛いい～～○▲※@▽●」

と慌てふたためいて、違う意味でパニックになっていたので、璃々と蒲公英が

「翠お姉ちゃん、顔真っ赤だよ」

「もうお姉様って、うぶなんだから～」

と言われ、翠が照れながら

「うるさい～～！」

と言って、何とか怒りの状態は解消されていた。

そして紫苑が一刀に

「怒るのは後にして、星ちゃんをこのまま放っておくことは出来ませんわ、取り敢えず、助けに行かないと」

「ああ、そうだな、朱里、何か策はあるか？」

と言われ、朱里は物見の情報を確認して出した答えが

「まず、紫苑さんが2千の弓騎隊を連れて、星さんと必ず合流して下さい、しばらく戦った後、敵兵を釣り、必ず星さんを連れて、こちらの本陣まで撤退して下さい」

「そして翠さんと蒲公英ちゃんは、紫苑さんと同時に出陣、それぞれ6千の兵を連れ、左右に分かれ、本陣と敵が戦い始めてから、横撃を入れて下さい」

「そして本陣にはご主人様、璃々ちゃんに私が残りますが、璃々ちゃんには弓隊を指揮して、紫苑さんがこちらに帰ってきている時に紫苑さんが通過した後、敵がこちらの弓隊の射撃範囲に入れば、遠慮なく打ち込んで足留めして下さい」

「そして敵の足を留めると本隊と紫苑さんの部隊で、突撃し、それと同時に翠さんと蒲公英ちゃんも突撃するという作戦ですが…、どうでしょう？」

朱里が作戦を説明してから、周りを確認すると、翠や蒲公英が

「すごいな朱里、私じゃあ、そんな作戦すぐには出ないぞ」

「すご～い、やっぱり軍師がいて良かった」

と朱里を褒めていた。

そしてこれで軍議一決し、一刀たちも作戦行動に入った。

～星視点～

風に吹かれ、私は敵軍勢に向かいながら

「やはり一刀殿も英雄の器では無かったかな、黄巾党ごときの弱兵に必要以上に恐れているとは」

「さてさて、私を満足できる主君はいるかな、いたら喜んで主とお呼びするが…」

「さて、ここでの最後の奉公だ、さっさ敵を葬り去ろうか」

と言いながら敵先鋒に単騎向かっていると、その軍勢が見え

「なかなか雄大な眺めだ…さあ、私の1人舞台だ。」

「遠からずんものは音に聞け、近くば寄って目にもみよ!我こそは、常山の趙子龍なり!」

星が名乗りを上げると、敵兵は、襲いかかるが

「はいはいはいはいーーーー」

と見事な槍捌きで敵兵を倒し

「恐れる者は背を向けよ！恐れぬ者はかかってこい！」

と更に挑発するため、敵兵も

「おい！相手は1人だ！どんどんかかって行け！」

「女だ捕まえて、好きにしてやるぜ」

「周りを囲んで、逃げられないようにしろ！」

と言って、星の包囲網を作って行った。

そんな中、星は次々と敵兵を倒しては行くが、次々へ来る敵兵に

「チィ、同じような場所で戦っていたから、死体で足場が悪くなっ

てきたな…」

「しかし、私はまだまだ負けん！」

気力を絞って言っていると、後方から何か音が…援軍か…。

しかし私には援軍と言えるかな…？

星視点終了

先鋒の紫苑が馬を駈けながら

「敵発見！星…趙雲ちゃんには当てないよう、一斉に射ちなさい」

と言いながら、敵先鋒に対し弓矢を放ち、敵を混乱させてた。

そして紫苑が疲れ切った星を見て、

「さあ文句を言うのは後にするから、今は、敵にもう一度一当てしてから、引き上げるわよ」

「ああ…もう一丁やるか」

再度、紫苑の部隊は敵を弓矢放ち、混乱させていると本陣から合図の鐘が鳴ったので、紫苑と星は上手く敵を釣り、本陣に撤退して行った。

本陣で待っている一刀は璃々に

「もうすぐ紫苑が帰ってくるから、援護射撃頼むぞ」

「任せておいてご主人様」

と言っている紫苑の部隊が見え、そして敵の姿が見え、朱里が

「あわわ、もう弓矢を放った方が…」

と言うも璃々は

「もう少し我慢、ギリギリまで引き付けるから」

と言うと、一刀が

「璃々！」

「うん、今だよ、一斉に射て！」

放たれた弓矢が見事に敵先鋒に刺さり、そして連続射撃で大混乱を起こした。

それを見た朱里が

「本隊と紫苑さんの部隊はこのまま敵兵に突撃、そして翠さんと蒲公英ちゃんの部隊にも突撃の合図を」

と命令すると、敵は崩れ出し、散り散りに敗走し、見事に初戦を飾ったものである。

そして戦を終えて、戦いの後始末に、全員が集まり軍議が開かれ、一刀は笑顔で

「皆、お疲れ様、怪我なくて良かったな」

そして皆が笑顔で勝利の余韻に浸っていたが、一刀が席の隅にいた星の方に寄り

「星、大丈夫か？怪我はないか？」

「大丈夫です、ありませぬ」

「そうか…、本当に大丈夫だな？」

「くどいですぞ、一刀殿」

「分かった…、星、歯食い縛れよ」

と言って、

「パチーン」

一刀は星の左頬にビンタをしていた…。

すると星が

「何をするのですか一刀殿！」

「星…、自分がやったことを本当に分かっているのか！」

「私のお陰で、戦に勝ったではありませぬか」

「ああ、星以外の活躍でな！」

「星がやったことは、無断出撃して、軍の規律を乱し、そして…死なくてもいい兵の命を増やしただけだ！」

「！」

と一刀は辛辣な発言をし、更に

「これは星の失敗が皆が救ってくれた形だ」

と一旦言葉を切り、寂しそうな顔をして

「星、君が自分の武に自信があるのは分かる、しかし周りを顧みず、自分勝手な武は、軍を率いる将として失格だ、軍には必要ない、だから星、本来なら軍律で処罰してもおかしくないが、君は客将だ、あえて処分はしないが、嫌ならここから立ち去っても構わない・・」

と言い切った後、一刀は最後に

「星、手を出したのはすまなかった、少し興奮したみたいだ、しかし言ったことについては間違っていないつもりだ、ちょっとすまんが頭を冷やすので席を外させて貰う」

と言って、席を外し、そして璃々も後を追い掛けた。

そして放心状態になっている星に翠が

「星、お前が無断で出撃したので、帰って来たら私がぶっ飛ばしてやろうかと思ったけど、ご主人様が言ってくれたから、もう言わないつもりだけどよ、一言だけ言わせて貰う、私らは兵たちを死なせるために訓練をしている訳じゃないんだ、生かせるため訓練しているんだ、これだけは忘れないでくれ…、あとはお前の決断に任せる、行くぞ蒲公英」

と言って2人も席から離れた。

そして紫苑が星のところに来て、星がやや不貞腐れたように

「紫苑も何か言いたいか」

それを見て紫苑が

「あら、何か色々と言って貰えるうちが花じゃない？」

と言われると星もきょとんとした顔になり

「それはどういう意味だ？」

「分かりやすく言えば、ご主人様も翠ちゃんも星ちゃんのことが心配で、星ちゃんのために言ってくれているのよ」

「星ちゃんも今回の行動が正しいと思っている訳ではないでしょう」

「ああ…」

「だからご主人様や翠ちゃんも上に立つ立場の人だから、ああいう風に言ったのよ、もし誰も星ちゃんの失敗を指摘しなかったら、星ちゃん自身が将として間違った方向に進むかもしれない、兵のことも考えず、独りよがりの将として…」

「だからご主人様も言っていたでしょう、軍を率いる将として失格だと、あれは星ちゃんにそれくらいの将になれる期待をしてくれているから、そう言っているのよ」

と言われると朱里も

「そうですよ、星さん、只でさえ強いのですから、これで星さんが軍を率いたらもっと強くなりますよ」

と励まし、すると星は納得した顔になり

「一軍を率いる将か…ふっ、一刀殿や紫苑、朱里言われたらその期待に応えないとこの趙子龍の名が泣くな、済まぬが紫苑、一刀殿のところに案内して貰えるか」

と言うと3人は一刀を探しに出た。

一方、一刀は陣の外に出て空を見上げていた。

そして後ろから璃々が来て

「ご主人様、星お姉ちゃんのこと考えていたの？」

「さすが璃々だな、分かっていたか」

「それは分かるよ、星お姉ちゃんを叩いた時のご主人様の顔、悲しそうな顔してたからね」

「そうかよく見てたな」

「星には、将としての実力は持っているんだ、だからああいう行為したことが許せなかったんだ、もしこれでここから出ても仕方がないけどな…」

「大丈夫だよ、ご主人様、お母さんもフォロー入れてくれると思うし、今は分からなくても、いつかは分かってくれるよ」

と言うと、すると星が璃々の背後から

「璃々ありがとう、お主の言う通り、紫苑に言われてやっと気がついたよ」

そして一刀の方に向くと、星は頭を下げ、一刀に

「一刀殿、いや主、先ほどのことは申し訳ありませぬ、この趙子龍、

あなたの家臣となり、この身を全てあなたに捧げますぞ」

「星…頭を上げてくれ、さっさは手を出して悪かったな、星に家臣とは言わない、仲間になってくれるか」

「はい、ありがとうございます、主」

と一旦切ったあと、星はいつもの調子に戻り、

「それで、主、仲間と言うことは、紫苑らと同じように妻としてくれるということですかな」

「……意味が違うわ、星！」

「そうだよ、星お姉ちゃん、私も反対だよ～」

「わ、私もいるからな、星」

「星お姉様、私も譲らないからね！」

「はわわ～～」

一刀が突っ込みを入れると璃々、翠、蒲公英もいつの間か来ており、それぞれ譲らない構えを見せ、朱里は顔を赤くしてパニック状態になっていた。

これを見て、紫苑は一刀に

「皆、ご主人様を愛しているのですから、もし彼女らと結ばれたら、最後まで責任を取って上げて下さいね、ご主人様。でも一番の花は、私ですから」

と笑顔で言われると、こういうことについては、一生紫苑に勝てないと感じた一刀であった…。

そして翌日、軍は更に東に向け出発したのであった。

第１６話

一刀たちは、小規模の黄巾党を駆逐しながら、更に進軍を続け、長安の郊外まで来ていた。

そしてそこで陣を張っていたところ、官軍と合流し挨拶に来ていたのだが、その相手が…

「ウチは司隷校尉（中央の官吏の取締り及び洛陽・長安周辺の軍事・行政担当官）の董卓の配下の張遼やねんけど、馬騰軍の指揮官は？」

と言われると一刀が

（霞か…、今回は月の客将ではなく、配下でいるんだな）

と思いながら

「ああ、はじめまして張遼さん、一応ここの指揮を取っている北郷一刀です」

挨拶をすると、霞は驚いた顔をして

「はぁ？失礼やけどアンタがか？馬騰軍やったら、馬騰様の他に錦馬超がいるんと違うんか？」

と言われると一刀は内心

（相変わらず、ストレートな物言いだな…）

苦笑しながら、翠の方を示し

「お目当ての錦馬超も一緒にいるよ」

と霞に教えると、霞は翠に

「え?何でアンタ、指揮取ってないの?」

翠は言いにくそうに

「ああ…ご主人様は、私より頭が良くて、強いからだよ」

霞は感心したように一刀に

「へえ～、人は見かけによらんもんやな～、時間があれば、一度お手合せ願いたいわ」

「そんな神速の張遼さんと勝負って、おこがましいよ」

と言っていると、朱里が霞に

「張遼さん、いったいこちらにはどういう御用で…」

「ああ忘れるところやったわ、主の董卓から、お詫びと雍州の鎮圧のお礼の書簡とまた新たな命令書を持ってきたわ」

と言うと紫苑が

「お詫び？」

「ああ現在、雍州は太守不在で、代わりに長安の治安維持もしていた董卓が臨時で太守も兼務していたんやけど、洛陽にも黄巾党が迫っていたため、そちらの防衛で手一杯で、雍州の鎮圧を馬騰軍に任せてしまったお詫びと鎮圧していただいた礼状とそして、あんたらとうちらの両軍共同して、新たに黄巾党を殲滅する命令書やわ」

と言って、一刀に書簡を差出し確認すると、一刀は、月、詠、恋の

ことを思い出しながら書簡を見ると、内容には、黄巾党の本拠地である宛城（南陽）にいる本隊を討ち取るように書かれていた。

これを見て一刀は、霞に

「当然、向こうは大軍だけど、官軍の方はこちらの他に誰がこちらに派遣するんだ？」

「うちが聞いている範囲では、陳留太守の曹操に、袁術配下の孫策、それに北平太守の公孫讃の配下で各地の義勇軍を纏めている劉備だな、他はまだ自分ところの領地の黄巾党を相手にするのが手一杯みたいやわ」

（やはり曹操…華琳がいるか、今回は孫策は生きていて、桃香が各地の義勇軍と纏めているって？）

「張遼さん、曹操や孫策の噂は聞いているけど、桃…劉備が各地の義勇軍が纏めているって、どういうこと？」

「ああ話では、劉備らは各地で転戦して戦っているんだが、その時に各地で個別で立ち上げていた義勇兵と協力して戦い、その後その義勇兵をそのまま配下にして、かなりの戦果を上げているらしいわ」

それを聞いた一刀と紫苑、朱里は

（「恐らく雛里の指示だな…」）

と思っていた。

そして、その後今後の作戦について、計画したところ、張遼の軍もかなり強行軍で、こちらも兵の疲れを考え、2日ほど休みを取り、その間に補給などを済ませたあと宛城に向けて出発することが決まった。

そして、一刀は、その後少し元気がなさそうな朱里を見て、

「朱里どうした元気がないな、雛里のことか？」

「そ、そうです。劉備さんが都でも評判になるほど活躍している話を聞いて、ちょっとうらやましいなと思って…」

と言うと、一刀は朱里に笑顔で言い聞かせるように

「まあ確かに名声はあるに越したことはないけども、俺たちはそんなことを求めて、戦いをしている訳ではないだろう。民のためを思ってやっていることだよ、名声などはその結果に過ぎないよ、それよりも一刻でも早く黄巾党を殲滅させないとまだまだ泣く人がいるからね」

と一刀に言われると朱里はハッと気付き

「ありがとうございます、ご主人様、そうですね、私大事な事を忘れていました。民のために尽くすことを、雛里ちゃんも名声など関係なく、今は夢中で仕事に取り組んでいるだけですからね、私も負けていられませんよ」

「よし、それこそ朱里だ、明日からも頼むぞ」

と言って、一刀は朱里の頭を撫でると、

「私は子供じゃないですよ～」

と嫌がっていたが、

「でも、いいかも…」

と一刀も朱里の可愛い仕草に見とれて、続けていると、背後から

「あ～朱里ずるい、私も～」

と言って蒲公英が、一刀の背中におんぶするような形になり、胸が一刀の背中に当たっている状態になり、一刀は

（「まずい、まずい」）

と思っていると翠がやって来て

「な、何やってるんだ蒲公英、ご主人様が嫌がっているじゃないか、とっと降りろ！」

「あ～お姉様妬いているのね、ご主人様を取られて～」

「べ、別に焼いてる訳じゃないけど…、あ～いいから降りろ！」

「は～い、次の夜は私の番だからね、ご主人様」

と言うと、翠は蒲公英に

「お前の番はない！」

と言って、頭に拳骨を入れて、無理矢理陣幕に連れ戻した。

そして一刀は気を取り直して、朱里に

「取り敢えず、俺たちには朱里が必要だから、まずは俺たちが出来ることから、やっていこうな」

「はい、ご主人様」

笑顔で言って、落ち込みかけた朱里を元気にした一刀であった。

そしてそれを見ている、星の顔があった。

それから、一週間後、宛城に向けて進軍していると、物見から途中で宛城から迎撃に出た部隊と各地で敗れた敗残兵を編成した約3万の軍勢が武関の郊外の山岳地帯で待ち伏せをしている情報が入り、一刀たちは武関で軍議を開くこととなった。

そして、軍議で紫苑が

「兵力自体は私たち2万に、張遼さんたちが1万5千ですが、向こうは峡路に1万4千に左右の山に8千ずつの兵に、更に落石計もありますわ」

「向こうは、いいところに陣を引いて、更に上から石とかが待ち構えているからな…」

「この狭い道は、うちら騎馬隊の働きが制限されるけどどないする？」

翠と張遼がぼやいていると、朱里が満面の笑みで

「閃きました！、ますば星さんの部隊５千が右の山に、蒲公英ちゃんの部隊５千が左の山に火を放って下さい、決して山上に上がらず、下で気勢を上げや旗を振って、虚兵を見せて下さい。更に敵は煙や火に巻かれて混乱しますので、その煙を利用して、火のかからないところから一気に山上まで攻め上がって下さい」

「山上を占拠すると、下に部隊がいたら、その落下計を発動して、敵に落として下さい、そして計を発動してから関から兵を出して、殲滅作戦を取ります。もし山を占拠する前に敵が撤退するのであれば、その時は張遼さんの部隊が一斉に討って出て下さい」

と皆が朱里の作戦を聞くと感心して、異論は無かった。

そして星と蒲公英の部隊が山に火を放つと、敵は煙に巻かれて動きが鈍くなり、手向かう者や逃げる者で指揮系統がバラバラになり、落石計をすることなく敗走、敵は山の異変を見て、敵軍は撤退、そして朱里は張遼の部隊や山から降りた星や蒲公英の部隊で敵に追撃戦を加えた結果、張遼が敵将を討ち取り、こちらの兵はほとんど損害なく完勝と言っていいくらいの勝利だった。

そしてこの作戦を見て、張遼が朱里に

「あんた大したもんやな、うちの軍師の詠…賈駆とタメ張れるで、そして星や蒲公英、他にいるあんたらも皆、強いわ。そして朱里、あんた私に手柄を立てさせるように感じたで、だからあんたらに私の真名を預けるわ」

と言って真名を皆に預け、そしてお互いに真名を交換した。

そして、その夜、星が蒲公英、朱里を誘い、3人は一刀の部屋に来ていた。

「はわわ、星さん、いいのですか」

「何、今日の戦いの褒美を貰いに行くだけだ」

「そうそう、蒲公英たちは貰う権利あるもんね～」

「お主たちも主を好いていのだろ？」

と言われると朱里も顔を赤らめていた。

そして3人は、一刀の部屋に入ると部屋には一刀と紫苑がいたが、星がニヤニヤしながら、一刀に

「主、今日の戦いの褒美を頂きに来たのですが」

「星、そのニヤニヤは止めてくれ…、何を考えているんだ」

それを見ていた紫苑が星の要求しそうな物に気付き、

「でも、星ちゃん、あれくらいの戦いだったら、星ちゃんらが考え

ているご褒美は無理ね」

先読みした紫苑に言われると3人は

「う…、主、ではそれ以外の物の褒美が頂きたいのだが」

「そうそう、何かご褒美欲しいよ～」

「今後、ヤル気を出すためにご褒美欲しいでしゅ」

と言われると、紫苑がヤレヤレという顔で、一刀に耳打ちして、それを聞くと

「またそんな事を…、それいいのか？」

「言いましたでしょ、責任は取って上げて下さいって」

「分かっているよ、でも一番は紫苑だからさ」

「取り敢えず邪魔したら悪いので、ちょっと部屋を出ますが、星ちゃんたちに大人の第一歩を教えて上げて下さいね」

と言って紫苑も微笑を浮かべた顔をして部屋を出た。

すると一刀が星らに

「あ～、一つ言っておくけど、一応ご褒美ではないけど、俺の本当の気持ちだと思って受け取って欲しい、もし嫌なら、後で殴っても突き飛ばしても構わないから、星、こっちに」

星を呼び、

「では主、私らに何を下さるのかな？」

「星、好きだ、受け取ってくれ」

いきなり一刀は星にキスをして、そして口を離すと

「い、いきなり接吻するとは思いもしませんぞ」

と恥ずかしながら反論するも、一刀は

「でも、嫌がってはなかったね、安心したよ。でも俺の星のことは好きだから、でも今日はここまでだけどね、それで蒲公英に朱里はどうする？嫌なら止めておくけど」

「私はいいよ、お姉様に負けたくないもん」

「はわわ、私も負けたくないでしゅ」

と2人にもキスをすると

「やったね」

「はわわ～、これが大人の第一歩でしゅか～」

と喜んでいると、ドアのところからどす黒い殺気が漂ってきたので、そこを見ると璃々がいた。

「何しているの、3人とも…」

「いや、主から褒美を貰っていたところでな」

「そ、そうそう、今、貰ったから、もう帰るわね」

「あ、ありがとうございます、失礼します」

と3人は慌てて部屋から出て、璃々が

「ご主人様…、どういうことか話を聞かせてね」

普段では、考えられない璃々の嫉妬心を見て

（「まるで愛紗が乗り移ったみたいだな…）」

一刀が嘆いていると璃々は、殺気を消し

「フフ～ン、じゃあ、またご主人様に色々教えて貰って、女として

より磨きをかけないといけないね」

と笑顔になり、先程と打って変わり、すごい変わり身みせた璃々に一刀は

「璃々、お前…、段々紫苑に似てきたぞ…」

「だってお母さんから話は聞いていたけど、いい気はしないのだから、これくらい、いいでしょう～」

と再び甘えた姿を見せ、一刀は、将来、璃々は紫苑以上の女性になるのではないかと思い、夜が更けていくのであった…。

第17話

一刀たちは、武関で黄巾党を破り、宛城に向かっていたが、宛城の手前、約30里手前で陣を張り、宛城を攻撃する部隊の集結を図っていた。

そして、官軍で今回の指揮官である張遼の名で、一刀の陣で軍議が開かれようとしていた。

～曹操の陣～

「あら、秋蘭どうかしたの？」

「華琳様、これを」

と言って手紙を渡した。

華琳と呼ばれた女性、名は曹操、字は猛徳で、現在は陳留太守である。

秋蘭と呼ばれた女性、こちらは名は夏侯淵、字が妙才、華琳の右腕的存在、姉に春蘭こと夏侯惇がいる。

そして手紙を見て華琳が

「軍議に参加しろ…か」

「仕方がありません、華琳様、まだまだ我々は力不足なのですから」

「あら、秋蘭、そういう意味で言ったのではないのよ、今回、この戦いに参加している陣営を見たら、会うのが楽しみということを。孫策に劉備、そして馬騰軍の指揮官である天の御遣い人がどんな人物か」

「そして我が覇業の敵と成り得るかどうかをね…」

「秋蘭、すぐに桂花（荀？）を呼んで、軍議に出席するわよ」

～孫策の陣～

「軍議なんてめんどくさい～、冥琳代わりに行ってきて」

「馬鹿な事言うな雪蓮、お前が行かなければ、誰が行くのだ？」

雪蓮と呼ばれている女性、名は孫策、字は伯符、現在、袁術の将として軍を率いている。

そして冥琳と呼ばれている女性、名は周瑜、字は公謹、孫策の軍師でもあり、盟友で「断金の交わり」を交している。

「仕方がないか、取り敢えず、行きましょうか？」

「おや、やけに素直にだな」

「まあね、行った方が面白いと、私の感が囁いているのよね」

「面白いか…、まあその感が外れたことがないから信用はするけどな」

「そうね、さあ行きましょう、孫呉復活の第一歩を踏み出すために…」

～劉備の陣～

「ほえぇ～沢山集まっているね～」

「桃香様、まもなく軍議が始まりますので、準備の方を」

「うん、ありがとうね愛紗ちゃん、あと雛里ちゃんは？」

「雛里ももうすぐしたら、こちらに来ますので」

「しかし、一刀さんらと会うのも久しぶりね、皆、元気でやっているかしら」

「実は私も、皆と会うのが楽しみです」

「ふ～ん、愛紗ちゃん、一刀さんが気になるの？」

「い、いいえ、そんなことはありませぬ」

「そうか、そうか、さあ軍議に行こう、愛紗ちゃん」

「そんなのではありません！桃香様！」

先の２人に比べ、呑気な桃香たちであった。

～一刀の陣～

そして、各軍の代表者と軍師が集まり、そして警護の武将については別室で待つこととなっていた。

そしてお互いの自己紹介を終え、朱里が現状の把握ということで、各軍勢を人員を公表すると

馬騰軍　２００００

張遼軍　１５０００

曹操軍　２５０００

孫策軍　１５０００

劉備軍　１５０００（公孫讃の援軍込み、公孫讃自身は、自領守備のため参戦出来ず）

そして現在、宛城に籠城している黄巾党本隊は約１０万くらいで、首謀者の張角らも一緒にいるという情報であった。

そして、霞が

「一応、ウチが大将みたいになってるけど、頭使うのを苦手やから、各軍いい軍師連れてきてるやろ、無茶な策ではない限り、承認するから、あんじょう頼むで」

丸投げな提案を出してきた。

それを聞いた一刀が内心

（「おいおい、それはないだろう、いくらこの国の5本の指に入ろうとする軍師らがいるとは言え、それは無茶苦茶だろ」）

と思っていると華琳が

「あなた、なかなか面白い提案するね」

すると霞が

「ああ下手に私が、策を立てるよりは、皆、いい軍師連れてきてるんやろ、それやったら、兵の被害が少なくすむよう策を考えてくれるやろ、アホな作戦を立てて被害を増やすのは、嫌やからな」

「確かに、それはいい考えね、下手な指揮で兵を死なすよりはよほどいいわ」

と雪蓮も同意し、一刀も桃香も同意したので、各軍の軍師を中心に策を考えることにした。

そして冥琳が朱里に

「現在、敵の食糧状態は分かるか？」

「詳しい量は分かりませんが、ただ１０万の大軍を抱えてますから、潤沢ではありませんね」

「ふむ…」

すると桂花が

「それだったら、敵を誘き寄せるよう、偽の食糧の輸送隊を作るのは、どうかしら」

そして雛里が

「その輸送の荷物の中に兵を潜ませたらどうでしょうか」

と言うと、続いて冥琳が

「そうだな、これに敗残兵を装った黄巾党にこれを襲わせ…」

最後に朱里が

「偽の伝令を使い、敵兵を城から出して、救助に向かわせて、わざと救助させ、そして、その敗残兵と輸送隊の中に潜ませた部隊で城中に入る…」

そして一刀が

（「さすがにこれだけの軍師がいたら、多少の兵力の差なんか問題にならないだろうな…」）

と思いながら

「俺らが攻めた時に中から蜂起するか…」

と言うと、華琳、雪蓮、桃香は

「この案が一番妥当じゃない、まともに攻めても被害が多そうだし」

「そうね、こちらの兵が少ないから、被害が少ない方が助かるわ」

「皆、すごいね～、こんな策考えつくなんて…」

3人は様々な反応を示していた。

そして、霞もその作戦を了解し、あとは各軍の軍師で詳細を詰めることなり、軍議は解散する運びとなったが、すると一刀のところに華琳がやって来て、いきなり

「あなたが噂の御遣いなのね、噂と違って、ずいぶん普通なのね」

（「相変わらず、キツい言葉を吐くな、華琳は」）

内心思いながらも、一刀も皆が見ている前で、舐められては駄目だと思い

「ああ、確かに見た目は普通だけとね、噂の曹操さんも当てにはな

らないな、人を見かけで判断するなんて、身体同様に器も小さいのかな？」

と切り返すと、華琳は一刀の見事な切り返しにあっけに取られたが、そして表情を元に戻し、

「なかなか面白いね、あなた、今の会話の切り返しやそして涼州での治政の噂も聞いているわ、ぜひ私に仕えないかしら」

と人材収拾に余念がない華琳が一刀に誘いをかけたが、一刀はあっさりと

「あ～、それは無理だな」

断ったので、華琳は少しムッとした表情で一刀に

「それは、何故かしら？」

「愛する妻を捨てて、曹操さんに仕えることできる訳ないだろう」

一刀がその拒否理由を答えると華琳もその回答に驚き

「え!?妻ですって?」

「ああ、俺には愛する妻が3人いるが、そのうちの1人が、錦馬超さ」

と一刀が自信満々に答えると、華琳はさすがに驚きを隠せず

「そ、そうなの残念だわ」

（「すでに馬家に先手を打たれたか…、何か手段を考えて出直しだわ」）

「でも、私は諦めないからね、また出直しから来るわ、秋蘭、桂花は帰るわよ」

と言って、華琳たちは自分たちの陣に帰った。

それを横で見ていた雪蓮が一刀に

「ふ～ん、あなたって、結婚しているのね」

「ああ、そうだよ」

「何で馬超と結婚したの？」

「何で、好きに決まっているからだろう、それ以外になるかあるのか？」

「聞き方が悪かったわね、馬超のどこに惚れたの？」

「話を聞いていなかったか？俺にはすでに妻が3人いるんだ、翠…馬超は3人目の妻で、馬超はそんな俺でもいいから結婚したんだ、そんな馬超の意志を無視した言い方は失礼だな」

一刀が雪蓮に指摘すると、さすがに雪蓮も

「ごめんなさいね、そういうつもりじゃなかったわ、ただあなたに興味があって聞いてみたかったの」

「その血を貰えるのは、馬家だけなの？」

雪蓮が一刀に言うと、一刀もさすがに目が点になり、雪蓮が一刀に

「だか～ら、私はどうって、聞いているの」

「いや、それおかしいだろ、いきなり初対面でそんな話になるのは？」

「全くだ、雪蓮、帰るぞ」

「いたた～」

雪蓮の背後から、髪の毛を引っ張っている冥琳の姿があった。そして冥琳が一刀に

「すまなかった、呼び方は、北郷でいいか？」

「ああ北郷でいいよ、気にしてはいないけど…、周喩さん、いつも

孫策さんこんななの？」

「ああ…、突拍子な事を平気で言ったり、実行したりするからな」

冥琳が一刀に言うと、思わず一刀が冥琳に

「…苦労しますね」

「分かってくれるか…」

「ぶ～ぶ～、私をそんな変な人みたいに言わないの」

雪蓮が文句を言うも、冥琳は、一刀に迷惑を掛けたことを謝罪して、無理やり雪蓮を連れて帰った。

今度は、桃香、愛紗、雛里がやって来て、

「こんにちは、一刀さん」

「お久しぶりです、一刀殿」

「お、お久しゃしぶりです」

3人が挨拶をしたが、一刀は雛里に

「朱里と話をしたの？」

「は、はい、元気そうで良かったでしゅ」

「戦いが終わったら、ゆっくりと話をする時間があったら、また話をするといいよ」

「はい！」

と元気よく返事をした。

そして一刀は、桃香と愛紗に

「皆、元気そうで良かったよ」

すると桃香と愛紗も

「うん、一刀さんも元気そうで良かったよ」

「またお会いできて、何よりです」

「そうだな桃香、あれからここまで兵とか集めてすごいな」

「私だけの力じゃ無理だよ、愛紗ちゃんや鈴々ちゃんに雛里ちゃん、そして凪ちゃん、真桜ちゃん、沙和ちゃんもいるからだよ」

一刀は聞いたことがない人がいたので

「そのあとの3人は、誰？」

「あ～、ごめんなさい。楽進ちゃんに李典ちゃん、于禁ちゃんのことだよ」

一刀は、それを聞くと

「（この3人って、本来曹操の配下だよな…何でだ？）」

疑問に思っていると愛紗が

「その3人は、別の町で「大梁義勇軍」という義勇軍として、賊から町を守っていたのですが、町を攻められた時に、近くにいた私たちが助け、そして取り敢えず、この乱が治まるまで、一緒に戦ってくれる仲間ですよ」

と補則説明してくれた。

「へ～、大したもんだな。また機会があれば、紹介して欲しいな」

「うん、いいよ」

「3人とも、怪我しないよう頑張れよ」

一刀が桃香らに激励すると、桃香らも一刀と笑顔で別れた。

そのやり取りずっとを見ていた紫苑と翠が

「ご主人様、曹操さんや孫策さんに、ずいぶん翠ちゃんのことを熱く語っていましたね」

「見ていたのか紫苑、話の成り行き上、こんな話になってしまったけど」

「ちょっと妬いてしまいましたけど、ちょっと翠ちゃん見て下さい」

一刀が翠の方を見ると、顔を赤らめて放心状態になっていた。

それを見て一刀が翠に

「何、顔を赤くしてるんだよ」

「い、いや、あんなに妻だと強調されると逆に照れてしまって…」

「だって事実だろ、翠はかわいいのだから、もう少し自分に自信持てよ」

一刀がそう言いながら、翠の頭を撫でると、翠も

「こ、子供じゃないんだ馬鹿するなよ」

「いいじゃないか、俺が好きでやっているのだから、それとも触れるのは嫌か？」

「嫌じゃないけど…、ご主人様がいいのだったら、触ってもいいよ」

最後は照れながら言う翠であった。

そして各軍の軍師と協議した結果、３日後に作戦を開始することに決まり、黄巾党討伐の最終決戦を迎えるのであった。

第１８話

そして、軍議が終わってから朱里は全員を集め、今回の作戦方針を伝えた。

まず、偽の輸送隊に忍び込む将には、こちらからは蒲公英が、そして曹操軍からは典韋こと流琉、孫策軍からは周泰こと明命、劉備軍から鈴々が参加し、各軍から兵を３００ずつ出すことなった。

そして偽の敗残兵の指揮官に、華琳の強い要請で秋蘭が取り兵は約２０００、そして輸送隊の指揮を紫苑が取り、敗残兵が襲ってきた時点で、一応戦うふりをして、城から兵が来た時点で逃走することが決められた。

それで夜になれば、その９００の兵が、食糧庫を放火のあと、西門を開け、馬騰軍と張遼軍が突入、残りの２０００が城内を攪乱、北門の曹操軍と南門の孫策軍はかがり火を多く焚いて大軍がいるように見せかけ、東門にはこちらの兵がいないようにして、逃走する敵兵を劉備軍が討つという形となっていた。

すると紫苑が朱里に

「朱里ちゃん、一つ聞きたいのだけど、曹操さんが、夏侯淵さんを指揮官に強く要請したと言ったけど、何か理由があるのかしら」

「これは私の予想ですが、曹操さんは張角らの捕縛を考えているのではないでしょうか？だから曹操さんの右腕的存在である夏侯淵さんを使い、張角らを確保するつもりではないでしょうか？」

すると翠が朱里に

「殺すのではなく、捕縛か？普通殺した方が手柄になるだろう？」

「確かに普通なら、そうですが、今回に関しては張角の正体については、未だに不明で、中には化け物みたいな話はありますが、実際そんな人はいないでしょうし、極端な話、偽物でも使えば分からないですから。でもそんなことして、後で本物が出てきたら、大きな問題を生じますから、あの曹操さんがそのようなことはしないでしょう」

「だから曹操さんは、すでに張角らの正体が分かり、今後、自分の指揮下において、何らかの形で利用することを考えたら、捕縛する理由も分かります」

星が

「それなら他の軍も気付くのではないか？」

「今のところ、他の軍の様子は分かりませんが、他に孫策さんのところが、今回の城攻めで、隠密戦が得意な周泰さんを使い、敵の食糧庫などに火付けをするので、それを一番槍の形で認めて欲しいことを言ってきましたので、曹操さんもそれを承諾しました」

それを聞いて、蒲公英が

「それじゃ、私たちは今回は曹操や孫策の援護する形なの？」

「そうですね、私たちは攻城戦には慣れていないのと、雍州平定などで戦果を上げているので、これ以上、目立つ活躍をすると、他の諸侯から妬まれる恐れもありますから、今回は敢えて控えました」

と朱里が答えると、更に璃々が

「それだったら、桃香お姉さんのところも活躍の場は少なそうだけど？」

「向こうは、色々な義勇軍や公孫讃さんの援軍がいるから、雛里ちゃんは、桃香さんの考えも入れて、被害や混乱を避け、無理をしないように考えたと思います」

朱里が説明すると、皆は納得したようであった。

そして一刀は、朱里に華琳のところに物見を増やし、動向を監視するように命じた。

そして一刀は最後に皆に

「これで黄巾党との戦いも最後だ、色々とあったが、これに勝って、、無事に涼州に帰るぞ」

「「「「「「御意！」」」」」」

と軍議を終えた。

そして3日後、囮の輸送隊を率いる紫苑に一刀が

「紫苑、気を付けてな」

「大丈夫ですよ、ご主人様、璃々に翠ちゃん、星ちゃん、朱里ちゃん、作戦の方、よろしく頼むわね」

と言って出陣した。

そして一刀らは、一応輸送隊を救援する部隊を出すため、出陣準備に掛かった。

そして紫苑が出陣してから、しばらくして秋蘭が率いる偽敗残兵部隊がやって来て、偽輸送隊に襲い掛かってきた。

そして紫苑は秋蘭に対し

「さて夏侯淵さん、一度お手合せ願えますでしょうか？」

「ああ、あなたの名は…」

「私の名前は、北郷紫苑と言います、以後よろしくお願いしますわ」

紫苑が自己紹介すると秋蘭は少し驚き

「あなたが天の御遣いの第一夫人ですか、しかしあなたの強さは本物みたいだ、遠慮なくいかせていただく」

と言って、現在、黄巾党のスタイルをしているので、念のため、普段の使用している餓狼爪を持参せず、今、所持している槍を突いていった。

同じく紫苑も颶鵬を所持せずに、同じく槍で応戦した。

2人とも弓矢にかけては、超一流であるが、使い慣れていない槍や刀を使わせても、さすがに一流の武将である。

特に紫苑は、一刀の世界に行ってから、修行したおかげで、接近戦の能力も上がり、今では接近戦でも翠や星と互角の力を持つようになっていた。

そして時間が経つにつれ、紫苑の方が押し気味に戦っていたが、城から応援の兵が見えてきたので、紫苑は、秋蘭に

「そろそろ、敵が来ましたので、これで兵を引かせて貰いますわ、あとよろしくお願いね」

何か買い物に行くみたいな気軽さで紫苑は兵を引いたのだが、実際に戦った秋蘭は

「向こうは、まだまだ余裕がありそうだったな…、ひょっとしたら姉者や私より上かもしれんぞ…」

まだ力を隠していそうな紫苑の力量に驚く秋蘭であった。

そして秋蘭らは、うまく敵軍と合流、城内に潜入、紫苑も援軍に来た、一刀たちと合流して、陣に戻った。

そして夜、夜陰に乗じて、討伐軍は城を包囲したが、敵は未だに気付かず、そして城からの蜂起を待つのであった。

そして、一刀たちが城近くで、潜入部隊の蜂起を待っていると、翠が落ち着きなく、そわそわしていたので、一刀が翠が蒲公英のことを心配していると思い、

「翠、蒲公英の心配は分かるが、お前が落ち着きが無かったら、兵にも影響するから落ち着け」

と言って、一刀が翠の頭を撫でると、翠は顔を赤らめて

「ご主人様、分かったから、逆にこんな姿を見られたら恥ずかしいから止めてくれよ」

先程比べ、多少落ち着いたので、一刀は撫でるのを止めて、紫苑に

「まだ動きはないか？」

「残念ながら…、そろそろ動きはあるとは思うのですが…」

と言っていると、璃々が

「ご主人様、お母さん、あれを」

と城の方を指差すと、城内から黒煙が上がっていた。

それを見て、一刀は全員に突撃準備をさせ、門を開くのを待ち構えていた。

門が開放されると一刀は、全軍に突撃命令を下し、そして後方に朱里を残していった。

城内に突入すると、門近くに蒲公英や鈴々が居り、一刀が

「大丈夫か？」

「これくらい、平気だよ」

「相手が弱いから、大丈夫なのだ」

と再び掃討戦に移り、一刀たちも掃討戦に移った、敵は、敵兵がいないと思われている桃香がいる東門に逃走を計ったが、雛里の策で、すでに隠れて待ち構えいた愛紗や凪たちの手で敵兵を次々と討ち取ったり、捕虜として行った。

そして曹操軍が本殿に突入して、張角らを討ち取った話が伝わってきた。

すると、紫苑と星が陣に戻ってきたが、紫苑が真剣な顔つきで一刀に

「星ちゃんが、凄い情報を持って帰って来ましたわ」

と言うと、一刀は付近にいた兵に人払いを命じ、そして後方に待機している朱里と翠を陣に来るように伝えた。

しばらくすると、2人が陣に来て、星が皆に

「やはり、主が言っていましたように、曹操と夏侯淵が張角らを捕らえ、そして先に殺害した張角らの衛兵を張角の首として替え玉にし、それで討ち取った形にしていました、そして張角らを侍女として保護、周りを厳重警戒にして自分の陣に連れて行きましたぞ」

それを聞いた一刀は

「星、よく分かったな…」

「何、先の軍議で曹操にそのような動きがあるかもしれないと聞いていましたから、あわよくば、先に本殿に侵入して張角を捕らえようとしましたが、残念ながら、先に夏侯淵に張角を捕らえてしまったので、気配を消して、見ていたのですよ」

すると紫苑が

「まあ、よく気付かれなかったわね」

「ああ、本殿の窓の外から見ていましたので、さすがに気付かれずに済みましたよ」

一刀は星の身軽さに感心していたが、翠が

「しかし、曹操が張角を捕らえて、何の目的で保護するのかは分からないけどよ、このまま黙っておくのも何か気分悪いな」

「しかし、翠ちゃん、せっかく乱が治まるかもしれないのに、事を荒立てるのもどうかしら？」

「ふむ、主に朱里よ、良い案はござらぬか」

一刀が翠、紫苑、星の意見を聞いて

「確かに、翠の言うとおり、曹操にこのままにさせておくのも、こちらにとってはあまりいいことではないかもしれないな、かと言って紫苑の言うとおり、事を荒立てることはあまりしたくはないから、朱里、何か曹操に対して、このことで牽制できることはないか？」

一刀は朱里に意見を求めると朱里は少し考え、

「ならば、いい案があります、皆さん、側に寄って下さい」

と言って、皆が朱里の周りに集まり、聞こえように密談を行い、そして朱里の意見を聞くと

「それはいいな、これでいこう」

「朱里ちゃんも駆け引き上手わね」

「朱里もなかなかやるな」

「これで曹操がどう出るか見物だぜ」

皆、朱里の意見に賛成したので、一刀は朱里にその準備を進めるように指示した。

～華琳視点～

今回の戦功で、更に勢力を拡大させることができ、そしてほとぼりが冷めた後に張角らを利用し、人を集めることができる。

今回参戦していた孫策や劉備も今後、勢力を拡大するだろうし、そしてあの北郷もいる馬騰にも注意が必要だわ。

と華琳が考えていると、春蘭が現れ、

「華琳様、例の北郷から、戦勝祝いが贈られてきましたが」

それを聞いた華琳が些か幻滅したようで

「ふ～ん、何か大きな箱のようね、私に張角を討ち取ったから、媚びているのかしら？まあ、いいわ、どんな物が贈られてきたか、確認しましょう。もし変な物だったら笑ってやるわ、春蘭開けてみなさい」

と言って春蘭に箱を開けさすと中には、３つの長弓が入っていた。

これを見た春蘭が

「な、何だ、これは!?あいつら、華琳様を舐めているか!」

と大声で叫ぶと華琳や秋蘭、桂花が

「春蘭、どうしたの何、怒っているのよ」

「姉者どうした?」

「脳筋がそんなに大声出したら、びっくりするでしょう!?」

3人が箱に近寄り、中身を見ると

「「「!」」」

驚きの表情を見せた。

そして秋蘭が

「華琳様、これはどういう意味でしょうか？」

「分からないわ、桂花分かるかしら？」

華琳は、桂花にこの問いについて聞いてみると

「……華琳様、これは私の推測ですが、あいつらに張角らを匿っていることがばれているかもしれません」

「華琳様、長弓を漢字にしたら、どう読むことができますか？」

「…張になるわね」

「そして、それが3つ贈られたのは？」

と桂花が言うと華琳も気付き、

「張角ら3姉妹を指しているのね！」

「そうです華琳様、これはあいつらが張角を匿っているのを知っていると警告してきたのよ！」

「しかし、なぜ北郷たちは何でこんな手段を使って警告してきたのだ？もし分かっているのだったら、皆が集まる最後の軍議にでも追及はできるだろう？」

秋蘭が桂花に言うも

「私にも分からないよ！」

桂花は逆に切れてしまい、それを聞いていた春蘭と口論になりそうになったが秋蘭に止められた。

そして華琳は、少し考えた後、

「仕方がないわ、秋蘭、桂花、北郷の陣に行って、戦勝祝いのお礼の挨拶に行くから準備しなさい」

と言われると、さすがに桂花も

「クッ…申し訳ありません華琳様、今のところ、あいつらの意図が分からないですし、現時点では、向こうに主導権を取られている状態ですから、策を出すことが出来ません」

悔しそうに桂花が呟いた。

「仕方がないわ、桂花、まさか私も張角らを匿っているのがばれていると思わなかったわ、まずは向こうの出方を伺いましょう」

華琳の陣は、とても勝利者とは思えないほど暗い雰囲気になってしまった。

華琳らは、一刀の陣に訪れ、謁見することなり、一刀の要望で、２人きりに話し合いすることとしたが、これに翠が反対したが、紫苑が翠を説得して、２人きりの話し合いにこぎ付けた。

華琳が一刀に開口一番

「戦勝祝いありがとうね、礼を言うわ、でもあの祝いの品はどういう意味かしら」

華琳が一刀に尋ねるも

「それは想像にお任せするよ、曹操さん。こちらとしては、これ以上事を荒立てるつもりはないし、曹操さんも彼女たちをそのままにして、外には出さないでしょう？」

「もちろんよ、それで何か私に要求でもあるのかしら？」

「まあ、今のところは何もないね、要求するものも何もないしね」

「そうは行かないわよ、私は、どんな相手でも借りを作るのは嫌なのよ」

「分かった、でも今のところ正直、何も要求する物が何もないから、取り敢えず、今後、こちらから、要求する物ができたら、その時、この借りを返して貰うよ」

と一刀が言うと華琳も

「仕方がないわね、今回のことは礼を言うわ」

華琳は無言で頭を下げた。

そして、華琳は、一刀を悔しそうに睨み付け

「この借りは、きっと返させて貰うわ、秋蘭帰るわよ！」

と足早に一刀の陣から退出したのであった。

会談が終わって、一刀は

（「完全に怒っていたな、しかし、前回は左慈らの介入で、華琳とは完全に決着をつけられなかったが、今回は完全に決着を付けたいが…」）

と思っていると華琳が立ち去ったあと、皆が一刀のところに集まり、会談の結果を説明すると、朱里が

「ご主人様、上手く誘導できましたね」

「ああ、朱里が言っていたとおり、曹操は自分に誇りを持っているから、早くこの借りを返したいから、要望を聞いてきたが、正直今のところ、欲しい物は何もないからね」

これは朱里の策で、華琳に対して、今後の主導権を握るために、予め一刀らと話し合った時に流れを決めていたのであった。

「彼女は自ら、覇王を名乗るだけありますから、この借りはデカいですね、そして彼女の性格から、これを反故はしないでしょう」

紫苑が答えると、一刀が

「まあ、このことはまた追々考えよう、また何かの時に借りを返して貰ったらいいだろう」

「それにこれで、一応乱が治まったことだし、今日は皆に慰労の意味も込めて、祝勝会の準備をしてくれ」

と命じると、翠は大喜びで兵士に命じて準備させ、そして嵐の祝勝会に突入したのであった…。

第１９話（前書き）

少し短いです。

更に都合主義になっています。

第19話

ようやく、黄巾党の本隊を打ち破り、一部の見張り兵を残し、祝勝会をやっているのだが、やはり、皆、ようやく戦が終わって嬉しいのか、よく飲んで食べてはしゃいでいた。

璃々は、蒲公英と朱里と3人で仲良くやっており、翠は食事に夢中で、星は霞と酒談議に花が咲いていた。

そして一刀と紫苑と2人で静かに飲んでいた。

「やれやれ、やっと一段落ついたか」

「お疲れ様でした、ご主人様」

「でもこうやって、2人で酒を飲むのも久しぶりだな」

「そうですね、さすがに行軍中や戦いの時は、飲むのは控えますからね」

と言っていると星と霞がやって来て

「主、ここにいましたか」

「一刀、紫苑、一緒に飲もうや」

４人で飲みはじめたが、ところが、一刀以外の３人が酒が滅茶苦茶強く、かなりのハイペースで飲んでいた、そして皆、酔いはじめたのだが、よく見る紫苑の顔がかなり官能的な表情になってきていた。これは一刀が結婚してから、気付いたのだが、紫苑は酒に酔い、この表情になると、普段以上にあっちの方が強くなり、一刀が次の日の朝、太陽が普段と違う色見えてしまうほど、絞り取られてしまうのである。

それを見て、一刀は身の危険を感じたが、ところが今日は、これに星が絡み付き、

「さて、主、今日の褒美を頂きたいのですが？」

「あら、星ちゃん、正式にご褒美を貰うのだったら、涼州に帰ってから言わないと」

星の褒美の要望に、紫苑は分かって牽制したので、星は

「紫苑、よいではないか、今日1日、主を貸してくれぬか」

「あら、私も長い間、戦のせいで空いていたから、譲れないわよ」

と言っていたが、この会話が全て一刀に聞いていたので、この場から逃げようとしたが、するとすでにぐでんぐでんに酔っている蒲公英と朱里がやって来て

「ご主人様～、星お姉さんだけ、贔屓しないでよ～」

「しょうですよ～、私たちを無視しないくださいぃょ～」

この2人は、すでに出来上がっており、璃々はこの2人に潰されて、すでに寝てしまっていた。

そして更に

「私だけ、のけ者にしないでくれよ～」

と何故か泣き上戸になっている翠もやって来て、一刀は逃げるに逃げられない状態になっていた。

それを見ていた霞が

「ハハハ、あんたら面白いな～、それやったら酒の飲み比べで勝負

したらどないや」

提案すると、紫苑や星はもちろん受け、すでに酔っている翠や蒲公英、朱里までが、勝負を受けたが、そんな中、一刀は

（「これって俺の意見、全く聞いてくれてないよな」）

とぼやきつつも、すでに諦めモードに入っていた。

そして勝負して、しばらくすると朱里が

「はわわ～、ご主人が5人くらいいましゅ～」

と言って酔い潰れ、そしてその後に蒲公英が

「ZZZ～～～」

疲れと酒のダブルパンチでダウンしてしまった。

翠にあっては、星の言葉の羞恥心プレイと酔いが回ってしまい、これもダウンしてしまった。

さすがにこれを見かねた一刀と霞は、璃々も含めた４人を取り敢えず、寝台まで運びに行った。

そして紫苑と星は、そんな中、勝負を続行していたが、

「なあ紫苑、一つ提案があるのだが？」

「あら、乗ってもいいわよ？」

「まだ何も言っていないのだが…」

「言いたいこと分かるわよ、だから先に譲るから、終わったら呼んでね」

紫苑は笑顔で、その場を離れ璃々の様子を見に行った。

そして皆を寝かせた一刀と霞が帰ってくると、星しか居なかったので、一刀が

「紫苑なら、璃々の様子を見に行きましたが」

そしてちょっと恥ずかしい顔をしながら、星が

「主…、少しお話が…」

と声を掛けてきたので、霞が

「あ～、うちは他の者と飲んどくから、２人で行ってらしゃい～」

と冷やかしながら、その場を離れた。

そして、一刀と星は、一刀の陣幕へ移動した。

陣幕に入ると星が

「主、この乱が始まって、最初の戦いの時を覚えていますか？」

「ああ…」

「正直言って、あの時、私は戦いが終わったら、軍を離れようと思っていました、主を主君とする器ではないと」

「しかし、私を助けに来た後、主が私を叩いた時に言ってくれました、「一軍の将として失格」というあの言葉…」

「私はそれまで誇っていた武は、匹夫の勇でしか無かったことに気付きました、確か時には個人の武が必要な時はありますが、一軍の将であるべき姿は兵の事を思いやり、そして全体を見渡す視野が必要な事が分かりました」

「そして、その事に気付かされた主には大変感謝していますし、そして我が武を生涯、主に捧げると共に、我が身、我が心も主に捧げたいと思っております」

と星は思いを語った。

それを聞いた一刀は、

「こんな俺でもいいのか？」

「主、美しい花には蝶が集います、ならば私は、その集まっている蝶の中で一番になることを証明しますぞ」

それを聞いた一刀は一つため息をついて

「ダメだな俺って、星みたいなかわいい女の子にここまで言わせて、こういうことは男の俺から言わないといけないのにな」

「星、ごめんな、改めて言わせてくれ、星、大好きだ、そして気の多い俺だけどずっと一緒にいて欲しい」

と言って一刀は星の身体を抱き締め、そしてキスをした。

すると星は驚き、そして目から涙が出てきていた。

「……主、嬉しくて、涙が止まりませぬぞ……」

「星、こっちへ」

星を寝台に連れて行き、こうして2人は結ばれたのであった・・。

第２０話（前書き）

今回も短めです。

第２０話

昨夜、星と情を交わした後、一刀は、その後きっちりと紫苑の呼び出しを受けて、事情聴取の上、その後、笑顔でしっかりと絞り取られた。

そして朝になると、昨晩のことが全て璃々と翠にばれて、２人からはため息をつかれながら

「やっぱりご主人様のこれは、一種の才能か病気ね」

「このエロエロ魔神…」

２人から冷たい視線とぼやかれた上、武威に帰ったら、それぞれ１日デートと好きな物を買わされ

ることなってしまった。

そして蒲公英や朱里からは、冷たい視線を浴びてしまっていた。

ようやく最後の軍議が終わり、各軍はそれぞれの地元に帰ることとなり、一刀たちもようやく武威に帰還することができた。

そして武威に帰還すると、碧、渚、真理、馬休、馬鉄が皆の無事生還を祝い、そして久しぶりに翠たちも親子水入らずになり、束の間、平穏を味わうことができた。

しばらくして、都から今回の黄巾党討伐の恩賞が出たのだが…

一刀は最初その発言を聞いて驚きのあまり、碧に

「す…すいません、もう一度言って貰えますか？」

「だか～ら、一刀さんには、雍州と涼州の太守をやって貰うということだよ」

それを聞いた碧以外の全員が一斉に絶叫を上げていた……。

一刀が

「何で、俺が太守なのでしか、碧さんがいるでしょう！」

「そうだよ、お母様、病気も治って元気になったし、まだまだ太守もできるだろう！」

「まさか、また体調が悪くなって、だから義兄上に譲るのでは…」

「え？そうなのか母上？」

「叔母様どうなの、譲る理由を教えてよ」

と翠、馬休、馬鉄、蒲公英がそれぞれ騒ぎ出すと、碧が

「静かにしな！別に私はあれから体調が悪くなったわけではないわよ、むしろピンピンして、今からでも戦に行けるくらいだよ」

「では、どうしてご主人様に太守の座を譲ろうとされるのですか？」

紫苑が静かに碧に尋ねると碧は

「ああ、最初、今回の恩賞で、董卓から私に現在不在の雍州の太守も兼務して欲しい打診があったのさ、董卓の亡くなった母親とは戦友で、董卓はその娘なのさ」

「それで最初は断ろうしたんだが、以前に一刀さんや翠たちのお陰で、私の命を救って貰っただろう、その恩を返すには、それなりの謝儀をしないと私の器が問われ、やはり恩を返しておかないと気持

ちが悪いからね」

「だから私の命の対価の恩になると、太守の地位と言うわけで、雍州の太守を引き受けるのと同時に私の地位を譲ることを董卓に頼んだところ、まあ上手くいったわけだよ」

「これで太守の座を譲ったら、私の仕事の量も減って、ゆっくりできるってことさ」

碧はやや寂しそうな感じで説明した。

それを聞いた一刀や紫苑は、前回の世界で華琳を助け、そして謝儀として魏を吸収合併した場面を思い出し、

（「ここまで礼を尽くされたら、断るのは失礼だな」）

一刀と紫苑は観念したかのように決意し、一刀が本来の後継者でもある翠に目にいったが、翠は

「私は、もうご主人様の妻さ、ご主人に付いていくよ」

「俺たちも義兄上についていきます」

「兄貴に同じく」

「蒲公英もついていくよ～」

と馬休、馬鉄、蒲公英も同意し、そして

「もちろん、私もついていくよ～」

「主、私もお忘れなく」

「私も頑張って、付いて行きましゅ」

「何か面白くなってきたね、もちろん私も付いて行くからね」

「私も一刀さんに付いていきますから」

璃々、星、朱里、真理、渚も皆、同意をした。

皆の賛成意見を聞いて、一刀は碧を寂しい思いをさせないため

「では、一つだけ引き受けるのに条件があるのですが、碧さん、太守の座を譲っても引退はさせませんよ、相談役兼武官で仕事はして貰うのが、条件ですが、どうでしょうか？」

一刀が碧に言うと、翠も

「お母様、まだまだ戦に出れるくらい元気があるんだろう？また戦で暴れ回る姿を私たちに見せてくれよ」

とハッパを掛けるような口調で言うと碧が

「ふん！あんたが私にそんな口叩くのは１０年早いよ、よし分かったよ、明日からでもあんたら全員、しごくから覚悟しな！」

元気な口調になり、そして一刀が

「碧さん、ありがとうございます、碧さんの決意を無にしないよう、頑張っていきたいと思います」

「皆にお願いがある、俺が出来る事は自ずと限界がある、皆の協力が無かったら、国に成り立たない、力不足の俺だけど、皆、助けてくれるか？」

それを聞いて、皆が

「「「「「御意！」」」」」

と答え、これにより一刀が、正式に当主になった。

そして、今後の方針を決めることになったのだが、一刀は、新しく統治する雍州に治世に専念するため、現在の拠点を武威から長安に移す考えを示すと朱里と真理からは、

「そうですね、やはり人の集まりや農業など、色んな面でお金の集まりが違いますから」

「あと情報を集めるには、やっぱり武威は遠いから、そういう面で拠点を変えてくれた方が助かるけど」

2人は賛成し、そして碧は

「私たちは生まれ育ったこの地を離れるのは、辛いけどさ、しかし雍州を治めるには、この人数でも足りないくらいだから、私たちも付いていくよ」

一刀の案に賛成した。この意見に皆、賛成をしたことから、拠点を長安にすることに決めたのであった。

そして一刀たちは、1月後に、長安に向けて出発したのであった。

第２１話（前書き）

幕間的に近い内容ですが・・

第２１話

一刀たちが、長安に来て、すでに3月が経過していた。

一刀たちは、まず内政や開墾、そして商業に力を入れ始めた。

その結果、内政運営も上手くいき起動に乗り始めたそんな時に一刀は一部の人間を集め、会議を開いた。

因みに出席者は、碧、紫苑、璃々、翠、星、朱里、真里である。

そんな中、一刀から出た話が反董卓連合の事だ。

紫苑や璃々は、前回の反董卓連合の時は参戦していないが、その時の話や現代に行ってからの本史の歴史での知識はあるが、他のメンバーは半信半疑で聞いている状態だ。

「今回は、どういう理由で発生するか分からないが、それに備えて準備をした方がいいと思う」

一刀が言うと、それを聞いた碧が

「もしそれが起きるとしてだ、一刀さんはどうするつもり？」

「今の状態では、判断はできないので、だからその時に備えて、どちらでも動けるよう準備はしておくつもりです。取り敢えず情報が必要になってくるから、真理すまないが、洛陽、袁紹、曹操、袁術、孫策、劉備、公孫讃のところを中心に物見を送ってくれるか？」

「分かった、あと羌からも馬の買い入れも増やすようにするわ」

「ああ頼む、それと朱里、以前言っていた新しい武器の開発を出来るだけ早く急がせてくれるか」

「分かりました」

2人に指示を出すと、翠が

「ご主人様が開発してくれた鐙は、全部の馬に行き渡ったから、こっちの方は問題ないよ」

「主、新兵の訓練も進んで問題ないですぞ」

「あと弓騎隊の方も問題ないよ、いつでも出陣は出来るからね」

そして星や弓騎隊の補佐を勤める璃々がそれぞれ説明した。

そして当面は、密か戦の準備をしながら、内政充実を図ることで会議を終えたが、会議が終わると

紫苑が一刀のところに来て

「ご主人様、もし反董卓連合の参戦の命が来たら、どうされますか？」

「一応、最終的には情報を聞いて判断するつもりだ」

「分かりました。でもご主人様、私と璃々、翠ちゃん、星ちゃん４人は、何があってもご主人様に付いて行きますからね」

「ああ、分かっているよ、４人を泣かせないようにしないと」

と言って2人は軽くキスをした。

そして会議を終えて、２人は別れて、一刀は執務室に行こうとしたところ、中庭に蒲公英がいた。

しかし、よく見ると蒲公英は泣いていた……。

一刀が蒲公英に近寄ろうとしたら、蒲公英は一刀に気付き、涙を拭いて、何も無かったかのように

振る舞って

「どうしたのご主人様？」

「いや、それは俺が言う言葉なんだけど…、蒲公英何かあったのか？」

一刀が蒲公英に問い掛けるが、

「何もないから、大丈夫だよ」

「何も無かったら、泣くのはおかしいだろ、俺に出来ることがあれば、話を聞いてやるから、言ってみたらどうだ？」

そうすると蒲公英は意を決したかのように

「じゃ一つ聞くけど、ご主人様は蒲公英の事、どう思っているの？」

一刀に聞いたが、ここで一刀は蒲公英の決意に気付かず・・・

「そうだな、蒲公英はかわいい妹だと思っているぞ」

と思ったことを素直に答えたが、蒲公英は内心

（「やっぱりご主人様は、私を1人の女としてくれないんだ……」）

「ご主人様のバカ～～～」

と蒲公英は大声で叫びながら走り去った……。

そして一刀は走り去る蒲公英をただ眺めるしかなかったのである。

～蒲公英視点～

「はあ～～」

「ご主人様は、私のことをどう思っているのかな…」

「私が積極的に言っても相手にしてくれず、先に星お姉様が、ご主人様と結ばれて……」

「私を女として見てくれていないのかな……」

「何か置いてきぼりになった気分……」

「段々、考えが悪い方に考えてしまい、そして涙が止まらなくなってしまった……」

「そして泣いているところをご主人様に見られてしまった」

「最初はこんなところを見られて、恥ずかしいと思っていたけど、ご主人様が、話を聞いてくれると言ってくれるので、思い切って、ご主人様に蒲公英のことをどう思っているのか、聞いてみたけど……」

「やっぱりご主人様は、私のことを女として見てくれていなかったのだ……」

そして

「ご主人様のバカ～～～～」

私は叫んでいた……。

蒲公英視点終了

一刀は、その後執務室に行くと部屋には、璃々と星がいた、そして星が一刀がやや元気がないのに気付き

「主、どうなされた？」

聞かれたので、一刀は先程のことを2人に話をしたら

「ご主人様、乙女心が分かってないね～」

「主、それはないですぞ」

それぞれ批判され、2人は

「蒲公英の気持ち、璃々分かるな～、ご主人様、前にいた世界の時に私がご主人様に積極的に行っていたのを覚えているでしょう？ご主人様、周りの目とかを気にしていたから、私に手を出してくれなかったけど、愛している人が相手にしてくれなかったら、結構、落ち込むからね～」

「主、以前から蒲公英は、本気で主の事を好いていたのですぞ、それに気付かれなかったのですか？」

鋭い指摘を2人から言われると、一刀は

「確かに蒲公英が俺を好きだったのは知っていたけど……」

「今の居心地のいい関係を壊したく無かったんだろうな……」

と素直に心境を語った。

そして2人は

「でもね、ご主人様、蒲公英だってもう子供じゃないから、1人の女性として扱わないと」

「そうですぞ、主、でも蒲公英を1人の女性として好いておられるか？」

星から言われると一刀は

「ああ、それは好きだと言えるけど……、しかし良いのか、これ以上増えても」

「お母さんから言われているから、もう覚悟はできているけど、このお礼は必ずして貰うからね～」

「そうですな、私はお礼に極上メンマを1壺頂きますかな」

「そうそう、恐らく蒲公英はお気に入りの場所である、森の中の小川に居ると思いますぞ」

「ありがとう、璃々、星、2人とも愛しているぞ」

と言いながら、2人に頬にキスをしていった。そして

「ご主人様、（主）は、こういう時は上手なんだから……」

と2人とも顔を赤らめていた。

そして一刀が森の中の小川に駆けつけたが、蒲公英の姿が無かったが、人の気配を感じたので、一刀は蒲公英を誘き寄せるようと考え、叫んだのが……

「俺は蒲公英が好きだーーそして俺の事が好きで、俺の妻になってくれる俺だけの蒲公英はいるかーー」

「ここにいるぞーー」

「あ……ばれた」

顔を赤らめて、涙目になっている蒲公英が勢いよく草むらから出てきた。

そして一刀は蒲公英の元に駆け寄り、そして優しく抱き締め

「蒲公英ごめんな、今まで蒲公英が俺の事を好きだと分かっていたのに、俺が返事する勇気が無く、それに応えることが出来なくて……」

抱き締めていた腕を強くすると、蒲公英は再び泣き始めて

「ご主人様が私を好きって言ってくれたのは、嬉しいけど……ご主人様は、あんなこと言った蒲公英に怒っていないの？」

「馬鹿だな、蒲公英、何で怒るんだ、悪いのは俺なんだからさ」

「でも……」

そして一刀は、抱き締めていた腕を離し、そして視線を蒲公英の高さに合わせ

「蒲公英聞いて欲しい、俺はお前が好きだ、そしてその太陽のような笑顔と明るさで、１人の女性して、俺を支えて欲しいんだ」

蒲公英は一刀のその言葉を聞いて、

「……ご主人様、嬉しいよ、私、何度生まれ変わっても、ご主人様の側にいて、ご主人様のために命賭けるからね」

と言って、自らキスをしてきて、そして一つになった……。

そして一刀が蒲公英を部屋に連れて帰ってきた時には、紫苑、璃々、翠、星が部屋で酒を持って待ち構えていた。

そして、皆から酒のつまみ代わりに、今回のことについて事情聴取をされてしまい、挙げ句の果てには、蒲公英が酔った勢いで、もう一度プロポーズの場面を再現をせがまれ、それをやると皆から冷やかされてしまった……。

しかし一刀は、４人とも蒲公英のことを歓迎してくれているので安心したのであった・・。

第２２話（前書き）

ようやく反董卓連合編に突入します。

第２２話

一刀と蒲公英が結ばれてから、しばらくして袁紹から手紙が送られてきた。

そう、反董卓連合の参加要請の手紙であった・・

その手紙を見て、一刀は全員に集合を掛け、今後の決意を決めるつもりであった。

～衆議場～

一刀からの要請を受け、全員集まり、袁紹からの手紙の内容を披露

したが、その内容は

「董卓は、陛下を蔑ろにして国政を壟断、そして民を虐げている」

とのことであった。

そして、一刀は情報を担当している真里にその手紙が真実かどうか確認すると、真里は

「その話は事実ではないわね、どちらかと言えば董卓は巻き込まれてという感じかな」

と説明すると、事実は

元々は大将軍・何進と十常侍・張譲との勢力争い中に、時の帝、霊帝が死去。

その最中、何進が張譲らの策で暗殺され、何皇后や弁皇子を暗殺したので、それを聞いた董卓らが張譲らを捕え処刑した。

そして相国に就任して、国政を立て直しているところ、袁紹が相国に就任した董卓に嫉妬し、今回の手紙の内容に至ったと説明した。

すると翠が

「じゃ、民を虐げていると言う話も・・」

「事実ではないわよ、むしろ以前より民は安定した生活を送っているわよ」

「じゃ、私たち…」

翠が言うとすると途中で碧が

「ところがだ、この話を聞いてだ、大半以上の諸侯が連合側に参加する話だ」

説明すると、怪訝そうな顔をして翠が

「お母様、どういうことだ?」

「つまり大半の諸侯の連中は、自分たちの勢力拡大の機会で、話の事実の有無は関係なしに連合に参加しているということだ、中にはこの事実を知って、敢えて連合に参加している者もいると思うけどな・・」

説明すると、皆、考える顔をして沈黙状態になってしまった・・。

そして星が一刀に

「主は、今回のことをどうお考えですかな」

話を振ると、一刀は全員の顔を見回して、静かに

「俺の考えは・・董卓に付こうと思っている。理由は、董卓は民のために善政を引いている、ところが袁紹は自分の欲の為に董卓を討伐しようとしている、他の諸侯はいざ知らず、俺はそんな卑怯なことはしたくない」

と言い切ると、朱里が

「ご主人様、その考えはご立派ですが、もし私たちは董卓側につくと、殆どの諸侯を敵に回してしまい、場合によって、私たちは滅びてしまいますけど、それでもいいのですか」

朱里はいい加減な回答では許さない雰囲気を出したが、一刀は一言

「…義を見て為さざるは勇なき也」

「・・・」

「董卓が正しいことだと分かっているのに、これを強い者に流されたり、屈したりして、正さないのは勇気のない臆病者になってしまう。俺はそんな事をしたくないからだよ、朱里…」

一刀が説明したが、更に朱里が

「それは分かります、しかしそれが…」

納得できないのか感情的になって、何か言おうとしたが真理が机を叩いて、

「朱里いい加減にしな！一刀さんが民の為に董卓に付くと言っているだろ、お前も民の為に尽くしたいと言っているのに、軍師が感情的になってどうする！少しは頭を冷やせ！」

と言われると朱里はシュンとなり大人しくなってしまった…。

そして碧が

「じゃ私が聞くけどさ、一刀さんの言いたいことは分かったわ。でも董卓に付くには勝算あるのかしら、無謀な戦いだったら、私は賛成できないわ」

碧が言うと一刀が

「多分、そういうと思ったので、一応こんな物を作ったのだけど見てくれるかな」

一刀は何か書かれた紙と木簡を皆の前に差し出し、皆に見せると歴史物の知識がある紫苑と璃々以外は皆、驚いていた。

そして星が

「主、この作戦でしたら勝利を望めないのでは？」

「ああこの策は、勝利を前提していないが、目的は達成できると思うがな」

「目的？」

「そう、目的は董卓たちの命を救うこと。この戦いでこの国は分裂状態になり群雄割拠の時代になる、こんな輩みたいな戦いに董卓の命を失うなんて間違っている、と言って俺達が董卓軍と組んでも連合軍に勝利を得ることは難しい、だからこの作戦を作ったのだが・・皆、どうだろうか？」

「私は、ご主人様がどんな決断をしようとも、一生付いて行きますわ」

「私もご主人様とお母さんに付いていくよ」

「わ・・私も勿論ご主人様と一緒付いて行くからな」

「おや翠、何赤くなっているのだ。主、私も一緒付いて行きますぞ」

「蒲公英も勿論付いて行くぞ～」

と言えば、

「やれやれ、この馬鹿娘どもは・・、しかし「義」のためか・・悪くないね、私も行くよ」

「まずは姉貴の暴走を止めないとな・・」

「これだけの将がいて俺出番あるかな?」

「私も腕が鳴りますわ」

と碧、馬休、馬鉄、渚が賛成し、そして

「これだけ策を立てて、私たちを失業させる気なの？」

「（涙目で）グスン・・、申し訳ありません、私、どうかしていました・・、勿論賛成します」

と真理、朱里の軍師も賛成し、これで軍議一決し、董卓軍との同盟を結ぶため、直ちに洛陽に差し向けた。

～朱里視点～

「私の心の中は、何かもやもやしていた・・」

「ご主人様は、普段通り、私に優しく接してくれているが、先に星さんや蒲公英ちゃんと結ばれたと聞いた」

「私も2人と一緒にご主人様の世界で言う「キス」をして貰ったが、それ以降、何もして貰えず、

2人に先に越されてしまった・・」

「そして何か嫉妬心が出て来てしまって、ご主人様が言っていることが正しいのに…

私に構って欲しくて…、感情的になってしまって、真理お姉さんに怒られてしまった…」

「私は軍師失格だ、…ご主人様に嫌われてしまう…、どうしょう…」

そして軍議の途中から涙目になってしまった…

朱里視点終了

そして軍議が終わり、紫苑と真理が

「今日の朱里ちゃん、様子がおかしかったですわね」

「あ～多分、朱里のやつ、一刀さんに焼もちをやいていたのと思うわ。あいつ星や蒲公英に一刀さんのことで先に越されて、それで何で私はという気持ちになったのと思うけど？」

と言われると一刀も今回の朱里の様子がおかしい事について納得した。

すると紫苑が

「ご主人様どうされます？」

「このまま放っておくわけには行かないだろう？」

「そうですね、朱里ちゃんもご主人様のことが好きですから、ちゃんと責任を取って上げて下さいね」

「すまんな紫苑」

「ご主人様、星ちゃんの言葉ではないですけど、美しい花に蝶が集まるのは当たり前ですわ、後はその蝶の中で最も愛することを証明するだけですから、もっとも私は誰にも負けるつもりはありませんけど・・」

紫苑はそう言いながら微笑を浮かべていた。

それを聞いていた真理は

「すごいな・・紫苑は、私には真似できそうにないわ・・」

と紫苑の懐の大きさに驚きを見せていた・・。

そして一刀は朱里の部屋の前に行き、

「朱里居るか」

「・・はい」

中から声が聞こえると、一刀は部屋に入った。

朱里は一刀を見るなり

「ご…ご主人様、さっきは申し訳ありませんでした」

「何で謝るんだ朱里、さっきの意見も俺たちのことを思って言ってくれたのだろう？」

「い、いいえ、さっきの私は軍師の役目を忘れ、私の不満をご主人様にぶつけてしまいました…こんな私、軍師失格ですよね・・」

「ハハハ、朱里が軍師失格だったら、殆どの軍師が失格で誰もいなくなるよ」

そして一刀は朱里の頭を撫でながら

「朱里、ごめんな、お前のことを気付いていなくて、もう少し、俺が気付いていたらこんな思いをさせずに済んだのに…」

「いいえ…、私が悪いのです、家臣の身分でありながらご主人様に嫉妬するなんて…ご主人様、私に罰を与えて下さい…」

朱里は責任を感じて再び涙目になっていた。

「罰って…、別に悪いことをした訳ではないから、いらないけどな…？」

「そうは行きません、軍議の場で公私混同をしてしまいました、だからけじめを付けるために必要なのです」

と朱里が言い張るので、一刀は仕方がない顔になり、

「じゃ朱里、君への罰だけど……」

「…俺が死ぬまで、必ず側にいることを命ずるよ」

恥ずかしそうに一刀が言うと、朱里は

「……へ？へ？はわわーーー」

とパニック状態になったので、一刀は朱里に深呼吸をさせて落ち着かせた。

そして朱里は

「ご、ご主人様、何言っているのでしゅか！」

「うん？その言葉の通りだけど、やっぱり嫌？」

「そ、そうではありません…、軍師失格の私にこのようなことを言って貰って…」

「あ～、朱里、軍師だからって完璧な人間っていないんだからさ、そんなこと言っていたら、俺なんて女の子にだらしない君主で失格になってしまうぜ」

と軽口を叩くと朱里もその言葉に気を取り直したのか

「フフフ、それもそうですね、それにご主人様も公私混同させてますから、罰を与えないと駄目です」

「そ…それで、ご…ご主人様、罰として今日1日、私と一緒にいて下さしゃい」

朱里は、カミカミながら言うと一刀は

「分かりました、我が軍師殿、仰せのままに…」

と笑顔で言うと、一晩2人で過ごした。

そして翌朝には、今までやや自信なさそう軍師から、気持ちが吹っ切れ、何か自信が付いた軍師が誕生していた…。

第２３話

董卓に味方をすることにしたが、一刀だが、朱里と真理の指示で、連合軍を油断させる一環として「羌に不審な動きがあり、連合には参加できない」と書状を袁紹に送らせて、こちらの動きを油断させるようにした。

一刀と結ばれてからやる気を出した朱里は、先の一刀の策を修正を加えたが、その策は一刀や真理を驚かせ、朱里の策も追加され、今回の作戦に加えることにした。

そして予め、この日に備え準備もしていたので、兵を揃えた５日後には、７万の兵を引きつれ、洛陽に向かった。

～洛陽～

洛陽に到着した一刀たちは、早速、董卓軍の首脳会議を持ち、早々に自己紹介として、後の方針を打ち合わせることになった。

董卓軍の首脳陣は、月、詠、恋、霞、華雄、音々音

一方、一刀たちは将全員が出席していた。

自己紹介が終わると月が、

「北郷さん、今回、私たちに味方していただいてありがとうございます、…でもなぜ私たちに味方なされたのですか？」

「そうね、あんたたちが味方してくれるのは有難いけど、その真意を聞きたいわね」

と詠が月の言葉を繋いだ。

すると朱里が、

「代わりに私が答えさせていただきます。ご主人様は私が董卓軍に付く危険性について意見をしましたが、ご主人様は、董卓さんが悪政を引いていないことが分かり、そして「義を見て為さざるは勇なき也」の信念を持って、これを退けて、董卓軍に付くことを決意されました、そして私たち将もご主人様の決意に同意し、この場にやって来ました」

と説明した。

すると霞が

「はぁ？一刀、それだけの為にあんたら私たちに味方してくれるんか？」

「そうだよ霞、しかしそれだけと言うのは酷いな」

「それはそうやろ、周りが敵ばかりの状態でうちらに味方になる物好きは普通おらんで？しかしそんなあんたらが、味方になってめちゃくちゃ嬉しいけどな」

「でも変わっているのは、変わっているのです」

「しかし私は気にいったぞ、北郷」

霞に続き、音々音や華雄が言うと、すると恋が

「……変わっている、でも月助けに来た、信用できる……」

「……恋」

「それ真名だけど、教えていいのか？」

（コクコク）と恋は首を頷いていた。

「でも、本当に裏切らないでしょうね」

「あのな賈駆、敵になるのでだったら、最初から向こうに行っているぞ、俺を見損なうなよ」

「そうよ詠ちゃん、せっかく来てくれたのに、そんなこと言うのは失礼だよ」

「……う、ごめんなさい」

「北郷さん、詠ちゃんが失礼なこと言って申し訳ありません」

「いいよ、気にしなくても」

「それで北郷さん、私の真名を受け取って欲しいのですが……」

「え？」

「私が何かお礼ができると言えば、これくらいのことしか出来ませんので、どうか受け取って貰えますでしょうか……」

「……分かった、董卓の気持ち、ありがたく受け取るよ」

「私の真名は、月と言います、皆さんもそう呼んで下さい」

「はぁ～、月が信じるのだったら、ボクもあんたたちを信じるわ、ボクは詠、よろしく頼むわ」

「この間不在の人も居てるから、もう一度言うておくわ、ウチは霞よろしゅう」

「恋殿が信用するので、私も教えますぞ、私は音々音（ねね）と言いますぞ」

「私は華雄だ、真名がないがよろしく頼む」

「では、俺は真名がないので一刀と呼んでくれたらいいよ」

「私も真名がないから紫苑と呼んで下さい」

「私は璃々って、呼んでね～」

と言い出すと、全員真名を交換した。

そして朱里が、

「それで詠さん、今後の作戦なのですが、今のところ、どう考えてますか？」

朱里から聞かれると詠は、ため息を出しながら

「正直言うと、あんたたちが来るまで、私たちに逃げ場無しで、と？水関と虎牢関で防戦するしか手がなかったわ……」

苦悩の表情を出すと、朱里が

「では取り敢えず、私たちが考えた作戦なのですが…」

朱里は詠に作戦の書いた紙と木かんを渡すと詠は

「……何これ！？」

すると恋以外の董卓軍の将がそれを見ると

「ハハハ、面白い作戦やん～」

「うむ、いい作戦ではないか、私たちも武の奮いがいがあるわ」

「恋殿も喜びますぞ～」

と霞と華雄と音々音は喜び、月は

「これ本当にいいのですか…？」

と心配になっていた。

そして詠が

「これを見て大体分かったけど、何で洛陽に守備兵3千しか置かないのよ！」

切れた口調で言うと、朱里が

「では一つ聞きますが、今回総大将の袁紹さんの性格分かりますか？」

「はあ？それは傲慢で自己権欲が高く、馬鹿と言うところじゃないの？」

「はい、そうです」

「だからこそ、洛陽を手薄にすることができるのです」

「分からないわね…」

「洛陽を手薄することにより、こちらに３つの利点があります」

「1つ目は、洛陽の民を戦火から免れます」

「2つ目は、洛陽の守備兵を？水関や虎牢関の守備に充てることができます」

「そして3つ目ですが、洛陽に兵3千しか置かなくても袁紹さんの性格上、洛陽への別動隊は絶対に作りません」

「何でそんなこと言い切るのよ！」

「だから袁紹さんの性格を利用するのですよ？」

「先程、詠さんは袁紹さんの性格を言いましたよね、そんな人が、帝の救出や都への一番乗りの大手柄の役を他人に譲りますか？」

と朱里から言われると詠も冷静になり、少し考えて納得したのか

「なるほどね…、だからこそ洛陽をほぼ無防備状態するか……、袁紹の性格上、別動隊を作って他人に手柄を立てさせないわ、逆に自分が総大将として実績を作りたい、それで連合軍全軍を？水関の方に攻めさせ、そして此方で連合軍を叩くと言うわけね」

「はい、その通りです」

と朱里が答えたこの策は一刀の作戦を見て、朱里が更に付け加えた策であった。

そして真理が

「そこで、私たちは、最初の？水関でなにがなんでも膠着状態に持って行き、その間に虎牢関の土木工事等をして土木工事が終わった時点で、？水関を放棄、私たちが虎牢関で籠城している間に、月達が洛陽から避難する民を連れて虎牢関を出発、そしてあなた達が長安に着いた時点で、虎牢関も放棄して、全軍雍州に引き上げる作戦よ」

と作戦内容を言い終わると月が一刀に悲しそうな顔で

「…私たちが雍州に行っても、一刀さん達が今度逆賊になってしまいますが…」

「…月、俺たちは月に味方する時点で、それは覚悟しているよ、しかし月は民の為に必死でやっているのは、ここにいる皆が分かっている、だから卑屈になる必要はないんだ、安心して雍州に来て欲しいんだ」

そして月は一刀の言葉を聞き終えると決心したように

「ありがとうございます、では一つお願いがあります。一刀さん」

「何かな？」

「今回の戦い、全軍の総指揮を取って貰えますか？」

「月！」

詠が月の発言を止めようとするも

「詠ちゃん、一刀さんらは、自分たちの命を賭けて私たちを助けに来てくれたのよ、それに私たちの逃げ場も用意してくれている、そんな一刀さんの気持ちを報いるには、私たちも一致団結して戦わないと助からないと思うの、そのためには私たちは一刀さんの指揮下に入るのが、一番だと思うの……」

「月……」

「分かったわ……月、取り敢えずこの戦いが終わるまでは、私たちはあなたの指揮下に入る、これでいいかしら」

2人から言われると一刀は

「月、詠ありがとう、それでいいよ、まずは、この戦いを乗り切らないとな」

一刀は両軍の指揮官になることを承諾した。

そして引き続き、？水関、虎牢関などの配置する将の割り振りと連合軍の兵力について話し合った。

そして真理からの情報で、

現在、連合軍はまだ集結中で、しばらく時間は掛かり、そして兵は約２５～３０万に集まるらしい。

そしてこちらは董卓軍１０万と北郷軍７万の計１７万である

そして一刀は提案した配置は

？水関に一刀、碧、紫苑、璃々、翠、星、渚、真理、恋、霞、華雄、音々音（兵１１万）

虎関に馬鉄、蒲公英、朱里（兵３万）

洛陽に月、詠、馬休（兵３万で避難民の護衛、洛陽の守備兵も含む）

であった。

これを見た霞が一刀に

「なあ、これかなり氾水関に主力を集めすぎと違うか？」

「ああ、さっき真理が言ったように虎牢関の工事が終わるまでは、

必ずを？水関死守する必要がある、だから最初の戦いは連合軍に痛撃を加えるために撃って出て、膠着状態にしたいんだ」

「そして虎牢関はその間の工事をし、朱里には虎牢関の工事等を一任、馬鉄は朱里の工事の補助、蒲公英にあっては、関の守備と万が一、別動隊が来た時にそれを叩いて欲しい」

「「「御意！」」」

「洛陽の方は、雍州への避難民を集めて、その避難民に虎牢関の工事を手伝いに来て貰いたい、そしてその時に必ず賃金を払うことにする、そして工事が終われば、そのまま雍州に避難する段取りで進めて貰いたい、月と詠はその避難民の誘導指揮、馬休にあっては、その護衛だ」

「分かりました」

「分かったわ」

「御意！」

「そして俺たちの方は、最初霞と華雄、そして真理が先行して、？水関に入ってくれ」

「ええけど、一刀らはどないするの？」

「俺たちや恋と音々音は少し遅れて、そちらに行くが、俺たちや恋の部隊はに？水関に到着しても旗は関に出さない、ギリギリまで秘匿しておくつもりだ」

「何故なのです？」

音々音が尋ねると、一刀は

「俺たちは本来、この戦いに別の理由を付けて参加しないことを袁紹に書状を出している、そこで最初に霞と華雄に出陣して貰い、連

合軍の目を引き付けて貰う、そしたらどうなる？」

「向こうは霞たちを倒せば、関が落ちると思いますな」

「そして向こうがこちらに到着する直前に、俺たちと恋の部隊を出撃させる、向こうは本来居ないはず俺たちに驚くだろうし、更に飛将軍呂布の部隊が居たら、更に混乱するだろう、そしてその時に開戦だ」

「向こうは大軍だが、限られた場所での戦いだから、遊兵が出てくるから、十分に戦える、そしてそこで連合軍をある程度叩いておくということだ」

それを聞くと

「よっしゃー、腕が鳴るぜー」

「私の腕の見せどころですな」

「あらあら気が早いわね」

翠と星が意気盛んになり、それを見て紫苑が余裕の表情をしていた。

「あとは流れによって作戦は変わるかもしれないが、基本的にはこれでいきたいが、いいかな？」

一刀が皆にそう告げると、皆、納得して軍議が終わり、董卓軍も戦いの準備を始め、決戦の時が迫るのであった……。

第２４話

一刀たちが水関で合戦への準備をしているころ、ようやく連合軍も集結し、そして軍議をしていたが、その軍議の陣幕から、とても軍議の場とは思えない声が聞こえてきた

「おっほほほ～～～～～」

と・・・。

その声の主は、袁紹こと麗羽であった、なぜこのような高笑いしていたのかは、この軍議において、なかなか総大将が決まらず、麗羽はやりたい、周りはやりたがらないという中途半端な状態で、会議に遅参した桃香が麗羽に総大将になればいいと言う一言で軍議が進み、結局麗羽が総大将に決まった。（この時点で羌に不穏な動きがありと言うことで、一刀の連合軍不参加は報告済み）

そして、桃香に?水関攻略の先陣を押し付けたが、雛里が辛うじて兵の少なさを理由に麗羽から兵と兵糧を借り、軍議が終わろうとし、自分が総大将になって気分がいい麗羽が先程の発した声であった、そしてそんな中、

「失礼します！」

と袁紹軍の伝令兵が焦った様子で入ってきた。

麗羽が気分を害し、何か言おうとしたが、顔良（真名は斗詩）がその伝令兵に

「どうしたのですか？こっちに来て下さい」

その伝令兵を呼び、ひそひそ話でその内容を聞くと斗詩は

「ええ～、そ、その話は本当ですか！？」

と大声を出したので、横にいた文（真名は猪々子）が

「斗詩～、どうしたんだ？」

「斗詩さん、五月蝿いですわよ、どうかしましたの？」

と麗羽が怒りながら言うと斗詩は困った顔をしていたが、軍議に参加していた華琳が

「顔良、何かあったのね、答えなさい」

と拒否を許さない口調に麗羽も

「斗詩さん、隠し事は許しませんわよ、言いなさい」

と麗羽から言われると、斗詩も諦めた表情で

「・・・はい、実は今、洛陽から入った情報なのですが、今、洛陽の守備兵が僅か3千しかいないということらしいのです・・・」

と聞くと、それを聞いた麗羽と猪々子は

「はぁ？」

「斗詩どういうことだ？」

と気の抜けた声を出し、軍議に参加していた他の諸侯からも騒めくようになった。

そんな中、袁術（真名美羽）が場の空気を読まず

「のう七乃（名は張勲、袁術の側近）、なぜ皆はこんなに騒いでいるのじゃ？」

「それがですね～、お嬢様、今から皆、洛陽に攻めるのに、今、洛陽の兵がたった3千しかないのですよ～」

「何じゃ、それだったらここから洛陽に直接攻めたらよいのじゃ」

言いだすと七乃が

「でも～、もし別動隊を出して、直接洛陽に攻めるのでしたら、洛陽制圧と帝の救出という大変名誉ですけど、困難の役ですよ～」

と言うと、その洛陽制圧と帝の救出と言う甘い言葉に周りは酔い始めた。

そして

「それでしたら、ぜひ私にこの大役を・・・」

「いや、貴殿のところが兵が少ないだろう、この役は私に・・・」

「何、二人とも役不足、この大役は、私がするべきだ」

と勝手に別動隊で洛陽に攻める話になり始めていた。

そして、この様子を見ていた華琳、雪蓮、桃香、公孫賛（真名は白蓮）は

（洛陽制圧という餌をぶら下げ、麗羽の性格では、自分が主役に成りたいから、絶対に別動隊は作らないわ。そして？水関攻略に誘導する、この策考えたのは、誰かしら？ぜひ欲しいわ）

（ふ～ん、董卓もなかなか面白いことするわね、冥琳あたりは頭を悩ませそうだけど、私は楽しくなりそうよ）

（この人たち、帝や民のことを考えるより、自分たちの事しか考えていない・・・）

（何、考えているんだこいつら？こんなバラバラ結束で勝てる訳ないだろ！）

とそれぞれ思っていると、麗羽が明らかに動揺しながらも、その場を収めるように

「そ・そんなの罠に決まっています！敵がわざわざ洛陽を空けるなんて考えられませんわ！私たちを誘き寄せるための罠ですわ！」

「わ・・・私を騙そうとしてもそうはさせませんわ、だからこのまま？水関から、華麗に進軍しますわ、おっほほほ～～～～」

最後は麗羽の歯切れの悪い笑い声で締めくくり、無理矢理、軍議が終了した。

～華琳視点～

「麗羽もたまには私に対して役に立つこととしてくれるわね」

「私に勢力拡大の好機をわざわざ作ってくれるのだから、せっかくだからせいぜい利用させて貰うわ」

「しかし悪政を引いていない董卓を陥れて、この後は自分の天下と思っているでしょうが、皆があなたに従うかしら、まあ無理ね・・・、だって私があなたを倒すから」

「そして我が覇業を成し遂げるための好敵手となりうるの、あの中では孫策と劉備しか目立たなかったわね、両袁家は勢力は大きいが、君主は無能、公孫賛はある程度有能だが、補佐する良将が居らず、勢力としても残念ながら小さく好敵手としては無理、あとも皆、似たり寄ったりね」

「あと、今回は参加していない北郷一刀・・・」

「黄巾党の乱のあと、あの男は馬騰の跡を継ぎ、雍州と涼州の太守を兼務、そして治政の良さで勢力を更に伸ばし、そして一緒に天の国から来た夫人たち（紫苑と璃々のこと）に更に馬超や猛将で名高い趙雲まで妻にしている、正に違う意味で将の心を掴んでいると言っていいわね（この時点の情報では蒲公英と朱里は入っておらず）」

「そして頭も切れ、武の方もあの馬超を倒し、そして妻に迎え入れたというから凄いわ・・」

「今回は戦う機会がないけど、また会うのを楽しみにしているわ」

「でも、まずはまだ見ぬ敵より、目の前の敵に目を向けた方がいいわね・・・」

～華琳視点終了～

～雪蓮の陣～

「はぁ～疲れた冥琳、あんな馬鹿な軍議、出席しなければ良かったわ」

「馬鹿なこと言うな雪蓮、袁術ですら出席しているのに、その配下の私たちが出席しなければどうするのだ」

「それで雪蓮、これからどうする？」

「う～ん、取り敢えず劉備の陣に行きましょう」

「それはいつもの勘か？」

「そうよ♪」

「まったくお前って奴は、しかし我らが名を上げるためには？水関や虎牢関攻略は絶対に成し遂げなければならない。それに今後に備

えて兵の消耗を控えないとならないからな」

「だから、劉備たちと同盟して?水関を落とすのよ」

「やれやれ仕方ないな。祭殿申し訳ないが、引き続き留守をお願いします」

「分かった、では策殿の世話を頼んだぞ」

この祭殿と呼ばれた女性、名は黄蓋（真名を祭）で、亡き孫堅の時から仕えている孫呉の宿将で雪蓮が頭が上がらない数少ない人の１人。

「そんな人を問題児みたいに言わないでよ」

「だったら、普段から真面目にしてくれ・・・」

「うっ・・・」

そして、2人は桃香の陣に向かった・・・

～桃香の陣～

「はぁ～、先陣か・・・」

「あわわ、桃香様気を落とさないで下さいよ、何とか袁紹様から兵や食糧を借りることができたのですから」

「そうですよ桃香様、元気を出して下さい」

「そうなのだ、先陣は鈴々たちがいるから大丈夫なのだ」

雛里や愛紗、鈴々に励まされ、桃香も

「そうだね、そんなことも言ってられないね」

と気合を入れようとしたところに

「桃香様、失礼します」

と楽進（真名は凪）が入って来て

「ただ今、呉の孫策様と周瑜様が桃香様にお会いに来られましたが・・・」

「いったい何だろう・・・、凪ちゃんお通しして」

桃香が許可すると凪の案内で雪蓮と冥琳がやって来た。

そして緊張している桃香に雪蓮が

「まあそう緊張しないで。あなた、今回の戦の先陣でしょう」

雪蓮の問いかけを聞いた桃香は再び暗い顔になった。

「それで、え～と鳳統ちゃんだったかな?あなたはこの戦、どう戦う?」

「・・・難しいとしか言えません。ただでさえ、篭城している敵を力攻めするのは厳しいというのに、私たちより敵の軍勢の方が自分

達の軍勢より多いとなると・・・」

雪蓮の質問に雛里は深刻そうな顔で答えた。

「ふむ、そこでだ。我等孫呉は貴公等と同盟を組みたいと思っているのだが」

「「「えっ!?」」」

突然の冥琳の言葉に桃香達は驚いた表情をした。

「ああ、ついては今回の?水関での戦い、我々も協力しようと思うのだが・・・」

「それは願ってもないことですが・・・何で私達に協力してくれるのですか?」

桃香が雪蓮に不思議そうに聞いた。

「まあ、理由は二つあるわ。第一にこの戦の戦功、協力してあげる代わりに?水関での戦功を私達に譲ってほしいのよ」

「はあ・・・私達は戦功に興味はありませんから別にいいですが・・・」

桃香はどこか疑問そうな顔をしながら言った。

「そしてもう一つ、それは、あなたとの同盟よ」

「私達との、同盟ですか・・・?」

「そう、あなた達を黄巾党の乱の時から見て、将来有望そうだし、周りの臣下も有能そうだからね。今のうちに手を組んでおこうと思って。あなたにとっても悪くない話よ?」

「はあ・・雛里ちゃん、どう思う？」

雪蓮の言葉を聞いた桃香は、隣にいた雛里に意見を求めた。

「・・確かに今の私達にとっては大変魅力的な話ではありますが・・・」

「信用できないと？」

雪蓮の言葉を聞いた雛里は、躊躇した末、口を開いた。

「・・・はい。失礼かもしれませんが、私達と孫策様達は初対面ですので、そう簡単には信用はできませんので・・・」

「まあこの乱世ではしかたのないことだな。むしろ我々がいきなり

同盟を組もうといってきたのだ。疑って当然だな」

雛里の言葉を聞いた冥琳は肩を竦めてそう言った。

「だから、同盟締結の証として今回の戦で、協力しようって話なのよ、それに私たちがあなた達を裏切ることは連合軍を裏切る話になるわよ」

そう言われるとその通りであったので、桃香らも特に反対する理由がなかったので、孫策との同盟を受け入れたのであった。

そして戦いの時が刻一刻と迫るのであった・・・。

第２５話

刀たちが、氾水関に到着して決戦前の最後の軍議が行われていた。

しかし会議中、意外とおとなしかったのが華雄であった、やはり理由は俺たちが到着する前に一騎打ちで真理に負けたショックだったのだろう。

元々の原因は華雄が、俺らが到着する前に連合軍に奇襲を掛けるを言って聞かないから、仕方なく真理が一騎打ちの勝負した。

勿論、華雄が勝てば出陣を認める、もし負けたら、真理の言うことを聞くとのことで、元々真理は親の敵討ちするために鍛えていたが、その勝負を見ていた霞いわく

「真理の頭の良さと華雄の悪い癖が出た結果やな」

戦いの内容は、真理が華雄を言葉で挑発、挑発に乗った華雄が、自分の武器「金剛爆斧」を振り回すも、真理が華雄の周りを逃げ回り、

華雄の地面周辺に多数の穴が空いてしまった。そして華雄の疲れを見て、真理が反撃し、その勢いに後退した華雄が足を穴に取られて転倒して、勝負ありとのことだった。

その後、真理から華雄への罰はあったらしいが、一言

「まだ恋と一騎打ちをした方がマシだった……」

とか、どんな罰を与えたんだ真理……？

それを聞いていた翠は横で震えていたが、多分罰を受けたことあるのだろうな……。

そんなこともあり、軍議では先陣に霞と恋、その後に華雄と俺たちの部隊が出ることにしたが、華雄も真理を気にして大人しくなっていた。

真理からの情報で、向こうの先陣は、桃香と孫策らしいので、こち

らは、孫策に霞、桃香に恋をぶつけることにした。

「分かったで一刀、相手は孫策か、何かしらんが血が騒ぐわ」

「…分かった」

でも桃香には雛里がいて、霞と違い、恋は武に自信があるが兵のことを忘れて単独で戦う傾向がある、どんな策があるか分からないので、真理の同意もあり

「星すまんが、恋の部隊に付いてくれないか」

「主、なぜですか？」

「何で音々音を付けないのですかー」

と星と音々音から異論が出たので、一刀は

「今回は乱戦状態になるから、音々音は危険だから出陣させる訳にはいかない、だから真理と2人で氾水関を守って貰う」

「それで星は、恋が劉備軍と当たるが向こうは朱里に匹敵する軍師の？統がいる、兵は少ないが、関羽や張飛など優れた武将が多い、さすがに恋も手を焼く可能性があるかもしれないから、だから星にも手伝って欲しい」

と言われると

「…主と一緒に戦えないので納得はできませんが、命令とあれば引き受けましょう、ですのでこのお礼は、この戦いが終われば1日に私に付き合っていただくということでどうでしょう？」

「あらあら」

星の要求に紫苑が微笑みながら言うと、一刀も仕方がない顔をしながら

「分かったよ星…今はそれで手を打とう」

「その言葉忘れないで下され、主」

星が言うと璃々や翠が

「星お姉ちゃんズルいー」

「せ…星ズルいぞ」

とぼやくも、星はそれを気にせず

「主からの要望に応えた褒美ではないか、璃々や翠も頼んだよいだ

ろう？」

と一笑していた。

そして恋も音々音に

「…一刀の言うこと正しい、ねね、留守番…」

「恋どのー」

と言いながらも、周りからの意見もあり、結局恋の一言が効いて、関の守備につくことになった。

～汜水関移動中の孫策軍～

「ねえ冥琳、もしかしたら敵さん、関から打って出てきそうだから、その準備して貰えるかしら」

「敵が打って出てくる…？」

「策殿の勘ですかな？」

冥琳と祭が聞くと

「そうよ、多分このまま行けば痛い目に合いそうだから、早めに戦闘準備させてね」

「取り敢えず、もうすぐしたら偵察に出ている者も帰ってくるだろうが、準備させておこう、そして劉備の方にも伝令を出しておくぞ」

とこちらは早くも戦闘準備を整え始めた。

～劉備軍～

「ねえ雛里ちゃん、向こうは恐らく籠城するけど、この少ない兵でどう攻める？」

「桃香様、向こうは張遼さんと華雄さんがいますが、華雄さんが血の気が多い方なので、愛紗さんに華雄さんを挑発していただいて、城外に引きずり出すのが、今のところはそれが一番かと」

「分かった雛里、その役引き受けよう」

「お願いします愛紗さん」

と言っていると、先に出ていた偵察の者が帰って来たが…

「も…申し上げます、敵は城外から出て、我々を待ち構えおります」

「え?敵さん出てきているの?」

「良かったですか桃香様、それであれば私たちも安心して敵と戦えます」

「そうなのだー、鈴々に任せるのだー」

「しかし敵も何考えているのでしょう、わざわざ不利な城外に戦いを挑むとは」

「凪、アホな敵さんやから私たちも楽出来るんや、文句言うたらあかんで」

「そうなのー凪ちゃんは、真面目過ぎるから、もう少し楽した方がいいのー」

「真桜、沙和、2人はもう少し真面目に仕事をしろ」

会話していると、報告している兵が、

「それが…、敵の様子がおかしいのです」

「どうしたのです、張遼さんと華雄さんが出陣しているのではないのですか？」

雛里が聞くとその兵は、

「華雄軍はいるにはいるのですが…、先陣は張遼軍とあの飛将軍、呂布の部隊なのです……」

「えー、呂布さんって、メチャクチャ強い人でしょう、何で氾水関

にいるの？」

「桃香様落ち着いて下さい、呂布でしたら私と鈴々で何とかしますから」

愛紗が言うものの、その兵は

「それだけではないのです、張遼軍と呂布軍のあとに華雄軍にそして丸に十文字の軍、そして更に馬騰、馬超、趙雲、？徳の旗印の軍があります、ですので西涼の北郷軍も参戦しております」

「「「「「「え……？」」」」」」

とその言葉を聞いた瞬間、桃香らは言葉を失ってしまった。

～曹操軍～

「申し上げます、敵は関から出陣、先陣は張遼と呂布、その後に華雄、そして丸に十文字の旗、北郷軍も参加しております」

「何ですって？」

「華琳様、敵は関から出てきたのですから、蹴散らしましょう！」

「待て姉者、敵は張遼に呂布、あと北郷や北郷の夫人たちや馬騰、馬超まで出てきているのだ、少し様子を見るべきだ」

「華琳様、兵もさすがに動揺しておりますので、先に動揺を収めるのが先決かと」

「そうね秋蘭、桂花の言う通りだわ、幸い私たちは後陣、先に兵たちの動揺を押さえるわ、春蘭と秋蘭は先鋒の部隊を、桂花、季依（許緒）、流琉は本陣の引き締めをしなさい」

「「「「「御意！」」」」」

将がそれぞれ配置に付くと1人残された華琳は

「全く意表を付いてくれるわね北郷一刀…、どこまで私を楽しませてくれるか楽しみにしているわ」

と微笑を浮かべていた。

こうしてまもなく決戦が始まろうとしていた。

そして霞の号令で

「全軍突撃や！いてもうたれ！」

そして恋も

「…突撃」

それぞれ命令を下し孫策・劉備軍に突撃を開始し、こうして汜水関の戦いの幕が開けられた……。

第２６話

～孫策軍～

「弓隊！三連正射！」

「大盾隊、敵の騎馬隊をまともに受けるな！流せ！」

と祭の指示で何とか霞の攻撃を受け止めている状態であった。

前線に雪蓮と冥琳がやって来て

「どう張遼は？」

雪蓮が祭に聞くと

「さすがに「神速の張遼」ですな、我らの軍も強いと思っていましたが、さすがに騎兵中心の相手ではやや分が悪いわ、しかし負けるつもりもないですがな」

それを聞いた冥琳が

「雪蓮…、先に言っておくが、張遼との一騎打ちは認めんからな」

「何よ、それ！まだ私、何も言ってないじゃない」

「お前は言いかねないから、先に言っておくぞ」

「そうですぞ、策殿、あなたは大将で、我らの玉なのですから、今は我慢して下され」

「はぁ～仕方がないわね、今は我慢するわ、しかし必要な時は出るから止めないでよ」

「仕方ないな…」

冥琳はため息をつきながら呟いていた。

～劉備軍～

「ドガ！バギ！」

「ぐぁ！うぁ！」

「ば…化け物が来たー」

予想外であった呂布軍や北郷軍の参戦に動揺した劉備軍に対して、
突撃した恋が早くも大暴れしてい

るのを見て、愛紗が

「鈴々！このままでは戦線が持たない！我らで呂布を止めるぞ！」

「分かったのだ、愛紗！」

2人は雛里の指示を待たずに、恋を食い止めるために前線に向かった。

そして凪も

「あの呂布の強さ…、愛紗たちでも厳しいだろ、真桜、沙和行くぞ！」

と言ったところ、雛里が

「…ちょっと待って下さい」

「なぜ止める、雛里！」

「どないしたんや」

「どうしてなのー」

3人が愚痴るも、雛里は

「時間がないので、手短に言います、このまま行けば愛紗さんだけではなく、3人とも、はっきり言って命がありません」

「ですので、私の指示に従って貰えますか」

と3人にその指示を伝えると、3人とも複雑な顔になり

「…愛紗たちは文句を言うだろうな」

「ウチは賛成や、あんな化け物とまともに戦える自信はないわ、兵たちのことを考えたら、それが正解や」

「沙和もあんな人と一騎打ちできないのー、だからそれが一番いいと思うのー」

と雛里の策を聞いて3人とも賛成したので、雛里は

「では向こうに道具を準備していますので、よろしくお願いします」

と真桜と沙和が走って行き、凪もそちらに行こうとすると

「すいません凪さん、一番厳しい役ですが…」

「いや、この場合私が適役だろう、雛里が気にすることない」

「決して無理だけはしないで下さい」

「ああ…行ってくるぞ雛里」

と3人も遅れて前線に向かった。

～一刀の軍～

「ご主人様、華雄さんにはまもなく突撃するよう伝えておきました」

「ありがとう、紫苑」

と言っている、一部の部隊から

「「「ウォー」」」

と士気を揚げていたので、一刀と紫苑と璃々が、それを見に行くと

……

「てめえらー、今からカチコミを駆けるから、気合いを入れろよ！」

「敵の命取(タマ)りに、ブッ込むぞ！」

「「「ウォーーーー」」」

まるで女暴走族(レディース)の総長よろしくになっている碧がおり、それを見た

3人は、普段の姿から様子からあまりにも代わっている碧を見て

「「「……」」」

呆然としていた。

そこで後から来た翠が

「ご主人様、どうしたんだボーとして」

「翠か…、い…いや、碧さんが普段と全く違う姿を見てビックリしたんだ」

「あーそうか、ご主人様はお母様の戦をするところを初めて見るんだな。普段は普通だけど、戦になるとあのように口調が全く変わってしまうんだ、ああなるとお母様は強いぜ」

「でもあの豹変ぶりは凄いな」

「ああ…、私もあれをマネしたいとは思わないよ」

とさすがに翠も閉口していた。

そして皆に気付いた碧が

「皆、見てた？」

「ああ…、凄い変わりっぷりですね」

「何言っているんだい！お上品な言葉で戦なんてできないよ！戦では喰うか喰われるかだよ！ハハハーー」

「でも礼を言うよ、一刀さん、アンタが華陀先生を連れて来てくれなかったら、またこうして戦に立つことはなかったんだからよ」

そして翠に

「さあ翠、アンタもとっと準備しな！」

と言って碧は無理やり翠を連れて行った。

そして璃々が

「でもご主人様…いよいよ私たちも始まるね……」

「ああ、紫苑、璃々、無理するなよ」

一刀が言うも、紫苑が微笑を浮かべ

「フフ…ご主人様、私を誰だとお思いですか？」

と言われると

「ごめんごめん、紫苑と璃々が心配になったらからだよ」

と言って、一刀が

「なあ紫苑」

「何ですか、ご…」

紫苑が一刀の方を振り向いた瞬間、一刀の口が紫苑の口を塞いでいた。

そして一刀が紫苑に

「愛しているよ♪」

「……ズルいですわ、ご主人様、そんなことされたら怒るに怒れないじゃないですか」

「紫苑の機嫌を直すにはこれが一番だと思って」

「でしたら、この戦いが終わったら、この続きをお願いしたいのですが？」

と言うと、すると横にいた々が

「あ…あ、ズルいーー、何言っているのよお母さん、次は私だよー

ー」

と戦い前に痴話喧嘩する3人であった。

そんな一刀たちがやり取りしていた時に一刀の前に陣取っている華雄に一刀からの伝令が届き、そして前方を見ると、恋に押されている劉備軍と孫策軍の間が開き、そして第二陣に構えている袁術軍が見えた。

それを見た華雄が

「よし！華雄隊は袁術軍に突撃するぞ！」

「突撃！」

「「「ウォーーー」」」

すると袁術軍は、華雄隊の突撃に対して早くも動揺して

「七乃、は…早く迎撃するのじゃ」

（「あ～動揺している美羽様って可愛いい～」）

と内心で変なこと考えていたが、そんな普段の緩んだ空気が袁術軍に蔓延しているため、士気は非常に低かった、それに気付かない七乃は

「はいはい～、では兵士の皆さん、迎撃して下さい」

と命令を下し、一応迎撃態勢を取った。

しかし、士気が高い華雄隊に取っては

「フン！こんな動きで私たちを止められると思うなよ！いっけえええー！」

と言って華雄が袁術軍に突撃すると早くも袁術軍は列を乱し崩れ始めた。

そしてしばらく袁術軍は何とか持ちこたえているもののジリジリ後退をしているため、後方にいる部隊が動きが取りにくい状態になっていた。

その動きを見ていた紫苑が

「ご主人様、今が突撃の機会かと」

「分かった紫苑」

と言うと横で聞いた

「緊張するな～」

「よっしゃ、腕が鳴るぜ」

「久しぶりのカチコミだよ、気合い入るぜ」

「さあ派手にいきましょうか」

と璃々、翠、碧、渚がそれぞれ待ち構えていた、そして一刀が全軍に告げた

「今から俺たちは死地に突入する、しかしこれは死に向かうのではない、明日へ生きるために今日戦うのだ、そしてこの戦いに勝って、一人でも多く帰って来て欲しい」

「俺は皆を信じている、そして皆、俺を信じてくれ！」

「「「ウォーーー」」」

兵士たちが気勢を上げ、一刀が

「全軍突撃ーー！」

「「「ウォーーー」」」

と突撃を開始した。

一刀が突撃すると、華雄隊がすでに袁術軍を完全に押し込み、後続の連合軍が混乱状態に陥っていた。

そんな中、辛うじて反撃態勢を取ろうとした公孫賛軍を発見した一

刀は

「碧さん、碧さんの部隊は、公孫賛軍に当たって貰えますか」

と話を振ったところ、

「公孫賛か…、面白いじゃない、涼州の騎兵が上か幽州の騎兵が上か決めるにはいい機会だ、よっしゃ！私らは公孫賛にブッ込むぞ！突撃ーーー！」

そして馬騰隊が突撃するのを見て、白蓮が先程の碧の言葉が聞こえていたのか

「涼州の騎兵より、私たちの騎兵が上だと見せてやるぜ、白馬義従構え！突撃！」

と白蓮も碧に対して迎撃を開始、両軍激しく激突した。

そして一刀らは、更に次の陣へ進軍した。

その頃、態勢を建て直した曹操軍は現在は後方待機する形となっていた。

「桂花、今、前線はどうなっているかしら」

「はい華琳様、すでに孫策軍と張遼軍、劉備軍と呂布軍が激突、孫策軍は膠着状態で、劉備軍は早くも呂布軍に押されています」

「さすが呂布ね…」

そんなやり取りをしていると、前線に偵察に行っていた兵が報告に来て

「失礼します、敵、華雄軍が第二陣の袁術軍に突撃を開始、早くも

袁術軍は押されており、そのため後方にいる公孫賛軍を始め、他の軍も混乱状態になっています」

「な…何しているのよ、袁術のバカは」

それを聞いた桂花がこの場にいない袁術を罵っていたが、華琳は慌てず

「桂花落ち着きなさい、こういう乱戦になれば、必ず私たちにもいい機会が巡ってくるわ」

「春蘭、秋蘭貴女たちは、いつでも部隊を動かせるよう準備しておきなさい」

「「御意」」

「さて…どうなるかしらこの戦」

今後の展開を楽しみにしている華琳であった。

そして戦いが始まって、半刻（約1時間）以上経過して、

痺れを切らした雪蓮が、

「ねえ冥琳、このままじゃ埒あかないから、前線に出ていいかしら？」

「ハァ、仕方がないな、護衛に明命を付けるから、それから出てくれ」

「さすが冥琳♪」

「褒めても何も出ないぞ」

と言って雪蓮が前線に出ると孫呉の兵の士気も上がり、徐々に反撃を開始した。

その動きに霞が気付き

「うん？こいつらの士気が上がってきょったな…、誰か出てきたか？」

と呟いていると、前方の兵を駆逐している敵部隊を見つけ、そちらに行くと雪蓮がいた。

そして霞が雪蓮に

「あんたが孫策か？」

「そうよ、その姿…あなたが張遼ね？」

「その通りや」

「ならば張遼、あなたの命、私が貰うわ」

「面白いこと言うやんあんた、やれるもんなら、やってみい！」

と言いながら、飛龍偃月刀を雪蓮に振り剥けたが、雪蓮は南海覇王で

「ガキン！」

と難なくこれを受け止めていた。

「へえ～あんたやるやん、これ見えたんか？」

「勘で、ここに来そうだったと思ったから止めたのよ」

「勘って…、まあええわ、アンタやったら十分楽しませて貰えそうや、行くで孫策！」

「そのセリフ、そのまま返すわ張遼！」

と言いながら一騎打ちが始まった。

そして一方、呂布隊対劉備軍は、すでに恋対愛紗・鈴々が戦っていたが、

「お前たち弱い…」

とすでに息が上がり、防戦一歩の愛紗と鈴々に対して、恋が言っていると

「愛紗、鈴々大丈夫か！」

と凪が応援に駆け付けた。

すると愛紗が

「凪、大丈夫だ、しかしこいつかなりの強敵だ、私たち2人で掛かっても全く通用しない」

「だろうな、2人のその様子を見たら、まともにやっても勝てそうにないな」

そして凪は、恋に聞こえないように小声で、愛紗と鈴々

（「すまぬが、今から私が気を溜めるから、しばらく呂布の相手を私から目を離すようにしてくれないか」）

と言われると

（「何か策がありそうだな、分かった」）

（「鈴々に任せるのだー」）

2人が納得し、恋は3人がこそこそ話をしていたのを気にも止めず

「何か話し合っても無駄……、お前たち、恋に勝てない」

と言うと愛紗は

「さあそれはどうかな、呂布、今しばらく私たちに付き合って貰おう、いくぞ鈴々！」

「おうなのだ！」

と再び2人は恋に掛かっていった。

愛紗と鈴々が攻撃するも、恋はこれを難なく跳ね返していたが、途中、闘気を感じ、気配がする方を見ると、凪が気を溜め終わり、そして

「愛紗！鈴々！離れろ！」

「食らえ呂布！猛虎蹴撃！」

と気弾を放ったが、恋はこれを手にしていた方天画戟で跳ね返し

「お前…面白い、でももう見切った…」

と言うと、凪も内心

（「さすが呂布…、やはり無理か、雛里の策しかないな」）

そして今度は凪は

「まだまだ！食らえ」

を拳からの気弾を恋に向けて放ったが、この気弾が恋の体ではなく、恋の足元付近の地面に放ち、これが大きく穴を開け、そして土埃が大きく舞い、恋の周りの視界を消してしまった。

そしてその瞬間を狙い凪が

「今だ！真桜、沙和！」

「よっしゃー」

「了解なのー」

と2人が言うと、まずは沙和が屈強の決死兵１０名くらいを連れて、そして何重にも重ねた網を砂ぼこりで周りが見えていない恋の頭の上から被せた。

恋がそれに気付いたにすでに網が被せられて、網を切断しようしたが、そうすると真桜が

「油断大敵、足元が留守やで！」

と螺旋槍を恋の足元に横から左足を目がけ凪ぎ払うと恋はバランスを崩し、先程、凪が打ち込んだ気弾の穴に右足が填まってしまい、転倒してしまい、そしてその瞬間に手にしていた方天画戟を離してしまった。

そして恋が起き上がると真桜と沙和に刃が突き付けられていた…。

第27話

凪らが、雛里の策で恋を捕えることができたが、これを見ていた愛紗と鈴々が不服そうな顔をしながら

「凪、どういうつもりだ？」

「そうなのだ、こんなの卑怯なのだ」

と言うも凪は

「私も卑怯なことは分かっているさ、しかしこれは雛里の策だけど、呂布とまともに戦ったら、兵たちの被害がもっと増えてしまうだろう、だから私たちも同意したんだ」

と正論を言うと、2人は黙ってしまった。

一方、網に掛けた恋を捕えようと真桜と沙和が恋に手を掛けたところ、

「ハアアーーー」

疾風のように1人の将が真桜と沙和に襲いかかった。

「な…何や、何や!?」

「キャーーー」

2人と何とか気付いたが、その将の槍の攻撃を防ぐのが精一杯で2人は見事に吹っ飛ばされてしまった。

そして恋を捕えていた決死兵もその将と一緒に突撃した兵たちに追い散らされてしまい、そしてその将は見事な槍さばきで、網を切断して恋を救った。

そして

「恋、大丈夫か？すまんな、本来お主を補助しなければならなかったのだが」

「星悪くない、大丈夫…ありがとう」

恋を救ったのは、今回、呂布隊の副将になっていた星であった。

そして恋は星に礼を言うと再び方天画戟を持ち、愛紗らと対峙した。

一瞬の出来事に茫然と見とれてしまっていた愛紗が、

「貴様！何者だ！」

怒鳴るも星は

「ふむ、尋ねるのであれば普通はそちらから名乗るものだが、どうやらそんな余裕もないらしい」

「クッ…」

「まあよい、ならば我が名は趙子龍、北郷軍の将だ、貴殿の名は？」

「我が名は関雲長、劉玄徳の一の家臣だ、では趙子龍殿に一つお聞きしたい、なぜ北郷殿はこのような非道な振る舞いをしている董卓に味方しているのかお聞きしたい」

と愛紗が言うと恋がその言葉を聞いて静かに殺気を出して

「……月は非道ではない、貴様等殺す…」

「まあ待て恋、しばらくこの場は私に任せてくれないか？」

星が恋を宥めるように言うと恋は

「……（コク）分かった…」

「ありがたい、任せて貰おう」

そして星が愛紗に

「ならば再度聞こう、誰が非道な振る舞いをしているのだ？」

「な…何を聞いていたのだ！董卓に決まっているだろう！」

それを聞いた星が

「……ハハハハハハ！」

と大声を出して笑っていた。

「な…何がおかしい！」

「なぜ笑うのだー」

「ふざけているのか！」

「何、笑っているんや」

「失礼なのー」

と言うと、星が

「これが笑わずいられるか、お主たちの言っていることがあまりにも滑稽すぎてな」

「そしてお主たちの表面しか見えていない純粋過ぎる正義感には笑いを通り過ぎて、涙が出るぞ」

星から言われると愛紗が

「何！貴様、我々を愚弄する気か！」

と青龍偃月刀を星に構えるも星は歯牙にも掛けず、

「フッ、自分の言葉が通じないとみるとすぐ刃か、以前紫苑が言っていたように周りが全く見えていないな」

「何！」

「待て！愛紗！もう少しこやつの話を聞こう」

凪が愛紗を宥めるように言うと星も

「関雲長殿より、こちらの御人の方が、まだ冷静だな、ならば聞こう」

「お主たちが言っていた董卓殿の非道な振舞いとやらをお主たちは見たのか？」

「「「「「！」」」」」

星に言われると5人は驚き無言になってしまった。

星はそんな愛紗を追及すると

「さあ関雲長殿、どうなのだ？」

「うっ…いや見ていない…」

と力なく小声で答えた。

「ほう、見ていないのにどうして董卓殿が非道な振舞いをしていると言い切るのだ」

「それは、袁紹殿が洛陽で董卓殿が非道な振舞いをしているからだとおっしゃっていたからだ」

と凪が言うも、星はそれを軽蔑した笑いで

「結局お主らは、洛陽の様子を見ていないということだな」

「そしたら、あんたは洛陽の様子を見たというんか？」

真桜が聞くと、星は

「無論その通りだ、実際に見たら、洛陽は平穏無事で、治めるのが董卓殿に代わってから、治安がすっかり良くなっているぞ」

と言われると、愛紗が

「敵の貴様が言うそんなこと信じられるか！」

と愛紗が言うも

「愛紗、鈴々は難しいことは分からないが、このお姉ちゃんの目を見ているとこのお姉ちゃんが言っている事が嘘言っているように見えないのだ」

「確かにこの人、自信満々に答えているのー」

鈴々と沙和が星の言葉を聞いて迷いを感じ始めると皆にそれが伝わった。

そして星が

「私の言葉を信じる信じないかはお主たちの勝手だ、しかしお主たちは自分で確かめもせずに、主や董卓殿を逆賊呼ばわりしたのは、私や恋も許すことができないからな、殺しはしないが少々身体で反省して貰おうか、お主たちは、主と知り合いみたいだから命は助けるがな」

「恋すまぬが、少々手加減してやって貰えぬか」

「分かった…」

と言って、恋はさっき捕われかけた怒りと月を侮辱した発言に対する怒りが重なり、先程より強い闘気を愛紗たちに叩きつけると、愛紗たちは

「クッ…これが呂布の本来の闘気か…」

「鈴々より強いのだ…」

「これはかなり強いぞ、真桜、沙和死ぬなよ」

「おしっこちびりそうなのー」

「おしっこちびったらあかんで、沙和」

と言っていると星が

「恋よ、お主に任せると全て相手しそうだから、私はこの無礼な脳筋女を相手にするから、あと４人を相手して貰ってもよいか？」

星が恋に言うと、助けて貰ったこともあり

「仕方ない…、譲る」

愛紗は先程の星とのやり取りでの精神的動揺並びにこの挑発的な言動で、完全に頭に血が登ってしまい

「貴様、誰が脳筋女だーーー！」

青龍偃月刀を振るも、星に見切られて簡単に躱され、そして

「どうした?当たらぬではないか」

「ふざけるなーーー」

と更に挑発されると愛紗は完全に星のペースに巻き込まれてしまい、星は

（「やれやれ、主に仕える前の私も未熟者であったが、この女はこれだけの武を持ちながら精神的にこれだけ未熟者とは、もったいないものだ…まともに戦えば私と互角くらいの実力があるだろうのに」）

と内心呆れ返りながら、愛紗の攻撃を難なく躱し、恋も鈴々らの攻撃を余裕で受け止め、5人にとっては地獄への時間に突入しようとしていた……。

一方、一刀たちは白蓮の軍を突破したあと、孔融軍を撃破、そして

更に後続の陶謙軍と戦っていたが、渚が

「敵将、陶謙討ち取ったりーーー！」

と陶謙を討ち取ると紫苑は一刀に

「ご主人様、そろそろ引き上げますか？」

と言うと、これを聞いていた翠が

「まだ余裕があるぜ！ご主人様、このまま袁紹の軍に挨拶に行こうぜ！」

と袁紹軍との戦いを主張し、横にいた璃々も

「ご主人様、私も袁紹軍に挨拶はしたいな、今の袁紹と違うけど、

昔、袁紹に人質に取られた仕返しをしたいよ～」

と言うと紫苑も璃々の発言を聞いて

「そうね、まだ余裕があるようですし、今の袁紹さんと違うけど、あの時のお礼は直接できていないから、今からお礼参りさせて貰おうかしら、フフフ……」

紫苑まで行く気満々の態度を示したので、一刀はさすがに驚き

「おいおい紫苑……」

と呆れつつも、確かにまだ余裕があったので、一刀は

「よし分かった、袁紹軍には弓騎隊と騎馬隊のみで突撃して一当てしてから戦線離脱する、渚さんにはこの場を確保して貰うよう伝えてくれ」

と伝えると、３人は喜び、そして一刀も

「それでだ、どうせなら紫苑と璃々、２人で直接袁紹に挨拶して来たらどうだ、俺と翠で顔良と文醜の二枚看板を押さえて、道を開くからさ」

と言うと、２人は危険であると制止しようとしたが、一刀は

「紫苑、璃々たまにはいいカッコさせてくれよ」

「そうだよ、私もいるから安心して挨拶に行って来いよ」

一刀と翠が２人に言うと、紫苑が

「分かりました、ご主人様、すぐに帰って来ますから、では翠ちゃんお願いするわね」

「ご主人様、怪我したらダメだよ～」

「ああ分かっているさ、２人とも気を付けて行ってこいよ」

と一刀が言うと一刀たちは、袁紹軍に突撃を開始した。

袁紹は連合軍があまりにも翻弄されているのに頭に来て、斗詩に

「キーーー、皆さん何をやっているのです！顔良さん、伝令を出してさっさと関を落とすように伝えなさい！」

「姫、今、関を落とすどころか、敵の本隊がこっちに迫っている状態です」

と言うと

「斗詩、敵が迫っても、ここまで来たら疲れているだろう、来たらそんな敵、私が一撃でぶっ飛ばしてやるよ」

と猪々子が言うと、麗羽も

「お～ほほほほ、さすが文醜さんですわ、楽しみしていますわ」

と言っていると、伝令兵がやって来て

「失礼します、敵が陶謙軍を撃破して、こちらに向かってきています！」

それを聞いた麗羽が２人に

「な…何しているの！文醜さん、顔良さん、華麗にやってしまいな

さい！」

と言うと、猪々子が

「はい～よ、行くぜ、斗詩！」

「あ～待ってよ、文ちゃん」

と2人は前線に向かうと、猪々子が

「そろそろ敵が来るな、う～ん腕が鳴るぜ」

「文ちゃん、そんな簡単に言わないでよ、相手はあの北郷一刀さんに、噂で強いと言われている北郷夫人の両姉妹に錦馬超でしょう、それに西涼の強兵もいるんだよ……」

「大丈夫、大丈夫」

と気楽な会話をしていると、一刀の軍が迫ってきていた。

そして部隊の先頭に立っていた翠が、袁紹軍の先頭にいる将と思われる2人を確認して、

「ご主人様、私は髪が青い奴を相手にするから、ご主人様はもう1人の奴を相手してくれないか？」

「よし分かった、そっちは任せたぞ、翠」

と言うと、翠が猪々子に向かって突撃を開始した。

そして猪々子が突撃して来た翠に

「貰ったーーー食らえ！」

と斬山刀を振り回すも、翠にあっさり躱されてしまうと

「我が名は錦馬超！我が白銀の槍の攻撃、この身に受けてぶっ飛びやがれーーー」

と猪々子は騎乗している翠の槍の攻撃をまともに受けて、見事に吹っ飛ばされてしまい、頭を地面に叩きつけられ気絶、戦闘不能状態になってしまった。

そして見ていた斗詩が

「文ちゃん！」

猪々子に駆け寄ろうとしたが、一刀が阻止する形で

「おっと待った顔良さん、この先は行かせないよ」

「え!?、あなたはひょっとしたら北郷一刀さん?」

「ああそうだよ、よく気付いたね」

「こんなところに居る男の将は、あなたしかいません、でも千載一遇の機会、あなたを捕まえて、この戦いいただきます!」

「そいつはどうかな?」

一刀が言うと、弓騎隊が突撃して一斉に弓を放つと袁紹軍は、算を乱し始めた。

これを見て斗詩があわてて軍勢の指揮に戻ろうとしたが、一刀の兵たちに足留めされてしまい、そして猪々子は、配下の者に救助されたが、猪々子や斗詩以外に指揮を取れる者が不在の袁紹軍は、数は

いるものの、翠が前線を掻きまわされ、混乱に拍車を掛けていた、
そんな中、

「行くわよ、璃々」

「はい、お母さん」

と言って紫苑と璃々の部隊が突撃すると、袁紹軍は更に混乱を深めた。

そして麗羽が

「何していますの！とっとあのような軍勢蹴散らしなさい！」

怒鳴るも、猪々子や斗詩が不在で指揮系統が混乱しているため、紫苑や璃々の部隊を止めることが出来ず、そして麗羽の視野に紫苑が見え、そして紫苑の方も麗羽の姿が見えたので、弓を構えるのを見えると

「な…何していますの、さっさとあのおば…」

と麗羽が紫苑にとっての禁句用語を言い切る前に、遠くにいるにも関わらず紫苑の殺気立ったオーラが纏っているのを感じたのか、途中で言葉を切って、口が金魚みたいにパクパクしていた。

そして紫苑が不敵な笑みを浮かべ、横にいた璃々が

「お母さん」

「フフフ……行くわよ璃々、あの時、お礼をさせて貰いますわ」

と璃々と共に袁紹からやや離れた位置まで来て、そして

「我が名は北郷紫苑！我が夫、我が主北郷一刀の守護神なり！」

「同じ北郷璃々！袁紹、あなたに良いものあげるわ！」

と璃々がまず弓矢を構え、

「我、渾身の一矢を受けてみなさい！」

を璃々が鵬翼を持ち出して、麗羽に弓矢を放つと、麗羽の右頬の横を風を切って通り過ぎて、麗羽の自慢の髪の一部を切っていった。

そしてそれを見ていた紫苑が

「璃々、ずいぶん上手になったけど、まだ甘いわね、よく見ていなさいね」

と言いながら颶鵬を構え、そして静かに息を整えると

「曲張比肩の弓矢の舞、特と味わうなさい！」

と発すると、紫苑が弓矢を放つ音が一度しかしなかったにも関わらず、矢は2本放たれ、その矢は麗羽の両頬の薄皮を掠めて、そして麗羽の髪の一部をバッサリ切り取っていった。

そして麗羽の両頬から血がうっすらと流れ、そして

「はぁわ……」

と両膝を地面に付き、そして恐怖心からか毛穴と毛穴から色んな物が吹き出してしまっていまい、最後には失禁している状態であった。

紫苑と璃々は用が済んだとばかりに

「挨拶は終わりよ！」

「皆、引き上げるよ！」

と2人の部隊は撤退を始めると袁紹軍の本隊は恐怖心から追撃することが出来ずに、ただ見送るしか無かった。

そして2人は一刀のところに戻り、一刀は2人の無事の姿を見て安堵し

「よかった……」

と静かに呟いていたが、それが紫苑と璃々に聞こえていた、2人は一刀の心配そうな表情を見て、

「ごめんなさい、心配を掛けて」

「ごめんね、ご主人様」

「いや、2人が無事に帰ってくるとは信じていたが、やっぱり顔を見るまでは安心できなかったからね」

と話をしていると翠がやって来て

「3人でいい雰囲気の途中悪いけどよ、そろそろ撤退しないとまずいじゃない？」

翠からそう言われると一刀も再び気を取り直し、部隊の撤退合図を出したが、心配された袁紹軍の追撃は無かった。

そして時間が少しさかのぼり、一刀たちが袁紹軍に突撃したころ、

「曹操様、敵の一部が袁紹軍に突撃を開始しました」

「一部のみ突撃ね…」

「華琳様、これはどういう意味でしょうか？」

と秋蘭が聞くと

「秋蘭あなたも分かっているでしょう？本気で麗羽を倒すのであれば、少なくとも全軍で突撃するはずよ、それをしないことは挨拶代わりの攻撃というところかしらね、だから退路を確保するために兵を残しているというところかしら」

「では華琳様、敵が引き上げる途中で、我らが横撃を入れますか？」

「そうね桂花、その作戦で行くわ」

「春蘭！秋蘭！貴女たちは敵が袁紹軍から引き上げる途中で攻撃を

加え、敵の大将、北郷一刀らを捕えてらっしゃい」

「「御意！」」

と2人が華琳の前を去って華琳が

「さあこれでどうなるかしら…」

と今後の展開に思いを馳せていた。

今まで動きが無かった曹操軍がようやく動き始め、戦いは佳境を迎えるのであった。

第２８話

一刀たちが撤退する途中で伝令がやって来て

「申し上げます、曹操軍の夏侯惇、夏侯淵が我が軍の撤退に横入りしようとしています！」

「ご主人様、どうしますか？」

紫苑が一刀に聞くと

「そのまま横入りさせるわけにはいかんだろう、何かいい方法はあるか？」

「そうですね…、夏侯惇、夏侯淵は恐らくご主人様を狙ってくると思うから、私たちは二手に分けて、ご主人様と私で迎え撃ち、そして翠ちゃん、璃々で隙を見て向こうの軍の横を目がけて突撃してちょうだい、そして渚さんにも伝令を出して挟撃するように伝えて」

と紫苑が指示したものの、璃々と翠が一刀を前線に出すことに反対するも、紫苑が

「璃々、あなたの実力ではまだあの2人には勝てない、翠ちゃんだったら夏侯惇、夏侯淵と互角に戦えるけど、翠ちゃんの場合、一騎討ちに夢中になりすぎて指揮を疎かにしまう可能性があるわ」

と言われると2人は紫苑からそう指摘されると

「うーん、仕方がないか……」

「一騎討ちに夢中になってしまうと言われてしまうと、その可能性があるから否定はできないよな……」

紫苑から指摘されてしまうとなぜか素直に納得してしまう2人であった。

「2人とも心配するな、紫苑もいるし、大丈夫だ」

「ああそうだな、ご主人様は私に勝ったくらいだから、問題ないよな」

「そうだね、翠お姉ちゃん、私たちが敵を早くやっつけたら、敵はすぐに引き上げてくれるし」

「じゃ2人とも分かれば、すぐ動きなさい！」

「「は…はい！」」

と紫苑が学校の先生の様に指示を出すと2人もなぜか生徒の様な返事をすると、4人は軍を二手に分けた。

そして曹操軍が一刀たちの軍勢の前に立ちはだかると、軍の先頭にいる春蘭が一刀の軍勢に突撃すると

「退け退け！敵の大将はどこにいる！早く私の前に出て来い！」

「姉者…、少し落ち着いてくれ」

早くも暴走モードに入っている春蘭を宥めようして秋蘭であったが、
何処からか声がした

「何だい、猪さん？」

「誰が走りだしたら、止まらない猪武者だ！？」

自らボケ突っ込みを入れている春蘭を見て、曹操軍の兵は思わず

（「アンタのことですよ……」）

と内心思っていた……。

「へ～自分の事、分かっているね」

「だ…誰が猪武者だ！何者だ貴様！」

と春蘭が言うと

「ああ…、俺は君が探している人物だよ」

一刀が春蘭に言うと

「貴様が北郷一刀か！華琳いや…曹操様の命令で貴様を捕まえる！」

「フッ…そう簡単に行くかな？」

「そうですね、私もいますからそうはさせませんわ」

と紫苑も出てきたのを見て秋蘭が

「北郷夫人……、やはり貴女がいましたか」

それを見て春蘭が

「秋蘭？こいつを知っているのか？」

「ああ…姉者、黄巾党の乱の時に言っただろう、「天の御遣い人」の横にいる強い夫人の話を」

「おお！思い出した、秋蘭が認めた奴の事だな」

戦いの事なら、まだ記憶力がある春蘭であったが、しかし春蘭が

「ならば秋蘭、私にこいつと戦わせろ」

春蘭は紫苑に鋒先を変えようとしたが秋蘭が

「待て姉者、北郷夫人とは私が戦う、向こうも弓遣いで接近戦で戦う姉者では分が悪い、だから私が戦う、それに北郷を捕まえると華琳様は喜ぶぞ」

春蘭の操作に長けている秋蘭の華琳が喜ぶと言う一言に

「そ…そうだな、では私は北郷の相手にしよう」

春蘭が言うと、一刀がそんな春蘭を挑発するように

「おいおい夏侯惇さん、そんな猪武者さんに捕まるほど、俺は弱くないぜ」

「貴様ーーー！何度も同じことを言うな！」

と七星餓狼を振り回すが、一刀は紫電を抜かずに足裁きで躱していた。

そして春蘭が

「貴様！なぜ抜かない、その腰の物は飾りか！」

春蘭が言うも一刀は更に挑発的に

「そんなに悔しかったら、抜かせてみな」

「ふざけるなーーー！」

と春蘭が一方的に攻撃、一刀が躱すだけの展開になり、一方、紫苑
対秋蘭は

「北郷夫人、あなたの本気の実力を見せて貰おう！」

と秋蘭が素早い構えから矢を放ったが、紫苑が

「はい！」

と難なくこれを颶鵬で防御、そして

「これくらいのことで、私を撃ち取ろうとは少々甘いわね」

「さすがですな、ではこれはどうだ！」

秋蘭が連射で放つものの、紫苑はこれもまた颶鵬を扇風機のように回転させて、簡単に防御してみせた。

「クッ…流石に強いですな」

「そうかしら、あなたも相当な腕よ、では次は私の番ね」

と言って、紫苑が

「ハイ！」

と弓を放つと秋蘭も受け止めていたが、内心驚き

（「私より早い…、これは想像以上に厳しい戦いになるぞ」）

と2人の戦いは射者のプライドを掛けた戦いになった。

そして一刀対春蘭は、まだ一刀が紫電を抜かずに戦っていたが、なかなかバテずにいる春蘭に

（「しかし本当に体力だけはあるな…」）

一刀が呆れ返っていると、春蘭が

「貴様！なぜ剣を抜かぬ！」

「何度も同じ事を言わすなよ、聞こえないのか？それとも頭悪いのか？それとも両方か？」

再び挑発すると、春蘭は

「もう勘弁できん！貴様を叩き斬る！」

「それは一回でも当ててから言う言葉だな」

一刀が言うと春蘭は完全に頭に来て

「ウォーーー」

と強引に大振りの構えを見せた、一刀は春蘭との戦いをまとも勝負すれば、春蘭の馬鹿力で刀で受けると力勝負で不利になるので、挑発して冷静な戦いをさせず、そして空振りなどで春蘭の体力消耗させ、一瞬の隙をつき、翠との戦いで使った居合い抜きで勝負をつけようと考えていた。

そして一刀は居合い抜きの態勢になっていたが、春蘭は完全に頭に

きて、一刀の構えなどお構い無しに強引に一刀に打ち下ろしたが、
一刀は

「はあーーー！」

と電光石火の居合い抜きを見せると

「うぁ！」

春蘭は防御したものの、身体が流されてしまい、一刀に背を向けた状態になってしまっていた。

そして一刀は春蘭の背後を付こうとしたところ

「姉者危ない！」

紫苑と戦っていた秋蘭が割って入るように一刀に弓矢を放つと、

「ご主人様！」

紫苑の声に気付いた一刀が

「うぁ！」

慌ててその矢を躱したが、その場で転倒してしまった。

そして春蘭が、その間に態勢を立て直し、一刀に

「貰ったーーー！」

と七星餓狼を振りかぶったところ、

「そうはさせないわ！ご主人様は私の大事な人！我命同様！ご主人様の命、私が守ります！」

紫苑が言い切ると放った弓矢は、一刀を斬ろうとしていた春蘭の左目に突き刺さっていた……。

「ぐぁぁーーー」

「姉者！大丈夫か！」

「だ…大丈夫だ、秋蘭」

と言いながら、春蘭は自ら左目に刺さっていた矢を抜き、そして矢に付いていた左目を口の中に飲み込み、そして周りにいた兵士は、春蘭の行為に呆然と立ち尽くしていた。

紫苑も一刀のところに駆け寄り

「ご主人様、大丈夫ですか？」

「ああ紫苑のお陰で助かったよ」

一刀は紫苑に身体を起こして貰うと、一刀の元に伝令兵がやって来て、璃々と翠の隊、それに渚の隊が曹操軍の横撃に成功したとのことであった、その知らせは秋蘭のところにも入り、秋蘭は悔しそうな顔を向け、一刀と紫苑に

「今日のところはこれで引せて貰う…しかしこの仇、必ず取らせて貰うぞ」

静かな口調で怒りを噛みしめながら、負傷した春蘭を連れて撤退を開始した。

そして一刀は紫苑に

「やれやれこれで助かったが、曹操とも完全に敵対することになりそうだな」

「そうですね、でも覚悟されていたでしょう？」

「ああ覚悟はしているさ、でも紫苑や璃々、翠、星、蒲公英、朱里たち皆がいるから心配はしていないけどな」

「ありがとうございます、ご主人様、その期待に必ず応えるようにしますわ」

一刀の言葉に紫苑は決意を新たにし、そして璃々らに合図を送り、撤退を開始した曹操軍を追撃をさせずに再び一刀たちと再合流するよう指示した。

やがて関から本隊の撤退の様子を見ていた真里が、他の部隊にも撤退の鐘を鳴らした。

撤退の合図を聞くと

「チィ、よう仕留めきれんかったか…、一騎討ちして初めてやわ、まあしゃあない、また今度楽しみにしておくで、孫策」

「フン、それはこっちの台詞よ張遼、でも今度は決着つけるわよ」

と言いながら霞が撤退するのを追撃せず見送ると、雪蓮の近くで見守っていた明命が現れ

「雪蓮様、大丈夫ですか？」

「ああ明命、いいところで来たわ、ちょっとこれを取ってくれるかしら」

と言いながら、雪蓮は右手に持っていた南海覇王を差し出したが、雪蓮は戦いに力が入り過ぎてしまい、手が強ばり、手から離れない状態になっていた。

「流石に強かったわ、張遼は…でも今日は完全燃焼というか、いつもみたいにアレが出ないわね……？」

と最後の方は、明命に聞こえないように呟いていた雪蓮であった。

「はいいーーー」

「ぐぁ！」

星が愛紗を叩きつけていたが、この光景はすでに3度目であった。

そして

「悔しいのだ……」

「う……大丈夫か？真桜に沙和…」

「…何とか生きとるで…」

「痛いのー」

恋と戦っていた鈴々や凪たちは、恋が叩きのめしていたが、その圧倒的な力の差に立つのがやっとの状態であった。

そして愛紗が

「く…くそ、なぜ私がここまで……う…」

愛紗は今までにない屈辱を味わい、悔しさのあまり涙目になっていた、そして星が愛紗に対し

「悔しいか？実際は私とお主とはそれほど力の差はない、しかしなぜ今、このように差がついているかは、お主の武や信念が薄っぺらなものだからな」

「な…何、そんなことはない！私は……」

「では聞くが、なぜ私にあのように言われ、動揺した？自分の信念があれば決して動揺することはないはずだ」

「うっ…」

「武を奮う前によく考えろ、武を奮う時は何も考えるな、一度（ひとたび）武を奮う時は、人の命を奪うのだ、そのことをよく考えろ、考えることを忘れたら、単なる人斬りになる」

「お主の場合は、表に見える部分しか見ず、考えることを放棄しているのだ」

「……」

星に指摘されると愛紗は、無言になり聞き入っていた。

「まあ私も人のことは言えぬがな、以前主に言われるまでは、目の前の戦いことしか考えていなかったからな……」

「お主にもう一度機会を与える、自分の武を奮う意味を考えろ、そして再び会った時に主や董卓殿に対して、同じような言葉を吐いてみろ、その時は殺すからな、引き上げるぞ、恋」

星と恋の部隊は引き上げたが、愛紗たちにはそれを追撃する力などは全く残っていなかった…。

そして華琳の方も春蘭負傷の報を聞き、

「クッ！北郷一刀…、私の春蘭を傷つけるとは……」

「私の覇業に立ちふさがる男になりそうね、必ずこのお礼をさせて貰うわ…」

そう呟いた時、怒りと笑いが混ざった顔をしている華琳であった。

そして今日の戦いが終え、連合軍の各陣営は、一刀たちに散々、痛い目に合ったため、暗い雰囲気になっていた。

その中、一番の落ち込みを見せていたのが、劉備軍であった、兵の被害は勿論だが、特に将の被害が大きく、愛紗や鈴々、凪など三羽烏の負傷、そしてしばらく安静のため、明日以降現場指揮できる将が不在になり、そのため雛里が斗詩に頼み、何とか軍を後方に下がることが決まった。

そしてさっきまで雛里が斗詩と交渉して、ようやく陣に戻ってきた。

雛里を待っていた桃香に交渉の成功を伝え、桃香は安堵していたが、その後雛里は厳しい表情をして

「桃香様、愛紗さんからお話はお聞きになりましたか？」

「うん……」

愛紗らは負傷しながらも、何とか陣に戻ってきて、星とのやり取りについて、桃香に報告した、そして報告を終えた愛紗は、最後に

「今まで私たちのしたことは間違っていたのでしょうか……」

と自信を失い、そして桃香も慰めはしたものの、その言葉は今の愛紗には通じなかった。

それを桃香が雛里に言うと雛里は

「それで桃香様、今後はどうお考えですか？」

「……雛里ちゃん、私たち連合軍を離れよう…」

「桃香様、それは無理です」

「え？」

「今、桃香様は平原の太守で、ほぼ袁紹様の支配下近い状態です、この時点で謀反を起こされますと私たちは根拠地を失います」

因みに黄巾党の乱後、華琳はエン州の太守になり、雪蓮は、七乃の妨害により、旧家臣達の合流が認められていない状態であった。

「それに北郷軍の言うことが事実にしても、敵はそれを公にしておらず、この時点での謀反は、何の正当性もなく、逆に呂布さんに敗れ命乞いするために下ったと思われます」

「もし謀反を起こされるのでしたら、今まで行なわれたことを全て無にしてしまうでしょう」

雛里から言われてしまうと桃香は諦めきれないのか

「でも……」

「今は何を言っても仕方がないです、まずは愛紗さんたちが怪我をしてどうにもならない状態ですので……」

桃香の言葉を遮り、雛里は

「今回の作戦については、私に責任があります、ただ今後について

は桃香様にも色んな意味で決断をしていただきますが、桃香様には皆の命を預かっている責任は分かって貰わないといけません、ですので思い付きの決断だけはしないようお願いします」

雛里が言うと桃香はその言葉に対して小さく頷いただけであった……。

そしてようやく氾水関の初日の戦いが終わった。

第２９話（前書き）

皆様のおかげでＰＶ１０万アクセスを越え、お気に入りも１００件を超えることができました。

今後とも応援よろしくお願いします。

第２９話

～一刀視点～

取り敢えず、初日の戦いを終え、皆、戦いの感想を語って盛り上がっていたが、璃々が紫苑と自分が射た矢で袁紹がおもらししたことを話して、皆は大笑いしていたが、約１名は何か他人事とは思えなかった表情をしていたのは気のせいだろうか……？

翌日、連合軍は袁紹を中心に攻撃を加えてきた、特に袁紹は昨日の恥を俺ら、全員殺して記憶から抹消したいのか、無茶苦茶な攻撃をしてきたが、無秩序な攻撃では関は陥落できない。

逆に不気味だったのが、曹操軍と孫策軍で、曹操軍は昨日夏侯惇が負傷したにも関わらず、早々復帰して前線で戦い、そして紫苑への敵討ちに静かに燃える夏侯淵も的確な射るから迷惑極まりないが、今のところ損害を押さえたい曹操の意向もあり、全力では攻めていない状態である。

一方孫策軍も、本気で攻め込んでいないが、隙があれば、関を奪い取ろうという動きをしている。

あとの諸侯は攻めるも兵の士気や練度も今一つなので、攻めてきても脅威ではない。

あと桃香の軍は、全く攻めてこないが物見の話では、現在後方待機になっている状態で、星の話では昨日、俺や月に対して暴言を吐いた愛紗を散々打ちのめし、恋も鈴々たちを打ちのめしたため、現場指揮する人物がいないらしい。

しかし、星と愛紗の話の中で、愛紗たちは袁紹の嘘を完全に信じていたそうで、それを星と恋が愛紗たちに指摘して完全に叩きのめした。

愛紗は、以前紫苑が言ったことを完全に忘れているのか、若しくは桃香の忠誠心で自分を見失っているのだろうか……、そして桃香も単純に袁紹の嘘を信じていたんだろうな、それで今後はどうするつもりかな……。

俺も他人を心配している場合ではないな……。

～一刀視点終了～

連合軍が汜水関を攻略開始してから2週間が経過して、一向に落ちる気配が無かった、そんな中、前線から外れて休息中、孫策軍の陣において冥琳が、前にある汜水関を見ていると

「関から出ている炊煙がいつもより多い……、まさか！」

「誰か、雪蓮を呼んできてくれ」

と伝令兵に雪蓮を呼びに行かせた。

炊煙を見て冥琳は

「この好機、利用させて貰うぞ……」

と呟いていた。

一方、その頃華琳も炊煙の多さに気付き

「それで桂花、貴女も敵が撤退間近だと思っているのね」

「はい華琳様、現在敵が我々を押さえ込んでいるにも関わらず、炊煙を多く出ていることは、出陣の可能性はあるでしょうが、我々が攻め込んで現在では、打って出ることは難しいでしょう、ですので今は撤退の可能性が大だとと思います」

桂花が意見を述べると華琳は、

「取り敢えず、春蘭、秋蘭、季依あなたたちはいつでも兵を動かせるよう準備しておきなさい」

「「「御意」」」

華琳は自分と桂花の意見が合致していたことから、春蘭らに？水関占領の準備を進めた。

一刀のところに、ちょうど虎牢関を守っている朱里から伝令が来て、虎牢関の工事が終了したので撤退して欲しいとのことであったので、軍議をして、まず歩兵や弓部隊を夜陰に紛れて後退、その部隊を率いるのが、董卓軍は恋と音々音、北郷軍は璃々と真里である。

最初、璃々は一刀たち一緒に行動したいと主張したが、紫苑が

「あなたが、翠ちゃん、星ちゃんや渚さんに勝てるのだったら替わってもいいわよ」

怖い笑顔で言われると

「……ごめんなさい、まだ無理です……」

まだこの3人に勝てない璃々はあっさり引き下げた。

横で聞いていた一刀は笑いながら

「璃々我慢しろよ、では碧さん、紫苑、翠、星、渚さんに霞、華雄らの将と騎馬隊と弓騎隊で朝駆けの奇襲を加えて、そのまま連合軍の陣を横断して、俺たちは関に戻らずに迂回して虎牢関に引き上げる、奇襲時は曹操軍と孫策軍の方に近寄らずに行くからな」

一刀が作戦を告げると、翠が

「なあご主人様、なぜ曹操軍や孫策軍を避けるんだ?」

「正直、手強い敵だから、この両軍を相手にしたら面倒になる、まずはそれ以外の軍の兵を減らすのが一番だからな」

「そうやな孫策軍も手強かったし、まず奇襲を確実に成功させるのやったら、それが正解やわ」

「ふ～ん、分かったよ、ご主人様」

と一刀の意見に翠と霞も同意し、他からも異論が無かったので、方針が決まった。

そして翌朝の日の出が出るか出ない時に？水関の門が開き、朝駆けの奇襲が始まった。

昨晩から警戒していた曹操軍と孫策軍以外の部隊は、完全にこの奇襲の備えがなされておらず、完全に混乱状態になっていた。

そして奇襲するのを見届けて、冥琳が明命を呼び、大至急、関の調査に向かわせた。

そして冥琳は、横にいたやや拗ねている雪蓮に

「なんだ不服そうだな」

「うーん、何で敵がこっちこないかなと思って」

「はぁ、まだ戦いは続くのだから、我慢しろよ」

「はいはい分かってるって、それでこれからどうするの？」

「明命の偵察が終わり、何も無ければ祭殿と明命に関の一番乗りをしてもらう」

「えーーー、私が行きたい」

「却下だ、万が一のことがあるからな、祭殿、お願いします」

「分かった、任せてくれ」

「それでだ雪蓮、お前をこのまま放っておくと、勝手に飛び出して、敵軍と戦いを挑みに行きそうだから、私と一緒に居てもらうぞ」

「ぶーぶー、人を戦闘狂みたいに言わないでよ」

「ほう、そうだと言い切れるのか？」

「うっ……自信はないかな？」

冥琳に指摘され、変に素直な雪蓮であった。

一方、曹操軍も一刀の奇襲を見て、曹操軍の方には攻撃の恐れがな

いと分かり

「仕方ないわね、こちらに掛かってこないから」

「春蘭、秋蘭、季依、貴女たちは今から関に攻撃する準備をしなさい」

「あと孫策たちが関の一番乗りを狙っているから、早く準備して行きなさい」

「「「御意！」」」

3人はただちに軍を動かす準備をしていた。

「今回はあなたにしてやられたけど、次はそうはさせないわよ、覚悟しなさい北郷一刀……」

すでに次の虎牢関に想いを馳せている華琳であった。

一方、一刀らは各陣を突破して、最後方にいる桃香の陣に突撃を開始した。

さすがに最後方になると、備えも間に合っていた。そしてようやく怪我から復帰していた鈴々や凪、真桜、沙和はそれぞれ指揮をして何とか防戦していたが、防衛線の一角が破られ、一刀と紫苑、星の部隊が桃香の本陣まで迫った。

そして本陣に迫ると愛紗が立ちはだかっていた。それを見た星が

「久しぶりだな、関雲長殿、あれから結論は出たか？」

星が愛紗に言うと愛紗は暗い表情を出して

「……正直言って私は迷っている…まだ結論が出ていない、そして

今、私の心は出口のない迷路に迷い込んでいる気分だ…」

前回と会った時と違い、全てにおいて迷いが出ている愛紗を見て一刀が星を制して

「愛紗、事情は星…趙雲から聞いた、では一つ聞きたいが愛紗のいう正義は何かな？」

一刀から聞かれる愛紗は困った顔をしながら

「……ありきたりの答えですが、民を困らせている悪を倒し、民を救うことです…」

愛紗から聞くと一刀は

「うん、確かにその答えは、間違ってはいない、それではそれを踏まえて聞くが、今の俺たちは民を困らせている悪かな？」

一刀に言われると愛紗は

「確かにそこにいる趙子龍殿が言われるまで、あなたや董卓殿を悪と断じていました、しかしそれを確かめもせずにいた武を奮っていた自分が怖くなったのです……、本当に自分が正しかったのかと……」

愛紗がそう答えたが、一刀は前史や今までででもここまで弱気な愛紗を見るのは初めてだった。

そして一刀の横にいた紫苑が

「愛紗ちゃん、私からも一つ聞くけど、この世に絶対の正義はあると思う？」

紫苑に尋ねられると愛紗は

「絶対の正義…、恐らくないと思います……」

「正解よ愛紗ちゃん、正義の解釈も人によったり、その時の状況や立場によって変わるのよ、だから私から言えることは一つ、多数の人間を幸福に導くことができる行為、それを行なうことができるのを正義だと思うの」

「正義の解釈なんて色々あるのよ、一つの形なんてないのよ、だからそれを自分の目や耳で確かめて、それで皆にとってどれが幸せか考えて欲しいわ」

紫苑は愛紗を諭すように言った。

すると愛紗は一刀たちに頭を下げ

「先の暴言、大変申し訳ない…、貴方の言葉でまだ迷いが晴れた訳ではありませんが、私のやるべきことが分かったような気がします」

一刀たちは、愛紗が先程よりは顔つきが良くなっているのを感じていた。

すると、本陣から桃香と雛里がやって来て桃香が

「愛紗ちゃん！大丈夫？」

「大丈夫です、桃香様、ご心配おかけしました」

「よかった……」

そして一刀たちの方を見て桃香は単刀直入に

「一刀さん、いったい洛陽はどうなっているのですか？」

「桃香、それを教えてもいいけど、その答えを聞いてどうするんだ？それを聞いて有利な方に寝返るのか？」

一刀が厳しい口調で聞くと桃香が

「そうではありません！私はただ洛陽の人が困っているかどうか聞きたくて…」

一刀は桃香の言い方に何らかの不快感を感じ

「じゃあ教えてやるよ、洛陽は董卓が来てから治安とかは安定している、俺たちは色々な情報を調べて、袁紹の嘘が分かったから董卓に付いた」

「それでだ、これを聞いてどうするんだ桃香？」

桃香は少し間を空けて

「一刀さん、今更ですが話し合いって無理ですか？」

一刀たちは桃香の発言に唖然とし、そして横にいた雛里も

「あわわ……、何を言っているんでしゅか桃香様！」

雛里は桃香の発言にパニック状態になっていた。

それを聞いた一刀もさすがに怒りを隠そうとせず

「……桃香、本気で言っているのか？」

「…はい」

桃香が返事をすると一刀は無言で紫電を桃香の顔に向けた。

それを見た愛紗が

「一刀様！」

制止しようとするが、紫苑が

「大丈夫よ、愛紗ちゃん、ご主人様は斬るつもりはないから」

紫苑が言うと一刀が

「さすがに分かっていたか」

紫苑の洞察力に褒めて、そして桃香に

「桃香、君が言っているのは、自分がこういう風に有利な立場に立って、話し合いしましょうと言っているものだ、君の場合、それも自分の力では無く、他人の力を利用してな」

そして一刀は紫電を下げ

「では俺から君に一つ聞きたい、君の理想を聞かせて欲しい」

一刀が桃香に聞くと

「私はこの国を皆で笑顔で過ごせる平和な国にしたい、それだけです…」

桃香が自分の理想を言ったが、一刀はさっきの自分の中にあった不快感の理由が分かった。

（「桃香は理想は立派だが、今のところそれを成し遂げるための方策や力を持っていない、だから他人や家臣達の力を利用するのは分かる、しかし桃香は無意識に他人の力に依存し過ぎているし、更に自分の手を汚していない感じだから、言う言葉も全く重みがない……」）

と一刀は感じ取った。

「桃香、君の理想は立派だ、でもはっきり言うが今の君にそれを言う資格も力もない」

「君の言葉は全てにおいて軽過ぎる、これが全てだ、そして君の力無き理想は、皆にとっては甘い毒で迷惑にしかならない理想だ、だから今のところ、君の意見や理想は俺は一切受け付けない、もし俺に対して自分の意見や理想を通すのであれば、俺にその力を見せてくれ、そうでなければ俺は認めない」

一刀はそう言い切った。

それを聞いた桃香は

「そんな……」

一言言って立ち尽くしていた。

すると、劉備軍の他の部隊が桃香らの危機を感じ、増援にやって来たことに気付き、紫苑と星が一刀に引き上げるように告げると一刀が最後に桃香と愛紗に

「これでも2人の事は期待しているのだから、頑張ってくれよ」

そう言いながら2人の返事を聞かず立ち去って行ったが、この一刀の助言を聞いた桃香と愛紗の2人の間に、深い溝が出来てしまうとは今の時点は想像すら出来なかった……。

第３０話

一刀が？水関を放棄すると、関は曹操軍と孫策軍が占拠していた。

そして連合軍が？水関において、軍の再編成をしているころ、一刀たちが虎牢関に到着したが、皆は工事してあまりにも様変わりしている虎牢関を見て、日本の城郭の知識がある一刀と紫苑と璃々以外は呆気に取られていた。

一刀が到着する前に月や詠、護衛の馬休並びに避難民はすでに長安に向けて出発していた。

そして再編成が終わった連合軍が虎牢関に攻めてきたが、新たに変わった虎牢関を見てを

「「「「「……」」」」」

こちらも大半の諸侯は言葉を失っていた。

というのは、一刀の命で朱里を中心に虎牢関の兵、月の軍勢や避難民を総動員して虎牢関の工事を行っていた、そして門付近以外の平地を全て堀が作られていた。

その堀は深さ5間（約9メートル、1間は約1，8メートルで計算）、堀の幅は１０丈（約３０メートル、1丈は約3メートルで計算）あり、そして堀の内部には2重の柵が構えられていた。

更に城壁の上には、堀を作った際に出来た残土を土嚢として積み上げて、盾代わりに利用し、そして
朱里が開発した新型の投石機も装備されていた。

それを見て、先鋒の麗羽（？水関の戦いで手柄を上げれなかったのと紫苑と璃々への復讐戦）や美羽
（初戦の失敗を麗羽に咎められたため）の両名は

「おっほほほーーー、あんな堀なんて、大したことありますわ、華麗に突撃ですわ、おっほほほーーー」

と必要以上に声を上げ、こめかみに怒りマークをを付けている麗羽と

「こんなこと早く終わって、蜂蜜を飲みたいのじゃ」

とぼやいている美羽が、無策で突撃を開始した。

そしてその様子を見ていた各陣営は

～曹操軍～

「せっかく決戦を楽しみにしていたけど、相手が籠城戦では相手も出てこないわね」

と残念そうな口振りをしていた華琳だが、大幅に変わっていた虎牢関を見て

「でも元々難攻不落と言われていた虎牢関に、更にあのよう工事を念入りにして、私たちを防ぐなんて面白い考えだわ」

華琳が一刀を褒めていたところ、春蘭が

「華琳様！あのような男を褒める必要はありません！私が今から出て、関を落としてきます！」

と春蘭が主張するも

「あんたね、どこ見てるのよ！今、私たちが持って来ている梯子とかは堀が掘られているおかげで、城壁の上まで届かないし、門は一つしかない上、門への道が一本道になっているから、ほとんどの兵が門にたどり着くまでに弓矢でハリネズミにされてしまうわよ！」

春蘭の発言に桂花もキレてしまい、桂花自身のこの発言自体が現状、効果的な関への攻撃方法が見出だせいない状態が表わになっていた。

そんな中、秋蘭が

「華琳様は、今回の関への攻撃はどうお考えですか？」

「正直言って、短期間で落とせる物ではないわね、でもねこんな危険な事を我が軍だけで負う必要はないわ、じっくりと考えましょう」

華琳は虎牢関を見て、無理攻めをせずに今後のために兵力温存をする考えになっていた。

～孫策軍～

「正直、これだけ用意周到に準備されたら厳しいな」

「さすがに冥琳でもいい案は浮かばない？」

雪蓮が言うも

「さすがに厳しいな、この状況では策とかが通じる場所ではない、更に今回は内応とか内部からの撹乱も無理な状態だからな」

「そうね、私の勘も無理しない方がいいかなーと言っているわ」

「取り敢えず、祭殿に言って無理せずに遠くから弓を射るくらいに攻撃はお茶を濁しておこう」

「まあ今、攻めている袁術ちゃんに関を落として貰うことを期待しておくけど」

「フッ…、ああそうだな、今の主に関を落として貰うことを期待しておくがな……」

雪蓮と冥琳は、言葉と裏腹な表情をしながら話をしていた。

～劉備軍～

「……現状の我が軍の兵力や装備では、関への攻撃は余りにも危険です」

と雛里が桃香たちに関への攻撃の危険を説いていた。

「それではどうすればいいのだ」

鈴々が言うと、雛里は

「今の私たちの兵力では関を落とすことは出来ませんので、攻撃命令があった時は、攻めた振りをして、関に何らかの動きがあった時に動く、これしかないです」

と雛里が言うと愛紗は一刀と助言を受けてからは何事にも考えるようになり

「うむ…、雛里が言う通り仕方がないか…」

「何や、愛紗、えらい珍しいな、雛里がこんな消極的な策を出したら、軟弱みたいことを言って怒るくせに」

真桜から指摘されると愛紗は

「な…何だそれ、それでは私がまるで単なる頑固者みたいではないか？」

と驚いていると

「自覚がなかったのか……」

「気付いていないのーー」

凪と沙和から突っ込まれていた。

そしてそれを聞いていた桃香が一刀のアドバイスで変わろうとしているのを見て、そして微笑ながら、でも皆に聞こえないような声で

「やっぱり力を付けないといけないよね……」

と一人呟いていた。

一方、虎牢関では

「は…はわわ、ご主人様、敵が来ましゃた」

「落ち着け、朱里、そう簡単にこの関は落ちないだろ？」

「そ、そうでした」

「フフフ、朱里ちゃんもさすがにこれだけの軍勢が集まって緊張しているのね」

「朱里お姉ちゃんしっかりしてよ～」

一刀と紫苑、璃々が緊張している朱里を宥めていた。

「ご主人様、これからどうするんだ？」

「翠よ、お主は話を聞いていなかったのか？虎牢関は一切打って出ずに籠城戦になることを」

「わ…分かっているよ、そういう意味で言ったのではなくて、ここを防ぐのはいいけどさ、撤退する時どうするんだ？」

「えー、私たち出番ないのー」

翠や星、蒲公英が言っていると、一刀が

「蒲公英は不満だろうけど今回は時間稼ぎの防衛が主だからな、打って出る必要はない。取り敢えずは今いる１０万の軍勢を４つに分けて、兵の疲れを考えて、４交替制にして防ぐことができるだろう、撤退時期については、しばらく防衛してから月たちが長安に到着してから順次撤退して行くことにするぞ」

と言うと蒲公英はやや不満そうであったが、紫苑や朱里、その他も反対の意見もなく、こうして虎牢関の防衛戦が始まった。

第３１話（前書き）

少し短いです。

第３１話

虎牢関の戦いは、袁紹と袁術の無策な攻撃などで当然落ちるわけがなく、そして他の諸侯たちも虎牢関の守りの堅さのために兵力損失を控え、攻撃もおざなりなものになっていた。

そして連合軍の士気も落ちてきて、そんな中行われている軍議も……

「キーーー、皆さん何をやっているのですか！あんな関を落とすのに手間取るなんて！」

麗羽が一人イライラしていたが、周りはしらけムードで、そんな中麗羽が、桃香が視界に入り

「劉備さん、あなた何も戦果を上げていないのですから、そろそろあなたの軍勢に総攻撃を掛けて貰お……」

麗羽が言うとするがその途中で華琳が

「麗羽、それはあなたにも言えるわね？それらしいことを言うなら、あなたこそ仕事らしい仕事をしたらどうかしら？」

「ふむ、それは言えるな。劉備の軍は？水関で先陣を切って、痛手を負っているのに対して、袁紹殿の軍は関や？水最初の虎牢関の攻撃でも被害は言う程受けていないではないのでは？我々は袁紹殿を総大将と仰いでいるが、決して家来ではないがな……」

雪蓮の代理（雪蓮はサボりという病気）に軍議に参加していた冥琳が冷たい視線を向けながら麗羽に対して、批判的な発言をすると、他の諸侯も麗羽、更に同じ袁家の袁術にも批判が相次いだ。

そして？水関を陥落させている曹操・孫策軍の意向を無視できず、更に他の諸侯の批判も出てきていたことから、そばにいた斗詩が

「姫…、このままでは連合軍が崩壊する恐れが……」

と言うと麗羽が渋々ながら

「わ…分かりましたわ！この私たちが再び先陣を切って、関を落としてみせますわ、おっほほほ～～～」

こうして再び麗羽と美羽が先陣を切ることが決まった。

軍議が終わると桃香と雛里が華琳のところにやって来て

「曹操さんありがとうございます」

「ありがとうございます、本当に助かりました……」

2人が華琳に礼を言ったが

「礼を言われるほどのことはないわ」

「劉備、あなたに一つ聞きたいわ、あなたが目指すものは何？」

「私はこの国をみんなが笑顔で過ごせる平和な国したいのです」

桃香が華琳に言うと、華琳は軽く一瞥して

「フッ…分かったわ劉備、でもね一つ忠告しておくわ、あなたもっと大きな力を付けなさい、さもないとあなたが言ったことは一生実現できないわよ」

華琳はそう言って、その場を立ち去った。

そして残された桃香と雛里だったが、雛里が

「桃香様…」

呼び掛け、返事が無かったので、気になり桃香の顔を見ると桃香の目から涙が出ていた……。

そして桃香は

「う……雛里ちゃん……、私たち力を付けないと誰も相手にしてくれないよね……、悔しいよ……」

泣きながら雛里に語っていた。

それを横で聞いていた雛里も同じく、一刀や華琳の言われたことに内心悔しい気持ちを持っていた、そして桃香のために何とか力を付けたいと思っていた、更に今回虎牢関で一刀が出した防衛策が、朱里が提案したと思い込み、軍師として差が開いたのではないかと、嫉妬心も湧き始めていた。

（「このままでは私、朱里ちゃんに負けてしまう…」）

雛里は桃香に

「桃香様、このままでは私たちは、取り残されてしまいます」

「私たちが力を付けて、安定した勢力を築くまで、一旦、桃香様の理想を捨てていただきますか？」

「それはどういうこと…？」

桃香の疑問に雛里は

「今の我々には、桃香様の理想を掲げるための力は全くありません」

「ですが私は桃香様に力を付けるためには、どんなことでもする覚悟です、だから桃香様にも覚悟を決めていただきたいのです」

雛里から言われると桃香は少し考えた後、涙を拭い去り、そして

「分かったよ雛里ちゃん、私、雛里ちゃんの言葉を信じる、だから一緒に頑張ろうね」

二人はこうして決意を新たにしたのだが、この二人の決意が、愛紗との対立を作る切っ掛けになるとは今の二人には想像も出来なかった……。

一方、連合軍の軍議前日の虎牢関では、一通の書状が一刀たちに届いていた。

それは先に長安に向けて出発していた月たちが無事に長安に到着したとのことであった。

それを聞いた恋や霞、華雄、音々音の董卓軍の将たちも安堵の表情を浮かべ、そして一刀たちも一つの山を越えたことに安心をしていた。

そして朱里が

「それではご主人様、撤退する方向で話を勧めてよろしいですか？」

「ああ、月たちが長安に到着した今、俺たちもここにいる理由もない、連合軍の追撃を完全に諦めさせるために、最後に袁紹らに一撃を加えて撤退したいが」

一刀がそう告げると真理が

「なあ朱里、最後に一撃加えるのだったら、あれ使ったらどうだ？」

「そうですね、せっかく持ってきたのですから使いましょう」

朱里が更なる兵器を投入するのを予告すると

「しかし関を堅固にして、更にあんな物騒な物を持ち込んで来ている時点で負ける気はしないわ」

「主は、袁紹たちには全く容赦しませんな」

「そうだな、ご主人のやる事物騒この上ないな」

「蒲公英、敵が気の毒に思うな～」

「俺、味方で良かった…」

「でもこれを使えば確かに撤退は楽になりますわね」

「しかしあんな物騒な物まだ持っていたかと思うとゾッとするわ」

「霞、私もそう思うぞ、私なんか先陣切って、あれを浴びてしまうことを考えると……」

「か…華雄、変なこと想像するなです」

「ＺＺＺ～～～」（居眠り中）

それぞれ言っていると朱里が

「では撤退の手順ですが、まず最初に碧さん、鉄さん、渚さん、真理お姉さんは騎兵中心で３万の兵を連れて撤退して、函谷関を固めていて下さい」

「その後恋さん、華雄さん、音々音さんたちは５万の兵連れて撤退して下さい」

「そして残りの私たちはもう一度連合と戦ったあとに撤退します、皆さん意見はありますでしょうか？」

朱里が周りを見回すと、特に意見が無かったので、これで最後の軍議が決した。

そして皆が準備のために部屋を出たあと、部屋には紫苑と璃々が残り

「ご主人様、何とか月ちゃんたちが長安にたどり着いて良かったですわ」

「さすがご主人様、前は月たちは命は助かったけど、名前を失って嫌な思いをしたけど、今回はうまくいったね」

2人は一刀を褒めたが、一刀は

「璃々、まだ戦いは終わってないんだ、うまくいくのは最後の戦いが終わって、俺たちが無事長安に到着して、初めて成功なんだ」

一刀から言われると璃々はやや拗ねた顔をしながら

「は～い、分かっているよ」

「でも最後のもう人踏張りだ、紫苑、璃々頼むぞ」

一刀から言われると2人は

「分かっていますわ、最後までやり遂げましょう」

「うん、頑張るからね」

3人はこうして虎牢関最後の戦いの準備を始め、そして碧たちが撤退してから2日後、袁紹たちが総攻撃を仕掛けて来たのであった……。

第３２話

前日にほとんどの部隊を撤退させた一刀たちは、現在虎牢関で残っている将は、一刀、紫苑、璃々、翠、星、蒲公英、朱里に霞であった。

そして、城壁で連合軍を待っていた朱里は一刀に

「ご主人様、最初の守備は普通で構いませんが、途中からわざと抵抗を緩めて貰ってもいいですか？」

朱里が提案すると横にいた翠と蒲公英が

「え？何でわざわざ緩める必要があるんだ？」

「そうだよ、そんな敵を片っ端からやっつけたらいいのに」

そう言っていると星と霞が

「翠に蒲公英、朱里が何も策がないのにそんなことは言わないだろ？」

「そうそう、少なくとも朱里はウチらより頭はいいから、最後まで話を聞こうや」

と言われると翠が

「そう言われるとまるで私らがまるで馬鹿な子みたいじゃないか……」

「ちょっと待ってお姉様、私まで馬鹿の仲間に入れないでよ」

翠と蒲公英が漫才をしそうになったので朱里は構わずに話を続け

「それで防御の手を少し緩めて、ある程度、敵の兵を引き寄せます、そしてまず城壁から敵軍の中にあれを投げれ入れます、その後に紫苑さんと璃々さんらに……を使っていただきます。その後に止めに城壁からと投石機を使って、第二段階の策を実行、それで敵が混乱している隙に撤退を開始しますので、特に紫苑さんや璃々さんに無茶な事をやって貰いますが、大丈夫ですか？」

朱里が紫苑と璃々に確認すると

「私は問題ないわよ」

「多分、大丈夫じゃないかな？」

2人が言うと、朱里も

「最初は失敗しても問題はないのですので、安心してやって下さい」

「まあ璃々にとっては、いい訓練になるから助かるわ」

紫苑も気楽な口調で返事をしていたが、璃々は

「うーんあれ、まだ難しいから…」

難しそうな顔をしていると一刀が璃々の頭を撫でながら

「璃々、お前なら大丈夫だから、自信持てよ」

璃々を励ますように言うと

「うん、分かったよ、ご主人様頑張るから見ててね」

一刀が璃々に声を掛けると表情に少し余裕ができ、それを見ていた紫苑が

「相変わらず、ご主人様はお優しいですね…」

「でも…その割には喜んでいるけど？」

「フフフ…、それは2人とも私の大事な者ですから…」

この時の紫苑は、2人を見守る母親の様な顔をしていたのであった。

そして翠が

「ご主人様、紫苑、そろそろ敵が来たぞ」

と声を掛けると一刀が

「ありがとう翠、それじゃ皆、総員戦闘態勢を取れ！」

こうして一刀が命令すると、最後の虎牢関の戦いが始まろうとしていた。

袁紹・袁術両軍はさすがに何度も関を攻めていたので、学習能力を身に付けてきたのか、楯を全面に出しながらじりじりと前に進んできた、それを見ていた蒲公英が

「楯を使うなんて、やっと袁紹たちにも学習能力というのが付いたのかな？」

「いやあれは袁紹や袁術が学習したというよりは顔良や張勲たちが知恵を絞ってやっているという感じだろな」

「それで朱里よ、このまましばらく敵を攻めさせていいんだな？」

星が確認すると、朱里が

「構いません、このまましばらくは好きに攻めさせて下さい、その間にこちらも準備しますので」

朱里は敵が予想通りの動きをしていたので、安心していた、そして袁紹軍は

「おっほほほ～～～敵は私たちに恐れをなして、抵抗が弱くなっていますわ、顔良さん、文醜さん、さっさと関を落としてきなさい」

「はい…（抵抗が弱くなっているって…罠かも、でも城壁に辿り着くには絶好の機会、勝負を掛けます）」

「あらほらさっさ～」

袁紹軍が動き出すと

「うーー、麗羽に負けていられないのじゃ、七乃、関を攻めるのだ」

「はいはいー、皆さん関に攻撃して下さいー」

袁紹軍に続き、横にいた袁術軍も総攻撃を仕掛けて来た。

その動きを見た朱里が

「では兵士さん、順番に箱を敵さんのいる間に投げて下さい」

朱里に言われると投石機に鉄箱を積み、そしてその箱を袁紹軍と袁術軍の兵の間に投げ込んだ。

その鉄箱は正方形で密封状態にされており、大きさは縦横2尺（1尺＝約33，3センチ）厚さ5分
（1分＝約0，33センチ）で作られ、その中には油と鉄菱と釘を

入れていた。

そして鉄箱が投下されると、紫苑と璃々が予め準備されたいた鉄弓矢の先端に油を染み込ませた火矢を2人共放つとそれぞれ投下された鉄箱に見事に命中した。

そしてしばらくすると

「ドカーン！」

「バーン！」

爆音が轟くと同時に鉄箱に入っていた鉄菱や釘なども一緒に飛び散りると箱の周りにいた袁紹・袁術軍の兵士たちを薙ぎ倒していった。

そして鉄箱がどんどん投下され、あちらこちら爆発音が起こる度に敵は混乱していった。

因みにこの鉄箱の名を「爆散箱」と名付けていた。

更に爆散箱の投下が終わると、今度は城壁並びに投石機から木樽が投げ込まれた。

木樽が地面に叩きつけられると見事に割れて中か油が広がり、そして城壁からは更に油を直接敵兵に掛けられていた。

それを見ていた一刀は、悲しい表情しながら無言で火の付いた松明を取出すと、それに気付いた紫苑が

「ご主人様、辛いですか？」

紫苑が心配そうに来たので、一刀は

「…辛くないと言えば嘘になるが、ただ命令を下すだけの方が余計

嫌だからな、命令した限りは、自らも実行しないとな」

一刀がそう言うと紫苑は微笑みながら

「やはりご主人様はご主人様ですね」

「でも私はそんなご主人様を大好きですわ、一生離しませんわよ」

「そうだよご主人様、ご主人様だけ苦しむことはないよ、ご主人様の苦しみは私たちと一緒に分かち合おうよ」

「私は何があってもご主人様に付いて行くからな」

「主、私も主が泣こうが嫌がろうが一生付いてまいりますぞ」

「ご主人様、私、ご主人様に誓ったあの言葉忘れていないからね」

「好きな人のためなら、私、何でも出来ますよ」

紫苑に続いて、璃々、翠、星、蒲公英、朱里が一刀を心配して想いを改めて語った。

それを聞いた一刀は勇気を奮い

「皆ありがとう、これより敵に対し火攻めを行う」

と言って一刀が松明を投下すると皆、一斉に松明や火矢を放つと袁紹・袁術の両軍は爆散箱の攻撃に火の海にも包まれしまい、両軍は６割の兵を損害を出してしまった。

一刀たちは、両軍の混乱を見届け、無事虎牢関を撤退することができたのであった。

～曹操軍～

本陣の陣幕内で読書をしていた華琳のところに慌てて姿で春蘭が入ってくると

「華琳様！大変です虎牢関を見て下さい」

戦においては驚くことが少ない春蘭が慌てているので華琳は春蘭と一緒に軍の先頭に来ると爆発音と関の下が火の海に広がっている風景を目にした。

関まで偵察に行っていた秋蘭が帰ってきて、関での戦いを華琳に報告すると、それを聞いた華琳が春蘭と秋蘭に

「2人には正直に言うわ、今回は何も知らずに私たちが関を攻撃をしていたら麗羽たちと同じような目にあったかもしれないわね……」

「でもこれでこそ、この戦乱を統一する楽しみが増えたわ、北郷一刀よこれからが本番よ！春蘭、秋蘭付いて来なさい！」

「「ハッ！」」

華琳は気を取り直し、２人を連れて自軍の本陣に戻って行った。

～孫策軍～

雪蓮と冥琳と祭が虎牢関の様子を見ていると、偵察に出ていた明命が戻り

「袁術軍は約半数以上の兵が損害を受け、袁術様の無事が確認されました」

そう報告すると、雪蓮が

「あ～残念、袁術ちゃん死ななかったの～」

「でも雪蓮よ、袁術軍もこれだけ被害を受けたのだ、私たちが動く時は楽になったと言うものだ」

「そうですぞ策殿、これから休まる暇はないですからな、しっかりとやっていただかないと」

「分かっているわよ、2人とも、まずは袁術を倒すためのお返ししないとね」

「ああ分かっているさ」

「それにはあと蓮華殿や穏、思春たちの力も必要ですぞ」

「そうね、あの子たちの力も必要になってくるわね……でも北郷一刀、あなたは私たち孫呉の味方になるか敵になるか、どちらにしても楽しみだわ……」

雪蓮は袁術から独立を考える一方、一刀についても興味津々になっていたのであった……。

～劉備軍～

袁紹・袁術両軍の混乱を見ていた雛里は

「桃香様、今すぐ虎牢関の占領の兵を出しても宜しいでしょうか？」

桃香に進言したが、一緒にいた愛紗が

「ちょっと待て雛里、まだ前線は混乱しているだろうし、まだ関に兵が居るかもしれないだろ？」

愛紗が待ったを掛けたが雛里は

「愛紗さん、その心配は不要です、今、関の城壁を見たら兵の姿はなく、そして城壁からも煙が見えます。あれは恐らく城壁に備え付けていた投石機を私たちの手に渡らないように燃やされたと思われますので、今、この機に乗じて、虎牢関を占拠すべきです」

雛里が力説すると桃香が雛里の言葉を信じ、迷うことなく

「じゃあ雛里ちゃんの作戦に乗って、愛紗ちゃんに凪ちゃん、危ないけど2人で虎牢関を占拠してきてくれるかな」

桃香からそう言われると愛紗も

「分かりました桃香様、では行ってきます」

「了解しました」

愛紗・凪の部隊は未だ混乱している袁紹・袁術軍を避けて、関に辿り着き、そしてどさくさ紛れて無人の虎牢関を占拠し、劉備軍が更なる飛躍する足掛かりを掴んだのであった。

撤退した一刀たちに追撃する部隊もなく、途中で恋たちと合流、そして函谷関で碧と合流した。

そして将を誰一人欠けるなく、長安近くまで帰還していると長安の城壁に「董」の旗がなびいているのを見て一刀は少し涙目になっていた。

それを見ていた紫苑が

「どうされましたご主人様？」

「…ああ、皆のおかげで月たちが今回は無事で良かったと思ってさ

と思ったら、思わず嬉しくて涙が出そうになってさ」

「これもご主人様が月ちゃんたちを助けようとしたから出来たことですよ、もっと胸を張って下さい、私の愛するご主人様」

「ありがとう紫苑、もっと紫苑に認めて貰えるよう頑張るよ」

「あらあら、私はもうご主人様の虜になっていますのに」

一刀たちはそう言いながら、軍勢は無事長安に到着し、反董卓連合との戦いもこれで幕を引いたのであった。

第３３話（前書き）

最後のオマケは無茶苦茶ですが…

第３３話

長安に戻った一刀たちは、まず領内の内政建て直しや部隊の再編などに取り掛かった。

月や詠などの董卓軍の将も手伝ってくれたので、予定よりも早く領内は落ち着きを取り戻した。

そして、一段落付いたところで、一刀たちは、月たちと今後の方針に付いて話し合うこととなった。

会議の冒頭に一刀が

「月、これからどうする？俺自身の意見は、このまま俺たちの仲間になって欲しいのだが、しかし月にも付き従っている兵や将もいる、こちらも強制はしたくないので、遠慮なく考えを言って欲しい」

一刀がそう言うと、詠が

「あんた、随分甘いこと言うわね、もし私たちが独立したいと言えば手を貸してくれるの？」

「本音を言えば独立はして欲しくはないが、しかしそれが董卓軍の将全員の総意の意見なら仕方はない、でも出来れば最低限同盟関係は結んで欲しいけど」

一刀がそう答えたが、すると月は決意した顔で皆に言い聞かせるように

「詠ちゃんや皆に聞いて欲しいの、私は今回のことで、一刀さんに命を救って頂きました。そして命の恩人に対して私は刃を向けたくはありません、私は一刀さんにお世話になろうと思っています。皆さんも一緒に協力していただけないでしょうか…」

月は董卓軍の将たちに、一刀の世話になることを告げたが

「月、それでええんか？あんたもある程度の勢力を築いていたんや

から、それやったら一刀の言うとおり、再び独立して同盟結んで、一緒にやっていったらいいのとちがうか？」

霞がそう反論したが、詠が

「僕もそのことは言ったけど、月の意志は固いわ」

「詠ちゃんや霞さんの言うことは分かりますが、やはり今回のことで一刀さんが殆ど接点が無かった私たちのために命を賭けて救ってくれたことに報いるには、やはり私たちが一刀さんたちに下って協力することが一番だと思うの」

「…私も星に助けて貰った、恋も仲間になってもいい」

何時もは会議の時、居眠りの多い恋が珍しく発言すると皆、驚いていた。

そして恋がそう言うと音々音が

「私は恋殿の言うことに付いていきますぞ」

と同意の姿勢を示し、そして華雄も

「私は、月様のどんな命令にでも付き従います」

と2人とも月の方針に賛成の意向を示した。

そして詠は一刀に

「あんたに一つ聞きたいわ、あんたがここで目指す物はなんなの？」

「俺が目指す物は、皆が普通な生活や人生を送れるようにしたいことだな。そして普通に恋愛や結婚などして人生を過ごして欲しい」

「そして月、世話になるからって卑屈になる必要はないんだから、俺たちは仲間だろう」

一刀はそう言って笑顔で答えた。

一刀の答えに対して、詠は内心、月の元での天下統一も考えていた、しかし月自身は争い事を好まず、そして今回の一件で領土を失い、そして一刀に命を救って貰い、更に月たちが望むなら援助まですると言った一刀に詠も流石に敵にしたいとは思わなかった。そして月も一刀に世話になることを決断したことで

「仕方ないわね…、月がそういうのだったら、僕も月に付いていくわ、月や僕たちを泣かしたら承知しないわよ」

「何や詠も素直やないな～、一刀たちが助けに来てくれて、喜んでいたくせに。まあウチもあんたらのことは気にいっとるし、ここにいたらおもろいこともあるから、ウチも一刀に従うわ」

そして詠や霞も一刀に従うことに同意した、これで正式に董卓軍も一刀の傘下に入ることが決まった。

そしてこれからの方針を決めるのに、まず真里から各諸侯の現状が報告された。

「まずあれから連合軍は、洛陽を無血占領したわ。そして各諸侯に領土配分があったわ」

その内容は、

公孫賛が北平の太守から幽州の太守に昇任

袁紹が司隷州並びに洛陽を管理

曹操がエン州の太守兼任で鎮東将軍に就任

劉備が戦死した陶謙の後釜に徐州の太守に

袁術が予州を管理

孫策が袁術の配下のままであるが呉郡の太守に就任

という内容であった。

この内容を聞いた碧が

「曹操が領土が配分されていないというのは腑に落ちないね」

「確かに曹操は、水関で功績あったはずなのに、鎮東将軍の地位だけというのは疑問ですね」

紫苑も納得していない顔をしていると朱里が

「もしかすると曹操さんは、逆にこの地位を使って、自分の領土の東側を切り取りを考えているのでは？」

そう言うと詠が

「成る程ね…、曹操は領土はエン州だけど、その東側は青州と徐州がある、青州は今、黄巾党の残党たちが暴れ回っていて、恐らく孔融では収めることはできないわ、そして徐州は新たに就任した劉備、もし統治が上手く行かなければ、乱を収める名目で両方を攻める可能性はあるわ」

「そうすると今後、曹操の動きには十分注意しないといけないな、真里引き続き曹操への監視頼む」

一刀がそう言うと真里も納得して頷いていた。

すると詠が

「あと孫策の動きにも注意する必要はあるわね」

「そうですね、孫策さんの目的は孫呉の復活、このまま袁術さんの下にいることはあり得ませんね」

朱里がそう言うと、璃々が

「しかし、よく袁術が孫策の呉郡の太守を許したね」

「確かに普通であれば反対するだろうに」

「袁術やから、孫策の目的に気付いてへんかもしれんで」

星と霞がそう言ったが、真里がその疑問に

「一応袁術の配下張勲が反対はしたのだが、恩賞で袁紹や袁術が殆ど功績がないのに領土を頂いて、功績がある孫策に恩賞がないのがおかしいと周りから言われて、結果しぶしぶ認めることになったらしいわ」

「そうなると、孫策も動く可能性が高いな」

翠がそう言うと

「……珍しい翠お姉様がまともな発言をするなんて」

横にいた蒲公英がそう言うと、翠から拳骨を頭に受けていた。

そして朱里が一刀に

「今の各諸侯の動きを見てですが、ご主人様は今後どういう行動を取られますか？」

「まあしばらくは俺らも含め、どの諸侯も内政に専念しないといけないだろうな、戦続きで兵たちも疲れているだろうしな」

言葉を一旦切ると一刀は

「そこでだ、月に頼みがあるのだが、君の内政力を見込んで、俺の代わりに涼州を治めてくれないか？長安や涼州ではすでに洛陽の暴政の噂は袁紹の嘘であったと言って、商人や旅人や細作などを使って徐々に解消されているから大丈夫だ」

「そ、そんな……」

月が一刀の頼みに困惑していると

「まあ治めて欲しいのは名目で、実際のところは故郷に帰って、心

身ともに休んで来て欲しいのが本音かな」

一刀がそう言うと、紫苑が

「そうよ月ちゃん、あなたは今まで頑張ってきたのだから、ご主人様の言葉に甘えて、一度故郷に帰って、ゆっくり休んで、また気持ち新たにして頑張ればいいのよ」

紫苑の母親の様な微笑み浮かべ、そして優しい言葉を言われると月も一刀の計らいに感謝に感激して

「…ありがとうございます、一刀さんに紫苑さん、分かりました、その役目お引き受けします」

やや涙ぐみながら受諾して、これで月が涼州の太守代行になった、更に一刀は

「詠、華雄、馬休、馬鉄たちも月と一緒に涼州に行ってくれないか

？」

「そして特に馬休と馬鉄は、涼州の豪族たちの説明を頼みたい」

皆納得して引き受けたが、すると馬休が何か笑みを浮かべて、

「では義兄上、俺たちの代わりに姉貴のことよろしくお願いしますね」

「おい休、それはどういう意味だよ？」

翠が怪訝そうな顔をしているとこれまたにやついている鉄が

「俺たちが居なくなって、気がねなく兄貴とイチャイチャできるだろうという意味だよ」

2人から突っ込みを入れられると翠は

「○▲※▽●～」

赤面した時に発する翠語を唸っていた。

「翠よ、結婚しているだからいい加減に慣れぬか」

星がからかう様に言ったが、事情を知らない詠が

「結婚って、何よ」

「何だ知らぬのか？私を含め、紫苑、璃々、翠、蒲公英、朱里が主と情を結び、結婚しているのだが」

星が説明すると、事情を知らない董卓軍のメンバーからは驚きの声

が上がった。

「そ…それあんたどういうことよ！？」

詠が一刀に説明を求めるも

「どうもこうもあるまい、我らは主に惚れて情を結んで結婚したのだ、それ以外あるまい」

星が顔をにやつきながら説明すると

「へぅ～、６人と結婚しているのですか」

「ち…ちょっとあんた、月にも手を出すのじゃないでしょうね！」

月と詠がそう言うと蒲公英が

「あっ、詠、それは大丈夫だからご主人様は無理やりにそんなことはしないから、皆、ご主人様と私たちがお互い納得して結ばれているから」

笑いながらそう言うと、多少事情を知っていた霞が

「しかし、一刀あんた、どれだけの女に手を出してるんや、仕舞いに紫苑あたりから後ろから刺されるで」

「霞ちゃん、私はご主人様を愛していますし、ご主人様も私を愛していますから、ご主人様が他の女の子を愛していても最後に勝つのは私ですから」

紫苑は貫禄のある笑みを浮かべ、そして一刀に

「でもご主人様、相手を増やすのは構いませぬが、増やすのであれば、皆を泣かせぬよう平等に愛してあげて下さいね」

紫苑がそう言うも、一刀は、周りを見ると璃々や翠、朱里はこれ以上相手が増えたやら駄目という嫉妬心剥き出しの目や態度になっているのを見て、さすがに何も言えなかった。

最後は何とも締めの悪い内容の話であったが、一刀たちは当面、内政に力を入れることを確認したのであった。

～おまけ～

その日の夜、寝静まっている一刀の部屋に音を立てずに近づく、2人の影があった……

そして、その2人の影は一刀の部屋の前でかち合ってしまった。

2人は、目が合ってしまうと思わず

（「り……」）

（「お……」）

お互い言いそうになってしまったが、ここは何とか堪えた。

そして…

（「夜討ち、朝駆けは戦の基本だけど…、よく分かったわね」）

（「お……の考えは読めているからね♪」）

（「でもいくらお……でもここは引かないわよ」）

「（私も引くつもりはないけど……、では一緒にどうかしら？）」

「（え～一緒に……）」

そして考えた末

「（私負けないからね）」

「（あらあら、さすが私の……ね」）

僅か数十秒のアイコンタクトでこれだけの会話をすると、２人は鍵が掛かっていない一刀に部屋に入って行った。

そして、そのあと一刀の部屋から奇声と艶やかな声が止まらなかったらしい。

そして翌朝には、一刀の部屋に入った２人の人物の肌色は艶々して

おり、一刀の顔はかなり疲れ切った表情をしていた。

第３４話

今後に対しての会議終わってから、月たちは静養のため涼州に向けて出発した、そしてしばらくしてからのある日、一刀は星に連れられ、長安郊外に馬で遠乗りに来ていた。

これは、反董卓連合の時に星が恋の副将に付いた際、一刀に要求していた褒美（一刀と1日デートする権利）を行使して2人で出掛けていたのである。

「なあ星、どこまで行くんだ？」

「内緒ですよ、主」

一刀が星に行き先を聞くも星はいたずらっ子の様な笑顔をして、星は一刀に場所を教えずに連れて来ていたのである。

町を出て半刻（一刻を2時間で計算なので、この場合は1時間で計算）してから、ある村に到着したが、星は村の中を通過せずに、村

の周囲をから回り込むように行き、そして村の外れの小屋に到着した。

そして星は

「主、先に小屋に入っていただきますか、中に入り奥を見れば分かります、私は用意する物がありますので後から入ります」

言いながら、星は何か準備をするため、小屋を離れた。

一刀は

「さて何があるのか？」

と言いながら、小屋に入り、星が言った通りにすると……。

「あ～～いい湯だ～～」

「でしょう、主」

2人は温泉に浸かっていた。

「しかし星、よくこんな場所を見つけたな」

「以前に訓練に来た時に偶然見つけまして」

言いながら、星は自らから準備して持ち込んだ酒とメンマを盆を浮かべながら一杯やり、そして一刀も星からお猪口を貰い、同じく一杯やっていた。

「この一杯が何とも言えませんな」

「星は、酒とメンマだけあれば、いいんじゃないか？」

「……主は、私を何とお思いですか……」

星は一刀にそう言われると、やや拗ねながら酒を飲んでいた。

そしてしばらくすると一刀が何か考えている様子に見えたので星は一刀に

「主、こんな美女を目の前にして何か考え事とはいただけませぬな」

「いや考え事というよりは、俺は星たちのにとって主として旦那として上手くやっているかと急に思ってな……」

「何を言っているのですか、主は？」

「主は女性関係はともかく、国の主としては立派にやっていますぞ」

「女性関係はともかくとは酷い言われようだな……」

「では主、改めて言わせて貰いますが、主は月たちを立派に救い出し、そして政もきちんとやっておりまする、そして女性関係については、皆、紫苑がいるにも関わらず、自らの意志で主と想いを遂げたかったのです。そして美しき花に蝶は群がり、その中で蝶たちは我こそは主にとっての一番を目指すのです。だから主は我らのことを気にする必要はありませんぞ」

星が一刀にそう言うも、まだ吹っ切れていない一刀を見て、星は口に酒を含み、そして一刀の顔を両手で挟み込むと顔を自分の方に向けてさせて、強引にキスをして自分の口に含んでいる酒を一刀の口に注ぎ込んだ。

星の突然な行為に驚きを隠せない一刀に

「目が覚めましたかな、主」

「ああ…」

「今更ですが、主、私はあなたに全てを捧げているのです、だからそんな顔をしないで下され、主に悲しい顔は似合わないですぞ」

一刀は星にそう言われるとようやく気持ちも落ち着き

「すまん星、ここまで心配して貰って、ここからはせっかくのデートだから楽しまないとな」

一刀がそういうと星は

「そうですぞ主、今日1日は他のことを忘れて、私だけを見て下され…」

最後はやや照れながら言う星に一刀は

「そんな姿を見る星も新鮮で可愛らしいよ」

と言いながら、2人は自分たちの世界に入った……。

～翠編～

「御遣い様、まいどありがとうございました～」

一刀は町で食事を終えた後、店を出て、しばらく歩いていると

「ご主人様～！お姉様捕まえて～！」

どこからか蒲公英の声がしたので、一刀は周りに目をやると、すでに目の前に全力疾走している翠が来ており、翠が一刀に

「あ…危ない！ご主人様！退いてくれ～！」

と言うも、流石に急すぎて避ける間もなく

「ドーン！」

2人は正面衝突をして、その場で倒れてしまった。

「イテテ……」

「退いてくれって、言ったのに何で退いてくれないんだよ……」

「流石にあれは無理だぞ…翠」

一刀が翠を嗜めていると

「お姉様、やっと捕まえた～」

「蒲公英しつこいんだよ！」

2人が言い争いを始めようとしたので、一刀が仲裁に入るような形で

「蒲公英どうした？翠を追い掛けていたみたいだけど？」

「ご主人様聞いてよ！お姉様たら、服を買いに行こうとしたら、急に逃げ出したの！」

「蒲公英！誰が服を買うと言った！？お前最初に飯食べようと言ってたのに、何で服を買う話になってるんだよ！」

「確かに騙して悪かったけど、お姉様って服とかおしゃれに全然気を遣ってないじゃん？そんなことじゃご主人様に嫌われちゃうよ！」

「えっ！？ご主人様そんなことないよな…？」

蒲公英が最後に言った一言が気になり、動揺している翠を見て、一刀も流石にからかう気にはなれず

「心配するな翠、そんなことで嫌うはずがないだろう、でも何で服を買うのがそんなに嫌なんだ？」

「いや…私みたいながさつな女に似合う服なんてないだろう？」

自分の容姿に自信がなさげな翠を見て、一刀と蒲公英は顔を見合わ

せて、意志は統一されてしまった。

これは何としても服屋に連れて色んな服を着させようと……。

「でも翠、たまには普段と違う服を着てみるのも面白いと思うけどな、もしかしたら戦の時に合う服があるかもしれないぞ」

一刀は翠が興味を引くように戦闘服について語ると蒲公英も

「お姉様も戦の時、動きやすいてカッコいい服の方がいいでしょう？」

「まあ…、戦の服を選ぶのだったら、いいけど……」

2人からそう言われると、さすがに翠も折れて、3人で服屋に行くになった。

そして服屋に行くと蒲公英が色々選んでいたが、翠は気にいるものが無かったので

「もう～お姉様どんなのがいいのよ！」

「仕方ないだろう！私の気にいったのがないから」

「じゃご主人様、お姉様に服何か選んでよ」

急に蒲公英が一刀に選ぶように言ってきたので、一刀は

「おいおい男の俺が選ぶのも、どうかと思うぞ」

一刀が返事をしたが、すると蒲公英が一刀に耳打ちして小声で

（「ご主人が選んで、お姉様にこれ着てくれと笑顔で言ってくれたら、お姉様も着てくれるからさ」）

蒲公英は自信満々に言うので、一刀は翠に

「翠、もしお前が良かったら、俺が選ぶけどいいか？嫌なら嫌と言ってくれよ」

一刀がそう告げると

「え？ご主人様が？……う～そんなの絶対に断われないじゃないか～」

「ぜ…絶対に変なのを選ぶなよ、そんなの選んでも絶対に着ないからな！」

顔を赤くしながらも一刀に服を選んで貰うことに同意した翠に蒲公英が

「素直じゃないな、お姉様は」

「う…五月蝿い、蒲公英！」

そして2人が言い合いしている間に、一刀がすでに目を付けていた服を取り出して、翠にその服を示すとそれを見るなり

「こ…こんな可愛らしいヒラヒラした服着られるか！」

「え～お姉様、可愛いじゃん、嫌なら蒲公英が貰うよ」

2人の反応に大きな差があったが、一刀が示したのは黒色を基調としたメイド服であった。

これは一刀や紫苑、璃々が現代風の服に着慣れたこともあり現代風

の服を何点か作成されていたが、その時に紫苑は再び一刀にメイドが付くことを想定して、予め作成していた。

しかし璃々の話では、一刀にメイドが付かなかった場合、

「その時はこれ、私が着ようかしら♪」

紫苑はメイドをする気満々の話をしていたらしい・・。

メイド服を見て翠は

「こんな可愛い服が私に似合う訳ないだろう！」

「え？そうかな、翠に似合うと思うけどな…」

「じゃあ、翠には色々と感謝しているから、これ贈るよ」

一刀は言い出すと

「はぁ～～！？」

「お姉様、ご主人様からの贈り物を受け取らないって失礼なことをしないよね～」

翠は驚くも蒲公英から逃げ道を防がれると

「わ…分かったよ！受け取ればいいんだろう！で…でもまだ気持ちの整理が付かないから、着るのはちょっと待ってくれよな」

「分かったよ、着る時は必ず見せてくれよな」

一刀からそう言われると翠は小さく頷いた。

翠は一刀から服を受け取ると

「ご主人様、ありがとう…」

小声で礼を言うと、一刀が清算している間に逃げ去ってしまった。

そして清算した後、店を出ると蒲公英が待っていて一緒に歩いて城に帰っていると蒲公英が

「ありがとうご主人様、あのままだったら、絶対お姉様、服を買わなかったよ」

「別に礼を言われることじゃないけど、でも蒲公英にも何か買ってあげたらよかったな」

「じゃご主人様、一つお願い聞いてくれる？」

「聞ける範囲だったら聞くけど……」

「じゃ耳貸して（ゴニョゴニョ）」

「別にいいけど…しかしどうするんだ？」

「それは蒲公英が考えるから、その時はご主人も協力してちょうだいね♪」

「じゃ蒲公英用事があるから、またね～」

蒲公英は一刀にあるお願いをして、その場を去ったが後日蒲公英のこのお願いが翠にとって散々な目

に遭うことになるとは知るよしもなかった……。

第３５話（前書き）

今回は数人のキャラが変わっていると思います。

特に桃香が変わりすぎていますが、しばらくはこの道を歩んで貰おうと思っています（決してアンチ桃香ではないです）

ですので、桃香が天然の子でなければ嫌だという方はUターンして下さい。

第３５話

ようやく反董卓連合の戦いから３か月が過ぎようとしたころ・・

再び大陸の東から戦いの火蓋が切って落とされた。

～一刀の部屋～

この情報を持って来たのは情報担当の真理で、現在この場には、一刀・紫苑・朱里で残りの者は他の場所での政務に兵の訓練や町の警戒に出ていた。

そして真理から、

「ちょうどいいところに居たわ、他国にいる密偵から情報を持って帰ってきたけど、……皆、信じられない話だけど、よく聞きなよ」

報告する真理に戸惑いの表情が見られたので、紫苑が

「あまりいい話ではなさそうね」

「……うん、直接的には私たちには関係ないけど、ここにいる3人に璃々・翠・蒲公英あたりが接点あるかしら、この話を聞いても最初は信じられないと言うだろうね」

「まず情報は2つあって、まず1つは曹操が黄巾党の残党が反乱を起していた青州を完全に鎮圧して、青州を支配下に置いたことよ」

「確か青州は孔融が治めていたけど、どうなった？」

一刀が真理に聞くと

「孔融は私たちとの戦いから帰国してから、すぐに攻め滅ばされてしまったわ。しかし孔融の遺臣たちが曹操に助けを求めると、曹操は待っていたとばかりに夏候惇や夏侯淵たちを中心に黄巾党の残党

を攻めて、瞬く間に鎮圧したわよ」

紫苑が

「確かに曹操は黄巾党を攻め滅ぼした手腕も素晴らしいことですが、青州を手に入れ、更に勇猛果敢な黄巾党の兵も多数傘下に入れたことは、これからの戦いにおいて有利になってきますわね」

「ださすがにしばらくは青州の治安維持や兵の再訓練には時間は掛かるでしょうから、すぐに袁紹や劉備との戦いはないでしょうけど」

「しかし曹操軍としたら袁紹軍と事を構える前に勢力拡大のため、先に劉備軍との戦いは避けられないでしょう……」

現在、劉備軍の軍師になっている雛里を心配する朱里であったが、しかし次に真理から2つ目の情報を聞いた瞬間、この人物を知っている一刀たちに衝撃が走った。

「朱里、ここから特にあんたにとっても重要な話だ、よく聞きなよ」

「劉備が徐州の内乱を制し、完全に支配下に置いたが、しかしその時の戦いにおいて捕えた将兵のうち、劉備に従わない将兵約３００人を皆殺しにして、そしてその首を城下に晒したそうよ……」

その情報を聞いた3人は、あまりにも桃香の信じられない行為に立ち尽くしていた。

そして一刀は

「その情報は事実か……？」

「私も最初その情報が信じられなかったけど、他からも同一の情報が複数入ってきたから間違いじゃないわ」

「で……でもそれは桃香さんや雛里ちゃんが直接実行したのではな

く、他の人が暴走して行われたのでは……」

朱里が真理の情報が間違いであって欲しいという願いを込めた言葉であったが、真理から返ってきた言葉は無常にも

「残念ながら朱里、今回の一件は劉備と雛里が中心となって実行されたそうよ」

「え……何で雛里ちゃん、こんなこと……」

朱里にとっては未だに信じられない事で、その場で放心状態になってしまった。

「でもなぜこのようなことになってしまったのか、その理由分かりますか？」

紫苑が真理に聞くも

「残念ながら、まだ理由については分かってないわ」

「でもなぜ桃香と雛里が中心になっていたのですか、他に愛…関羽や張飛たちはその場に居なかったのですか？」

「詳しい経緯は分からないけど、ちょうどその時に徐州にも青州の黄巾党の一部が流れ込んでいる話があったから、その2人は恐らくそちらの討伐に行っていたのかもしれないわね」

一刀自身もなぜ桃香たちがこのような行為をしたのか、疑問が湧き出ていていたが、このような情報が少ない状況では答えが出るはずも無かった

そして未だにショックから立ち直れていない朱里を見かねて、一刀が紫苑に

「紫苑すまないが、朱里を自分の部屋まで送ってきて貰えないか」

「分かりましたわご主人様、朱里ちゃん、今日の仕事はいいから部屋に戻ってちょっと休みなさい」

紫苑から言われると朱里もようやく言葉を発し

「……ありがとうございます、ご主人様、ちょっと休ませて貰います」

言葉少なく、そして足取り重く部屋を出て行った。

そして残された一刀たちは困惑な状態でその日を過ごしたのであった。

～徐州～

「いったいどういうことですか、桃香様！説明して下さい！」

「お姉ちゃんいったいどうしたのだ？」

烈火のごとく桃香を問い詰めている愛紗と普段の桃香の行動から考えられない事に不安になっている鈴々がいた。

事の発端は桃香たちが徐州に赴任してから、大半の豪族たちは帰順したのだが、元々以前の太守陶謙に対しても反抗してきた一部の豪族たちが桃香に従わないことを通告してきた。

それを当初、愛紗と雛里で討伐に行く予定であったが、青州黄巾党の残党の一部が徐州に流れ込み、国境を荒らしている情報が入り、そこで急遽予定を変更して、愛紗と鈴々に黄巾党鎮圧するように指示をし、反乱している豪族たちに対しては桃香・雛里に凪たち三羽烏で討伐することが決まった。

そして最初に当った豪族に対して、雛里の策などもあり、兵も損なわず快勝したのであったが、しかしその豪族の当主もそれなりに人望があったのか、兵たちも最後まで徹底抗戦してが、これを捕えることができた。

桃香や雛里たちは、捕虜になった兵たちに仕えるようにお願いしたが、豪族の当主やその幹部、それに慕う兵たちなどは桃香に下ることを拒否した。

そして再三説得をしたが意志を変えることができず、雛里は桃香に

「桃香様、彼らには再三投降して貰うようお願いしましたが、仕方がありません。彼らには、私たちの勢力拡大の手段として生贄になっていただきます」

「…生贄？」

「そうです、このまま彼らを解き放っても再び、私たちに抵抗するのは目に見えています。ですので、ここで彼らには全員死罪になって貰い、その首を城下に晒します。そしてこの話を他の抵抗勢力に流布して、私たちに抵抗すれば、このような目に遭うことを認識して貰います。そこで降伏の使者を送り、降伏すれば命を必ず助けようように明言します。そうすれば、恐怖感を持った他の豪族たちも私たちに恐れをなして降伏し、いち早く徐州を平定できると思われます」

「……雛里ちゃん、他に方法はないの？」

「桃香様、確かに他に方法はあります。しかしそれでは時間が掛かり、他の勢力に狙われる恐れがあります。桃香様は力を付けたいとおっしゃっていましたね。そして私は桃香様に力を付けるためには、どんなことでもする覚悟です。だから桃香様にも覚悟を決めていただきたいのですと言いました。私はこの徐州を素早く平定して、桃香様に力を付けるためにと思い、このような非道な事を言いました。しかし最終的に決断するのは桃香様です、でも忘れないで下さい。あの時、一刀さんや曹操さんに言われた言葉を……」

雛里からそう言われると桃香は改めて思い出し

「そうだね雛里ちゃん、力が無ければ誰も何をするにも認めてくれないもんね。だから私は雛里ちゃんの言葉を信じることにしたんだよ」

「分かったよ雛里ちゃん、それじゃ雛里ちゃんの方針で行くことするね、そしてこの命令は私からの指示にしておいて」

桃香がそう言うと雛里は自分で責任を被ることを言ったのだが、桃香は首を振りながら

「これで私も逃げないと覚悟を決めたことだから、雛里ちゃん一連托生だよ」

「桃香様・・」

こうして2人は改めて決意を新たにしたのであった。

その後桃香と雛里は、凪たちに今回の処置を告げると凪たちは反対したが、民たちに危害を加えないことや今回の戦いで無理やり徴兵された兵については釈放すること、そして桃香や雛里が自ら今回ここまで至った経緯と決意を語ると共に今回の刑の執行に立ち会い、そして2人の名前で刑の執行を執り行うことを告げられると凪たちも桃香たちの覚悟が固いことを知ると3人は桃香に従い、刑執行に立ち会ったのであった。

そして刑の執行が執り行われた後、先に黄巾党の討伐を終えて帰還した愛紗と鈴々が桃香の行為を聞いて驚いていたが、愛紗は以前一刀に言われたようにできるだけ冷静に考えるようにして、出した結論は桃香自身に直接理由を聞くまでは発言を控えることに努めた。
そして遅れて帰還してきた桃香に問い詰めていたのであった。

そして愛紗が桃香に

「桃香様、単刀直入にお聞きします、なぜあのようなことをなされたのですか……」

「愛紗ちゃん……、私だってあんなことやりたくてやった訳じゃないよ。でもあのまま逃がしてもまた敵になると判断したからだよ……」

「では幹部以上の者を処置して、あとの兵士だけでも逃がせばよかったのではないのですか！？」

愛紗が怒気を押さえながら言っていると一緒にいた雛里が

「愛紗さん、桃香様を攻めないで下さい。このようなことを進言したのは私ですから……」

「雛里！お前がいて、なぜこのようなことを進言したのだ！」

雛里が進言したと聞くと、今まで我慢していた愛紗が激高するものの雛里は冷静に

「すべては私たちが力を付けるためです」

「どういうことだ？」

「ではっきり言います、今のままの私たちでしたら、隣国の曹操さんや袁紹さんに攻められて、桃香様の理想を掲げる前に全てが終わってしまいます。そのためには逸早くこの徐州を平定し、ここを足掛かりにして他国に攻める必要があります」

「そして平定するには一番早い方法が力による支配です、だから敵対する豪族に対して、このような処置を取ることにより、敵に恐怖感を与え、そして少しでも早く桃香様の傘下に収める必要があったのです」

「だから言ってあのような方法を取る必要があったのか！」

「では愛紗さん、他に短時間でこの徐州を平定する方法はありますか！あれば教えて下さい」

激高している愛紗に、皮肉な言い方で返事をする雛里に、すると怪訝そうな顔で鈴々が

「鈴々は難しいことは分からないが、じゃお姉ちゃんは、力を付けるためには民を泣かしても構わないのか？」

「鈴々ちゃん、いくら力を付けたいからって民を泣かせる真似はしないよ、これは約束するよ」

「分かったのだ、鈴々はお姉ちゃんの言うことを信じるのだ」

鈴々は桃香の説得を受け入れたが、愛紗は悲壮な顔をして

「では桃香様、一つお聞かせ下さい。あなたが掲げていた「この国を皆が笑顔で過ごせる平和な国にしたい」という理想は捨てたのですか……？」

「愛紗ちゃんそれは今でも思っているよ、でも一刀さんが言っていたように理想を掲げるには、今の私たちにはその力がない、だから今は理想を捨ててでも力を付ける時なの」

「お待ち下さい、桃香様、ではその力を付けるためには勢力拡大のために理想を捨てて、このような悪評を貰い、更にどんなことでもするつもりですか！」

「……そうだよ愛紗ちゃん、今の私たちには力がない、力がないから誰も私たちを認めてくれない、だ

ったら私たちが力を付けるにはどんなことでもしないといけないの！」

「だからと言って理想を捨てて勢力拡大しても信念が無ければ何の意味もありません！」

「でも最終的にはこの国を皆が笑顔で過ごせる平和な国にしたいという目的も理由も変わらないから問題ないでしょう！」

「桃香様が理想を覆して、勢力を拡大してもそれまでの過程でその理想や意義を掲げなければ口先三寸の徒と思われます！」

「桃香様が桃香様でなくなって、それでこの国を皆が笑顔で過ごせる平和な国にしたいと言って誰が喜んでくれると思っていますか！少なくとも私や鈴々は嫌です！桃香様！目を覚まして下さい！」

愛紗が目に涙を浮かべながら、桃香に訴えるも桃香は

「ごめんね愛紗ちゃん、でももう引き返すことは出来ないよ……」

「桃香様……」

桃香の決意が変わらないことが分かると、愛紗は一言言い残し、泣きながらこの場を走り去ってしまった。

これが桃香と愛紗との仲に亀裂が入る出来事になり、これを切っ掛けに波乱を呼ぶとは今の時点では知る由も無かった……。

第３６話

桃香の徐州における行為は、周辺の諸侯の動向に影響を与えていた。

～曹操陣営～

「ふ～ん、虫を殺さないような顔をしていて、あの子がああいう行為をするとはね」

華琳は、桂花から周辺諸侯の情報を聞いていたが、桃香の一連の行為を聞いて、いささか驚きながら、そう呟いていた。

「華琳様、我が国の隣接に敵が出来たのです！今すぐ攻めるべきです！」

いきなり開戦を主張する春蘭であるが、これには桂花と秋蘭が

「あなたね、何考えているの！まだ青州を平定したばかりで、すぐに攻めれる訳ないでしょう！」

「姉者、それは無理があるぞ、まだ傘下に加わったばかりの青州兵には、今の我が軍の規律や練度に全く追い付いていないし、それに兵糧も心許ない」

「春蘭、今は先に青州を治めるほうが先よ、劉備もこちらに攻めるなんて愚かな真似はしないでしょうし、今は向こうも内政することで精一杯のはずよ」

桂花や秋蘭、それに華琳から反対の意見を受けるとさすがの春蘭も黙るしかなかった。

しかし何か不満そうな顔をしている華琳を見て、秋蘭は

「華琳様、何か不満でもあるのですか…？」

「フッ…さすが秋蘭ね、今は内政が先決は分かるけど、しかしこのままであれば北郷のところが益州の劉璋のところを攻略して勢力拡大する恐れがあるわ、だからすんなりと劉璋のところを攻略されても困るのよ」

華琳がそう言うと別のところから

「では華琳様、北郷軍の益州攻略を遅滞させ、そして袁紹様や他の諸侯を疲れさせることでよろしいのですか？」

「そうね、凛あなたそれできるかしら？」

「はい、私と風でしたらそれは可能です」

この凛と呼ばれた女性、名を郭嘉、字が奉考、そして風と呼ばれた女性が名は程？、字は仲徳と言うが、この2人は旅をしていたが、旅の途中に青州に立ち寄った際、青州黄巾党の乱に巻き込まれ、指揮官がいない町において2人は寡兵にも関わらず、自ら町の防衛戦を指揮して黄巾党を撃退してところ、応援に駆け付けた華琳にその功績が認められて、2人とも仕官したのである。

「あら簡単に言うわね、じゃそれを言って貰おうかしら、くだらない策だったら反対するからね」

その2人に嫉妬心全開の桂花に対して、凛がそれを無視して説明に入った。

「確かに華琳様の言うとおり、このまま行けば北郷軍は、我々がこちらで勢力拡大する間に先に益州攻略する可能性があるでしょう、残念ながら北郷軍に隣接している劉表様、劉璋様では単独では対抗できません。そして我々が加勢するにしても今の我々でも力不足ですし、更に兵を損なう訳にはいきません、そこで提案したいのが、私たちに劉表様、劉璋様に袁紹様を加えた対北郷包囲網を作ることです」

「恐らく劉表様や劉璋様は単独では北郷軍には対抗できないので、この話に乗ると思われますし、袁紹様は反董卓連合の時の恨みがあるので、我々が協力して北郷軍を攻めると言えば、袁紹様のあの性格ですから必ず乗ってくれると思います」

「では４方面から北郷軍を攻めるのか？」

「ちょっと待ちなさいよ！つまり４方面から北郷軍を攻める案はいいわ、しかし私たちも参戦して負けて兵を減らしたら、それこそ今後、劉備や兵に余裕がある袁紹に攻められるでしょう！」

凛の作戦に秋蘭が驚き、そして桂花が異を唱えると凛は

「まだ続きがあります、今回は私たちが率いる軍勢は、今回傘下に収まった青州兵や新兵を中心に編成し、そして率いる将も戦の経験が少ない方を中心に連れていきます、もし隙があればそのまま北郷領に攻めて貰ってもいいですが、どこか１つでも敗退の報を聞けば、すぐに引き上げます」

それを聞いた桂花が

「じゃあなたは、今回の私たちの戦いは本気でやる訳ではなく、新兵の訓練代わりに利用する気なの！」

「そんな人聞きの悪い、もし私たち以外の勢力が北郷領内に深く攻め入れば、私たちも同時に対応して一緒に攻め入るのですから、それくらい袁紹様たちに期待しても宜しいのでは…」

稟が微笑を浮かべると風が

「それだけではないですよ～、最初に稟ちゃんが言っていたよう、これが失敗しても他の諸侯の勢力を削ることにもなりますから～」

それを聞いていた華琳が

「凛、あなたのその作戦はいいけど、実際に麗羽や劉表、劉璋を説得することができるのかしら？」

「それはこの風が居たら大丈夫です」

凛がそう言うも風から返事が無かったので風を見ると

「ぐーーー」

「風！何寝てるの！、起きなさい！」

「いや、余りの期待の高さに現実逃避したくなりまして～」

「フフフ分かったわ、稟と風、麗羽達への交渉などはあなた達には任せたわよ、それまでは内政に専念しましょう」

「ありがとうございます華琳様、それでもう1つ訂正ありますが、皆さんは4方向からの攻略とおっしゃいましたが、もし調略が成功したら最終的には5方面から攻略になると思います」

稟がそう言うと華琳と風以外は稟の構想に呆気に取られ、

「いいわ稟、今日の献策の褒美に今晩私の閨に来なさい」

華琳がそう言うと稟は

「あ…憧れの華琳様のところに……、やっと……ブーッ」

稟は華琳との夜の妄想モードに想像すると、見事な鼻血のアーチが飛び出していた。

「はいはい、稟ちゃんトントンしましょうね～」

横にいた風が稟を止血しているのを見ると華琳は

「……この子もこれがなかったらいいのに……」

華琳は頭を抱えながら、最後にため息一つ付いていた。

～孫策陣営～

呉郡の太守に就任してから、領内整備に努めていた雪蓮たちであるが、こちらの方は、冥琳やその補佐に付いている穏（陸遜）や新たに軍師兼文官に就任した亜莎（呂蒙）がその手腕を発揮して、いち早く領内は平穏状態になっていた。

そしてそんな中、珍しく政務に励んでいる雪蓮のところに冥琳と雪蓮の妹である孫権こと蓮華がやって来た。

そして珍しく政務をしている雪蓮を見て冥琳たちが

「なんだ雪蓮、珍しいなお前がちゃんと仕事してるなんて」

「そうですわ、お姉様が机に座って仕事してるって……、明日雨でも降らないかしら……」

「二人とも、普段から私をどう見ているのよ！」

「フッ…、それを私の口から言わせたいのか」

「そうですね、一言で言えば怠業魔かサボり魔と言っておきましょう」

「酷い～！」

雪蓮は口を膨らませて拗ねていたが、冥琳が

「雪蓮聞いたか、劉備のことは」

「聞いたわよ、あの甘ちゃんがあんなことするなんてね、ちょっと想像できなかったわ」

「そうだな、正直なところ何があったんだと言うところだな」

「まあ理由は分からないけど、あの子が何か無理しているように見えるけどね～」

「それでだ、実は私のところに劉備軍の?統から手紙が来てな、これを読んでくれるか」

雪蓮の前に手紙を差し出し、雪蓮が一読すると無言で蓮華にこの手紙を渡し、蓮華もこの手紙を読むと顔に緊張が走った。

「冥琳、蓮華これ読んでどう思う?私はこの話受けてもいいと思っているけど」

「ほう、理由は」

「理由なんてないわ、勘よ」

「まったくお前は…、少しは考えたらどうだ…」

雪蓮の得意な勘で自信満々で答えるのを見て、冥琳は呆れていたが、蓮華が

「お姉様、私は反対です！劉備と共闘せずとも私たちだけで袁術を討つべきです！」

蓮華は雪蓮の意見に反対したが、雪蓮はやや呆れた顔をして

「蓮華あなた物事が固いわね、態々向こうさんから袁術を倒すのに協力しましょうと言っているのに、何で反対するわけ？」

「今の私たちに袁術を倒すだけの力は十分あります、劉備などの力は必要ありませんわ！」

蓮華がそういうと冥琳が

「蓮華様、仰る通り私たちだけでも袁術を倒すことは可能ですが、袁術は我々が呉郡に移ってから、警戒感を強めております。しかし袁術の力はまだ我々より上です、これで袁術を倒してもまだ西には北郷や劉表、北には袁紹や曹操などまだまだ強敵が控えております、そのためには無駄に兵を損ないたくないのです。その点分かっていただけますでしょうか」

冥琳から説明を受けるとさすがに蓮華も

「すいませんでしたお姉様、要らぬ差出口を叩いてしまって・・」

「いいのよ蓮華分かってくれたら、冥琳、受ける方向で向こうと話詰めておいて、じゃ私は…」

雪蓮がそう言いながら仕事をほっぽり出して逃げ出そうとしたが、
冥琳が雪蓮の右肩を掴み

「雪蓮…仕事を途中で放り出してどこに行くつもりだ…」

「い…いやちょっと息抜きで外に出ようかな～と思って」

「ほう…お前の息抜きは右手に酒を持って出るのか…」

どさくさに紛れて部屋から脱出しようとした雪蓮であったが、見事
に冥琳に捕まってしまい、その後

で冥琳と蓮華から説教を受けたのは言うまでも無かった・・。

～長安～

「今、帰りました」

「ああ紫苑、お疲れさん、それでどうだった、朱里の様子は？」

「まだ時間は掛かりそうですね、一応仕事はこなしてくれているのですが、まだ心ここに有らずの状態ですわ」

「そうか、気分転換に外に巡視に行っても駄目か…」

「真理ちゃん、今まで朱里ちゃんがあそこまで落ち込んだことはあるの？」

「さすがにあそこまで落ち込む朱里を見たことはないわね…、それに朱里と雛里はそれこそ親と居るより長い時間、一緒に過ごしてき

たからな、雛里のあまりの変わりようにかなり強い衝撃を受けているのだろうな」

真理がそういうと部屋に沈黙の空気が流れた、そんな中璃々が真剣な顔をして

「ねえご主人様、一度、私と朱里と2人きりで話をしたいけどいいかな？」

「どうしたんだ璃々、急にそんなことを言い出して？」

「さすがに朱里のああいう姿が見ていられなくて…」

璃々からそう言われると一刀も朱里の立ち直るきっかけが無かったので

「…そうだな、年が近い者同士で一度、璃々に任せてみるのもいいか」

「ありがとうご主人様、お母さん、朱里は今、どこにいるの？」

「さっき別れて、部屋に帰ったわよ」

「じゃ今から、行ってくるね」

璃々があわただしく執務室を出ると紫苑が

「ご主人様、あの子に任せて大丈夫ですか？」

「心配性だな、紫苑は。璃々もこの世界に来てから、心身ともに成長しているんだ、それに2人とも年が近いし、俺たちに話せないことも、もしかしたら言い合えるかもしれないだろう？」

一刀からそう諭されると紫苑も

「そうですわね、どうしても私、あの子のことをまだまだ子供として見てしまいますわ」

「それは仕方ないだろうな、どれだけ成長しても璃々は紫苑の子供には違いないからさ」

「それはそうですけど、でも私としては最近、あの子がご主人様に磨かれて、女として成長している姿が目に付きますわ」

一刀にそう言いながら、少し焼きもちになっている紫苑であったが、内心では朱里に早く立ち直って欲しい気持ちで一杯であり、璃々にそのきっかけを作って欲しいと思っていたのである。

「ハァーー」

巡視から帰って来て部屋で一人になり、ため息を付いている朱里に

「朱里入るよ」

璃々は朱里の返事を待たずに部屋に入ってきた。

朱里はそれを咎めることはなく

「璃々さんどうしたのですか？」

「え～、朱里と話がしたく来たけどいい？」

「はい、何もお構い出来ませんけど」

「いいよ、私が勝手に来たから」

「…それで朱里、まだ雛里のことで悩んでいるの？」

璃々が単刀直入に聞いたせいか、朱里は図星とばかりにしばらく沈黙状態になり、そしてようやく

「そうなんです…、私が悩んで仕方がないのですが、雛里ちゃんが何であんなことをするなんて、未だに信じられなくて…」

「確かに以前見た姿からでは想像できないね…」

「でもこればかりは一度本人から話を聞かないと分からないしね、それで朱里、雛里に手紙でも送ったの？」

「いいえ、流石にお互いに立場があるので…」

「あ～そうか、でも朱里と雛里の関係って羨ましいな～」

「羨ましい？」

「そうだよ、今こそ離ればなれになっているけど、前はお互いに色んな事を相談できたりしたでしょ」

「それが私には羨ましいよ、朱里も知っていると思うけど、私やご主人様、それにお母さんは2回も生きていく世界が変わってしまったでしょう、だから、せっかく友達がいても、急に生きていくところが変わったから、友達に別れも言えずに来たから…それが一番つらいかな？まあ私はご主人様やお母さんが居れば十分だけどね」

璃々は朱里のことを言っているうちに自分のことを思い出し、急に湿っぽい話になってしまっていたが朱里は璃々のこの話を聞いて

（「そうか…璃々さんやご主人様らは、私と違い、今まであった事を殆ど無くしてここに来ている……、それを考えたら、まだ私は雛里ちゃんと会うことも出来るし、お話することだってできるんだ。それに比べたら・・まだ私は良いほうだもんね！」）

朱里は璃々の置かれている状況と自分の事を考えると璃々の方がつらいはずなのに、いつまでも落ち込んでいられないことに気づき

「あ、ごめんね朱里、私の湿っぽい話を聞かせて」

「いいですよ璃々さん、璃々さんも私にとって友達ですし、仲間なのですから」

朱里は、さっきの悲壮感一杯の顔から、元気を取り戻した顔付になっていたので

「朱里、何か元気を取り戻したみたいだね」

「はい、璃々さんの話を聞いて、いつまでもくよくよしてられないと思いまして」

璃々も自分の内心を打ち明けた形になってしまったが、朱里のいい顔を見て、話をして良かったかなと思っていた。

「ちょっとでも元気になって良かった朱里、確かに私たちは友達だし仲間だけど、家族でもあるんだよ、但し私が2番目で、朱里は6番目だけどね」

璃々が意味深で、イタズラぽい顔で発言すると

「へ？は……はわわー！なゃ…何を勝手なことを言っているのですか、まだ私が6番目って決まったわけではないでしゅ！」

「わ・・私がご主人様の子供を産めば、わ・・私が正室でしゆ！」

朱里のこの暴走発言には、流石の璃々も驚き

「えー！朱里それは聞き捨てならないね、それは私も狙っているんだから！」

「そ…それは知りませしぇん」

カミカミながら反論する朱里の声が響き

「何でこんな話になっているんだ…」

「あら朱里ちゃんが元気になって良かったではないですか、ご主人様」

部屋の外から聞いていた一刀と紫苑は、一人は明らかに頭を抱え、一人は微笑んでいた。

そして一刀は、今晩は無事に寝られないことを覚悟した。

翌朝、朱里と他2名は普段より元気な状態で政務に取り組んでいたが、その横で約1名が精魂尽き果てた顔をしていた……。

第37話

～徐州政務室～

この部屋で現在、ある案件を巡り、愛紗と雛里が口論になっていた。

「この方針はおかしいだろう！納得できん！」

「そう言っても桃香様も許可された案件です！納得して貰わないと困ります！」

雛里が桃香の名前を出すと愛紗も明らかに不満な顔をして、怒りを押さえた声で

「クッ…分かった、その話了解はしたが、しかし私は納得していないぞ」

「すまんが気分が悪くなったので、これで失礼するぞ」

不満な顔をして雛里の返事も聞かず、愛紗は部屋を出て行ってしまった。

そして愛紗が出て行った後にちょうど愛紗と別方向から入れ違いに部屋に入って来た凪が

「また愛紗と喧嘩か？」

「はい…」

凪から言われると雛里も困惑そうな表情をし、凪も困り果てた顔をしていた。

桃香と愛紗の徐州平定戦後のやり取りの以降、２人の関係は微妙な雰囲気になり、それはあの一件で主導した雛里と愛紗の関係にも影響が出始め、それは色んなことでお互い意見が合わないことが多くなり、口論の回数も増加傾向を示していた。

そんな中、雛里は話題を変えようと凪に要件を聞くと、凪は現在の兵たちや町の様子の報告に来たことを告げると雛里が

「それで凪さん、現在兵隊さんや町の様子はどうですか？」

「兵の方は問題ないが、ただ町の方は、私たちが逆に警戒されている感じだな…」

「正直桃香様があのようなことをしたので、町の人の多くは今後について不安に駆られて

いる人が多くいると思うぞ、雛里」

「確かにその点について否定は出来ません、それで凪さん、今後についてご相談したいことがあるのですが、まずはこれを読んでいただきますか？」

雛里はそう言って、凪の前に木簡を差し出した。

凪はその木簡を受け取り、中を読み始めると、その中身に書かれている内容について驚いた。

「雛里…本気か！？」

凪は中身を書かれている内容について、雛里に確認の意味で問い詰めると雛里は無言で頷いた。

そこに書かれていた内容は桃香たちが近い内に兵を起こし、孫策軍と連合して袁術軍との戦における方針や今後の事が記載されていたが、凪が一番驚いた点は、今後の戦いにおける軍の責任者を凪にしていたことである。

「雛里、なぜ時期に戦を？そして何で私を責任者にした？鈴々は…流石に責任者に出来ないが、愛紗がいるだろう？」

これは至極当たり前の質問であったが、その質問について雛里は

「凪さんの言いたいことは分かります、まず一点目ですが、これは仕方がないことですが私たちの内政の不満や不安の矛先を袁術軍が戦うことにより、民の目をそちらに向けるようにします」

雛里は苦渋の表情で語り

「つまりこの状態を打破するために袁術軍を利用という訳か？」

凪がそう言うと雛里は無言で頷いた。

「それで二点目のことですが、愛紗さんは確かに我が軍で一番武勇が立ち、責任感など色んな事でも問題はありません……が、しかし愛紗さんは、今、私たちと今後の方針について、色んなことで意見が食い違っています。桃香様と愛紗さんとの関係で愛紗さんが何かするとは考えられませんが、今後の方針が食い違っている現状で愛

紗さんを責任者にすることは他の方への悪影響もあります。ですので一旦責任者から外しています、今後考えを改め、桃香様の方針に従って頂けるのであれば、責任者に戻します」

雛里はそう言って凪に説明した。

凪と話をする前に雛里は桃香と愛紗が徐州平定戦後の遣り取り以降、２人の関係に影を落としていた。更に愛紗は、桃香や雛里の政策に対しても反抗的な態度を取り始め、そこで雛里は周りへの影響を考え、先の理由から、一時的に軍の責任者から外す方針を固めていた。

そしてその方針について雛里が桃香に報告に上がると、桃香から

「雛里ちゃん、愛紗ちゃんがこの理由で軍の責任者から外れることに納得すると思う…？」

「……多分、不服は唱えるとは思います」

雛里は言葉を切り、真剣な顔つきで

「桃香様、一つお願いがあります、桃香様の剣と印を私に預けていただけますでしょうか？」

「万が一、愛紗さんが私の指示に従わない場合、私が桃香様から剣と印を預かっていることを示せば、愛紗さんも流石に了解はしてくれると思います」

雛里が桃香から剣と印を求めたのは、桃香から生殺与奪の権を与えられたということを示

すと同時に、桃香が今後雛里を重要視することを意味した、そして愛紗には桃香と雛里に何が何でも従って貰うメッセージを示すものであった、そんな雛里の問いに桃香の答えは

「うん…仕方ないね、今の私には愛紗ちゃんも必要だけど雛里ちゃんも必要だもん、きっと愛紗ちゃんもお互い話をしたら分かってくれるよ、分かってくれたら、その時は雛里ちゃん、愛紗ちゃんを軍の責任者に戻してあげてね」

桃香から言われると雛里も愛紗が責任のある役目から一時的に外して冷却期間を置けば、再び元の鞘に納まると踏んでいた。

雛里は、そして自分と桃香とのやり取りの経緯や今後への愛紗の扱いなどについて凪に説明をすると、凪は了解はしたものの、一言雛里に聞こえぬように

「上手くそれで治まれば良いが……」

無意識のうちに呟いていた。

～愛紗視点～

「なぜ桃香様はあのような行為を……いくら北郷様や曹操に桃香様の理想を認められなかったと言って、理想を変えるなんて……」

愛紗は、未だに桃香たちの行為に対して納得することが出来ず、そしてここ最近では桃香や雛里が行う政策に対しても自分の納得出来ない感情論が入り込んでしまい、次第に2人に対して反抗的姿勢を表していた。

そんな愛紗は自分でもやるせない気持ちは分かっているが、今の桃香を翻意させる手立てがない現状ではどうすることも出来なかった。

そしてそんな思いは、

「いったい私は何に対して怒りを持っているのだろうか……」

（桃香様が理想を変えたことに対する怒り？それとも私に相談が無かったことの嫉妬？桃香様を止められなかった自分への腑甲斐なさ？）

愛紗の中に様々な考えが頭を巡り、解決する糸口が見えない状態に陥っていた。

～長安～

一方、長安にいる一刀たちは各諸侯の思惑も露知らず、いつも通り平穏な日々を送っていたそんなある日の夜、一刀が用事で蒲公英の部屋をノックして

「蒲公英入るぞ～」

ドアを開けようとすると、中から

「へ？ご・・ご主人様待って入らないで！」

蒲公英が一刀の入室を叫んで止めようとしたが、残念ながらその声は届かず、一刀が部屋に入ると、そこには何故か星と亀甲縛りをさ

れていた蒲公英が横たわっていた……。

それを見た一刀は、あまりにもシュールな光景に固まってしまい、

「2人とも邪魔したな…じゃあ」

部屋から立ち去ろうとすると、縛られている蒲公英が

「ご主人様待って!待って!これ違うの!縄の縛り方の練習しているところなの!」

蒲公英がそう叫ぶと星が

「そうですぞ主、蒲公英が私に縄の捕縛の方法を教えて欲しいということで来て、いろいろ教えていたのですが、やはり実際に身体で覚えた方が良いということで蒲公英も了解してやっております」

「それで……なぜこの縛りしたのかな……?」

「私の趣味です（キッパリ）」

一刀の質問に星が自信満々で言い切ると一刀は頭を抱えていた。

「取りあえず、周りから見てもその姿は拙いから早く解けて」

一刀が星に蒲公英の縄を解くように言うと蒲公英が

「ちょっと待ってご主人様!もうすぐ何か掴めそうなの……」

最後の語尾が何か変だと思った一刀は、蒲公英をよく見ると息遣い

が荒く、表情も何か官能的な表情を見せていたので、

「星！蒲公英の様子がおかしいぞ！」

「おや、きつく縛りましたかな、蒲公英に新しい世界に連れていったかも」

星が呑気な事を言っていると、

「さすがにこれは拙いだろ…、蒲公英切るぞ！」

「ご主人様は待って！」

蒲公英がそう言うも、さすがにあのような姿にさせておくことに色々と問題があり、さすがに身体にも無理があったので、一刀は急いで縄を切った。

縄を切られて蒲公英が不服そうな表情をしていたが、一刀が蒲公英に

「何でこんなことをしてるんだ？」

「以前戦いの時に星お姉様が、捕虜を捕縛した時に縄裁きがあまりにも上手だったから、教わろうと思ってね」

「それはいいけど…何でそこで蒲公英の身体を縛ることになるんだ？」

「蒲公英は私の身体で縛る練習していたのですが、なかなか上手くいかずに解けてしまうので、１度力加減を知るには自分の身体で味わった方が良いと思いやってみしたが、なかなか効果があったよう

で……」

「星お姉様、今度は違う縄裁き教えてね♪」

星と蒲公英が笑みを浮かべているとさすがの一刀もこの2人には呆れかえるしかなかった……。

一方、一刀が星たちと戯れている時に紫苑は、朱里とお茶を飲んで話をしていると

「ねえ朱里ちゃん、あなたが持っている本を貸して貰えないかしら？」

「え？いいですよ、どんな本ですか？」

「あなたが持っている秘蔵の本よ」

「秘蔵の本と言いますと…？」

朱里が首を傾げながら聞くと

「あらあら、分からないのね、朱里ちゃんが寝台の下に隠し持っている（ピー）の本よ」

紫苑から予想外の指摘を受けた朱里は

「はわわーー、な……何で紫苑さんがそんなことをし……知っているのでしゅか！」

完全噛んでいる状態の朱里に、紫苑が

「ふふふ、それは秘密よ」

「せっかくばれていないと思っていたのに……、このことはご主人様に秘密にして貰えますか……」

「勿論よ」

「でも紫苑さん、なぜ私の持っている本が必要なのですか？」

「そうね……、ご主人様を愛しているのには変わりはないけど、最近お互いにアッチの方に刺激が足りなくなっているように感じて、ちょっと朱里ちゃんの持っている本を参考にしようと思って……」

紫苑の突然のカミングアウト的な発言をすると朱里が飲んでいたお茶を噴き出してしまい、

「はわわ……突然何を言っているのですか！」

「ごめんね、皆、ご主人様を愛しているのを見て私も負けてられないと思ってね」

紫苑のため息を吐く姿は、内容は別として本気で悩んでいる見えた。

すると朱里が

「紫苑さんって色んな事を知っていますね、私なんてアッチの方なんて基本しか知らないので……」

朱里が自ら発した言葉で何か思い出したかのように

「紫苑さん、おかしな言い方かもしれませんが、こういうことも基本に返られた方がいいかもしれませんね」

「どういうことかしら？」

「武術の方でも悩んだ場合、基本に立ち返れば良いと言うお話をお聞きします、ですのでこういうことも相通じる物かもしれませんので、１度お互いに基本に立ち返り試してみたらどうですか？」

朱里からそう言われると紫苑も納得したのか

「そうね１度やってみましょうか、ありがとう朱里ちゃん、朱里ちゃんが困った時に相談に乗るわね」

紫苑は朱里にお礼を言って席を離れた。

そして翌朝、紫苑が朱里を見つけて近くによると

「ありがとう朱里ちゃん、昨日の助言で旨くいったわ」

「あ、良かったです♪」

「今度は朱里ちゃんの技能向上に私と一緒にどうかしら？」

紫苑からそう言われると、さすがの朱里も興味心に負けてしまい、いつの間にか紫苑の弟子状態になってしまっていた……。

第３８話（前書き）

ここからオリキャラが多く登場していきます。

オリキャラが嫌な方はこのままUターンして下さい。

第３８話

華琳が進めている一刀包囲網は密かに行われており、現在麗羽のところにも華琳からの使者が送られていた。

～冀州・南皮城～

「さて曹操さんの使者が私に何の用かしら、こう見えても私は忙しいですのよ」

「いえ～お手間を取らせて申し訳ありません～。実は袁紹様に北郷軍との戦いに加わっていただきたくて参りました～」

いつも通りのんびりした口調で使者として口上を述べている風に麗羽がいつもより真剣な顔をして

「…それはどういうことですの？」

「はい～、現在、北郷軍の勢力が非常に強く、このまま行けば、私たちも飲み込まれる恐れがあります。ですので、曹操様は袁紹様や劉表様に劉璋様と連合を結び、４方向から北郷軍を攻めようと思っています～」

「それは私に曹操さんの指揮下に入れっておっしゃりますの？」

風の説明に麗羽がやや語気を強めながら言うも

「いいえ～、今回は各自別の方向から攻め入りますので、お互い同時期に攻め入り、早く北郷軍を倒したもの勝ちですよ～」

風が麗羽の口調を聞き流すかのように述べると、話を聞いていた斗詩が

「でも曹操様のところは直接北郷軍と領地は接していませんが、なぜ兵を出してくれるのですか？」

確かに現在華琳が治めているエン州と一刀が治めている擁州とは距離があり、仮に華琳が勝利収めたとしても領土は分断され、あまり得にならない状態で今回の戦いに参戦することに疑問に感じた斗詩は、風にこのような質問をぶつけてみた。

「はい～もっともな疑問です。その理由はさっき言った理由に、先の反董卓連合の戦いの時に袁紹様もご存じの通り曹操様の右腕的存在の夏侯惇将軍が北郷軍の北郷さんの夫人さん（紫苑）に負傷を負わされた上、散々な目にあい、その復讐戦のために参戦したいのです～、ですので戦いをするためにも、ぜひ袁紹様のお力が必要なのです～」

風が華琳の参戦理由をもっともらしい理由を述べるとも麗羽に頭を下げると麗羽もそれを無下に断ることが出来ず、更に麗羽の力も必要と言われたこともあり

「オッホホホ～～、曹操さんから頭を下げられると断ることが出来ませんわ～、曹操さんに伝えて下さい、今、預かっている司隷州を通過させることを許可しますので、一緒に北郷軍を叩きますわよ」

麗羽も賛同して一刀包囲網に参加することを風に告げると風も内心うまくいったと思い、頭を下げ退出した。

それを横で聞いていた猪々子が

「姫～、北郷軍と戦うって言うけど、先に公孫賛と戦う予定じゃないんですか？」

「その通りですわ文醜さん、私たちはそのまま白蓮さんと戦いますわよ」

麗羽が平然と答えるので、斗詩が驚いた顔をして

「それじゃ姫、北郷軍と戦うのは口約束ですか！？」

「何をおっしゃりますの？顔良さん、そんな名門の私が頼まれた約束を破る訳ありませんわ、并州にいる仲達さんに兵を出兵させますわ」

それを聞いた斗詩が

「姫、そ…それは無理があります！并州はつい最近ようやく黒山賊を鎮圧したばかりでまだ安定していません、それでしたら公孫賛様に向ける兵を北郷軍に回した方がまだマシです！」

斗詩が麗羽にそう言ったが、実は麗羽は話の途中から先の戦いで紫苑と璃々に散々な目にあったことを思い出し

「……顔良さん、また私にあのような恥ずかしい目に合わせるつもりですか？」

恥ずかしいそう顔をしている麗羽に斗詩は内心

（「それじゃ引き受けなければいいじゃないですか…」）

ぼやいていたが、結局斗詩も麗羽の命に従うしかなくなかったのである……。

～益州・巴郡～

「桔梗様！夕霧様、劉璋様から手紙が来ました！」

「何じゃ劉璋の小坊主から手紙じゃと？」

「あの馬鹿、また碌でもない命令を持って来たんじゃない？」

「取りあえず焔耶、その手紙寄越せ」

この桔梗を呼ばれた女性は巴郡を治めている太守で名を厳顔と言い、そして夕霧と呼ばれる女性は名を法正と言い、この巴郡における内政兼軍師を担当、手紙を持ってきた焔耶と名乗る少女は魏延と言い、厳顔の副将を務めていた。

桔梗はその手紙を受け取り一読すると

「これを見ろ、夕霧」

夕霧と呼ばれる女性もそれの手紙を見ると

「……馬鹿な太守の立場を守るとしたら、今回の攻撃参加も仕方がないだろうな」

「桔梗様、夕霧様、いったいどこに攻撃する話をしているのですか？」

「ああ我々と成都の張任を加えて、雍州の北郷軍を攻略しろとの仰せじゃ」

桔梗が苦々しく答えると焔耶が

「よろしいではないですか桔梗様、我々の力を北郷軍に見せつけましょう！」

焔耶が武人らしく答えると夕霧が「ゴツン」と焔耶の頭を拳で殴りつけ

「馬鹿かお前は！北郷軍は北郷夫妻に馬一族、趙雲、それに董卓軍の猛者だった呂布、張遼、華雄がいるんだぞ、お前ごときの腕で勝てるか！」

「それに兵の質もまったく違いすぎる、西涼の強兵と我々の兵では雲泥の差がある、いくら北郷軍を包囲網で分散させて戦うと言っても正直どれくらい戦えるか疑問だぞ、桔梗」夕霧が焔耶を叱り飛ばした後、冷静に状況を説明したが、桔梗は

「しかしこれだけの将を揃えている北郷軍とは、武人として一度勝負したいと思っていたのじゃ」

武人の血が騒ぐというべきか桔梗の笑みを見ると夕霧も

（「やれやれ…、酒と戦という言葉を聞くと止めようがないわ」）

すでに桔梗の説得を諦め、

「はぁ～、もう桔梗が戦闘態勢に入ってしまったわ、焔耶あんた今から出兵の準備しな」

夕霧から言われると焔耶はその場を離れ、出兵の準備を開始し、

「それで桔梗、ここの守りはどうする？」

「そうだな…、取り敢えず隣の城にいる……に頼んでおこうか…」

「それしかないわね、じゃあんたから頼んでおいてくれるかしら」

「承知じゃ、じゃ準備の方はお前と焔耶に任せるぞ」

こうして劉璋軍も北郷軍包囲網戦の準備を始めた。

～并州～

「陽炎、袁紹様より書状が来たぞ」

「白雪ありがとう」

陽炎はそれを受け取り、手紙を一瞥すると溜息ついて

「まいったわね……、これはあの姫はまったく予想外の行動を取ってくれるわ…、まだこっちは黒山賊の後始末も終わっていないのに……」

「取り敢えずは……この場面をどう乗り切るか……、白雪、急いで

北郷軍のことを調べておいてくれるかしら、それとあと全員こちらに来るように伝えて貰える」

「ああ分かった」

陽炎がそう伝えると深雪と呼ばれる女性は静かにその場を立ち去った。

この陽炎と呼ばれる女性の姿は黒色のロングヘアーで肌は白い肌できめ細かく見え、そして顔立ちは神秘的な姿を見せていた。

この陽炎と名乗る女性の名は司馬懿、字を仲達と言った。元々は漢の名門の出であったが、反董卓連合戦いの後、当時洛陽にいた華琳は陽炎が優秀で美形なことに目を付け、出仕を求められたが、陽炎は華琳の嗜好や上から目線の態度など気に食わず、病気を理由に出仕を拒否。更に華琳の従姉妹の曹洪（本来は同族ですが、今回は従姉妹で設定）が陽炎に交際を求めたがこれも当然拒否、これを恨んだ曹洪が華琳に告げ口したことを聞いた陽炎は、命の危険を感じ、同じく漢の名門で知己であった麗羽に助けを求めると麗羽はこれを承諾、そして麗羽の指揮下に入るような形で麗羽の勢力下である并州の太原郡の太守を務めることとなり、そして并州を荒らし回っていた黒山賊を麗羽に代わり、これを鎮圧、現在は并州を代理という形で治めていたのであったのであった。

そしてこの白雪は名を蒋済（しょうさい）と言い、陽炎とは親友で現在は副官兼内政担当を行い、非常に優秀でもあるが、酒が大好きで平気で二日酔いで朝議に出ることも癖のある豪快な人物だが、陽炎は白雪が親友で裏表がない性格をしているのを大変気にいっていた。

そして白雪が去ってから陽炎が一言

「でもこれから戦乱が本格化するわね…、これから生き残るのはいったい誰かしら…フフフ」

不敵な笑みを浮かべ、そう呟いていた。

～長安～

一刀たちは朝の仕事を終え、紫苑と碧と翠の４人が食堂で昼飯を食べていた。

そして訓練を終えて、遠慮なくガツガツ食べている翠の姿を見て紫苑が

「翠ちゃんよく食べるわね」

微笑んでいると、碧が苦笑いしながら

「あんた結婚したというのに全然女らしくならないというのはどういうことなんだ？」

「だって仕方ないだろう、訓練して腹が減っているんだからよ」

話をしていると、不意に碧が一刀に

「一刀さん、あなたこれからどういう方向に進もうと思っているの？」

「取り敢えずしばらくはこの状態で国力を蓄えようと思っていますが…、あとは他がどう動くか見極めたいところですね」

「そうですね…、今の状態で洛陽や荊州方面を攻め取ることは可能ですが、防衛面で問題が出てきますし、それでしたら益州方面を攻略したいところですが、ただ攻めるにしてももう少し落ち着いてから方がいいですわ」

一刀と紫苑がそう答えると碧も

「そう分かったわ、どちらにせよこのまま状態が長くは続くはずはない、多分どこが動くとは思うけど…」

3人がいろいろ考えていると翠が

「お母様、ご主人様、紫苑、何そんなに暗い顔してるんだよ、私たちは皆、家族で仲間なんだよ、私は小難しいことは分からないけどさ、私たちはご主人様の選んだ道を信じて付いて行くんだ、だから自信持ってくれよな」

翠からそう言われると一刀も

「ああそうだな、翠の言う通りだ」

「そうね、翠ちゃんに教えられたわ」

「翠、偶にはいいこと言うな」

「お母様、偶にはと言うなよ…」

翠の少々落ち込んでいる姿を見て3人が笑っていると、やや暗い表情をした真理が食堂に現れ

「何だか楽しそうですね」

皆に声を掛けると、真理の顔に何かあると感じた一刀が

「何かあったの」

「ええ…残念ながら一時の休息は終わりました、我らは袁紹・曹操・劉表・劉璋・羌の五方面に包囲されてしまったわ」

真理の報告を聞いて、一刀たちに衝撃が走り、そして新たな戦いが始まろうとしていた…

第３９話

一刀たちは五方面進攻の話を聞くと、軍議することを命じ、長安にいる将はすぐに集合した。

軍議冒頭、情報担当の真里から各軍の進攻状況が報告された。

「まず羌からの進攻、これを便宜上、第一路と呼ばせて貰うけど、これが軍勢約５万、現在西涼にいる馬休、馬鉄が伏兵や罠を仕掛けて行軍を遅らせているけど、最終的籠城戦はやむを得ない状況、ただ詠からの手紙では２万の兵がいるので籠城戦は問題ないけど、兵力の差で敵を押し返すことが出来ないので、その分の援軍が欲しいとのことだわ」

因みに華雄も出陣したかったのだが、詠が月に頼みこみ、傍にいて守って欲しい旨を告げると渋々言うことを聞いたらしい。

真里が語ると、皆は後に残る４つの進攻状況を聞くため無言のままであった。

「次は第二路、これは益州からの進攻、成都から張任、巴郡から厳顔、魏延、法正が出陣、両軍合わせて約５万が漢中に向けて出陣しているわ」

「引き続き、第三路、これは荊州からの進攻、蔡瑁と張充、文聘が出陣、これが兵約３万」

「第四路、こちらは曹操軍が来るわ、夏侯淵を筆頭に曹仁、曹洪、そして軍師として郭嘉が付いている、こちらは兵約４万」

「最後に第五路、并州の袁紹だけど、こちらは残念ながら警戒が厳しく大将の司馬懿以外他の将が分からないの、こちらは兵が約３万」

真里が一通りの説明を終えると一刀は内心

（「この世界には司馬懿もいるのか…、しかも今回は更に孫策もいるし凄いレベルが高いぞ…」）

一刀たちは、今更ながら今回は凄い世界に来たことを改めて感じ、紫苑や璃々も一刀と同様にこの外史の意外性を感じていたのか、３人でお互い顔を見合わせると苦笑をしていた。

そして霞が冗談半分で

「なあ一刀、あんた何か恨み買ったか？」

「…曹操や袁紹なら確実に恨まれているかもしれないけどな…」

一刀がやや自虐的に答えていると碧が

「しかし私たちが、劉璋や劉表からは攻められても仕方がない状況だよ」

「それはどういうことだよ、お母様」

「考えてもみな翠、隣国に自分より大きな勢力がいたら、いつ自分たちが攻められると思いビクビクするだろう？ましてや今回は、誰が音頭をとったか分からないけどさ、向こうからすれば私たちを潰せる絶好な機会だ、奴らもそんな機会をみすみす見逃しはしないだ

ろう」

碧がそう言うと皆は納得した表情をしていた。

「それでだ、誰をどの軍に当てるのだ？」

星が朱里や真里の軍師たちに確認すると朱里が

「これは私たちと音々音ちゃんと決めましたが…、まずはそれを聞いて貰えますか？意見がある方はその時お伺いします」

朱里がそう告げると皆は黙って、発表を待った。

「まず第一路ですが、こちらは碧さんと渚さんに当たって貰い、兵は3万付けます。これは羌の兵が強兵でもありますので、西涼にいる兵と合わせれば、兵は五分にしています。将については碧さんや渚さんが羌の方から恐れられているので、お二方よろしくお願いします」

「ああ分かったよ」

「承知したわ」

2人が承諾したが、すると次の瞬間、朱里が今まで見せたことのない辛い表情を見せ、そして璃々に

「璃々さん…、この戦い私に命を預けて頂けますか？」

突然唐突な発言をしたので璃々が発言する前に

「どういうことだ、朱里？」

「ちゃんと説明して貰えるかしら朱里ちゃん？」

一刀と紫苑が怪訝そうな顔したので朱里は

「はい勿論です、第二路についてですが、これは劉璋軍が輸送の問題などもあり、恐らく漢中から直接長安に突いてくると思います。ですので、我々は進軍途中にある陳倉に援軍１万を送り、そこに駐屯している兵５千と一緒にここを守っていただきます。そしてそこに行く援軍の将に璃々さんにお願いしたいのです」

「勿論理由はあります。まず璃々さんが防衛戦に不可欠でもある弓の扱いに秀でていること、そして天の御遣いであることです。今回の籠城戦は守りが主ですので、当然作戦は弓に長けた人に性格が沈着冷静粘り強いである方が条件になります。更に士気の向上についても天の御遣いが来てくれるのであれば、兵も我々は見捨てられていないと思い士気も下がることはしばらくないでしょう」

「この２つの条件に当てはまるのが紫苑さんと璃々さんなのですが、紫苑さんについては第四路の曹操軍を担当していただきます。だからこちらの指揮を璃々さんにお任せしたいのです」

朱里は説明したが、朱里の言葉に紫苑が

「朱里ちゃん、見捨てると言う言葉があったけどどう言うことなの？」

言葉は穏やかであるが、表情は怒りを抑えている紫苑であるが、朱里はそんな紫苑を怯むことなく見据え

「見捨てると言い方は誤解を招く発言で申し訳ありません。しかし

はっきり言います紫苑さん。現在我々は五方向から囲まれています。そして各方向に兵を向けてしまうため、ほとんど兵に予備がありません。ですので、どこか一方向でも撃破出来ない限りは、援軍は期待出来ないと考えて下さい。紫苑さんの第四路も同じよう理由で函谷関を死守していただきます」

「だからそういう理由で、璃々さんには死地に飛び込む覚悟をしていただくことであのような言葉をさせていただいたのです」

朱里の説明が終わると紫苑が

「……分かったわ朱里ちゃん、そういう理由だったのね。ごめんなさい」

「い…いいえ、こっちこそあのような言葉を言って申し訳ありません」

「そうか…まさに総力戦だね」

蒲公英がそう呟くと、一刀が璃々に

「璃々どうする？もし無理なら誰かと代わって貰うか」

皆が璃々の方に一斉に顔を向けると璃々は

「朱里…、貴女の事信じていいよね」

朱里が無言で頷くと、璃々は

「…分かったよ朱里、私、この任務引き受けるよ。もしこの任務を

断っても戦いからは逃れることは出来ない。だったら私、この任務を私に任せた朱里を信じて戦うわ」

璃々が力頷くと一刀と紫苑は成長した愛娘を見て、嬉しく感じていた。

「紫苑さん安心してちょうだい。私たちが羌の連中を早く片付けて、すぐに璃々の応援に向かうようにするからさ」

碧がそう言うと紫苑は

「そのお心遣い、ありがとうございます」

言って一刀と共に頭を下げていた。

「ご主人様、お母さん心配しないで、私、こんな戦いで死ぬ気さらさらないから。まだやりたいことたくさんあるし、そして皆が私たちを助けてくれるのを信じているから」

璃々が元気よくそう告げると、場が少し好転したように感じた。

朱里が引き続き説明に入り

「そして第三路ですが、ここは包囲網突破の鍵を握っていますので、こちらに主力を投入します。霞さん、恋さん、星さん、それに音々音ちゃんに兵４万を付け、武関に行って劉表軍を迎撃してもらいます。ここの部隊に望むことは劉表軍の速攻撃破です」

「向こうの兵の練度や士気はそれほど高くありませんし、指揮する蔡瑁や張充はどちらか言えば水軍向きの将で、もう１人の文聘も霞さんたちの敵ではありません。それに音々音ちゃんを付け、確実か

つ速攻戦で勝つことを期待しています。但し途中で作戦を変更する恐れがあるので、その時は必ず指示に従って下さい」

「劉表軍を撃破したら、連戦になり、大変申し訳ありませんが、素早く兵を二手に分け、曹操軍と劉璋軍に向けて下さい」

「任せとき朱里、その作戦必ず成功させるで」

「…必ず勝つ」

「厳しい戦いだが、遣り甲斐はあるな」

「恋どのがいたら、勝つこと間違いないのです」

それぞれ士気を高めていた。

「第四路については、先に説明しましたが、曹操軍が相手で函谷関の防衛です。ここは勿論紫苑さんに付いていただきます。理由は璃々さんと同じです。兵については1万5千しかいませんが……何とか守って下さい、よろしくお願いします」

「分かったわ朱里ちゃん、必ず守り切るわ」

「そして最後の第五路ですが、こちらは長安の北にある北地郡に出ます。そして翠さんを大将に、蒲公英ちゃんに私が出陣します。こちらは兵2万で行きます」

朱里が言ったところ、一刀が

「ちょっと待った朱里、俺もこちらに出陣するぞ」

「ご主人様危険です！長安にいて全体の動きに睨みを効かせて下さい」

朱里が一刀の出陣に待ったを掛けたが、一刀は

「朱里、皆、聞いてくれ。今回の袁紹軍の将の司馬懿は、俺が知る世界ではかなり有名で優秀な軍師だ。能力も朱里並、人によったらそれ以上の評価をしている人もいる。だから俺も出陣して確かめて司馬懿がどんな人物か確認したい、それに皆が出陣するのに俺だけ、長安にいることは耐えられない」

一刀がそう言い切ると真里が

「朱里、これは一刀さんが言うことを信じた方がいいわね。実際、今回の袁紹軍に偵察に行った者はほとんど帰って来ていない、正直こいつは不気味だよ」

「だから朱里、心配なら更に一刀さんと更に兵を1万付けて、向こうと兵数同じにしておくわ、それで出陣しなさい。こっち（長安）は5千で守るから。取り敢えずあと兵士希望者を募って、何とか兵を集めておくわ」

真里が朱里を説得するような形で、一刀出陣の案を提案すると、朱里もさすがに観念したのか

「仕方ないです…ご主人様、向こうでは私の指示に従って貰いますから、決して無茶な出陣は駄目ですから」

やや拗ねた言い方で言うと一刀は

「分かったよ、全て朱里に任せるから」

「これで決まりですねご主人様、最後に皆さんに言葉を発していただきますわ」

紫苑が最後に締めくくりの言葉を一刀に言うように促すと一刀は静かに席を立ち

「この戦いは非常に厳しい戦いになる。しかし俺たちは負ける訳にはいかない。俺たちの世界にこういう言葉がある「一人はみんなのために、みんなは勝利のため」」

「この言葉は、どれだけ優秀な者でも自ずと限界がある。しかし全体になればこれが個人でできることの何倍にでも力を発揮することができる可能性がある」

「だから俺は皆を信じている、だからそれぞれ皆もお互い信じてあってくれ。そして皆、再び元気な姿を見せてくれよ！」

一刀の激に

「「「「「おう！」」」」」

皆は意気に感じ、そして自然と戦いの準備に向かった。そしてそんな中、真里は星を呼び止め

「星、これをあんたに預けるよ」

真里は一つの小さい布袋を星に手渡し

「行軍中、行程の半分を過ぎた時にこの中に入っている紙を必ず見て、この指示に従ってくれ」

星は真里の顔を見て、ただ事ではないことを感じ

「このことを知るのは？」

「今のところ、私と朱里、後で一刀さんに伝える。それに霞には紙の中身は言わないが、必ずその指示に従うように言っておく。音々音には腹芸は無理だから黙っているし、紫苑さんや璃々にも変に期待させたくないから黙っておくつもりだ」

「中身のことは聞かぬが、我が軍にとっては良いことか？」

「一か八かの賭けだね。因みにこの作戦を考えたのは朱里だよ。私はこんな博打みたいな策は思いつかなかったね」

真里がそう言うと星は不敵な笑みを浮かべ

「これを見た時、皆の驚く顔が見物だが、真里よ、お主も色々気を遣って大変だな。これだけあれこれ気が付くもんだ」

「ふん、これも性分だ…」

「しかしお主のそういう周りを思う心遣いなら、お主と主と一緒になっても良いがな…」

「別に今のところは星たちの邪魔をする気はないよ」

真理がそっけなく言うと星がニヤニヤした顔で

「しかしこの世界では主より上の男はなかなかいないが、真理はいったいどういう男が好みかな？」

「べ…別に誰だっていいだろう！わ…私だって好きな男…」

「……」

「わ…悪い用事を思い出したわ！じゃあ！」

明らかに動揺した真理は、この場から逃げて去ってしまった。

それを見た星は

「フフフ…、これで真理をからかう話ができたな。朱里あたりから情報を仕入れておこうか…」

そう言いながら、星もこの場を立ち去って行った。

その後、真里と朱里は一刀に星に渡した物について説明をしたが、これは一か八かの作戦で、秘匿を要するため堅く口止めして、また作戦が失敗した場合の紫苑や璃々にも言わないよう伝えられると一刀も最初は難色を示したが、真理の説明を聞くと最終的には納得した。

そして一刀が真理に

「真理いろいろ気を使って貰って悪いな、真理が口止めするように言ってくれなかったら、やはり璃々のことが心配になってこのことを喋ってしまいそうだからな」

「一刀さん、このことはくれぐれ内密にしておいて下さい」

「ああ分かっているさ、期待していて万が一失敗した時に落胆が大きくなってしまうし、作戦上機密保持観点からも仕方がない」

「でも真理はいろいろ気が回るな、以前朱里の時にも世話になったし、今回も紫苑や璃々のことでもあれこれ気を遣わせて、真理には申し訳ないな」

「気にしないでちょうだい、むしろ作戦のためとは言え、紫苑や璃々や皆に黙っておくが気が引けるわ」

「皆分かってくれるさ、でも真理それだけ気が利くのだったら、将来良い嫁さんなれるな」

一刀がさり気なく言うと真理は、さっき星に言われたことを思い出し、そして今までそんなことを意識していなかった目の前の一刀を見て、急に恥ずかしくなり

「よ…嫁!?そ…そんなこと考えたこともないよ!」

「でも真理は世話好きそうで朱里や雛里からも慕われていたじゃないか」

「そうですよ、真理お姉さんだったら、良いお嫁さんになれますよ」

一刀に続いて朱里まで話に加わってきたので、真理は余計に恥ずかしくなり

「朱里あんたは余計なことを言わなくてもいいの！朱里！私たちも準備があるから行くよ！」

真理は強引にこの話を打ち切り、準備のために朱里を連れて部屋を出ていき、一刀も真理が動揺した理由をあまり考えずに、その後部屋を出たのであった。

その晩、一つの寝台に三人が『川』の字で寝ており、そして真ん中に璃々がいたがこれからのことが不安で目が冴えて眠れない状態でいた。

そしてそんな璃々を見ていた紫苑が

「璃々、不安なの？」

「う…うん」

横に寝ている一刀を気にして小声で璃々だったが、

「璃々…」

紫苑が優しく璃々を抱きしめたが、璃々はこれに抵抗することなく素直に抱きしめられた。

紫苑に抱きしめられるとなぜか先程の不安感が徐々に消えていった。

そして紫苑が璃々に

「あなたが不安なのはよく分かるわ、だから何も言わなくてもいいの、今日はずっとこうして上げるわ」

そう言ってくれる紫苑に安心していた璃々であったが…、すると紫苑が璃々の顔を見て

「まだちょっと不安かしら?だったらご主人様…起きているのでしょう?」

寝ていたはず一刀が紫苑に呼ばれると2人の方に顔を向け

「やれやれ起きていたのが分かっていたのか…」

一刀がそう言うと紫苑は優しく笑みを浮かべて

「ではご主人様、璃々を前と後ろから抱きしめるのを手伝ってくれるかしら♪」

一刀も

「それはいいなあ」

「え?え?……」

璃々は理解できないまま、前は紫苑、後ろは一刀に抱きしめられた。

璃々は2人の行為に驚いたが、しばらくすると何とも言えない抱き心地の良さに、目がとろんとなっていく。

「璃々、朝までオレたちがそばにいるからな…」

「そうよ、安心して眠りなさい…」

そして優しく頭を撫でる一刀と紫苑だったが、やがて璃々は安心したのか

「スー…スー…」

夢の中にたどり着いていた。

2人は璃々の寝顔を見て

「やはり母親の力は偉大だな。安心して眠っちゃった」

「でもご主人様もいてくれないと困りますわ…」

「そうだね…。紫苑、俺たちも寝ようか。明日から忙しくなるから」

一刀が璃々を挟んで、先程のように紫苑の頭を優しくなでると

「そうですわね。では、おやすみなさい…」

こうして3人は眠りにつき、そして準備ができると、皆それぞれ戦地に赴いたのであった……。

第４０話（前書き）

今回でようやく「ＴＩＮＡＭＩ」に投稿していた分に追いつきました。

今後は通常の投稿になりますので、更新は遅くなります。

これからもこの駄作の応援よろしくお願いします。

第４０話

一刀たちが各方面ですでに迎撃態勢を準備しているころ、各進攻軍もそれぞれ攻撃準備等に追われていた。

～漢中～

巴郡から出陣した桔梗たちは、同じく成都から出陣していた張任と合流を果たし、軍議が行われていた。

「物見の話では、陳倉に援軍１万がすでに入り、元々いた兵を含め１万５千程度だけど、でもその援軍の将が天の御遣いの第２夫人であたる北郷璃々が来たらしく、兵の士気はかなり高いらしいわ」

「だろうな」

「フン、そんなもの私が出陣したら余裕で崩してくれるわ」

やや慎重気味に考えている桔梗に対して、楽観的に考えている焔耶に夕霧が

「相変わらず馬鹿だね、アンタは。向こうがそんな簡単に城から出てくる訳がないでしょう、向こうは弓の名手と言われているんだよ。アンタがそんな考えでいたらアンタはどうでもいいけど、兵たちが城壁にたどり着く前に射殺されてしまうわ」

目上の夕霧から辛辣な言葉が言われると、さすがの焔耶も黙るしかなかった。

「夕霧、敵は散関（漢中側から見ると陳倉手前にある関）に出てく

るかしら」

「涼月（すずつき）、多分出てくるわ、ただ向こうの兵が私たちの3分の1程度しかいないから、恐らく足止めくらいの兵は出せないと思うけど」

「ただし今回は桔梗と焔耶がいるから、貴女には先陣させないわよ…」

「……分かっているわよ」

夕霧の発言に、一時戸惑いを見せた涼月に桔梗が

「…忘れられないか？旦那のことが…」

「ええ。どんなことがあってもあの人のことは、一生忘れることが出来ないわ……。取り敢えず後のことは貴女たちに任せるわ」

涼月と呼ばれる女性は、そう言いながら部屋を出て行った。

この涼月と呼ばれる女性、今回の大将である名は張任と言い、劉璋軍の名将でもある。しかし2年前に愛する夫が賊の討伐中に流れ矢に当たり落命すると、涼月は、今までの堅実な用兵ぶりが一転し、自ら先陣を切り、まるで夫の後を追うかのような猛烈な戦いをするため、一部の兵士から「死神」と呼ばれるようになり、桔梗や夕霧はそのことを心配していたのである。

そして部屋を出て行く涼月を見て、桔梗が

「ワシの戦好きは、生きるために戦うものだが、あやつの戦い方は死に向かって行くことを目的に戦っておる。このままだと本当に命

を落とすぞ！」

「だから私は散関では後方に回したけど、城攻めでは皆、それぞれに門を担当して貰うから、正直面倒は見られないわ」

「だったら、私たちの手で攻め落とすしかないですね桔梗様、夕霧様」

「焔耶その通りじゃ、それで夕霧、北郷軍の他の動きは分かるか？」

「取り敢えずは各地にそれぞれ兵を派遣して、防衛態勢を取っているわ、長安の兵は現在1万にも満たないから、ここを落とせば一気に長安を突けるわよ」

「では、ここにいる元々の守備兵5千ほど残し、我らはこのまま散関に出陣だな」

桔梗が発言するとあとの2人も頷くのであった。

～曹操軍～

現在、函谷関に向かって進軍中である曹操軍は、秋蘭を総大将にして、副将に凛、華琳の従姉妹に当たる曹仁、曹洪を引きつれ出陣していた。

今回は華琳自身の出陣も考えられたが、徐州の劉備軍が軍を起こす動きがあると情報が入り、万が一向背を突かれる可能性も考えられたので、代わりに秋蘭を総大将として出陣したのである。

「稟、函谷関に来る将は分かるか？」

「確か北郷殿の第一夫人の北郷紫苑が来るみたいです。かなりの強敵です」

「ああ、あの人か…、確かに強敵だな。実は姉者の目を射たのも、あの人だからな」

「え…春蘭殿の目を射られた話は聞いていましたが、その方ですか…これは油断出来ませんね。経験不足の明華様（めいか、曹仁の真名）と陽華様（ようか、曹洪の真名）にはよく言い聞かせておきます」

「頼む、今回は兵士たちに経験を積ませるつもりであったが、将があの人ではかなり手強い、皆にはよく言い聞かせておいてくれ」

秋蘭が凛に指示すると、指示された兵士たちにも緊張感が高まったのであった。

～陳倉～

すでに璃々は援軍を引き連れて入城しており、劉璋軍の迎撃に備え、陳倉と陳倉の防衛線である散関の防御態勢を整えていた。

そして璃々は、前線になる散関に兵5千を引き連れていた。

散関はすでに朱里の指示を受け先行した兵たちですでに陣地の構築を仕上がっていたので、璃々は数人の護衛兵と共にその案内を受けていたのだが、そこで案内している男性の将が急に

「これは指示と違っているではないか！ここを担当した責任者を呼

んで来い！」

怒鳴っていたので、璃々がその将に

「どうしたのですか？」

「ええ、この場所が指示された方法と違っていたので、ここを担当していた責任者を呼んでくるように指示したのです」

将が説明すると璃々が、

「その指示書を見せていただきますか？」

「どうぞ」

指示書を受け取り確認すると、その指示内容と実際に行われている実物と比較すると実際には手間は掛かるが実物の方が優れていた。

そして兵が責任者と思われる赤い髪をしたショートカットの少女を連れてくると

「何で貴様は勝手なことをしたんだ！」

「え～、こっちの方が手間は掛かるけど、頑丈でいいじゃない」

「何～！」

将が少女に注意しようとするとその少女が反抗的な態度を取ったことで、場が険悪な雰囲気になりそうだったので、璃々が間に入り

「ちょっと待って下さい、ここは私が注意しておきますので、貴男は私の代わりに他の場所の巡視をお願いできますか」

璃々が注意する将の立場も考えて、そう指示すると将も納得して璃々の指示に従った。

そして注意された少女は、璃々のことを少し階級が高い人くらいしか思わずに気軽に

「ありがとう。でもあの人考え方が固いよ、もう少し融通きかせればいいのね」

「まあいいや、説教を食らうのも嫌だったし。それで僕の名前は姜維って言うけど。あなたの名前は？」

璃々は、その名前を聞いて内心驚いたが、その動揺を隠して

「私？私の名前は北郷璃々だよ」

自分の名前を名乗ると姜維という少女は慌てて

「……ええ～～！そ…総大将にな…何て口の聞き方を失礼しました！」

「いいよ、急に喋り方を変えなくても普段の喋り方で話しようよ。それと北郷とかで呼ばれるとご主人様やお姉様も同じ姓でややこしくなるので、私のことを璃々と呼んでね」

璃々が一刀エキスを引き継いだような笑顔を向けると姜維と呼ばれる少女は、見事に心を打ち抜かれてしまい、顔を赤くしながら

「は…はい璃々お姉様！」

いきなりそう呼ばれると流石の璃々も頭の中が？になり

「ち…ちょっと待ってよ、何でお姉様なの？」

「え？私、実は璃々お姉様の噂を聞いていて憧れていたのです。璃々お姉様が普段から旦那様やお姉様から愛され、それを尽くす話を聞いて、ぜひ私も璃々お姉様みたいになりたい、そしてお姉様の妹みたいになりたいと…」

それを聞いた璃々は、頭痛がしたみたいに手で頭を押さえてしまっていた。

そして姜維がキラキラ目を光らせながら、璃々を見つめていたので、璃々はこの手のタイプには何を言っても聞いてくれないと諦め、ため息をつきながら

「ハァ…好きに呼んでいいよ」

「ありがとうございます！璃々お姉様！改めて自己紹介します。僕の名は姜維、字は伯約、真名は菫（すみれ）と言います」

「いきなり私に真名を預けていいの？」

「はい！喜んでお預けします」

2人がようやく落ち着くと、璃々が少し態度を改め

「では一つ聞くけど、今回の件について、指示が出ていたはずだけど、なぜ勝手に変更したの？」

「確かに指示通りにしなかったのは申し訳ありません。しかしこの指示では簡単に作り上げることは可能だけど、少し崩れやすいと思い、例え僅かでも時間を稼ぐためには、こうしたことに手間を惜しんではいないと思って、勝手に変えてしてしまいました…」

董の説明を聞くと璃々は

「確かに上の人に変更の指示を仰がなかったことは駄目だけど、決して手を抜いたわけでもないよね」

「それに董がしたことは、決して指示を仰がなかったこと以外は間違っているわけでもない、寧ろいい方に考えてくれていた。では私から一つ聞きたいのだけど、今回の戦い、私たちはどう守ればいい？」

璃々は董の話を聞いて頭が回る人物であると分かっていた、だから単刀直入に董に質問をぶつけてみた。今回の戦いは持久戦となり、少なくとも碧か霞のどちらかが敵軍を撃破しないと他に援軍がなく、敵はこちらの3倍以上で最低1月はこの状況を耐えないといけない状態であることを説明すると董は真剣な顔になり

「まずこの関自体は小さくて守りやすいけど、さすがにここで長期間食い止めることは無理、だからここは１０日～１５日くらい守ればいいかな」

「手始めにまずは３０名の部隊を２０組作るよ。この部隊は行軍中の敵軍にある程度接近、そして近くで奇襲と思わせる鐘を鳴らした

りや弓など一、二射を撃って貰い、それを何度もしながら、まずは敵の行軍を遅らせるのと同時に敵の士気低下が狙い」

「敵の将である張任や厳顔、魏延は優秀だけど、但し兵については戦の経験が少ないから戦慣れしていない。だからまずはこうした行為で兵の不安感等を煽るようにする」

「そして関での守りだけど、璃々お姉様やお姉様が引き連れてきた弓騎兵の方に最初に敵の弓兵を確実に仕留めていただきたいのです。普通の弓兵なら無理だけど、璃々お姉様や弓騎兵の方の実力なら問題ないと思う。恐らく弓兵に損害が出るとその防衛のために一部の兵を割くと思うから、これで多少なりとも敵の攻め入る力を減らせられると。」

「そして陳倉を守備している一部の兵の方には、この散関と陳倉の間にできるだけ、荷車が通行しにくいように溝を幾つも作っておくように指示」

「敵は5万の大軍だから、食糧の輸送も荷車を使用しない絶対に大量輸送は不可能でしょう、それを遅れることにより行軍も遅らせることにもなると」

「普通に関や城によって敵を足止めするだけでなく、こうしたやり方で行軍を遅らせたらどうかな?」

董の出した答えは、徹底した足止め工作であった。こうした徹底した考えは璃々には無く、そして今回の戦いで信頼できる副官や軍師もいない状態で不安であった璃々には董が一筋の光明に見えた。

そして璃々は董に

「菫、あなたに今回の戦いの副官兼軍師を命じるからね。これは命令だから拒否権はなしよ」

「えっ!?いいの僕何かが、そんな役について…」

「いいよ、あなたが私に信頼して真名を預けてくれたように私もあなたを信頼するわ。だから私たちと一緒に戦いましょう」

璃々からそう言われると菫も心を打たれ

「分かりました璃々お姉様、絶対この戦い勝ちましょう!」

こうして新たな見習い軍師を加え、璃々たちは劉璋軍を待ち受けるのであった…。

第４１話（前書き）

一応、今回から「ＴＩＮＡＭＩ」と同時投稿になります（ただし今まで基本０時の予約投稿してましたので、それについてはそのまま継続するつもりです。そのため若干こちらの投稿が遅いです）

第４１話

劉璋軍は陳倉に向け進軍していたが、途中、姜維こと董による足止め策がまんまと的中して、予定していた日程より遅れている状態であった。

「あー！くそ！卑怯なやつらだ、私と1対1で勝負できるやつはいないのか！」

焔耶が八つ当たり気味に吠えていると、

「ゴン！」

夕霧が背後から焔耶の頭を殴り付け、

「う…痛いではないですか、夕霧様」

「馬鹿かお前は、敵がそんな簡単に出てくるわけないだろう！」

「しかし焔耶の言うとおり嫌らしい戦いだな、ワシはこんな戦い方は好かんがな」

「まあ仕方がないわよ桔梗、敵は私たちの3分の1以下くらいしか兵はいないし、しばらく援軍が来る予定はない。出来るだけ足止めして時間を稼いで、劉表軍を撃破した軍の援軍を待つ。向こうはこれしか今のところ手がないだろうね」

「ああそうじゃろな、さて…散関では、どんな出迎えが待っているかの…」

～散関～

「璃々お姉様！そろそろ敵が来ます！」

「報告ありがとう菫、貴女の言うとおり、向こうは予定の行軍よりも遅れているわ。取り敢えずここから本番だね、これからどうする？」

璃々が菫に聞くと、菫は待っていましたとばかりに

「まずは…」

説明に入り、璃々もこれに同意して実行に移された。
そしてようやく散関に到着した劉璋軍であったが、城壁には旗印等はなく、門は解放状態であった。

これを見た涼月たちは

「ねえ、あなたたちはあれをどう見る？」

「普通は罠だと思うのだがな…」

「確かに罠の可能性高いわね…」

「例え罠であっても私が行けば、あんな関の一つや二つすぐに落としてきます！」

（（（ハァ～））））

3人は焔耶の発言に内心頭を抱えていたが、

「ここで眺めていても仕方がないわ。取り敢えず焔耶、あなたに5千の兵を与えるから好きにしてきなさい」

涼月は焔耶に関への先鋒を命じると焔耶は喜び勇んで出陣をした。

これを見た桔梗と夕霧が

「大丈夫かのう、あやつは…」

「馬鹿だからね…心配だわ」

2人が呟いていると涼月が

「桔梗、貴女は焔耶の後詰めの準備をしておいてくれるかしら。焔耶と一緒に攻撃するのもよし、引くのもよし、それは貴女の状況判断に任せる。それと夕霧、貴女は周りに伏兵がいないかどうか確認しておいて奇襲の可能性もあるわ」

二人は了解してこの場を立ち去ったが、涼月は二人が去ってから独り言のように

「フッ…、焔耶みたいな若い者が私より早く死ぬ必要はないんだよ、早く死ぬのは私一人で十分だからね…」

一方、関に攻めに来た焔耶は流石に罠の可能性もあると考えられ慎重に突撃しようとせず、門の前で考えていると、城壁から璃々が立ち

「あんたたちわざわざこれだけの兵を連れて、関の見物に来たの！

？暇だね～見ての通り、誰もいないよ。早く取りに来たらいいのに」

璃々が挑発するが、焔耶も流石に挑発に乗らず

「そんな簡単に騙されるか！貴様はそうやって私たちを罠に引っ掛けようとしているのだろう」

「ふ～ん、あなた強いと聞いていたけど、所詮井の中の蛙なのね。精々弱い相手に吠えているといいわ。じゃ、私は弱い人には興味ないから陳倉に帰るよ」

璃々が城壁から姿を消すと焔耶はさっきの慎重な態度を殴り捨て

「ゆ…許さん！今からあいつの首を取ってくれるわ！全軍突撃！」

璃々の簡単な挑発に乗ってしまい、怒りに任せて突撃を開始した。

それを後方から見ていた桔梗が、

「焔耶め！まんまと敵の挑発に乗る奴がいるか！すぐに我らも前に出るぞ！」

桔梗が慌てて前に出る準備をしたが、すでに焔耶の部隊は門に突入しようとしたものの、わすが手前で門が閉められると、勢い余った兵士たちはそのまま仕掛けられた落とし穴に気付かずに落ち込むと、更にそして今まで潜んでいた兵たちが急に現われ、そして菫が

「一斉に放て！」

城壁の弓隊が一斉に弓を放つと劉璋軍は大混乱に陥ってしまった。

これは董が、

「不意な攻撃に対してはどんな百戦錬磨の人物でも先手を打たれてしまえば、後手に回るもの、だから先手を打たれないよう、見え見えの罠を仕掛けて、逆に相手を警戒させ、待ちの姿勢を取らせる」

うまく心理をついた董の見事な策でこの戦い、先手を取ること出来た。

「く…くそ！私を騙しやがって！」

門の外で焔耶が捨て台詞を吐いていると城壁から璃々が

「ごめんね～、騙して、でもあんな策に引っ掛かるとは思わなかったの～」

茶目っ気を出した璃々の声に益々、焔耶の怒りが高まって行ったが、後方から来た桔梗が援護に駆け付け、

「馬鹿者！焔耶お前は何をしておる、あんな敵の見え見えの策に乗りおって、ここは儂が引き受ける。お主は兵をまとめて後方に下がれ！」

「しかし桔梗様…」

「いいから下がれ！」

焔耶が尚も食い下がろうとしたが、桔梗の命令により渋々部隊を撤退させた。

「さて、ここから儂が相手だ。儂の名前は厳顔覚えおいて貰おう、お主の名は？」

「城壁から失礼します。私の名前は北郷璃々、この軍の大将よ」

「ほう…お主が…」

桔梗は璃々の顔をじっくり見ると

（「ふむ…、よく見ると紫苑のところの璃々を成長させたら、あのような感じになるのかの…、しかし偶然とは言え、同じ名とは…」）

桔梗が璃々の姿を見て、考え込んでいると、璃々が

「隙あり！」

上から弓矢を打ち込むも

「甘いわ！」

桔梗は手にしていた轟天砲で、これを難なく横殴りで弾き飛ばし

「小娘、まだまだ！今度はこっちの番じゃ！」

「轟天砲出力全開！」

「ドン！」

桔梗が璃々に向けて轟天砲を発射したが、これを璃々は躱したもの

の、内心轟天砲を見て

（「何でこの世界にあんな現代兵器のパイルバンパーみたいのがあるのよ、反則じゃない～」）

ぼやいていたが、流石に愚痴を言っても展開が変わらないので、気を取り直して

「こっちも負けてられないわね！」

「ハィ、ハィ、ハィ！」

璃々は威力で負けるので、連射などして手数で対抗を切り替えると、

「ほう、お主も弓使いか。これは面白い。こっちも行かせて貰おうか！」

桔梗は璃々の連続攻撃を躱すとこちらも負けずに

「ドン！ドン！ドン！」

連射するも流石に距離があるため、璃々に躱され、お互い手を換えたりして一進一退の攻防を繰り広げていたが、桔梗の方が

「チィ、あと一発しかないか…、焔耶の部隊も撤退したし、最後に…」

「こむ…否、北郷璃々よ！今日はこれで引き上げる！これは儂からの土産だ、食らえ！」

「ドン！」

最後の一発を鉄製の門扉に叩き込むと流石に破壊はされなかったものの、音がかなり響きわたったので、璃々もこれには驚き

「菫！今すぐ門に行って、木や土嚢で門を補強して！」

璃々が菫に指示している間に桔梗は既に引き上げいた。

そして劉璋軍が門周辺から撤退したことから、本日の戦いがこれで終了した。

そして門の補強を終えて、璃々のところに戻ってきた菫が

「凄い威力でしたね、璃々お姉様、門は取り敢えず大丈夫ですけど、あんなの何発も受けたら、門が持たないっすよ」

「そうだね、…まだあんな強い人がいるのだから大変だよ～」

璃々がぼやいていたが、一方劉璋軍では、攻撃に失敗した焔耶が桔梗と夕霧の説教とお仕置きのフルコースをした後、２人で話をしているとと

「桔梗、今日の戦どうだったの？」

「そうじゃな、相手にしても面白いが、妙な親近感が湧いてきたという感じかの」

桔梗は夕霧に璃々と会った時の状況について話をすると夕霧は

「それは流石に偶然じゃないの？」

「そうかの…、儂には単なる偶然には感じないがな…」

「まあいいわ、また機会があれば一度お主も向こうの顔を見たら分かるだろう、焔耶の奴は北郷璃々に完全に馬鹿にされて頭に来ておるから、儂がこのことを言っても信用できんだろう。明日からこの戦、面白くなってきたわ！」

そう言いながら桔梗は嬉しそうな顔をしていた。

～函谷関～

「璃々やご主人様大丈夫かしら…」

紫苑が璃々たちの心配しているころ、１人の兵がやって来て

「紫苑様！まもなく曹操軍がやって来ます」

「そう分かったわ、全員に戦闘準備させてちょうだい」

百戦錬磨の紫苑らしく、報告を聞くとすぐに気を入れ直し、落ち着き払った声で兵たちに指示を出した後、再び１人になると

「…ご主人様や私たちに刃を向けるものは、例え相手が誰であろうとも、私はご主人様のために戦うわ！」

紫苑は静かに闘志を燃やし、そして「颶鵬」を高々と掲げ曹操軍の襲来を待つのであった。

そして曹操軍が攻撃を仕掛けてきたので、紫苑は兵たちに弓での迎撃を命じたのであるが、

兵から

「し…紫苑様、敵は盾部隊を先頭にしているため、なかなか我々の弓矢が敵に届きません！」

兵の悲痛な叫び声を聞いた紫苑は、城壁から曹操軍を凝視すると、盾部隊を全面に押し出し、更に後続の兵たちにも携行用の木盾を持たせて、じりじり進軍してくるのであった。

これを見た紫苑は兵に

「現在、中央部分に集まっている弓兵は弓騎兵の者を除き、左右に分散させ、斜めから敵部隊を射るようにしなさい！」

紫苑は、敵の盾部隊が正面の弓矢に対応していることから、これに対抗するため、以前（紫苑が現代に来た時）に読んだことのある戦国時代のことを掲載している某漫画の鉄砲の交差銃撃の陣形「殺し間」（十字砲火）を弓矢で応用しようと考えたのである。

そして関の左右からはげしく弓矢の攻撃を仕掛けると敵の盾部隊と後続部隊はその応対に追われ、連携がちぐはぐになってきたところを正面から紫苑や弓騎隊の弓自慢がその隙間から確実に敵兵を仕留めていくので、部隊の足が止まってしまい戦線が膠着状態に陥ったのである。

それを見ていた秋蘭と稟は

「やはり一筋縄でいかぬな…」

「盾を持たせて万全な態勢で行かせたつもりですが、やはり戦は思

う通りにはいきませんね」

「しかし、あの方本当に凄いお人ですね。あんな隙間から正確に弓矢を射ることができるなんて…」

稟が紫苑を見て驚いていると

「稟、以前黄巾党の乱の時に私と北郷紫苑と軽く立ち会ったことがあるのだが、正直あの方の腕は少なくとも剣の方は私より上で、下手をすれば姉者でも負けるかもしれん。それに姉者の目を射たのもあの方だ」

秋蘭からその話を聞いた稟が驚きのあまり

「春蘭殿と剣の腕では互角で、弓矢も扱えるなんて、あの飛将軍呂布並の実力があるのではないですか！？」

「さすがに武が呂布並とは言わないが呂布と違い、天の御遣いとしての知識もかなりの物を持っているので、文武の総合力では呂布を上回るぞ」

「恐ろしいお方ですね…、文武を兼ね揃え、そして人望も持っていると思われますし…、そう考えますとその方が仕えている君主の北郷一刀の器がどれだけ底知れなく怖いですね」

「ああ、そうだな。以前華琳様が北郷一刀を勧誘したことがあったのだが、簡単拒否されたよ、馬超と結婚しているから無理だと言われてな」

「そうですか…、ですが我々も幾ら牽制のための攻撃とは言え、そ

う易々と引く訳にはいきませんね」

「ああそうだな、北郷軍にはここで我々に付き合って貰うためにはいろいろ手を打たせて貰おうか…」

「そうですね、精々嫌がらせの準備でもしましょうか」

「稟、さすがに露骨過ぎるな、その表現は。あらゆる布石を惜しまぬということにしておこう」

2人はそう苦笑いしながら、更に前線に伝令を送り、様々な手を使い紫苑を悩ませるのであった。

第４２話

璃々たちが散関で籠城戦を開始して、１０日が経過したが、序盤は優勢だったものの、流石に劉璋軍の数の暴力には叶わず、死者や負傷者が多くなってきた。

そんな中、董が

「璃々お姉様、このままだと私たちの撤退が難しくなるので、そろそろ陳倉に撤退した方がよろしいかと…」

悔しさを押し殺し、璃々に撤退するように進言するど、璃々は

「そんな辛い顔しないの、董が居なかったら、この関はとっくの昔に落とされていたわよ。それにここから陳倉までの仕掛けも済んだでしょう?それだったら、ここを引き払うから、まずは負傷兵を先に撤退させ、それから私たちも撤退するよ」

「ただ敵の追撃が怖いから、これを何とかしたいけどね」

璃々は散関から撤退を認めたものの、敵の追撃を危惧していた。

「それは大丈夫っすよ、璃々お姉様。追撃できないよう、きっちり嫌がらせの準備はできてますから」

璃々の不安を消すように董が自信満々に答えたので、その内容を聞くと安心した。そして璃々はまず負傷兵を先に撤退するよう指示、その後残りの将兵を撤退する方針を固めた。

「何、敵の様子がおかしい？」

焔耶から話を聞いた涼月がそう言うと

「はい、城壁にいる敵兵が昨日より確実に減っており、それに残っている兵も何か逃げる準備しているみたいです」

「……このことどう思う桔梗、夕霧」

「まあ普通であれば、撤退だろうな。向こうは元々寡兵、ここで我らを１０日間足止めにしたら、取り敢えず初期の目的を達したところだろう」

「あと無理な追撃は避けた方がよいわね。向こうは頭が回る人物がいるから、それなりの準備はしてそうだわ」

焔耶の話から２人の意見聞いた涼月は

「２人の意見には、私も同意だね。取り敢えず、最初に様子見できる部隊を編成しておいてくれる」

涼月が璃々たちの撤退は既に決定事項と感じた焔耶が

「では追撃部隊は出さないのですか？」

「焔耶、わざわざ敵が関を放棄してくれる。それを占拠するだけでも立派な手柄なのよ」

「ただ、敵の罠に気付かずに目の前の獲物に飛び掛かる馬鹿も中にはいるからね」

涼月が焔耶を諭すように説明をしていると

「失礼します！敵兵が撤退した模様、それに気付いた一部の東州兵が無断で部隊を動かし、関に侵入した模様です！」

伝令兵がそう告げると４人は苦虫を潰した顔をしていた。

この東州兵は劉璋軍の主力であるが、４人が掌握している部隊と違い、兵の練度や規律の面ではかなり劣っていた。

そして無断で動いた部隊は、菫が関内に仕掛けていた逆茂木や柵などで動きが制限され、待ち伏せしていた弓騎隊に火矢等で散々に打ちのめされてしまい、挙句の果てに部隊が混乱したため、桔梗たちが応援に駆け付けるまで、この混乱が続いたことから追撃を断念したのであった。

～函谷関～

こちらの攻防は、膠着状態に陥っていたが、曹操軍のボディブローのような攻撃に流石の紫苑も閉口していた。

曹操軍は、稟の指示で通常攻撃は勿論、夜襲や罵声など精神的にも応える攻撃も並行して行っているため、兵たちも睡眠不足となり、疲れがピークにきていた。

ただそんな中、紫苑の年について罵声を飛ばした曹操軍のある兵は、罵声を浴びせた直後、常識ではあり得ないくらい身体に弓矢がハリネズミのように刺さっており、曹操軍の間では紫苑の年齢については禁句になっていた…。

そんな中紫苑は、現状打破するため、逆襲の夜襲をすることを決意。

そして紫苑は千の兵に予め用意していた全身黒装束を着用、紫苑自身も黒装束を着用したが、その衣装が全身黒タイツのような衣装でかなり色っぽかったので、違う意味で兵士の士気も上がったらしい…。

一方曹操軍では、今後のことについて軍議を開いており、その場で稟が

「現状では、まもなく北郷軍と劉表軍が武関で激突、袁紹軍の方面の北郷軍は、袁紹軍の進軍が予定より手間どっているため、まだ開戦には至っておりません。あと羌と劉璋軍の方は遠方での戦いなので、情報はまだ入ってきておりません」

現状までの情報を各将の前で報告すると、秋蘭が

「稟、北郷軍と劉表軍の戦いだが見通しはどうだ」

「北郷軍はこちらに主力をぶつけてきているみたいで、将に張遼、呂布、趙雲、そして軍師に陳宮を付けていますので、恐らくこちらを早急に片付けるつもりですね。片付けた後は、我々と劉璋軍に対して二手に分けて援軍に差し向けるのではないでしょうか」

「ならば我々は劉表軍が敗れた時点で撤退した方がよいか？」

秋蘭がそう告げたが

「しかし北郷軍が援軍に来るとしても、こちらの方がまだ兵が多いから、こちらも二手に分けて、迎撃すればよいのでは？」

明華こと曹仁がそう主張したが

「それは無理です。兵を分けた場合、こちらの北郷軍と我々と兵力がほぼ五分に近い状態になり、一応こちらの兵が多少多いですが、北郷軍とのここにいる兵たちの精強さでは差が出てしまうため、兵を分ける訳にはまいりません。我々の今回の役目はあくまでも北郷軍の牽制と新兵の訓練代わりです。ですので劉表軍が敗走した時点で我々も手を引くことを提案します」

稟は劉表軍敗走時点での撤退を提案すると、急に外から怒号から聞こえ、一人の兵士が現われ

「し…失礼します！て…敵軍の夜襲です！」

「何をしている！敵は少数だろう、すぐに跳ね返せ！」

陽華こと曹洪が命令するも、その兵は

「現在、迎撃に当たっていますが敵兵の数は大軍だと流言飛語が出回っており実際の数は不明、混乱のため迎撃態勢もバラバラになっています！」

それを聞いた秋蘭が

「聞いての通りだ、明華と陽華はすぐに指揮に当たれ、それで稟、ここは危険になるので、一旦後方に下がり後方の指揮に当たってくれるか」

稟はここに居ても危険で足手纏いになると判断して

「分かりました秋蘭殿、私は、すぐに体制を整えて、援軍に来ますので、しばらく頑張って下さい」

稟は素直に後方に下がり、明華と陽華は、現場の指揮を取りに行った。

その間にも紫苑たちは、敵陣に設置しているかがり火を破壊することに狙いを付け、徹底的にこれを破壊、陣を暗闇させた上、同士討ちを誘発するなど曹操軍の陣は更に混乱が増してしまった。

そして前線の情報が全く入ってこないことから、やや苛ついた秋蘭が側にいた兵に

「そこの者、前線に行って状況を見てきてくれ。前が分からなければどうにもならぬ」

その兵は、秋蘭に命令されると、暗闇の中に消えた瞬間…

「ギャ！」

兵は眉間を一刀両断にされて倒れ、暗闇から

「こんばんはと言っていいかしら…？夏侯淵さん」

黒装束に刀を持った紫苑一人が本陣やって来た。

秋蘭の周りにいた衛兵2人は、紫苑が来たことに驚きながらも、果敢にも

「死ね！」

「生かして帰すな！」

紫苑に掛かって行ったが、紫苑は

「あらあら、危ないわね」

紫苑はその攻撃を簡単に躱し、そして紫苑を持っていた刀でその2人を一閃していた。

それを見ていた秋蘭が

「相変わらず凄い腕をしていますな…、北郷紫苑殿」

「あら分かりましたか？」

紫苑は、黒装束で顔を殆ど隠しおり秋蘭からは目元しか見えていない状態であったが、秋蘭は先に聞いた声と雰囲気から一目で紫苑と見破ったのである。

「でも私の正体を見破るとは流石ですわね。ただ…」

「ご主人様の敵は私の敵…、あなたの命頂戴しますわ」

口調は柔らかだが、目は全く笑っていない紫苑に秋蘭は手にしていた餓狼爪を振り、弓矢を射つための間合いを取ろうとしたが、紫苑は

「そうはさせませんわよ」

間合いを詰め寄り、秋蘭に対して刀が風を切り裂くように襲い掛かった。

秋蘭は何とか反撃しようと刀を受けずに後退をしたが、紫苑はそれを許さず追撃する。

そして秋蘭が紫苑の刀を掻い潜って、先に倒された刀を紫苑に投げつけると紫苑はそれを難なく躱したが秋蘭はその間に餓狼爪を構えたが、紫苑もこのままでは秋蘭の間合いに入ると察知し、瞬時に持っていた刀を秋蘭に投げ、秋蘭もそれを難なく躱す間に背中に背負っていた颶鵬を構えた。

そして2人の睨み合いはしばらく続いたが、紫苑を追ってきた兵士と秋蘭を助けに来た兵がお互い雪崩込み乱戦状態になってしまった。

そして後方に下がっていた稟が援軍を引き連れ戻ってくるのが見えたため、

「今日はここまでのようね…」

紫苑はここで戦いを打ち切り、そして闇夜に紛れ撤退したのであった。

さすがに暗闇の中では追撃することもできず、

「大丈夫ですか、秋蘭殿？」

「ああ助かったよ、稟」

「あの方が噂の北郷紫苑殿ですか…、総大将自ら夜襲を駆けてくるとは…」

稟が驚いていると秋蘭は

「やはり、油断できない人物だな…、取り敢えず我々も1度下がって頭を冷やして出直そうとするか、稟」

「そうですね、我々も驕りがありました。いきなりの夜襲に我々も兵たちも対応できませんでしたから…兵たちにはいい教訓となったでしょう」

秋蘭たちは陣を後方に下げ、昼間の攻撃は続行するも、夜間の攻撃は紫苑たちの再夜襲を恐れて攻撃を控えるようになり、函谷関の北郷軍も一息つけるのであった。

第４３話（前書き）

いろいろバタバタして、更新遅くなりました。

恐らく、今年最後の投稿になるかも・・

第４３話

曹操軍が紫苑の夜襲を受けてから数日後、秋蘭たちの元に密偵が帰ってきた。

「申し上げます。北郷軍対劉表軍との戦いは、北郷軍が勝利。敵将張充が呂布に一刀両断にされ戦死、そして同じく文ぺいは張遼との戦いの途中に負傷、１万以上の死傷者を出し敗走。更に西涼を攻撃していた羌の軍勢も援軍に駈け付けた馬騰軍とそれに応呼した城兵との挟撃に合い、これも敗走しました」

「やはり劉表軍は敗れましたか…」

「仕方がない、稟。予定通り、私たちも撤退準備に掛かるか…」

秋蘭が稟に撤退することを指示したところ、先の密偵がまだいたので、それに気付いた稟が

「どうしたのですか、まだ何か報告があるのですか？」

「はい、まだ報告が残っておりまして…」

「何だまだあるかの言ってみろ？」

秋蘭がまだその場に残っている密偵に報告するに求めたところ、

「実は…」

～劉璋軍～

一方、劉璋軍は散関での部隊編成を終え、陳倉に向け行軍していたが、姜維こと董が仕掛けた溝に苦しめられ、輸送が遅れると共に行軍が遅れていた。

そんな中、焔耶が

「モタモタするな！行軍が遅れているぞ」

兵たちに叱咤するものの、疲労など士気が上がらず悪戦苦闘していた。

そんな中、桔梗が

「焔耶焦っても仕方ないだろう？ここで疲れさせていざ戦いの時に兵が使えんのでは話にならん。もう少し気楽にいけ」

「はあ…」

流石の焔耶も桔梗からそう言われると帰す言葉が無かった。

「失礼します！厳顔様、魏延様、張任様がすぐに本陣に戻るようにお呼びです」

伝令兵から言われると、取り敢えず2人はすぐに本陣に戻ると、涼月と夕霧がいたが、2人の顔色が苦々しい表情を浮かべていた。

そして涼月から

「今、漢中から伝令が来てな…。その報告だが…」

「「現在北郷軍が漢中に向けて進軍しています（いるわ）」」

～張遼軍～

これは時間が少し逆戻り、紫苑と璃々が戦闘に入る直前のこと、武関に向け行軍中、既に半分の行程を過ぎていたので、霞が

「なあ星、そろそろ真里から言われていた袋の中、見んとあかんのとちがうか？」

「ああそうだな、さて何が出てくるか…」

2人の話を横で聞いていた恋と音々音が

「……？」

「何ですかそれは？そんな話、ねねは聞いてないですぞ」

「ああ真里が音々音には、腹芸が無理だから黙っていたそうだ」

「う～失礼な奴なのです。ねねはそんな単純な人間ではないです！」

「…取り敢えず見る」

「そうやな早く見ようや」

音々音の抗議も皆に無視され、星が真里から渡されていた布袋を開けてみると、一枚の紙があり、その紙の中身を見ると、そこに書かれていた内容は

星は霞たちから離れ、1万の兵を引き連れ、直ちに西城（漢中の東側にある町）を攻略。そして西城奪取した後、長安からも治安維持

だけの兵を残し出兵、そして合流して漢中攻略することが書かれていた。

これは朱里の言っていた賭けの策で、西城を奪取し、その勢いで一気に漢中を制圧。益州攻略の足掛かり掴める可能性はあるが、ただ漢中攻略に手間取ると、攻略の知らせを受けた陳倉攻略部隊が反転し挟撃に合う可能性があるため、璃々に変わって、星が危険に合う可能性が出てくるのである。

これを見た星は不敵な笑みを浮かべ

「フフ…、これはやりがいのある任務だな」

「しかし、１万の兵に長安の兵を入れても漢中攻略って難しいで」

「ただ西城については、兵も少なく、こちらから攻めることは考えていないので、そちらは成功する可能性は高いと思うですぞ」

「う～ん」

これを見た霞が少し考え込み、そして音々音に

「ねね、もう１万の兵を星に預けていいか？」

霞は西城と漢中の攻略が流石に１万では厳しいと思い音々音に図ると

「恋殿がいたら劉表軍は目ではないですが、ただ連戦で曹操軍とも戦うとなるといくら恋殿でもきついのです。それに曹操軍は４万の兵がいるので、紫苑を助けるのにこちらもある程度の兵も必要ですから、５千くらいしか回せませぬぞ」

「後々の事を考えると仕方ないな。星、悪いけどこっちからあと5千しか出せんけど、これも連れて行き」

霞が更に5千を援軍として加え、1万5千の兵を連れて行くよう、星に言うと

「いいのか、霞、そっちが厳しいのではないか？」

「何、言うとんねん星、ウチらを誰やと思ってる。『神速の張遼』と『飛将軍呂布』やで、これくらいの兵力差やったら、負ける気サラサラないで」

霞が星に自信満々に答えると、星も

「フッ、これは失礼したな。これでは皆の期待に応えないとな、この趙子龍の名が泣くものと言うものよ」

「ああ頼むで、星」

「こらーねねも居ることを忘れるなです！」

「…ちんきゅー頑張る」

こうして星は霞から更に5千の兵が追加され、1万5千の兵を引きつれて、部隊から離脱、そして警戒が手薄だった西城をほぼ奇襲の形で攻め込み奪取に成功。

そして真里は、西城の報を受けると長安で訓練を終えたばかりの新兵5千と更に5千の守備兵から2千を抜き、7千の兵を斜谷関に進

出、そこから星の軍勢に加わり、漢中を伺う動きを見せたのであった。

これを聞いて慌てたのが劉璋軍で、漢中を奪取されてしまうと益州の帰還が困難になることは一目瞭然であった。

そんな中、桔梗が

「まず涼月と夕霧が先に撤退して何とか漢中を押さえてくれ、ワシと焔耶が散関で、敵の追撃を防ぐ。それで敵に一当てして被害を与えてから、儂らも撤退する」

「桔梗、その役目は私がするわ。貴女と焔耶は先に撤退して頂戴」

「この馬鹿者！総大将自ら殿なんぞ聞いたことないわ！お主は、儂らを逃がしてから死ぬ覚悟かもしれんが、儂らも武人としての意地があるし、総大将として一緒にいる兵たちのことも少しは考えろ！」

涼月は自ら殿を受け持つことを主張したが、桔梗は涼月のこの主張に激怒した。

「涼月、それはあなたが間違っているわ。貴女、今は総大将なのよ。まずは自分のことを考えずに周りのことをよく考えなさい」

夕霧からも自分の考えが間違った考えだと諭されると涼月も

「…ごめんなさい、桔梗に夕霧。私、間違っていたわ。そうね、今、自分のことしか考えていなかったわ」

「それでさっき桔梗が言っていた撤退の案だけど…、正直今の漢中

にいる守備隊の兵力では長くは持たない、恐らく漢中に帰るまでに落とされている可能性が高いわ」

「だがどうするのじゃ、漢中を完全に押さえられてしまうと儂等は帰れなくなるぞ」

「それだけど、取り敢えず涼月と私で半分の兵を連れて、急いで漢中に戻る。しかし漢中が落とされていた場合、私たちは最低限、陽平関を確保できれば、何とか益州への撤退はできるわ」

「恐らく敵は漢中を落とせば、さすがに向こうの兵力では恐らく陽平関まで兵を出す余裕はないわ。だから桔梗たちが陽平関まで帰還すれば、私たちは陽平関を放棄し撤退する」

夕霧が撤退案を提案したが、焔耶はこれに納得できず

「夕霧様このまま撤退すれば、我々の名折れです。このまま陽平関を保持し、私たちが引き上げて来たら漢中奪還に反転攻勢掛けましょう！」

漢中奪還論をぶち上げたが、これには涼月が制し

「焔耶あなたの気持ちは分かるけど、仮に漢中奪還する場合、その時は恐らく兵の士気も下がっているし、それに陳倉にいる北郷軍も追撃を仕掛けてくる。それこそ敗れた場合、益州への退路を断たれてしまうわ」

「そうじゃ焔耶、今回は儂らの個人の武で負けた訳ではない、作戦負けじゃ。今度向こうから攻めて来たら、今度はこの借りを返すまでよ。ハハハハーーー」

桔梗は今回の戦いは敗退したが、巴郡に引き上げれば勝手知る地の利を生かし、十分北郷軍と戦えると感じていた。

そして涼月と夕霧が先行、桔梗と焔耶が殿を務め、劉璋軍は漢中へ引き上げを開始したが、途中で漢中陥落の知らせを聞くと、2人は予定通りに陽平関に陣を構え、桔梗たちの撤退を待った。

一方、陳倉で劉璋軍を待ち構えていた璃々たちは、一向に敵が来ないことに不審に感じ、各方面に偵察隊を出し情報の収集に躍起になっていた。

「う～～菫、まだ劉璋軍の情報分からない？」

「璃々お姉様申し訳ありません、もうすぐ偵察隊が帰ってきますので、もう少し待って下さい」

敵の出方が分からないため、少しイライラしている璃々に菫が宥めていると

「申し上げます璃々様！徐庶様から手紙がまいりました」

1人の兵が璃々の前に手紙を差し出し、それを読むと、その内容には漢中を陥落させたことの報告と陥落させた経緯、そして作戦が賭けであったため、失敗に終わった場合の事を考え紫苑と璃々に内密にしていたことが書かれていた。

それを見た璃々は、安堵した顔をして、無言で菫にその手紙を渡し、菫が璃々の顔を見ると、2人の表情には自然と笑みが浮かんでいた。

そしてそのころに偵察隊が帰還し、劉璋軍が撤退し始めた報を聞くと璃々が追撃するか否か問うたが、董は

「璃々お姉様、無理な追撃は止めた方がいいっす。それに私たちが仕掛けた道の溝とかもあるので、追撃は道普請しながらゆっくり進んだ方がいいっすね」

董が道普請しながらの追撃を提案したので、璃々もそれを承諾した。

結局、桔梗たちは散関で璃々たちを待ち受けたが、璃々たちが追撃して来ないことに桔梗たちはこの機を逃すことなく素早く兵を纏め、陽平関に後退したのであった。

北郷軍が漢中攻略の報を聞いた秋蘭と稟は、素早く撤退準備を完了させ、紫苑の追撃に備えながら、撤退を開始していた。

そんな中、稟はやや口惜しそうに秋蘭に

「この包囲網戦は我々の敗北です。これで北郷軍は恐らく漢中を占領したら、その後益州攻略に向うでしょう」

「確かに今回、我々は兵士の実戦経験ができたことは良かったが、北郷軍の勢力拡大に一歩前進させてしまったな」

冷静に発言をしている秋蘭であるが、稟の言う通り北郷軍が勢力拡大することに対して、危険感を抱いていた。

「それは仕方がありません。今後は我々も北郷軍と対抗するためには、勢力拡大する必要がありま

す。華琳様もお考えでしょうが、まずは徐州の劉備殿を叩く必要がありますね」

「ああそうだな。徐州攻略の件は陳留に帰還すれば、私からも華琳様に進言をしてみよう」

秋蘭と稟は今後勢力を拡大する北郷軍に備えるためには、徐州攻略が必要だと感じながら、退却するのであった。

一方、紫苑の方にも真里から漢中陥落の知らせと作戦を内緒で行なった詫びが送られてきた。

これを見た紫苑は

「あらあら、いくら心配だったからって、私に作戦を内緒にするなんて真里ちゃんや朱里ちゃんにお仕置きが必要かしら♪」

作戦が内緒にされていたことに紫苑は少々拗ねていたが、すると紫苑の副官が来て

「紫苑様、敵、曹操軍が退却の動きを見せていますがどうされますか？」

「追撃は無用よ、ただ曹操軍が領外に出るまでの監視を続けてちょうだい。領外を出たら、私と弓騎隊を連れてご主人様の援護に向います」

紫苑は、袁紹軍と対峙している一刀を助けに行くべく兵を纏め援軍に行くことを決めていた。

こうして紫苑と璃々は、何とか無事使命を果たし、北郷軍は窮地を脱したのであった。

第４４話（前書き）

新年あけましておめでとうございます、今年もよろしくお願いします。

お気に入りが２００件を越え、大変喜んでいます。

今後ともこの作品の応援のほどよろしくお願いします。

第４４話

紫苑たちが戦闘を繰り広げている中、北地郡に進出した一刀たちは袁紹軍と睨み合い状態が続いていた。

と言うのも、進攻してきた袁紹軍であるが、陣を固めて動かない状態でいたので、これには一刀たちも困っていた。

「あいつら、攻めに来たくせに攻撃仕掛けてこないってどういうこった」

「うーん、訳が分からないね、お姉様」

「なあ、このままじっとしているのも何だし、ちょっと攻撃を仕掛けてみようぜ、朱里」

「翠さんの気持ちは分からないでも無いですが、今はこちらから不用意に動く訳には行きません」

「どうしてなの朱里？」

「今、私達は兵を分散されている状態で、万が一ここで私達が負けることになれば、一気に長安を突かれてしまう可能性があります。もしそうなれば、私達に袁紹軍を食い止める兵がもうありません。ですので、ここは我慢して下さい」

「翠、蒲公英。ここは朱里の言うとおりだ。ここでの戦いはこれ以上敵を進ませないことが第一、敵を追い払うことさえ出来れば俺たちの勝ちだから、翠、今回は我慢してくれ」

朱里や一刀から説得を受けると翠や蒲公英も

「チェ、ご主人様からそう言われると反対出来ないじゃないか…」

「あれ～お姉様、顔を赤くして何言っているの～」

「蒲公英、お…お前何に言ってるんだよ！」

一刀から優しく諭された翠が照れくさくなっているとそれを見た蒲公英がからかっていた。

そして一刀は、朱里に紫苑たちの戦況を確認したが、現状では、まだ戦闘状態としか分からなかったので、今は耐えるしかないと朱里から言われると一刀も紫苑たちのことを心配しつつ、袁紹軍を一刻も早く駆逐することを誓っていた。

一方、袁紹軍こと司馬懿軍では

「向こうもなかなか我慢強いわね」

「はい陽炎様、包囲網に囲まれているから、早急に攻めてくると思いましたが、向こうにああ守備を固められてしまうと攻めるには厳しいです」

「そうね…、松羽（しょうは）。このまま兵の損失を控えて守っておくのもいいけど、せっかくここまで来たから、まずは小手調べをしてみましょう。そうでないと若竹も怒るでしょうから」

「そうですね、あいつもいつ攻撃するんだと言って、手ぐすね引い

て待っていますからね…」

ちなみにこの松羽は名を徐晃、字を公明といい、そして若竹が名を張?、字を儁艾(しゅんがい)と言う、本来ならこの2人は魏の名将であるが、なぜかこの外史では司馬家の家臣となっており、そして現在并州を守っている郭淮こと梅香を入れこの3人を、司馬家の「松竹梅」と呼ばれていた。

「ではあなた達に2万の兵を与えるから、まずは噂の北郷軍の強さを確かめてきなさい」

「分かりました」

松羽が離れると陽炎は1人になると、独り言のように

「北郷一刀に曹操、孫策、劉備に袁紹、袁術…この戦乱に最後に笑うのは誰かしら…、そして勝者は必ずこの中から出るとは限らないわよ…」

そう呟くながら陽炎は新たな戦乱襲来に内心笑みを浮かべていたのであった。

袁紹軍の動きに一刀たちも察知し、

「敵が繰り出した兵は2万ですか…」

「取り敢えず、こっちも私と蒲公英に2万の兵で出ようか?」

「いいや翠、俺も出るぞ」

「は…はわわ、何言っているのですか！ご主人様」

「そうだ！朱里の言うとおりだ。ご主人様自ら出てどうするんだよ！」

「そうだよ、ここは私たちの出番だからデーンを構えていてよ、ご主人様」

3人は一刀の出陣に反対したが、一刀は

「おいおい別に先陣切るわけじゃないよ。取り敢えず先陣は翠に任せて、俺は後方に控えておくよ。何かするにしても敵の目を引き付けるには俺が出るのが一番だからさ、なあ朱里」

一刀が朱里に同意を求めるように言うと朱里が溜め息を付きながら、

「確かにご主人様に出ていただくと敵はご主人様の方に目が行きますが、あまりこのような事をしたくないのですが…」

「だって仕方ないだろう、皆が一生懸命戦っているのに俺だけじっとする訳にはいかないし、それに紫苑や璃々は寡兵で戦っているんだ。早く討って出て助けに行きたいくらいだ」

一刀は未だに戦っている紫苑や璃々を心配になり、多少気が急いていた面が出ていることに気付き、そ朱里は作戦の遂行上、紫苑と璃々に負担を掛けていることや一刀の焦る気持ちが出ていることに対して申し訳ない気持ちになり

「ご主人様、申し訳ありません。紫苑さんや璃々さんに負担を掛けさせて、ご主人様にもこのような思いをさせて…」

朱里が謝ると一刀も少し冷静さを取り戻すと

「いいやすまない朱里、別に朱里が悪い訳じゃないよ。やはり皆のことが気になるが、やはり璃々のことがどうも気になってしまうんだ。俺たち皆、それを承知でそれぞれ戦っているのだが、どうしても俺や紫苑が考えてしまうと璃々を安全なところに置きたくなってしまうからね。冷静な目で判断してくれる朱里がいたからこそ、こうして戦えるからさ。元気だしてくれよ」

一刀がそう言いながら、朱里を慰めるとようやく朱里も気を取り直し

「確かにご主人様の言うことも一理ありますので、ではこちらの作戦は…」

朱里は3人にそれぞれ指示をして、先鋒翠、そして後陣に一刀が同じく2万の兵を引き連れ出陣、そして遊軍として本陣に蒲公英に朱里という布陣を構えた。

一刀たちの出陣を見て徐晃と張?は

「なあ若竹、大将自ら出陣するってどう見る?」

「まあ罠か策の可能性が高いが、取り敢えず当ってみないと分からないね」

「取り敢えず、遭えて仕掛けみるのも1つの手だろ?このまま何もせずに帰ったら、何しに来たか分からないからね。まずは私の部隊で仕掛けてみるさ」

現状では見合っていても仕方がないので、様子見で仕掛けてこととし、袁紹軍は先鋒張?、後陣に徐晃という布陣で構え、そして先陣が激突した。

開戦早々に張?が早くも押し出し、

「こいつはいいわ、周りは全て敵。どいつもこいつも斬って斬って斬りまくりなさい！」

北郷軍は張?軍の勢いに飲み込まれようとされたが、

「どけどけーーー！」

雄叫びと共に、逆に敵を蹴散らしながら翠の部隊がやって来た。

「随分と派手なことやってくれたじゃないか。私の名は馬孟起、テメエは誰だ?」

「あんたが錦馬超か、噂通り強そうだね。私の名は張儁艾だ。あんたの首を貰いに来たよ！」

いきなり若竹が翠に斬り付けたが、これを翠が余裕で阻止。

「おいおい、いきなりかよ。上等だ、私が相手になってやる！」

2人はそのまま一騎打ちに突入し、乱戦状態になっていた。

一方、本陣で戦況を見つめている陽炎は、総大将の一刀が自ら出陣していることについて、策としては余りにも露骨に見えてしまい、真意を量りかねている状態であった。そして独り言で

「このような戦で総大将自ら出張るとは…。何か目的があるのだろうか…？」

「ただやっかいなのは本陣に諸葛亮に馬岱を置いていることは、どこか空いた隙を付いて、強襲を掛けてくるつもりだろうから、迂闊に兵を繰り出すこともできないわ…」

陽炎は自ら思考の海に入ってしまう状態に陥ってしまった。

一刀の考えとしては、基本この戦いにおいて袁紹軍（司馬懿軍）の兵の強さや将などを多少なりとも見定めたいのが主な目的であるが、ただ司馬懿は策士でもあることから、一刀自身が出陣するとこちらに何か策があるのではないかと勘繰り多少なりとも兵の展開が遅くなることを期待する程度であった。

ただ本陣の予備として蒲公英を備えていることで、こちらは蒲公英の機動力を生かした攻撃が可能であることから、敵もそれを警戒しているのか、迂闊な行為に出れないため戦いは一進一退の膠着状態になっていた。

そんな中、一刀と朱里の元に伝令がやって来たが、2人はその伝令の内容を聞いて、この包囲網戦が終息方向に向かっていることが分かった。

朱里は、一刀の部隊に伝令を送り、陽動で部隊を動かすように指示をした。

一刀の部隊が翠たちの戦いを迂回するように左側に回り込む動きを見せたため、陽炎は松羽に一刀を押さえさせ、本陣に蒲公英を迎撃

する部隊を僅かに残し、本陣からも兵を出して、一刀の部隊の左側に横撃することとし、そして命を下そうとした時に慌てて斥候が帰ってきた。

「申し上げます。我々の南側から、敵本陣から出てくる部隊と違う別の敵部隊約5千が迫ってきております！」

「これは恐らく敵の新たな援軍ね…、仕方ないわね、今回の戦はここで手仕舞いよ。今度、戦う時はこのような局地戦ではなく、大きな舞台で戦いたいものだわ…フフフ」

新たな援軍が来る知らせを聞いた陽炎は、この包囲網戦が崩壊したと判断し、このままであれば兵の数で蹂躙させられる恐れがあるため、前衛に構えている松羽に殿を務めるよう指示し、そして部隊を本陣まで引き上げる鐘を鳴らした。

引き上げの鐘を聞いて、翠と若竹はそれぞれ決着が付くことができなかったので、悔しがっていたが、翠はその時、まだ援軍が来ることを知らされていなかったので、敵に何らかの罠と判断し無理な追撃を避け、こちらも一刀を守りながら部隊を本陣に引き上げた。

そして一刀たちが本陣に引き上げてから間もなく、援軍が来た紫苑が本陣に現れた。

実は戦闘中に一刀のところに伝令を出したのは紫苑の弓騎隊であった、紫苑は函谷関の戦いを終えてから、すぐに一刀のところに駆け付けようとしたが、丁度戦闘中であったため、そのまま連携して敵部隊に横撃するつもりであったが、先に察知され、敵が本陣の防備を固めたため、紫苑も無理をせずに本陣に現れたのである。

そして紫苑を見た一刀が安心した表情を見せ

「紫苑無事だったか…」

「ええおかげ様で無事でした、ご主人様も無事で良かったですわ。翠ちゃん、蒲公英ちゃん、朱里ちゃん、ご主人様を守ってくれてありがとうね」

紫苑からお礼を言われると3人は照れながら笑っていた。

そして朱里が

「紫苑さん、私たちのところに全ての情報が入ってきていませんので、今までの知っている限りの情報を教えて貰えませんか？」

そして紫苑がここ以外の包囲網戦の結果を説明、そして璃々も無事の話を聞くと一刀と朱里は安心した表情を見せた。

そして紫苑が援軍に来て、2日後には袁紹軍は一刀たちの追撃を警戒して引き上げを開始したので、一刀たちは無理な追撃をせず、両軍引き分けの形でこの戦いを終結したのであった。

袁紹軍が引き上げてから、ようやく一刀と紫苑の2人きりになる時間ができて、

「紫苑が来てくれて本当に助かったよ。紫苑が来てくれなかったら、まだこの戦いも長引いていただろうし、璃々のことも分からない状態で多分やきもきしていただろうな」

「ご主人様が本当に無事で良かったですわ。でもなぜこの戦いに自

ら出陣なされたのですか？」

紫苑がやや怒りながら、一刀に聞くと

「……紫苑や璃々が前線に出て戦っているのに、俺が後ろで戦うというのが我慢できなくて…」

「そうですか…、ご主人様のお気持ちは分かりますが、ご主人様は私たちの夫でもあり旗印なのですから、できるだけ自重していただきたいですわ」

「それは無理な話だよ、璃々も戦っているのに親としては子供に好いところ見せたいしね」

一刀が紫苑に心配掛けないように笑顔で言うと

「仕方ないですね、でしたらご主人様には今後色んな鍛錬に励んでいただかないといけませんが、しかし今回は朱里ちゃんの言うことを聞かずに出陣したことに反省していただきますわ」

紫苑も一刀の説得を諦めて、そして何時もの笑みを浮かべた顔に変わり

「まずは、私を心配させた罰で…私にお茶を飲ませ、お菓子を食べさせてください」

「そ、それくらいだったら…」

またとんでもない罰を与えられると思っていた一刀は、机の上に置かれていた茶を紫苑の口元に持っていき、お菓子を切って楊枝に刺

して

「じゃあ紫苑、あ～ん」

「あらあら違いますわ、ご主人様、口移しでお願いします」

「えーーーーー！！」

「さっき、反省していただくと言いましたが嘘ですか？」

ワザと紫苑が寂しい表情をすると

「…ご、ごめんなさい嘘ではありません」

「では、お願いしますね♪」

一刀は何故か周りを確かめ

「（誰もいないな…。よし！！）」

茶を口に含み、目を瞑って待っている紫苑に近づくと一刀は紫苑に

「くちゅ…。んっ…」

口に含んだ茶を流し込んでいくと

「ふふ…いいですわ。もう一杯ください。ご主人様♪」

艶っぽい声で促す紫苑に一刀は何か違う戦闘モードが入ってしまい、

再び一刀と紫苑は官能的な口づけが続けると、お互い久々というこ

ともあって、そのまま戦闘態勢に突入してしまった。

後日、別の3人から、紫苑と同じようなことをせがまれたのは別の話である。

こうして一刀包囲網戦は、何とか防衛を果たし、戦局は新たな場面を迎えるのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3688x/

真・恋姫無双　～新外史伝～

2012年1月5日01時50分発行